
大里郡大里村

成願遺跡

和田吉野川防災センター建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

埼玉県
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念に、県民一人ひとりが真の豊かさを実感できる生活空間の形成が進められております。

人口の増加や急速な都市化の波の広がりは、丘陵地や低地への開発をも進めております。このため、自然環境の保全や多様化した災害の防止が急務となり、「水と緑と調和し、安全に暮らせる環境づくり」が求められております。

吉野川と和田川が合流する和田吉野川は荒ぶる川・荒川へと注ぐ河川であり、洪水災害が繰り返されてきました。埼玉県では河川防災拠点の整備が推進され、水防活動の拠点や、緊急時の避難施設及び緊急用物資の水上輸送基地となる総合的な防災施設として、和田吉野川防災センターの整備が計画されました。

和田吉野川防災センター建設用地内には、成願遺跡の所在が知られています。その取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議をかさねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講ぜられることとなりました。そのため、当事業団が埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査の結果、弥生時代後期から古墳時代後期までの竪穴住居跡や土器が発見されました。なかでも、古墳時代後期の掘立柱建物跡と竪穴住居跡が並び立つ様子は、古墳時代集落を考える上で貴重な資料を加えることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発や教育機関の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県県土整備部河川砂防課、埼玉県熊谷土木事務所、大里村教育委員会、並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 中 野 健 一

例　言

1. 本書は、埼玉県大里郡大里村に所在する成願遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡のコード番号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

成願遺跡（No64-039）
大里郡大里村大字玉作字成願3435番地他
平成12年9月29日付 教文第2-65号
3. 発掘調査は、和田吉野川防災センター建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、I-3に示す組織により実施した。発掘調査事業は、平成12年9月1日から平成12年12月28日まで実施し、西井幸雄・新屋雅明が担当した。

- 整理報告書作成事業は山本靖が担当し、平成13年7月1日から平成14年2月28日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は(株)東京航業研究所に委託した。
 6. 発掘における遺構撮影は西井・新屋が、遺物写真は山本が撮影した。
 7. 出土品の整理および図版の作成は山本が行い、中嶋淳子の協力を得た。
 8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、ほかを山本が行った。
 9. 本書の編集は、山本が行った。
 10. 本書にかかる資料は、平成14年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
 11. 本書の作成にあたり、出縄康行氏、大里村教育委員会から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X・Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは座標に基づき、10m×10m方眼を設定した。各グリッドの呼称は北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。

SA…柵列跡 SB…掘立柱建物跡
SD…溝跡 SE…井戸跡 SK…土壙
SJ…住居跡 P…ピット
4. 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。例外的なものについては、個別に示した。

遺跡全測図…1/200
住居跡…1/60 掘立柱建物跡…1/60
土壙…1/60 井戸跡…1/60
溝跡断面…1/60
5. 住居跡の主軸は、カマドが設置された壁と直交する軸線とし、主軸方位は座標北を基点に、東西に偏する角度を示した。
6. 掘立柱建物跡は長辺を桁行、短辺を梁行と仮定した。規模は推定される心心間の距離を示した。方位は立地する地形を考慮し、桁梁にこだわらずに座標北を基点にして西に偏する角度を「軸方位」として表記した。
7. 土層図に示したレベル数値は、すべて標高(m)

を表す。

8. 遺物挿図の縮尺は、次のとおりである。例外的なものについては個別に示した。

土器…1/4
弥生土器拓影図・砥石・大型石器…1/3
石製模造品・石製品・土製品…1/2
9. 土器実測図の網かけは次のとおりである。

10%…釉付着範囲・付着物範囲
20%…赤彩範囲
10. 遺物観察表は次のとおりである。
 - ・口径・器高・底径の計測値の単位はcmである。

()内の数値は、口径・底径が推定値、器高は残存高を示す。
 - ・胎土は肉眼で観察できる物質について、以下のように示した。

A…石英 B…長石 C…雲母 D…角閃石
E…片岩 F…チャート G…白色針状物質
H…白色粒子 I…赤色粒子 J…黒色粒子
K…砂粒 L…小礫
 - ・焼成は3段階に分けた。

A…硬質・堅緻 B…良好 C…劣・脆弱
 - ・色調は、『新版標準土色帖 1997年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)に照らし、最も近い色相を記した。
 - ・残存率は5%単位で表した。

目 次

序		IV	遺構と遺物	19
例言		1.	住居跡	19
凡例		2.	掘立柱建物跡・柵跡	113
I 発掘調査の概要	1	3.	土壙	137
1. 調査に至るまでの経過	1	4.	井戸跡	143
2. 発掘・整理報告書作成の経過	2	5.	溝跡	146
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	6.	その他の遺物	156
II 遺跡の立地と環境	4	V	まとめ	163
III 遺跡の概要	14			

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第24図 第12号住居跡	37
第2図 大里村の地形	5	第25図 第14号住居跡	38
第3図 成願遺跡周辺の地形	6	第26図 第12・14号住居跡出土遺物	39
第4図 周辺の遺跡	7	第27図 第15・18号住居跡	41
第5図 成願遺跡全測図(1)	14	第28図 第15・18号住居跡出土遺物	42
第6図 成願遺跡全測図(2)	15	第29図 第16号住居跡	43
第7図 成願遺跡全測図(3)	16	第30図 第16号住居跡出土遺物	44
第8図 成願遺跡全測図(4)	17	第31図 第17号住居跡	45
第9図 成願遺跡全測図(5)	18	第32図 第17号住居跡出土遺物	47
第10図 第1号住居跡	19	第33図 第19・20号住居跡・出土遺物	48
第11図 第1号住居跡出土遺物	20	第34図 第21号住居跡	49
第12図 第2号住居跡	22	第35図 第21号住居跡出土遺物	50
第13図 第2号住居跡出土遺物	23	第36図 第23号住居跡・出土遺物	51
第14図 第3・4号住居跡	25	第37図 第24号住居跡	52
第15図 第3号住居跡出土遺物	26	第38図 第24号住居跡出土遺物	53
第16図 第6号住居跡出土遺物	26	第39図 第25号住居跡・出土遺物	54
第17図 第6号住居跡	27	第40図 第26号住居跡	56
第18図 第5号住居跡・出土遺物	28	第41図 第26号住居跡出土遺物(1)	58
第19図 第7号住居跡・出土遺物	31	第42図 第26号住居跡出土遺物(2)	59
第20図 第8号住居跡	32	第43図 第27号住居跡・出土遺物	60
第21図 第9・10・11号住居跡	34	第44図 第28号住居跡	61
第22図 第13号住居跡	36	第45図 第28号住居跡出土遺物	62
第23図 第8~13号住居跡出土遺物	36	第46図 第29号住居跡・出土遺物	63

第47図	第30号住居跡・出土遺物	64	第81図	第57号住居跡	106
第48図	第31号住居跡	65	第82図	第64・65号住居跡	107
第49図	第31号住居跡出土遺物	66	第83図	第64・65号住居跡出土遺物	108
第50図	第34号住居跡	67	第84図	第69号住居跡	109
第51図	第34号住居跡出土遺物	68	第85図	第68号住居跡	110
第52図	第35号住居跡	69	第86図	第70号住居跡	111
第53図	第35号住居跡出土遺物	70	第87図	第1号掘立柱建物跡	114
第54図	第36号住居跡	71	第88図	第2号掘立柱建物跡	115
第55図	第37号住居跡・出土遺物	72	第89図	第3号掘立柱建物跡	115
第56図	第38号住居跡出土遺物	73	第90図	第4号掘立柱建物跡	116
第57図	第38・66・67号住居跡	74	第91図	第5号掘立柱建物跡	117
第58図	第40号住居跡	76	第92図	第6号掘立柱建物跡	118
第59図	第40号住居跡出土遺物	77	第93図	第8号掘立柱建物跡	119
第60図	第38・40号住居跡出土遺物	77	第94図	第7号掘立柱建物跡・第1号柵跡・第2・ 7号溝跡	120
第61図	第39・41・42号住居跡・出土遺物	78	第95図	第2号溝跡出土遺物(1)	122
第62図	第43号住居跡・出土遺物	80	第96図	第2号溝跡出土遺物(2)	123
第63図	第44・47号住居跡	82	第97図	第7号溝跡出土遺物	125
第64図	第46・49・56・71・72号住居跡	84	第98図	第9号掘立柱建物跡	126
第65図	第44・46・47・49・56号住居跡出土遺物	86	第99図	第11号掘立柱建物跡	126
第66図	第45号住居跡	88	第100図	第12号掘立柱建物跡	127
第67図	第45号住居跡出土遺物	89	第101図	第13号掘立柱建物跡	127
第68図	第48号住居跡	90	第102図	第15号掘立柱建物跡・第3号柵跡	128
第69図	第48号住居跡出土遺物	91	第103図	第14号掘立柱建物跡	130
第70図	第50・51・52・53・59・60号住居跡(1)	92	第104図	第16号掘立柱建物跡	131
第71図	第50・51・52・53・59・60号住居跡(2)	94	第105図	第17号掘立柱建物跡	131
第72図	第50号住居跡出土遺物	96	第106図	第18号掘立柱建物跡	132
第73図	第51号住居跡出土遺物	96	第107図	第22号掘立柱建物跡	132
第74図	第53号住居跡出土遺物	96	第108図	第19号掘立柱建物跡・第4号柵跡	134
第75図	第50~58号住居跡出土遺物	97	第109図	第20号掘立柱建物跡	135
第76図	第59号住居跡出土遺物	99	第110図	第21号掘立柱建物跡	136
第77図	第60号住居跡出土遺物	100	第111図	土壙(1)	137
第78図	第54・55号住居跡	102	第112図	土壙(2)	139
第79図	第54・55号住居跡出土遺物	103	第113図	土壙(3)	140
第80図	第61・62号住居跡・出土遺物	104	第114図	土壙(4)	142
			第115図	土壙出土遺物	142
			第116図	井戸跡(1)	143

第117図	井戸跡(2)	144
第118図	溝跡(1)	146
第119図	溝跡(2)	146
第120図	溝跡(3)	147
第121図	溝跡(4)	148
第122図	溝跡(5)	148
第123図	第4号溝跡遺物出土状況.....	149
第124図	溝跡出土遺物.....	150
第125図	ピット出土遺物.....	156
第126図	遺構内混入遺物(1)	157
第127図	遺構内混入遺物(2)	158
第128図	遺構内混入遺物(3)	159
第129図	グリッド・表採遺物.....	160
第130図	弥生時代後期～古墳時代前期の集落...	166
第131図	古墳時代後期集落の展開(1)	168
第132図	古墳時代後期集落の展開(2)	169
第133図	掘立柱建物跡の軸方位と規模.....	174
第134図	I・II・III・IV群の掘立柱建物跡の分布	175

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表.....	21
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表.....	24
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表.....	26
第4表	第6号住居跡出土遺物観察表.....	26
第5表	第5号住居跡出土遺物観察表.....	30
第6表	第7号住居跡出土遺物観察表.....	31
第7表	第8～13号住居跡出土遺物観察表.....	37
第8表	第12・14号住居跡出土遺物観察表.....	39
第9表	第15・18号住居跡出土遺物観察表.....	42
第10表	第16号住居跡出土遺物観察表.....	44
第11表	第17号住居跡出土遺物観察表.....	46
第12表	第19・20号住居跡出土遺物観察表.....	48
第13表	第21号住居跡出土遺物観察表.....	50
第14表	第23号住居跡出土遺物観察表.....	51
第15表	第24号住居跡出土遺物観察表.....	53
第16表	第25号住居跡出土遺物観察表.....	53
第17表	第26号住居跡出土遺物観察表.....	59
第18表	第27号住居跡出土遺物観察表.....	59
第19表	第28号住居跡出土遺物観察表.....	62
第20表	第31号住居跡出土遺物観察表.....	66
第21表	第34号住居跡出土遺物観察表.....	68
第22表	第35号住居跡出土遺物観察表.....	70
第23表	第37号住居跡出土遺物観察表.....	72
第24表	第38号住居跡出土遺物観察表.....	73
第25表	第40号住居跡出土遺物観察表.....	77
第26表	第38・40号住居跡出土遺物観察表.....	77
第27表	第39・41・42号住居跡出土遺物観察表.....	79
第28表	第44・46・47・49・56号住居跡出土遺物観察表.....	87
第29表	第45号住居跡出土遺物観察表.....	89
第30表	第48号住居跡出土遺物観察表.....	91
第31表	第50号住居跡出土遺物観察表.....	98
第32表	第51号住居跡出土遺物観察表.....	98
第33表	第53号住居跡出土遺物観察表.....	98
第34表	第50～58号住居跡出土遺物観察表.....	98
第35表	第59号住居跡出土遺物観察表	100
第36表	第60号住居跡出土遺物観察表	100
第37表	第54・55号住居跡出土遺物観察表	103
第38表	第61号住居跡出土遺物観察表	105
第39表	第64号住居跡出土白玉計測表	108
第40表	第65号住居跡出土遺物観察表	108
第41表	第2号溝跡出土遺物観察表	124
第42表	第7号溝跡出土遺物観察表	124
第43表	土壙出土遺物観察表	142
第44表	溝跡出土遺物観察表	151
第45表	ピット出土遺物観察表	156
第46表	遺構内混入遺物観察表	156
第47表	グリッド・表採遺物観察表	160
第48表	遺構グリッド一覧表	162
第49表	掘立柱建物跡一覧表	172

図版目次

図版 1	成願遺跡全景（北から）	第26号住居跡
	成願遺跡全景（東から）	第26号住居跡カマド
図版 2	成願遺跡全景（南から）	第27・28・29・30・31号住居跡
	成願遺跡全景（西から）	第27号住居跡
図版 3	成願遺跡全景（北東から）	第28号住居跡
	第1号住居跡	第29号住居跡
	第1号住居跡遺物出土状況	図版 8 第31号住居跡
	第1号住居跡カマド	第34号住居跡
	第3・4号住居跡	第34号住居跡カマド
図版 4	第2号住居跡	第34号住居跡貯蔵穴
	第2号住居跡遺物出土状況	第35号住居跡
	第5号住居跡	第36号住居跡
	第6号住居跡	第37号住居跡
	第7号住居跡	第38号住居跡
	第8号住居跡	図版 9 第38・66号住居跡
	第9号住居跡	第66号住居跡
	第10・11号住居跡	第38・40号住居跡
図版 5	第12号住居跡	第40号住居跡貯蔵穴
	第13号住居跡	第39号住居跡
	第14号住居跡	第41号住居跡
	第15号住居跡	第41号住居跡
	第21号住居跡	第42号住居跡
	第16号住居跡	図版10 第44・48・49・56号住居跡
	第16号住居跡カマド	第44号住居跡
	第16号住居跡貯蔵穴	第48号住居跡
図版 6	第16・17号住居跡	第49号住居跡
	第16・17号住居跡遺物出土状況	第45号住居跡
	第17号住居跡カマド	第45号住居跡貯蔵穴
	第17号住居跡貯蔵穴 A	第54・55号住居跡
	第19・20号住居跡	第50・51・52・53・59・60号住居跡
	第19号住居跡遺物出土状況	図版11 第50号住居跡カマド
	第19号住居跡遺物出土状況	第53・59号住居跡
	第25号住居跡	第59号住居跡貯蔵穴
図版 7	第24号住居跡	第57号住居跡
	第24号住居跡カマド	第60号住居跡

第61・62・65号住居跡	第13号掘立柱建物跡
第61・62号住居跡	第20号掘立柱建物跡
第64・65号住居跡	第21号掘立柱建物跡
図版12 第7号掘立柱建物跡・第1号柵跡・第2・7号溝跡	図版16 第22号掘立柱建物跡 第5号井戸跡 第5号溝跡 第4・9・35号溝跡 第4号溝跡遺物出土状況 第4号溝跡遺物出土状況 第6号溝跡 第6号溝跡
第1・2・7号掘立柱建物跡	図版17 第1号住居跡出土遺物
第1号掘立柱建物跡・第2号柵跡	図版18 第1号住居跡出土遺物
第1号掘立柱建物跡	図版19 第2号住居跡出土遺物
第1・2・7号掘立柱建物跡・第1・2号柵跡・第2・7号溝跡	図版20 第2号住居跡出土遺物 第5号住居跡出土遺物
第7号掘立柱建物跡・第1号柵跡・第2・7号溝跡	図版21 第5号住居跡出土遺物 第6号住居跡出土遺物 第7号住居跡出土遺物 第8～13号住居跡出土遺物
第1号柵跡	図版22 第8～13号住居跡出土遺物 第12・14号住居跡出土遺物 第12号住居跡出土遺物 第14号住居跡出土遺物 第15号住居跡出土遺物 第15・18号住居跡出土遺物 第16号住居跡出土遺物 第17号住居跡出土遺物
第7号掘立柱建物跡	図版23 第15・18号住居跡出土遺物 第16号住居跡出土遺物 第17号住居跡出土遺物 第17号住居跡出土遺物
第2号掘立柱建物跡	図版24 第17号住居跡出土遺物
第3・4・5・6号掘立柱建物跡	図版25 第17号住居跡出土遺物 第19・20号住居跡出土遺物
第3・4・5・6号掘立柱建物跡	図版26 第21号住居跡出土遺物 第23号住居跡出土遺物 第24号住居跡出土遺物
第4号掘立柱建物跡	図版27 第24号住居跡出土遺物 第26号住居跡出土遺物
第5号掘立柱建物跡	
第6号掘立柱建物跡	
第9号掘立柱建物跡	
図版14 第8号掘立柱建物跡	
第14号掘立柱建物跡	
第15・16・17・18・19号掘立柱建物跡・第3・4号柵跡	
第15・16・19号掘立柱建物跡・第3・4号柵跡	
第8・14・15・16・17号掘立柱建物跡	
第3・4号柵跡	
第15号掘立柱建物跡・第3号柵跡	
第16号掘立柱建物跡	
図版15 第17号掘立柱建物跡	
第18号掘立柱建物跡	
第19号掘立柱建物跡	
第11号掘立柱建物跡	
第12号掘立柱建物跡	

- 図版28 第26号住居跡出土遺物
- 図版29 第26号住居跡出土遺物
第27号住居跡出土遺物
- 図版30 第27号住居跡出土遺物
- 図版31 第27号住居跡出土遺物
第34号住居跡出土遺物
- 図版32 第34号住居跡出土遺物
- 図版33 第34号住居跡出土遺物
第35号住居跡出土遺物
第38号住居跡出土遺物
第38・40号住居跡出土遺物
- 図版34 第38・40号住居跡出土遺物
第40号住居跡出土遺物
第38号住居跡出土遺物
- 図版35 第38・40号住居跡出土遺物
第40号住居跡出土遺物
第38号住居跡出土遺物
第28号住居跡出土遺物
第41号住居跡出土遺物
- 図版36 第39・42号住居跡出土遺物
第45号住居跡出土遺物
第46号住居跡出土遺物
第47号住居跡出土遺物
第44・49・56号住居跡出土遺物
第48号住居跡出土遺物
- 図版37 第49号住居跡出土遺物
第50号住居跡出土遺物
- 図版38 第50号住居跡出土遺物
第51号住居跡出土遺物
第50・51・52号住居跡出土遺物
第50～53号住居跡出土遺物
- 図版39 第50～52号住居跡出土遺物
第50号住居跡出土遺物
第54号住居跡出土遺物
第54・55号住居跡出土遺物
第59号住居跡出土遺物
- 図版40 第59号住居跡出土遺物
- 図版41 第59号住居跡出土遺物
第60号住居跡出土遺物
- 図版42 第61号住居跡出土遺物
第65号住居跡出土遺物
第2号溝跡出土遺物
- 図版43 第2号溝跡出土遺物
第7号溝跡出土遺物
- 図版44 第2号溝跡出土遺物
- 図版45 第2号溝跡出土遺物
- 図版46 第7号溝跡出土遺物
第6号溝跡出土遺物
第14号溝跡出土遺物
第4号溝跡出土遺物
- 図版47 第7号土壤出土遺物
第11号土壤出土遺物
遺構内混入遺物
グリッド・表採出土遺物
- 図版48 グリッド・表採出土遺物
ピット出土遺物
第64号住居跡出土遺物
- 図版49 第29・30・31・43・60号住居跡出土遺物
第6・14号溝跡出土遺物・ピット・グリッド出土遺物
- 図版50 遺構内混入遺物(1)
遺構内混入遺物(2)

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。水環境の保全・再生に関しても河川流域を一つの圏域とした総合的な水環境の整備を進めている。また、まち・安全・彩の国の実現に向けて、氾濫を防ぐ河川整備の推進に努めている。

不慮の水害から人命及び財産を守るために治水対策を進める必要があり、和田吉野川の河川改修もこうした治水事業の一環として計画されたものである。

和田吉野川の河川改修に先立ち、河川課長から平成11年6月18日付け河第218号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成11年7月2日に遺跡所在確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が確認されたことから、平成11年7月12日付け教文第359-1号で、概ね次のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
成願遺跡 (64-039)	集落跡	古墳・奈良・平安	大里村大字玉作

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

和田吉野川河川改修についても調整を重ねたが、事業の計画変更が不可能であることから、造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。文化財保護課ではやむを得ず発掘調査する部分について、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

調査は平成12年8月～12月の5ヶ月にわたって行われた。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法第57条第1項にもとづき、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘調査届が、また埼玉県知事から第57条の3にもとづく発掘通知が提出され、それに対する指示通知は以下のとおりである。

発掘調査届：平成12年9月29日付け教文第2-65号

発掘通知：平成11年9月1日付け教文第3-397号

(文化財保護課)

2. 発掘・整理報告書作成の経過

発掘事業

成願遺跡の発掘調査は、和田吉野川防災センターの建設工事に先立って、平成12年9月1日から平成12年12月28日に実施した。

8月中旬から準備を開始し、熊谷土木事務所、文化財保護課、当事業団の3者立ち会いによる現地での打ち合わせを実施した。続いて、大里村教育委員会に発掘届および協力依頼を提出し、下旬に発掘事務所の設置、器材等の搬入等を行った。

9月から、重機による遺構確認面までの表土除去を開始し、順次、遺構確認作業も行った。表土層は当初の計画よりも厚く、掘削作業が難行した。また、12日、24日の2度にわたって大雨に見まわれ、調査区西側の用水路が溢れたため、調査区壁面が一部崩落し、調査区が水没する被害を被った。急遽、ポンプによる排水と壁面の復旧作業を行ったが、その影響によって、表土除去作業が10月初旬まで大幅にずれ込んだ。

基準点測量は、9月中旬と10月上旬の2回に分けて実施した。

遺構確認の結果、遺構数および竪穴住居跡の重複度合いが、予想を遙かに上回ることが明らかとなつた。そこで、文化財保護課との協議・調整を行い、熊谷土木事務所へ1ヶ月の調査期間の延長を申し出て、これを了承された。

10月に入ってからは天候も安定し、竪穴住居跡をはじめとする遺構の精査を鋭意、進めた。作業の進捗にあわせて、遺構実測図の作成、遺構の写真撮影を行った。

12月、竪穴住居跡の調査を完了後、引き続いて、掘立柱建物跡の精査と実測図の作成・写真撮影を行った。下旬に調査区全体の写真撮影を行い、発掘作業を終了した。その後、器材搬出、発掘事務所の撤去を行い、熊谷警察署に遺失物発見届、大里村教育委員会に保管所を提出した。

整理・報告書作成事業

成願遺跡の整理・報告書作成作業は、平成13年7月1日から平成14年2月28日まで実施した。

平成13年7月初旬に、出土遺物および各種記録類の搬入を行った。遺物は水洗・注記を経て、各遺構ごとに接合を開始した。遺構図面は二次原図の作成に取りかかった。

7月中に遺物の水洗・注記は終了し、以後、接合を重点的に行った。また接合された遺物は、順次、人手・三次元測定機を併用しながら実測図の作成作業に着手した。これと併行して、遺構図面は二次原図の作成を重点的に実施した。

8月には、遺物の接合・復元作業、遺物実測図の作成作業、遺構図の二次原図作成作業も軌道に乗り、これらを重点的に行った。月末までには、遺構図の二次原図作成作業はほぼ完了し、順次、遺構図の挿図用仮版組を始めた。

9月から、挿図用仮版組された遺構図のトレース作業も開始した。挿図用仮版組作業は中旬に終了し、引き続いて遺構データの処理を行った。遺物の接合作業は、月末までにはほぼ完了した。

10月より、トレースの終了した遺構図面の網掛けや文字記入等の版組作業を開始した。下旬の遺構図トレース作業終了を経て、月末までに遺構図の版組作業を完了した。

11月は、上旬に拓本を要する遺物の断面実測および拓本作業を実施した。中旬には遺物実測図の作成も終了した。実測作業の終了した遺物については、データの処理を行うとともに、写真撮影用の復元と着色を施し始めた。また遺跡全測図・遺跡周辺の地形図の作成およびトレース作業、遺構の写真選択・写真図版の版組作業を開始した。

12月より、遺物実測図のトレース作業に着手し、1月上旬までに遺物実測図のトレース作業をほぼ終了した。トレースの終了した遺物実測図は、順次、

挿図用版組作業を進めた。また1月中旬には遺物の写真撮影を行い、遺物写真図版の版組作業を引き続いて行った。

平成14年1月より、原稿の執筆を始めた。同時に

遺構・遺物データをもとに表作成を行い、併行して割付・編集作業に着手した。

2月末に入札を行い、3月の校正作業を経て、平成14年3月22日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘事業

平成12年度

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓
管 理 部	
管 理 部 副 部 長	関 野 栄 一
主席(庶務担当)	阿 部 正 浩
主席(施設担当)	野 中 廣 幸
主 任	菊 池 久
主席(経理担当)	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	石 岡 憲 雄
専 門 調 査 員 (調査第二担当)	大 和 修
統 括 調 査 員	西 井 幸 雄
主 任 調 査 員	新 屋 雅 明

(2) 整理・報告書作成事業

平成13年度

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大 館 健
管 理 部	
管 理 部 幹	持 田 紀 男
(庶務分掌)	
主 任	菊 池 久
(経理分掌)	
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
主 席 調 査 員 (資料整理担当)	磯 崎 一
主 任 調 査 員	山 本 靖

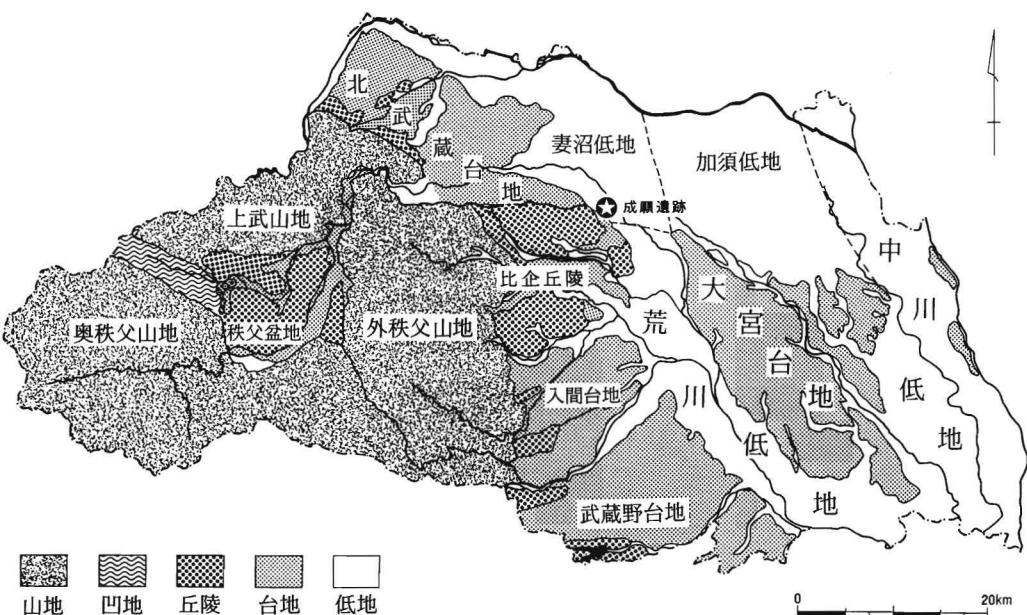
II 遺跡の立地と環境

成願遺跡は、埼玉県大里郡大里村大字玉作字成願3435番地他に所在する。JR高崎線吹上駅の西南西約3.2kmに位置している。成願遺跡は荒川とその支流の和田吉野川が合流する地点から約3km遡った和田吉野川右岸の自然堤防上に立地し、和田吉野川に架かる玉作橋西南に広がっている。成願遺跡付近の標高は約17m前後である。

成願遺跡の所在する大里村は、埼玉県のほぼ中央に位置する。西側には比企丘陵がせまり、東側には荒川が流れ、丘陵から低地に移り変わる地形を示している。

比企丘陵は、外秩父山地から関東平野に半島状に突出した丘陵で、関東平野西部の埼玉県下に広がる埼玉平野西縁部に連なる丘陵群のひとつである。この比企丘陵から続く大里村内の台地は、青山(東平)面(標高約50m)・船木面(標高35~30m)・箕輪面(標高27~25m)という平坦な地形面に区分されている。青山面は下末吉期に形成され、最上部に立川ローム上部層に対比される浅間山火山灰の大里ローム層を主体とする堆積段丘である。船木面は青山面の浸食段丘面で、武藏野期初期に形成されたと考えられる。

第1図 埼玉県の地形



えられている。箕輪面は大里ローム層が被覆する浸食段丘で、立川期の形成と考えられている。

大里村内の低地地形は、河川の氾濫原を主体にし、微高地・低湿地および特徴的な地形様相を示す荒川河川敷(堤外地)に区別されている。微高地は、河川に沿った自然堤防として形成された地形と考えられ、河川の古流路を推測させる。低湿地には後背湿地が広がり、一般に水田として利用されている。荒川堤外地は堤内地に比べて起伏に富んだ地形で、標高も約1~2m高い。

大里村を流れる河川には、荒川・和田吉野川・通殿川がある。

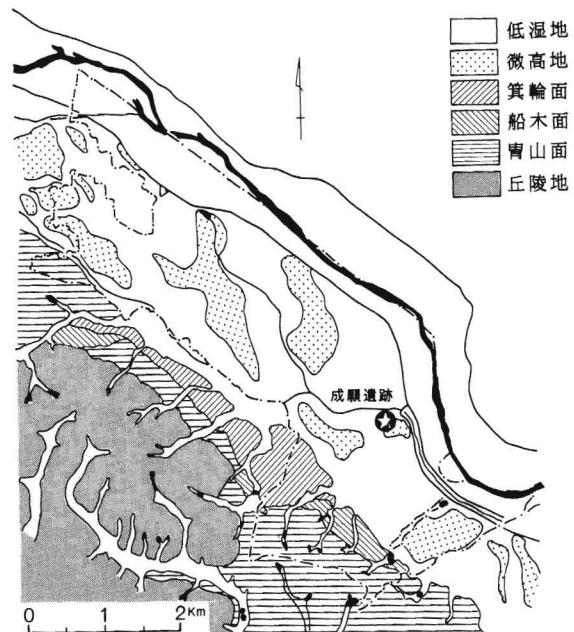
「埼玉県の母なる川」荒川は、奥秩父山地に源を発し、埼玉県を縦断して東京湾に注ぐ延長約173kmにもおよぶ河川で、大里村東側の村界を流れている。その流れは、周辺に暮らす人々に豊かな恵みをもたらしてきた。と同時に、往古の昔から幾度も流路を変え続けた「荒ぶる川」でもあり、時として大規模な水害をもたらしてきた。

荒川の水害の歴史を繙くと、『三代実録』に天安2年(858)、『吾妻鏡』に建仁元年(1201)、鴨長

明の編纂とされる『発心集』に建保2～3年（1214～1215）、慶長元年（1596）の100年に一度といわれる大規模洪水、慶長19年（1614）の諸国出水、元和3年（1617）の入間川洪水、寛永8年（1613）の利根川満水、元禄元年（1688）の荒川洪水などの傷跡が古記録に記されている。このように、たびたび襲いかかる水害に対して人々は果敢に立ち向かい、建久5年（1194）・天正8年（1580）・天正12年（1584）に箕田郷堰・箕田郷堤の修理、永禄6年（1563）に井草郷築堤や慶長年間（1596～1614）には吉見領大岡堤、和田吉野川の相上堤、足立郡遊馬村（さいたま市大宮）から葛西領までの築堤などの河川改修工事を行ってきた。そして、寛永6年（1629）には埼玉平野東部の水害防止と新田開発の促進、熊谷・行田などの水田地帯の保守、舟運開発などを目的として、伊奈忠治によって「瀬替え」が行われた。それまでの荒川の川筋は、寄居町付近までは現在と変わらないが、利根川の一支川として、熊谷市西側から北を回って行田に至り、現在の元荒川筋を流れて綾瀬川に入り、さらに利根川（現・中川）に合流し、隅田で隅田川と江戸湾（東京湾）に注いでいた。しかし「瀬替え」によって元荒川筋への流れは熊谷市久下から新たに開削された河道を流れて入間川支流の和田吉野川へと導かれ、さらに入間川へ合流させられて荒川本流となった。以来、人工的な流路として現在に至っている。この流路改修工事は、一方では入間川流域の水害を誘発する結果を招くこととなり、大里村の低地地域でも水害に苦しむようになってしまった。

和田吉野川は、比企丘陵北側を流下する吉野川と和田川が大里村下恩田付近で合流した河川である。大里村北部西側の村界を流れて、大里村南部で村内を横断し、現在の荒川へ合流している。成願遺跡が営まれた古墳時代から中世には、大里村東部の低地は和田川・吉野川が流れるだけで、大規模な水害に襲われることが少なかったことが推定される。これに対し、近世の荒川流路改修以降に見舞われた水害

第2図 大里村の地形



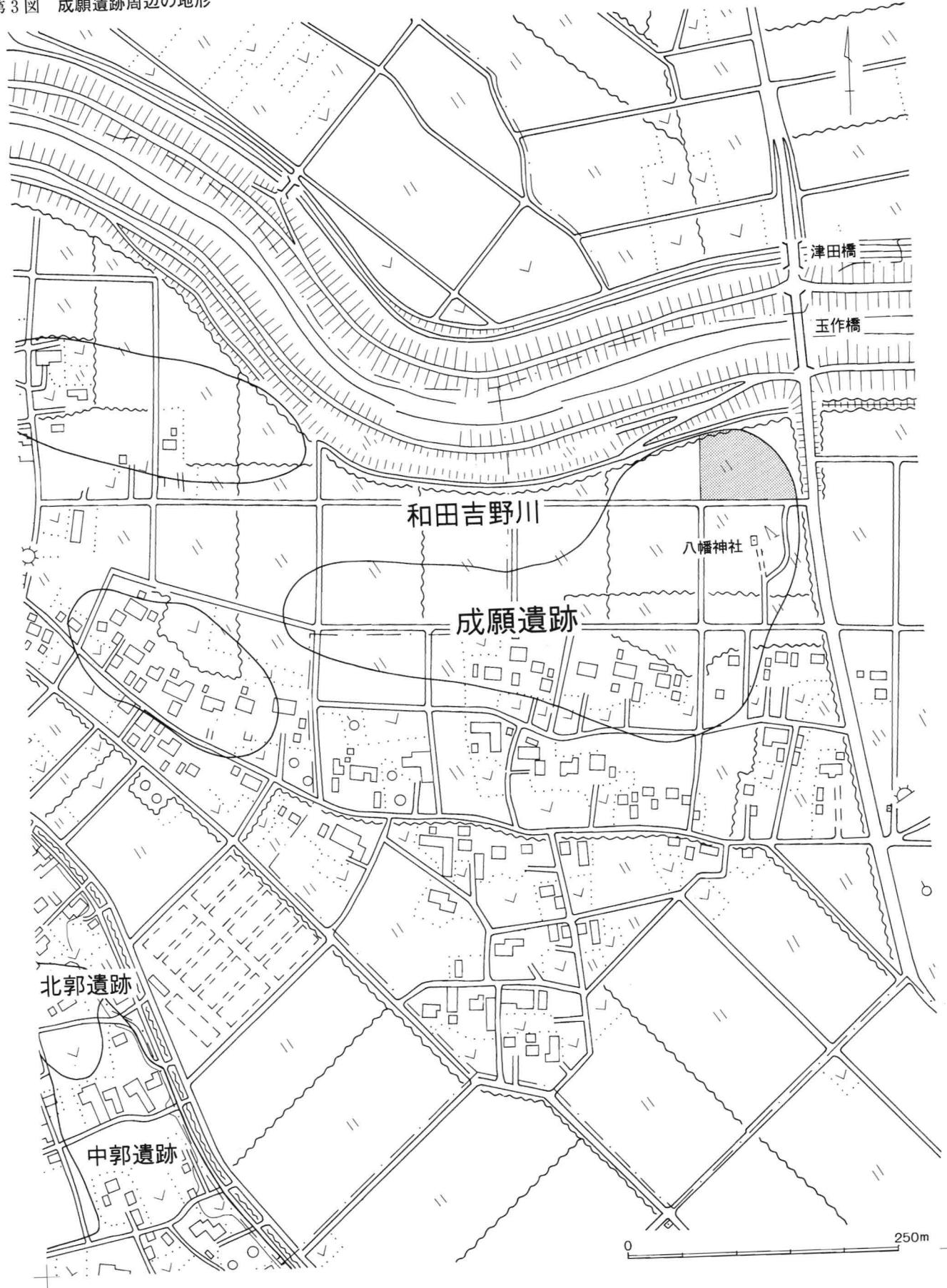
の歴史は、自然環境への人工的な改変を行うにあたって、将来的な予測も含めた総合的な検討の必要性を教訓として残している。

通殿川は、大里村北西部の三恩田地区の湧水群を源とする。大里村中央を縦断し、大里村南部で和田吉野川に合流する小河川である。

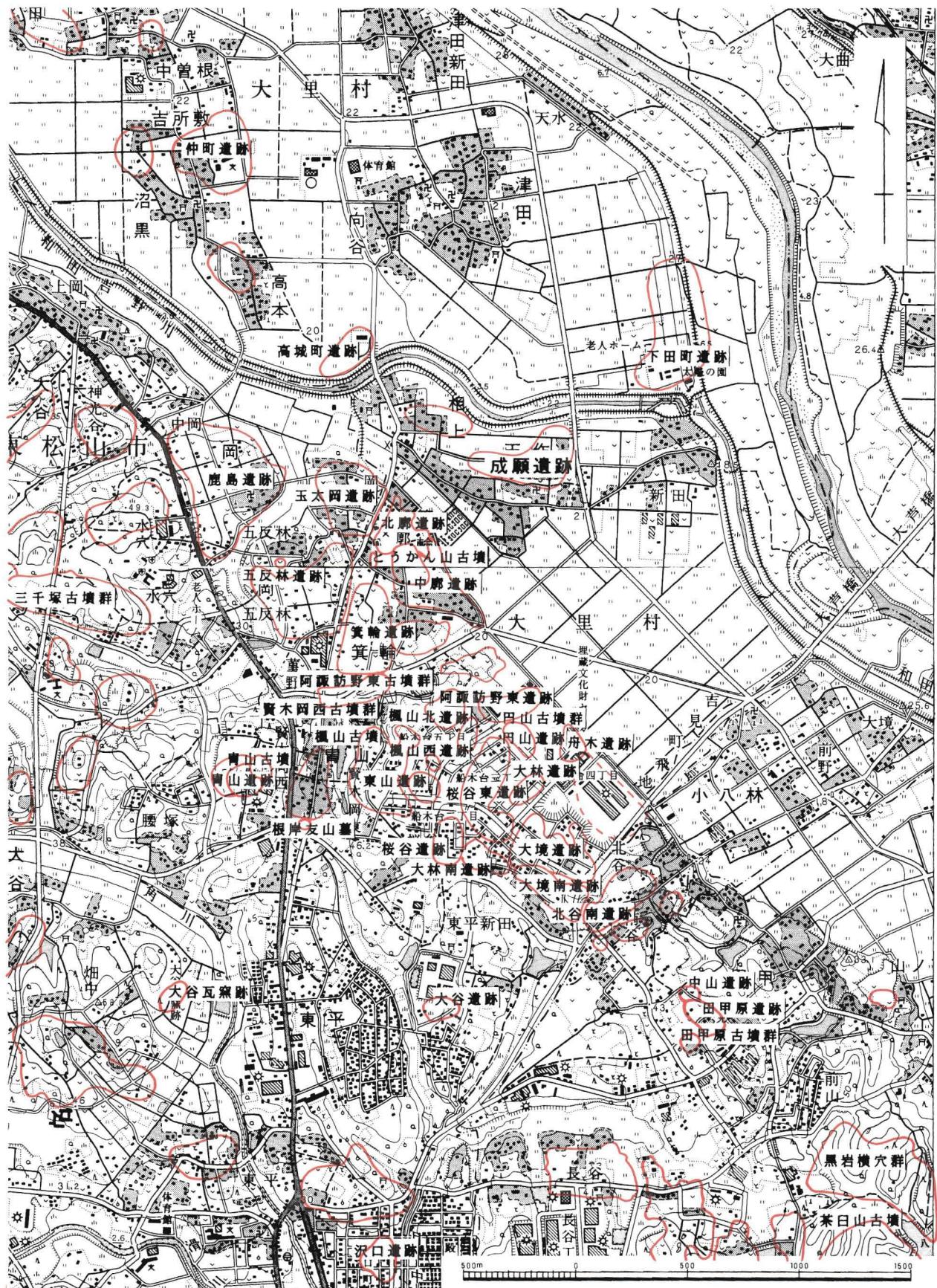
また大里村内には、特徴的な池沼が所在している。台地地域の小谷には、耕作地の用水源として溜池が作られている。これは、比企丘陵に数多く作られている池沼の一部である。一方、低地部には堤防決壊に伴う濁流が堤防付近を大きく掘削して形成された「押堀沼」が残り、近世以降の水害の傷跡を今に伝えている。

成願遺跡の立地する微高地は、低地部を流れる荒川の右岸とその支流の和田吉野川の流域に点在する自然堤防のひとつである。またこれらの自然堤防は、熊谷市村岡～大里村上恩田～中恩田、大里村小泉～中曾根～吉所敷～高本～相上～玉作に繋がり帶状に分布し、旧河川の流路を復元することができる。さらに「津田」の地名から「津＝港」の機能が連想させられ、河川交通の要所であった可能性が考えられる。これらの低地地域に分布する微高地（自然堤防）

第3図 成願遺跡周辺の地形



第4図 周辺の遺跡



には、眼前に耕地を臨む合理的な居住地として、今なお、集落が営まれ続けている。

成願遺跡の周辺の遺跡は、西側に広がる比企丘陵の谷筋や低地部を臨む台地縁辺部に集中して分布している。低地部では帯状に繋がる自然堤防上に分布し、古来より、積極的に耕作地を開発する高い意識を窺うことができる。

成願遺跡周辺の旧石器時代の遺跡は、調査例が少なく、遺物量も少ない。もっとも古く位置づけられるのはAT火山灰降下以前のローム層から発見された石器群で、立正大学構内の鹿嶋遺跡からナイフ形石器3点、東松山市塚原遺跡ではナイフ形石器33点・石核3点が出土している。これらより新しい資料としては、東松山市雷原遺跡からナイフ形石器5点・剥片2点・ポイント1点・細石刃12点・細石刃核1点が発見されている。ほかに、東松山市原宿遺跡・中山遺跡では、それぞれナイフ形石器が1点ずつ検出されている。

大里村内では、大里村南部土地区画整理事業に先だって、東山遺跡から砂川期に属すると考えられている石器集中1カ所が発見され、黒曜石製のナイフ形石器4点・スクレーパー1点・石核1点と剥片が出土している。また石器集中に隣接して、赤化した礫（200g以下）によって構成される礫群も見つかっている。さらに、大境南遺跡では黒曜石剥片と礫群1カ所が検出され、桜谷東遺跡からはナイフ形石器1点が出土している。このように、旧石器時代の遺跡・遺物の検出例が増加しつつあるが、富士箱根系や北関東系の火山灰の堆積が薄いために他地域のローム層との比較が困難な地域もあり、基本層序の確立と層位による文化層の検出が課題とされている。

縄文時代草創期の遺跡は大里村内では発見されていないが、花園町宮林遺跡で爪形文・多縄文系土器を伴う住居跡、川本町沢口遺跡で爪形文土器、川本町四反歩遺跡で石槍群が検出されている。

縄文時代早期になると、荒川右岸の江南台地を中心

に集落遺跡の調査例が増加している。比企地方では、東松山市立野遺跡・緑山遺跡・嵐山町金平遺跡・都幾川村江光山遺跡など、この時期の土器を出土する遺跡が増加しているが、遺構は確認されていない。成願遺跡周辺でも、東山遺跡で撫糸文系土器が、桜谷東遺跡では撫糸文系土器・後半条痕系土器が遺構を伴わないグリッドから出土している。

縄文時代前期になると集落遺跡が顕著となる。大里村内でも同様で、冴山遺跡では黒浜式期の住居跡が発見されている。また北郭遺跡では黒浜式期・諸磯式期の土器・石器とともに土壙が確認され、隣接する中郭遺跡からは黒浜式土器と花積下層式に分類される土器片が出土している。さらに、大里村南部土地区画整理事業に先だつ発掘調査によって縄文時代前期の遺跡が増加し、阿諱訪野東遺跡では黒浜式期の土壙と縄文時代の集石土壙、東山遺跡では黒浜式期の住居跡・土壙と諸磯b式期の住居跡および縄文時代の集石楓山北遺跡では黒浜式期の住居跡と諸磯c式期の住居跡・土壙および縄文時代の集石、桜谷東遺跡では諸磯b式期を中心とする住居跡・竪穴状遺構・集石・土壙、大境遺跡では黒浜式期の土壙、船木遺跡では黒浜式期の住居跡が検出されている。

縄文時代中期の勝坂式期以降、成願遺跡周辺では遺跡数が増加し、河川流域の台地縁辺部や山間平坦部等の広域な範囲に遺跡が分布している。なかには大規模集落遺跡も所在し、その周囲に中・小集落遺跡が点在する傾向も知られている。大里村内でも中期初頭には五領ヶ台式期の埋設土器が検出された桜谷東遺跡が知られているにすぎないが、勝坂式期以降は遺跡数・遺物量の増加が認められる。東山遺跡では、勝坂式期の土壙および加曾利EⅠ～Ⅲ式期の住居跡・屋外埋甕・集石土壙・集石・土壙が発見されている。また立地する台地南側の埋没谷には勝坂式期から加曾利E式期の遺物包含層が形成され、集落の継続性を窺うことができる。ほかに桜谷東遺跡では住居跡・土壙・集石、大林南遺跡では土壙・埋甕、大境遺跡では加曾利EⅢ式期の埋甕、円山

遺跡では加曾利 E 式期の土壙が検出され、吉見町の田甲原遺跡でも土壙・ピットが見つかっている。

縄文時代中期末葉から遺跡数の減少と規模の縮小化傾向が窺われる一方で、後期になると沖積地でも遺跡の検出例が知られるようになってくる。桜谷遺跡では堀之内 1 式期の住居跡と土壙が発見され、遺跡東側の谷頭部に形成された加曾利 E III 式期～堀之内 1 式期の包含層から中期末から後期へ継続された集落として捉えられている。ほかに、桜谷東遺跡では堀之内 1 式期の炉跡と堀之内式期の住居跡、東山遺跡では住居跡・土壙が検出されているが、いずれも集落規模は小さい。一方では、深谷市の本郷前東遺跡や明戸東遺跡等で沖積地の遺跡が見つかり、成願遺跡でも縄文時代後期の深鉢がグリッド出土として取り上げられており、縄文時代後期に台地上から沖積地へ集落が展開していった可能性を示唆している。

縄文時代晩期になると遺跡数はさらに減少する。中郭遺跡は後期から晩期にかかる加曾利 B 式期～安行式期を中心とする遺跡で、安行式期の住居跡・溝跡と安行 3a 式期の土壙が発見されている。遺物は縄文時代後・晩期の土器・石器を中心に、大洞 b ~c 式期の土器群や耳飾・土偶・土面等も出土している。

縄文時代後・晩期から弥生時代にかけて、遺跡が著しく減少する傾向は、北武藏地域では普遍的な現象で、その後、弥生時代中期になると、集落形成が再び始められるようになる。円山遺跡では中期前半の所謂須和田式期の住居跡と集落を囲む環濠の可能性も想定されている溝跡と中期後半の宮ノ台式期の住居跡が、船木遺跡では宮ノ台式の住居跡・方形周溝墓と中部地方から群馬県西部にみられる礫床墓が発見されている。また吉見町大行山遺跡でも住居跡が見つかり、さらに平成13年度より発掘調査が進められている大里村下田町遺跡では中期の墓域が検出されているようである。

弥生時代後期になると、北武藏では縄文を主体と

した施文が特徴の「吉ヶ谷式土器」と櫛描文系の「岩鼻式土器」という地域色の強い土器が隆盛をほこるようになり、これと呼応するかのように、遺跡数も増加している。遺跡の立地をみると、河川や低湿地を臨む台地縁辺部はもちろんのこと、沖積地で発見される遺跡数も増加しつつあり、当時の生産基盤であった稻作と水田開発に伴う土木技術に支えられた集落形成を窺うことができる。また各遺跡の住居跡と方形周溝墓の位置関係をみると、居住域と墓域との明確な分離が行われていないようである。

台地縁辺部に位置する大里村南部遺跡群では、桜谷東遺跡から住居跡、大境遺跡から住居跡・壺棺墓と弥生時代の方形周溝墓、船木遺跡から焼失住居 1 軒を含む住居跡、円山遺跡から方形周溝墓・円形周溝墓、箕輪遺跡から住居跡・方形周溝墓が検出されている。箕輪遺跡の方形周溝墓の主体部からは、ガラス玉 2 点が出土している。同じく、台地縁辺に立地する北郭遺跡では住居跡・方形周溝墓・土壙が発掘されているが、大里村立吉見小学校を中心とする遺跡で校庭に方形周溝墓や住居跡等のプランを窺うことができる。北郭遺跡に隣接する東松山市五反林遺跡で方形周溝墓、東松山市玉太岡遺跡で住居跡・方形周溝墓・土壙が、谷を挟んで対峙する東松山市大岡北部・鹿島遺跡群でも方形周溝墓が検出され、玉太岡遺跡の住居跡はほとんどが焼失住居であった。ほかに東松山市沢口遺跡でも、住居跡と方形周溝墓が発見されている。

一方、自然堤防上に立地する下田町遺跡では土壙墓から鉄剣が出土し、平成13年度から進められている発掘調査でも該期の集落も検出されているようである。成願遺跡も自然堤防上の遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期にかかる住居跡 9 軒が発掘されている。

古墳時代は古墳の造営に特徴づけられる時代である。しかし、その前期段階には成願遺跡周辺に古墳がまだ築造されておらず、墳墓は方形周溝墓に代表されている。なかでも、和田吉野川上流の和田川沿

いの江南町塩の前方後方形を含む18基の周溝墓群と、吉見町三ノ耕地遺跡の前方後方形周溝墓2基は、墳丘が残存していた墳墓群として注目されている。この時期の集落遺跡としては、「五領式土器」の標式遺跡である東松山市五領遺跡があげられる。住居跡が100軒を越える大規模集落で、東海・近畿・北陸地方の影響がみられる遺物も出土し、当時の拠点的な集落として捉えることができる。

成願遺跡周辺の古墳時代前期の遺跡は、楓山西遺跡（3軒）・大境遺跡（5軒）・大境南遺跡（1軒）のように住居跡数軒からなる小規模な集落と、大林南遺跡（20軒）や玉太岡遺跡（10軒）など数十軒単位の中規模な集落が所在している。また住居と墳墓が共存する箕輪遺跡や船木遺跡も認められる。船木遺跡は古墳時代前期から中期にかかる住居跡50軒を越える集落で、弥生時代から古墳時代にかけて台地を分断するように掘削された溝跡によって、墓域と居住域が区分けされている。

古墳時代中期になると、墳墓においては方形周溝墓は終焉を迎えることとなる。集落においても住居の厨房敷設が炉からカマドへ移行し始め、古墳時代における大きな転換の時期にあたる。成願遺跡周辺のこの時期の遺跡のうち、楓山西遺跡では住居跡・竪穴状遺構・土壙、楓山北遺跡では住居跡、桜谷東遺跡では住居跡・溝跡およびブリッジ付近の周溝内から壙が出土している方形周溝墓が発見されている。

この時期に注目される遺跡は船木遺跡で、玉作り工房跡が発見されている。この工房跡はカマドが付設された竪穴住居跡で、壁際から砂岩系の砥石4点と、その周辺から滑石製品とその削りカスが多量に検出されている。工作用のピットは検出されていないが、未完成の勾玉・円板・剣形等の滑石製品や筋砥等の出土から「玉作り」工房跡と推定されている。伴出した遺物には、北武藏地域最古段階の一例として位置づけられている須恵器はそうがあり、東国における須恵器研究のみならず、東国における須恵器受容と

「玉作り」の関連等に注目されている。さらに船木遺跡から約500mほどの距離に位置する桜谷東遺跡でも多量の石製模造品や剥片類が出土する玉作り工房跡が確認されており、船木遺跡との関連を熟考する必要がある。成願遺跡が所在する地名は「玉作」であるが、残念ながら「玉作り」に関わる遺構・遺物は検出されていない。しかし、滑石製未製品や欠損品を転用した遺物の出土もみられ、「玉作」の地名に由来する玉作り工房跡の存在する可能性は残されている。さらに船木・桜谷東の玉作り遺跡と「玉作」の地名との関連性の追求も今後の課題として残されている。埼玉県内の玉作り遺跡は、岡部町大寄B遺跡・滑川町月輪遺跡・東松山市舞台遺跡・川島町正直遺跡が知られている。大寄B遺跡を除いて、いずれの玉作り遺跡も荒川中流域右岸の比企丘陵先端部付近に分布し、古墳時代中期段階に比企地方を総括した同一政治圏内で成立した可能性が示唆されている。

古墳時代後期の集落は、台地奥部や山間部、沖積地等へ積極的に進出し、遺跡数が激増する。この動向の背景に、武藏国造の奥津城として前方後円墳が造営され続けた「さきたま政権」との関連を無視することはできない。

成願遺跡の周辺では、東山遺跡・楓山北遺跡・桜谷東遺跡・大境遺跡・玉太岡遺跡・五反林遺跡から住居跡、阿諱訪野東遺跡・下田町遺跡から住居跡と掘立柱建物跡、大里村北谷南遺跡から土壙・溝跡、沢口遺跡・吉見町田甲原古墳群から住居跡・土壙が発見されている。なかでも楓山北遺跡第1号住居跡からは多量の円筒埴輪片が出土している。

これらの遺跡を概観すると、数軒の住居跡からなる小集落と捉えられる。一方、成願遺跡もこの時期を主体とする遺跡であるが、住居跡58軒・掘立柱建物跡21棟が検出されている。同様に大岡北部・鹿島遺跡群でも30軒の住居跡が見つかっている。調査面積も考慮する必要はあるが、成願遺跡と大岡北部・鹿島遺跡群は突出した規模を有する集落遺跡と捉え

られる。

また、下田町遺跡・阿諏訪野東遺跡では成願遺跡と同様に、同時期の掘立柱建物跡が確認されている。下田町遺跡の掘立柱建物跡は3間×2間の規模をもち、柱穴は径0.8m前後と成願遺跡例と比較すると格段に大きい。このように、成願遺跡の至近距離に所在する遺跡から古墳時代後期の掘立柱建物跡が発見されている事実は注目に値する。特に、下田町遺跡と成願遺跡は遺跡の立地や存続時期など一致する点も多く、成願遺跡を理解するうえで、きわめて重要な遺跡といえる。

比企丘陵における古墳の築造は、既に古墳時代前期段階から始まっている。吉見町山の根古墳は全長約55mの前方後方墳で、4世紀前半代に比定されている。東松山市諏訪山古墳群では、4世紀中葉前后に全長約53mの前方後方墳の第29号墳が築造されている。東松山市北部の丘陵尾根上にかつては300基以上の古墳が群集し、湾入する小谷によって8支群に捉えられている三千塚古墳群でも、古墳の築造が開始されている。なかでも、全長86mを測る帆立貝形前方後円墳の雷電山古墳は、5世紀初頭と推定される埼玉県内最古の円筒埴輪を樹立する古墳である。出土した埴輪は裾広がりの基部と多条突帯を特徴とする当時の定型化した埴輪と比べると特異なもので、埴輪の製作技法は全国的にも注目されるものである。このように、諏訪山古墳群・三千塚古墳群は古墳時代前期から既に造営が開始され、さらに前方後円墳終焉後の7世紀代に至まで連綿と築かれ続けた古墳群である。

一方、成願遺跡に近接する大里村内の古墳群は、概ね6世紀以降から築造が開始される後期古墳群である。

円山古墳群は径17mほどの円墳3基が調査されている。いずれの古墳からも埴輪が検出され、6世紀後半に位置づけられている。なかでも第2号墳は凝灰質砂岩切石積横穴式石室の礫床が残存し、鞍・翳・帽子形等の器財埴輪や人物埴輪が出土している。

また船木遺跡・桜谷東遺跡から検出された古墳跡も属するものと思われ、桜谷東遺跡の円墳跡周溝からはTK47併行の須恵器甕が出土している。

阿諏訪野古墳群は阿諏訪野東遺跡から検出された6基の円墳群である。第1・2号墳から凝灰岩質砂岩の切石積みの横穴式石室が確認されている。埴輪は樹立されておらず、出土した土師器・須恵器から7世紀中葉から7世紀末に造営されている。また第1号墳の東側に沿って発見された礫榔墓は、第1号墳の副次的埋葬施設と推定されている。

東山古墳群は、東山地内と大塚地内に分布が想定された古墳群が一括して把握された古墳群である。東山古墳は江戸時代末期に消滅した古墳で、周辺には埴輪片・土師器片が散布している。伝承や地形の僅かな高まりから前方後円墳と想定されている。大塚1号墳は全長45.44mの帆立貝形前方後円墳である。後円部周溝が円形に全周する特異な古墳で、当初は円墳として築造された古墳が、あまり時間を経ずに墳形の変更がなされ、前方部が造り出された古墳として捉えられている。また括れ部南側に隣接する大型の竪穴状遺構は、前方部築成に際して掘削された遺構と想定されている。ほかに、凝灰岩質の切石による竪穴系埋葬施設を有する7世紀前半に比定される円墳も検出されている。

楓山古墳群の楓山古墳は『埼玉縣史』に「銅鏡・石製鏡・勾玉・石小刀・鈴環・須恵壺・土製鈴・埴輪馬」などを出土した古墳と記載された前方後円墳である。規模は不明であるが、伝承された遺物から6世紀前半代の築造と推定されている。

賢木丘古墳群は6世紀代に造営された古墳群で、詳細は不明である。明治36年に発行された『東京人類学雑誌』207号に人物埴輪の頭部が2体紹介され、顔面に赤彩が施されている。

甲山古墳群は甲山（冴山）古墳を中心とする古墳群である。甲山古墳は径約90m、高さ11mほどの二段築成の円墳とされているが、東松山市史編纂室が行った墳丘測量では東側の張り出しが認められ、造

出付円墳もしくは帆立貝形前方後円墳の可能性がもたれている。帆立貝形前方後円墳とすれば全長100mを超え、円墳とすれば行田市さきたま丸墓山古墳に継ぐ全国屈指の規模を誇る。墳丘から埴輪片が採集され、6世紀前半の築造と想定されている。また甲山古墳南方に隣接した小円墳から人物埴輪頭部が発見されている。

大境古墳群は既に消滅した古墳群で、伝承から数基の小円墳によって構成された小規模な古墳群と推測されていたが、大里村南部土地区画整理事業に先立つ発掘調査によって、前方後円墳2基と円墳11基が検出されている。第1号墳は全長40mの前方後円墳で、後円部中央に凝灰岩質砂岩の切石積横穴式石室が設置されている。石室内からは耳環・鉄鏃等が、括れ部周辺の周溝からは提瓶7点が出土し、第2号墳は全長36mの前方後円墳で、後円部・前方部とともに石室の痕跡が確認されている。前方部石室からは短刀・耳環・鉄鏃等が出土している。第1・2号墳ともに埴輪が樹立されていない終焉期の前方後円墳である。11基の円墳跡は径14~27mの規模で、埴輪を樹立する古墳としない古墳が共存する。

とうかん山古墳は全長74mの前方後円墳で、墳丘から採集される埴輪や土師器片から築造年代は6世紀中葉前後と推定されている。また、とうかんやま古墳を中心に、隣接する箕輪遺跡の古墳跡2基(うち1基は埴輪伴出)や五反林遺跡の古墳跡2基(埴輪伴出)を含めた古墳群を形成していると推定される。

大里村最南端の北谷南遺跡の周辺には、埴輪片の散布や伝承等から10基前後の古墳群が想定されている。発掘調査では古墳の周溝は確認されていないが、タガ状突帯の断面がM字形を呈する円筒埴輪片と須恵器片を出土している。一方、大里村北西部に分布する瀬戸山古墳群は、熊谷市揚井・万吉に分布する古墳群との関連が予想されている。埴輪の樹立が認められないことから、7世紀に造営が開始された終末期の古墳群と推測されている。また、大里村の

南方には、吉見町田甲原古墳群・吉見町茶臼山古墳群・東松山市岩鼻古墳群等が所在している。茶臼山古墳群では一辺約28mの方墳の茶臼山古墳を中心とし、終末期の古墳群が造営されている。これと併行して、吉見町吉見百穴や吉見町黒岩横穴群の横穴墓群も形成されている。

奈良・平安時代の大里村は、「和名抄」によると大里郡・横見郡にまたがる地域に相当し、その郡界は和田吉野川が推定されている。当時の和田吉野川の流路の復元次第ではその郡界も左右され、和田吉野川の自然堤防上に立地する成願遺跡は、まさしく大里郡市田郷と横見郡御坂郷の郡界・郷界付近に位置している。

奈良・平安時代の周辺地域の遺跡数は飛躍的に増加している。阿諱訪野東遺跡で住居跡・土壙・井戸跡と奈良時代の溝跡、東山遺跡で堅穴状遺構・火葬墓・土壙・円形土壙、楓山北遺跡で住居跡・土壙と掘立柱建物跡群が予想されるピット群4カ所、桜谷東遺跡で住居跡・ピット群・井戸状遺構、大林南遺跡で溝跡、大境遺跡で住居跡・掘立柱建物跡・溝跡、大境南遺跡で住居跡・溝跡と平安時代の円形土壙、大林遺跡で平安時代の住居跡、円山遺跡で住居跡、船木遺跡で住居跡・掘立柱建物跡・土壙、船木下遺跡で土壙・溝跡、中郭遺跡で平安時代の掘立柱建物跡、玉太岡遺跡で平安時代の住居跡、東松山市大谷遺跡で住居跡・土壙・溝跡、沢口遺跡で住居跡・土壙・溝跡が発見されている。また、大境遺跡では土器焼成遺構2基と粘土採掘場群、および小鍛冶遺構や円形土壙群が検出されている。

各遺構と奈良時代から平安時代にかかる時間軸との対応関係や調査面積の多寡を充分に考慮する必要があるが、現在知られている奈良・平安時代の集落を概観すると、桜谷東遺跡のように数十軒からなる大規模集落、船木遺跡のような20軒前後からなる中規模集落、そして阿諱訪野東遺跡や楓山北遺跡に代表される数軒単位からなる乱立した小規模集落に大別することが可能である。

また、成願遺跡と同様の自然堤防上には大里村仲町遺跡と下田町遺跡が確認されているが、土壙と溝跡のみが検出され、住居跡は知られていない。古墳時代後期には自然堤防上にも大規模集落を展開していたのに対し、奈良・平安時代には再び台地上に集落を展開している状況を看取できる。しかし、発掘面積が限られている仲町遺跡・下田町遺跡の状況を加味し、加えて、平成13年度より発掘調査されている下田町遺跡の成果によっては、自然堤防上へ展開した集落の存在を否定できない。

奈良時代の遺跡で特筆すべきものは、東松山市大谷窯跡群である。昭和30年（1955）に2基の半地下式有段登窯が発掘調査された国指定史跡の瓦窯跡群である。遺物は大形の平瓦と素弁十葉単弁蓮華文軒丸瓦・文字瓦等が出土し、軒丸瓦は飛鳥寺系統の瓦として注目されている。

大谷窯跡群の供給関係は明らかになっていないが、桜谷東遺跡・大林遺跡・船木遺跡・大谷遺跡の住居跡から瓦が出土している。このうち、船木遺跡では寺との関連が予想される遺構が認められ、鉄釘や瓦片が検出されるとともに、土壙から綠釉陶器と須恵器坏1点が出土している。

「文字資料」としては、沢口遺跡の第12号土壙から「□太人」と読める文字が刻まれている滑石製紡

錘車、円山遺跡の平安時代の住居跡カマドから鉄製焼印が出土している。円山遺跡出土の焼印は、長さが25cmほどで、鉄棒が「有」字に加工されている。「焼印」という遺物から古代の「牧」を連想させられるが、「大里郡坪付」によると「牧」を暗示する「収津里」「牧川里」という里名の記載がみられ、大里郡内に「牧」が存在していた可能性が指摘されている。「有」字については明らかになっていないが、古代氏族有道氏や「大里郡坪付」にみられる「宥田里」との関連などが示唆されている。いまだ推測の域を出ないが、平安時代の横見郡域に「有」字焼印を要する役所的な施設の存在が想定されている。

中世鎌倉時代は、大里村周辺に比企氏のような豪族的武士団とともに武藏七党と呼ばれる私市党・児玉党・丹党・横山党などの中小武士団が割拠していた。これら武士団との関係は明確ではないが、箕輪遺跡では土壙と藁研堀に囲まれた館跡が発見されている。ほかに桜谷東遺跡・船木下遺跡・大里村西浦遺跡・大里村高城町遺跡・北郭遺跡・玉太岡遺跡等から中世段階の掘立柱建物跡や溝跡が検出されている。なかでも高城町遺跡では中世から近世にかかる道路跡1条が確認されている。またこの地は延喜式内社高城神社の縁の地でもある。

III 遺跡の概要

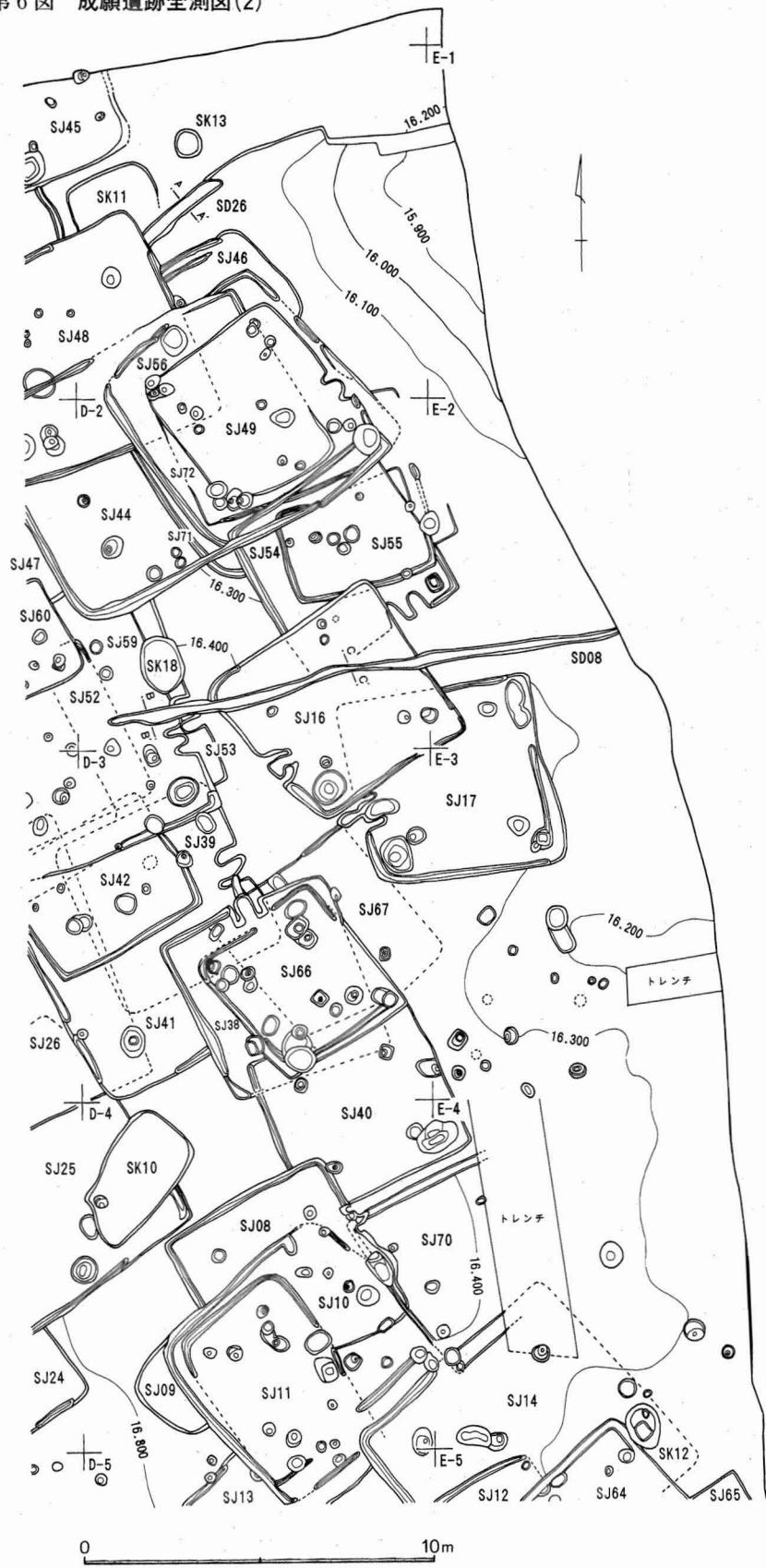
成願遺跡は、埼玉県大里郡大里村大字玉作字成願3435番地他に所在し、和田吉野川に架かる玉作橋西

側に位置している。荒川とその支流の和田吉野川が合流する地点から約3km遡った和田吉野川右岸に広



がり、大里村の南半部中央付近に位置している。東経 $139^{\circ} 25' 25''$ 、北緯 $36^{\circ} 05' 15''$ 付近である。和田吉野川右岸に沿って点在する自然堤防上に立地し、

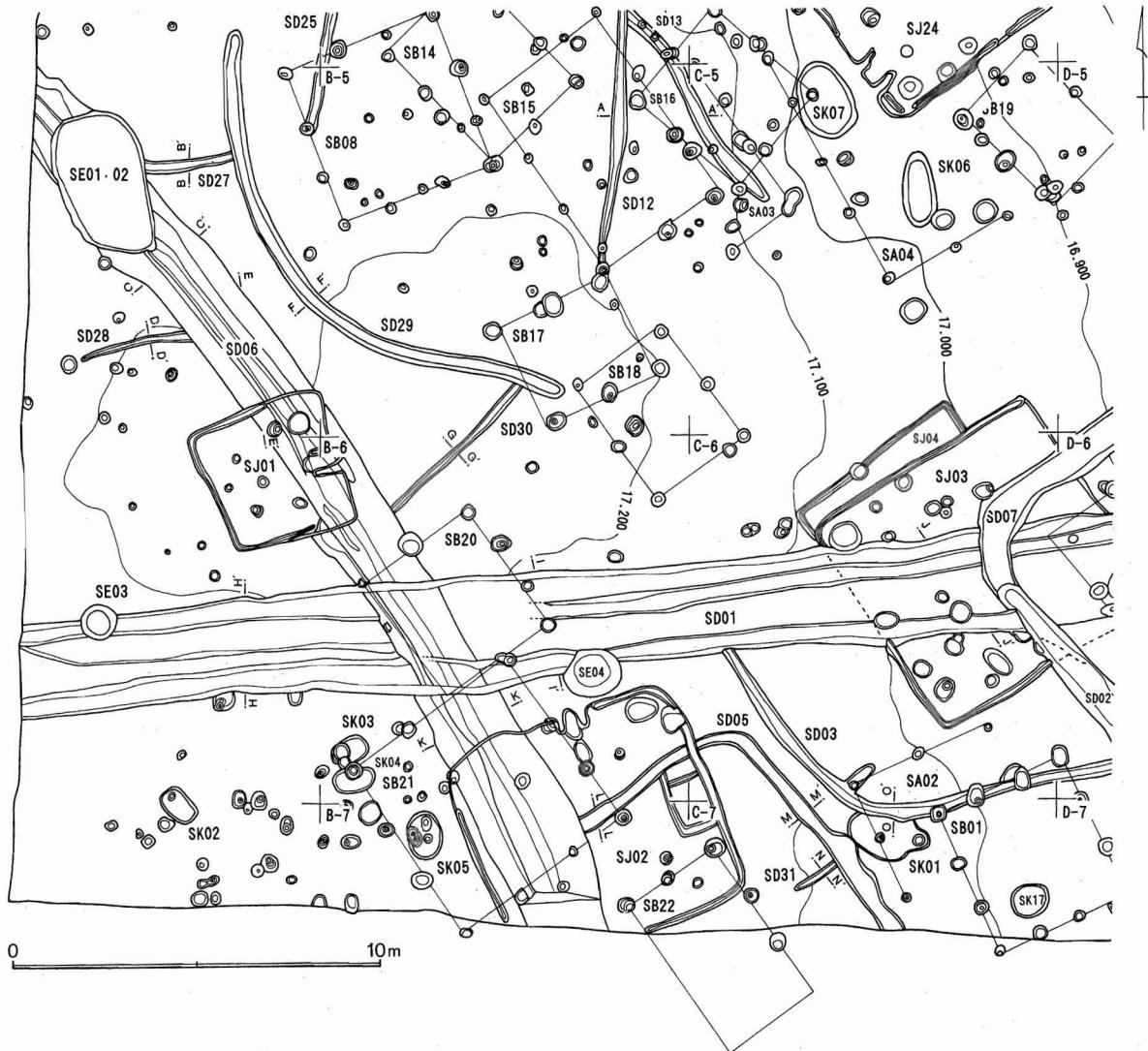
第6図 成願遺跡全測図(2)



遺跡の範囲は東西約480m、南北100~270mに及ぶ。

発掘調査は、成願遺跡北東端部の和田吉野川防災センター建設予定地の3,500m²を対象とし、平成12

第7図 成願遺跡全測図(3)



年9月から12月まで実施された。調査区は周知の遺跡範囲の北東端にあたり、南西部の平坦面から北東方向に向けて緩やかな傾斜をもって下っている。

発見された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡9軒、古墳時代後期の住居跡58軒・掘立柱建物跡21棟・柵跡4列、中世の井戸跡5井、弥生時代後期～中世の土壙18基・溝跡35条・ピット多数である。

弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡は、平坦面から傾斜が始まる肩部に分布している。住居跡の軸は等高線とほぼ一致し、自然地形を活用した集落

の展開が窺われる。同時期と推定される第6・14号溝跡の走向方位は、第6号溝跡が等高線とほぼ一致し、第14号溝跡は等高線と直交している。これら2条の溝跡は、南方の調査区外で交叉するか、L字状もしくはカーブを描いて繋がる可能性が高い。また第6号溝跡が居住地よりも高台に掘削されていることにも注目すると、集落の区画溝や環濠と意義づけることもでき、その解釈次第で異なった集落景観を復元することができる。

古墳時代後期の住居跡は調査区北東半部の緩斜面部に集中し、その密集度は高い。一方、掘立柱建物

第8図 成願遺跡全測図(4)

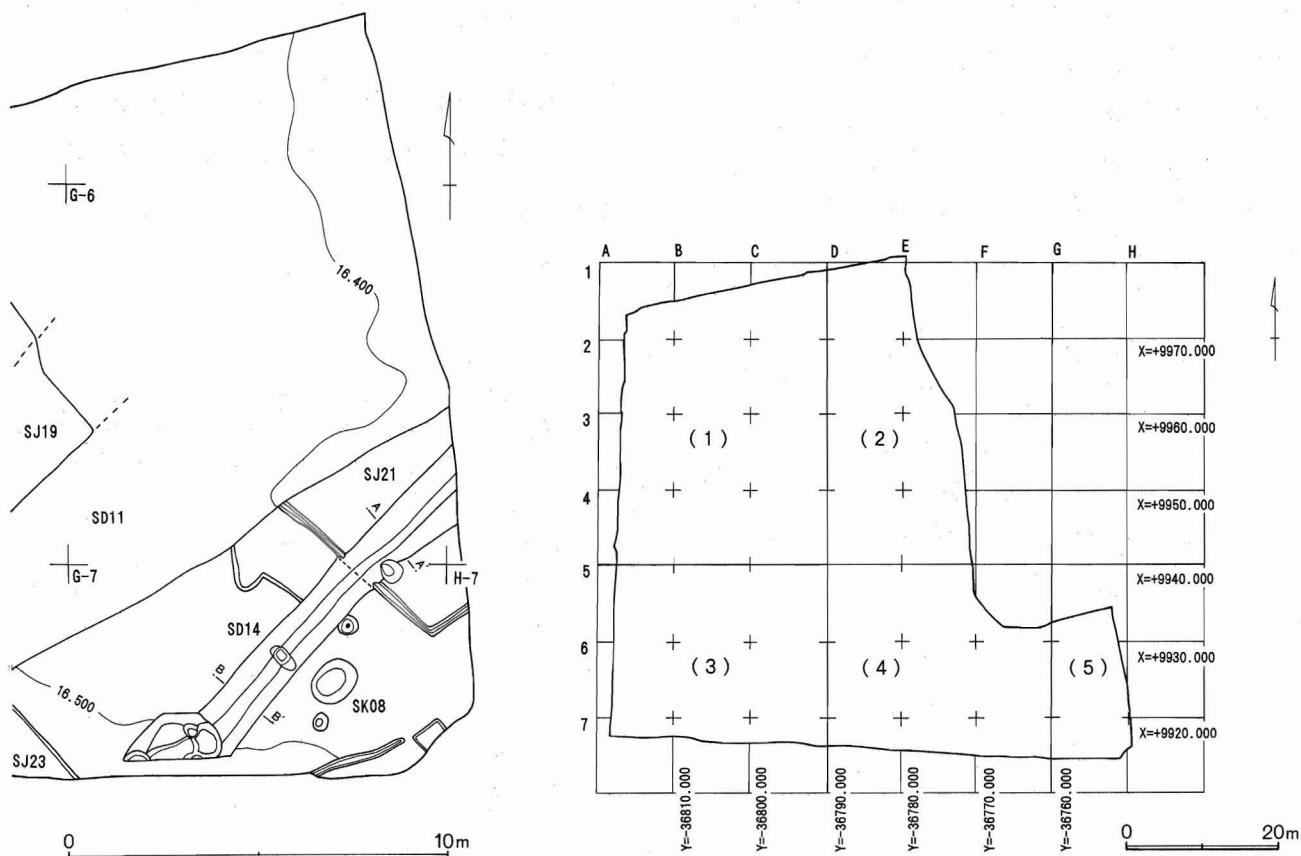


跡は南西半部の平坦面に分布し、柵跡は掘立柱建物跡とのセット関係が認められる。住居跡と掘立柱建物跡の分布は対照的である。

古墳時代後期集落において堅穴住居跡と掘立柱建物跡が並立することは、成願遺跡の特徴である。建物構造の違いが遺構分布に反映されていることは、両者の集落内における機能の違いを窺わせる。一方では、住居跡と掘立柱建物跡のいずれの軸方向も等高線とほぼ一致する事は、「建築技術の進展が地形の制約を越えられできなかった」と捉えることもできるが、集落の展開に立地する地形を活用した合理性が強く認められる。

古墳時代後期集落において特に注目されるのは、掘立柱建物跡と柵跡の関係である。第1号柵跡は第7号掘立柱建物跡と、第2号柵跡は第1号掘立柱建物跡、第3号柵跡は第15号掘立柱建物跡とセット関係が認められ、軸方位の違いからセット関係が成立しない可能性も否めない第4号柵跡と第19号掘立柱建物跡もある。掘立柱建物跡と柵跡のセット関係は、検出された掘立柱建物跡を柱穴のみが確認された堅穴住居跡と捉えることを否定し、掘立柱建物跡の存在を肯定する。なかでも、第7号掘立柱建物跡・第1号柵跡には、さらに外側にL字に屈曲する第2・7号溝跡が区画している。また第1号掘立柱建物

第9図 成願遺跡全測図(5)



跡・第2号柵跡は、第2号溝跡を挟んで第7号掘立柱建物跡・第1号柵跡と対峙し、集落内の特殊な空間を創造している。

中世の遺構は、井戸跡と第1号溝跡に代表される方位に沿った溝跡があげられる。溝跡は集落や耕地の区画溝と想定され、現地形とほぼ一致している。井戸跡は調査の安全を図るため、いずれも上部付近の形状を確認するに留めているが、素掘りの井戸と

思われる。比較的近い位置に分布し、自然堤防という低地地形に立地していることから、使用中の壁崩落などに際して、補修・修築よりも新たに掘削したことが考えられる。

遺物は住居跡、土壙、溝跡などから土師器を中心に、弥生土器、須恵器、常滑、石製模造品、砥石、紡錘車、玉類、縄文後期の土器などが出土している。

IV 遺構と遺物

1. 住居跡

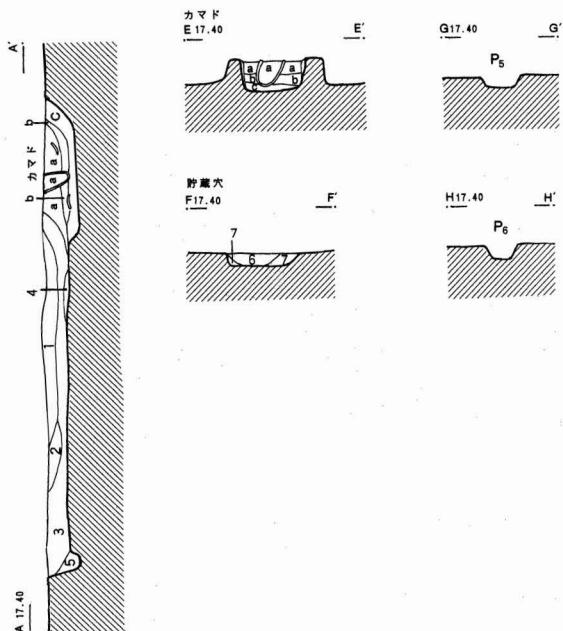
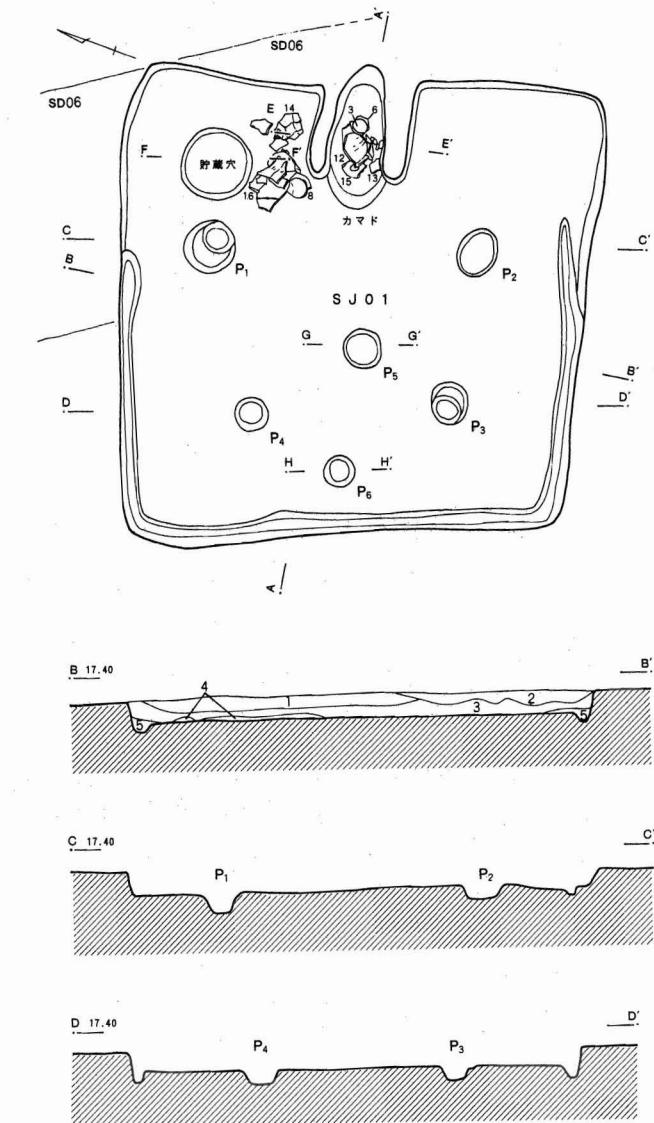
成願遺跡から発見された住居跡は67軒である（第1～72号住居跡、第22・32・33・58・63号住居跡は欠番）。住居跡は重複の度合いが激しく、調査区北東半の緩斜面部に等高線に沿った方向に軸を揃えて密集する。住居跡の密集化は、制約された地形に住居跡の構築を繰り返した結果である。

一方、掘立柱建物跡・柵跡は調査区南西半の標高の高い平坦域に分布するが、住居跡と同様に、等高

線に沿った方向に軸方位を揃えている。

住居跡と掘立柱建物跡の対照的な分布は、住居跡の構築範囲と掘立柱建物跡の建立範囲が集落内において明確に分離されていたことが捉えられる。また住居跡の密集化および住居跡と掘立柱建物跡の軸方位の一一致には、遺跡の立地する地形の影響の強さと、立地する地形を効率的に活用した集落展開を窺うことができる。

第10図 第1号住居跡

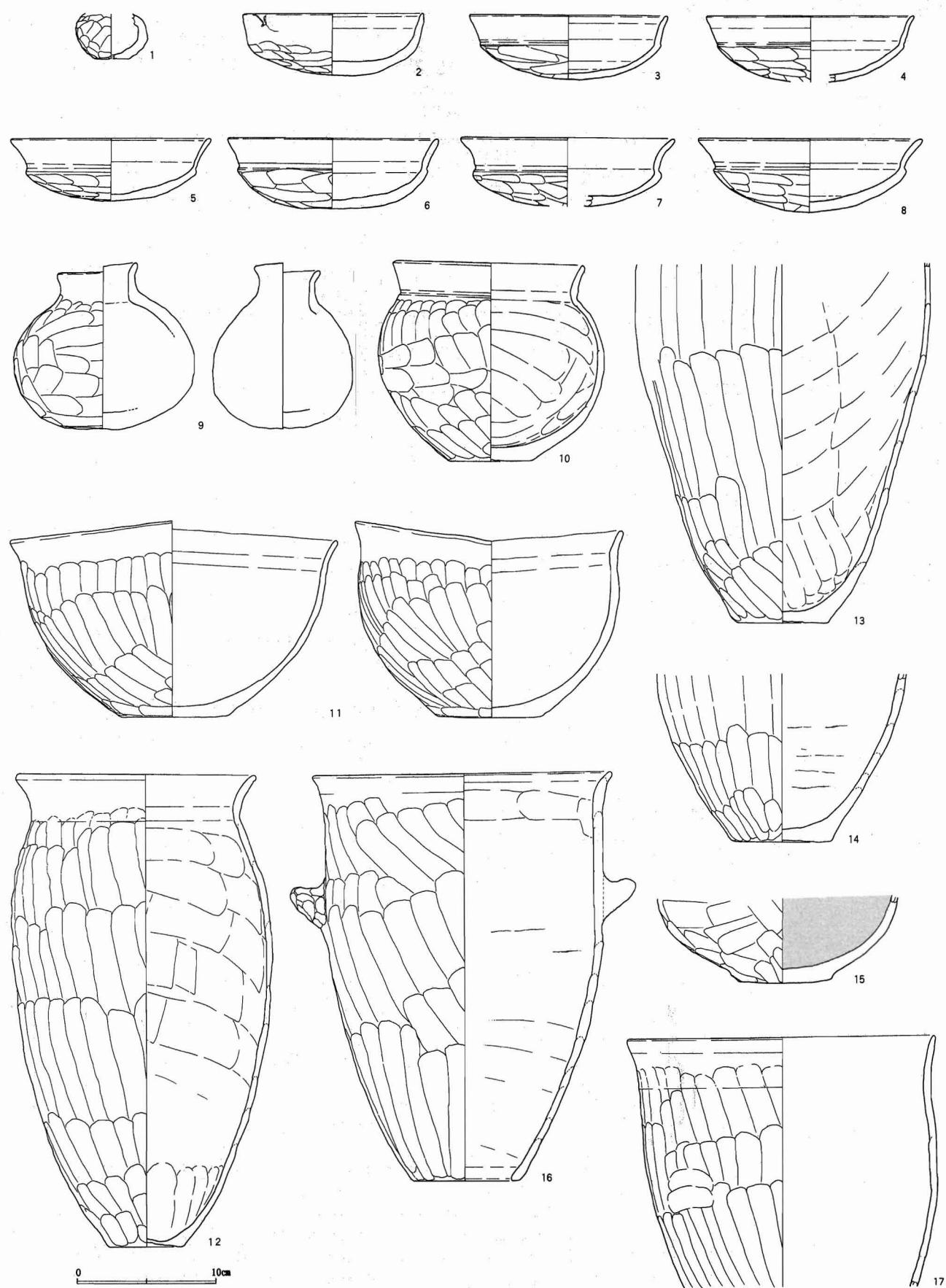


第1号住居跡

- | | |
|----------|--------------|
| 1 灰色土 | 地山粒子少量 |
| 2 灰黄色土 | 地山フジック |
| 3 暗灰黄色土 | マガシ粒子多 遺物出土層 |
| 4 にじい黄色土 | 地山フジック多 |
| 5 にじい黄色土 | 地山フジック多 |
| 貯蔵穴 | |
| 6 黄灰色土 | マガシ粒子多 |
| 7 黄灰色土 | 粘性強 |
| カマド | |
| a 暗灰黄色土 | カマド天井部の崩落 |
| b 焼土層 | 焼土粒子 炭化物粒子 |
| c 炭化物層 | |

0 2m

第11図 第1号住居跡出土遺物



0 10cm

第1号住居跡（第10図）

A-5・6、B-5・6グリッドに位置し、重複する第6号溝跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長3.77m、南北幅3.69m、確認面からの深さ0.20m、主軸方位N-70°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示し、覆土下層の3層から遺物が出土している。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。カマド側が広い台形に配列されている。

壁溝は南壁中央～西壁～北壁中央に巡り、幅0.10～0.22m、床面からの深さ0.09mほどである。

カマドは東壁中央に設置され、甕が掛け口に掛けられた状態で天井部が崩落している。燃焼部は1.13m×0.47mの楕円形で、火床面は床面より僅かに窪む。袖部内壁は被熱による焼土化が著しい。燃焼部には焼土層・炭化物層が堆積していた。

貯蔵穴は、カマド北側の北東コーナー付近に付設される。平面は長径0.56m×短径0.55mの円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.10mを測る。底面は平坦である。

ピットはP5・P6の2本が検出された。カマドと相対する西壁際の中央に位置するP6は、出入り口施設に関連するピットである可能性が高い。

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	ミニチュア土器	(3.2)	2.4	ABCHJ	B	暗褐	70			
2	壺	12.9	4.5	ABIJ	A	橙	95			
3	壺	14.4	4.6	ACHIK	B	浅黄橙	95	No 1		
4	壺	14.9	(4.7)	ABCHJ	B	にぶい橙	60			
5	壺	14.3	4.6	HJJ	C	橙	95			
6	壺	15.1	5.1	ACHIL	B	橙	100	No 2		
7	壺	(15.3)	(4.9)	ACHL	A	明赤褐	45			
8	壺	16.1	5.3	ABCII	A	にぶい赤褐	80	No 7		
9	横瓶	5.5 (4.2)	12.0	ABC	B	赤褐	90			
10	小型甕	13.4	14.4	5.8	ABCIJ	B	橙	70		
11	鉢	23.3 (19.2)	14.1	7.4	ABCHI	B	橙	60	No 6・カマド	
12	甕	(16.8)	34.0	5.4	ABCHIJ	B	暗褐	70	No 3	
13	甕	(20.9)	6.4	ABCHI	B	にぶい橙	40	No 3・4		
14	甕	(12.1)	7.2	ACEHIL	B	にぶい褐	100	No 9		
15	壺	(6.1)	6.7	ABCHL	B	赤褐	100	No 5	内面に黒色の付着物	
16	甕	21.2	29.2	7.7	ABCHI	B	にぶい赤褐	95	No 6	口径は把手方向に広がる楕円形 口径値は最大径 内面ナデ単位不明瞭
17	甕	22.0	(18.0)	ABCIJ	B	橙	25			

遺物はカマド内およびカマドの北側から、完存率の高い遺物が集中して出土している。図示したほかに、土師器甕・甌・壺・鉢片および混入した弥生土器片もみられる。

第2号住居跡（第12図）

B-6・7、C-6・7グリッドに位置する。重複する第5・6号溝跡よりも新しく、第21・22号掘立柱建物跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、主軸長6.39m、東西幅6.82m、確認面からの深さ0.08m、主軸方位N-23°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示し、壁際から埋没していった状況が窺われる。

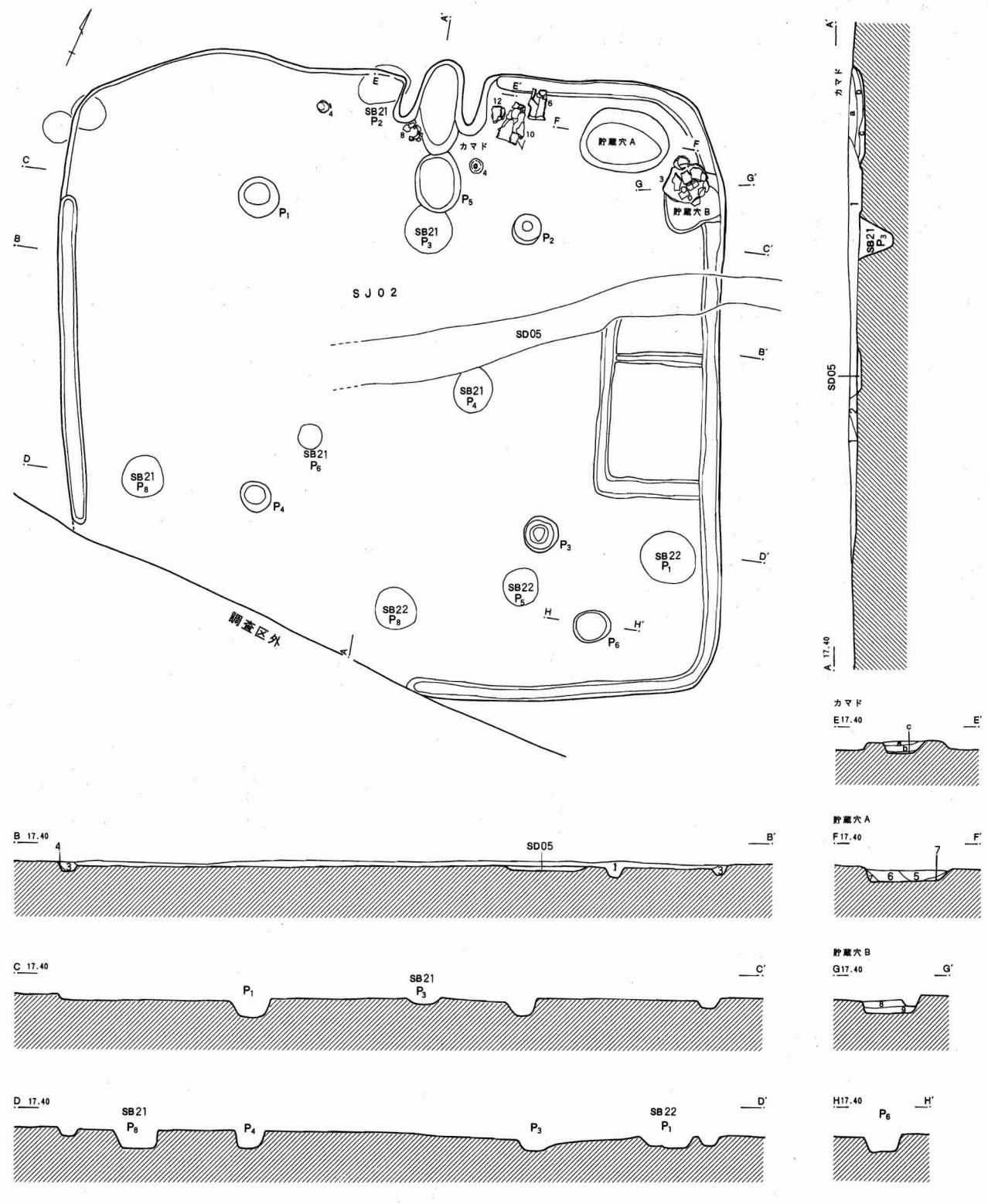
主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。住居跡平面プランに対して、若干歪な配列をしている。

壁溝は北壁中央～東壁～南壁中央および西壁中央付近に巡る。幅0.14～0.20m、床面からの深さ0.08mほどである。

東壁中央付近に沿って、南北1.50m、東西1.07mの方形に溝が巡っている。この部分の床面の状況等が把握されていないため判断はできないが、住居跡の出入り口もしくは間仕切りの施設と推測される。

カマドは北壁中央付近に設置される。燃焼部は0.98m×0.50mの楕円形で、火床面は住居跡床面より

第12図 第2号住居跡



第2号住居跡

- 1 黄灰色土 マンガソ粒子
2 浅黄色土 地山フロック
3 暗灰黄色土 地山フロック
4 浅黄色土 地山フロック

貯藏穴

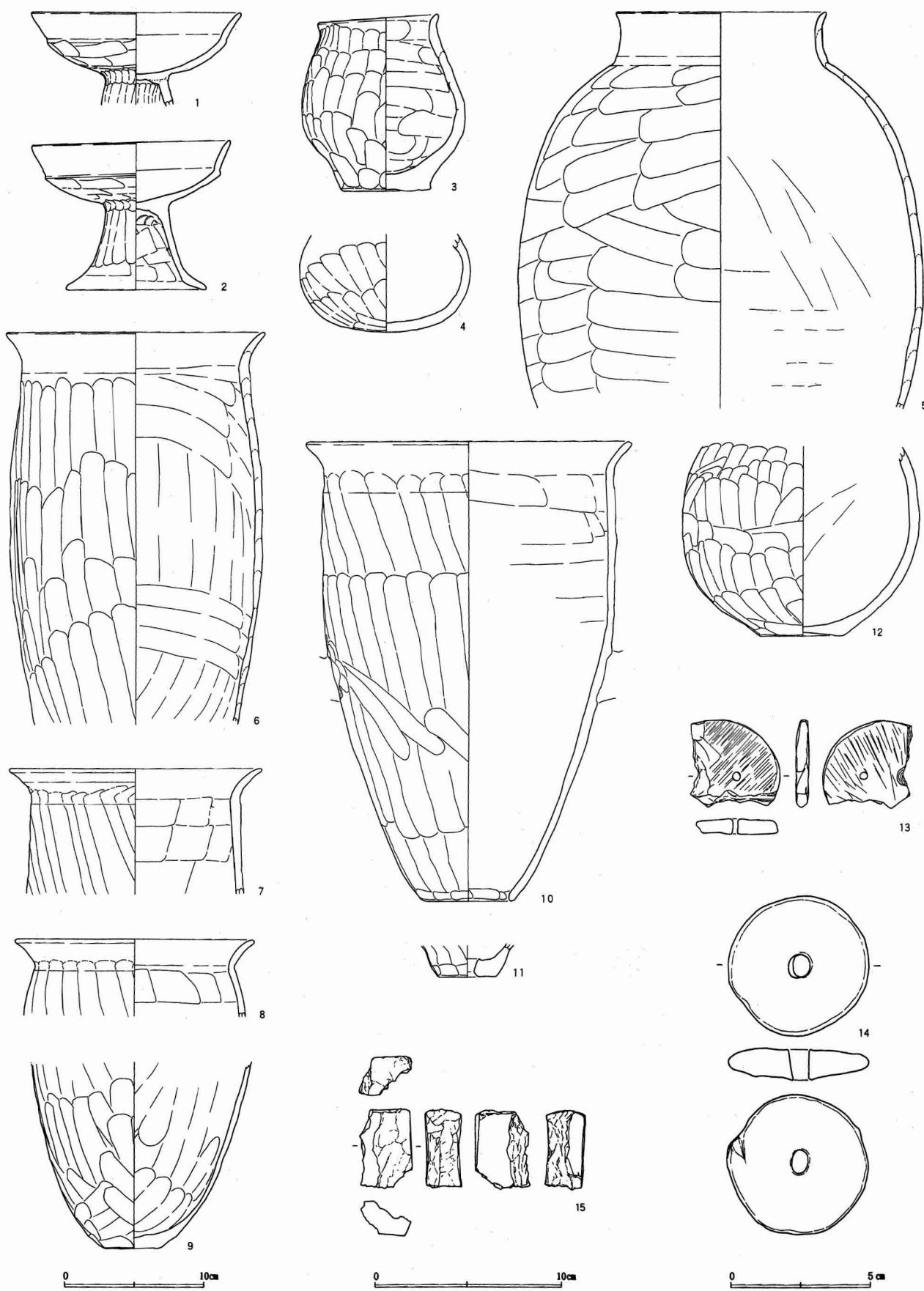
- 5 黄褐色土 地山フロック マンガソ粒子少量
6 黄灰色土 マンガソ粒子多量
7 浅黄色土 地山フロック多量
8 黄灰色土 下層部にマンガソ粒子多量
9 黄褐色土 地山フロック多量

カマド

- a 赤褐色土 烧土フロック多量
b 黄灰色土 底面に烧土堆積
c 黄褐色土 炭化物 地山フロック

0 2m

第13図 第2号住居跡出土遺物



も窪み、多量の焼土・炭化物が堆積している。カマド前面には、浅い掘込み（P5）も認められる。

貯蔵穴は2基検出され、いずれもカマド東側の北東コーナー付近に付設される。

貯蔵穴Aは、長径0.88m×短径0.64mの平面楕円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.12mを測る。底面は平坦で、掘込みは浅い。

貯蔵穴Bは東壁に接し、長径0.72mの平面不整隅丸方形を呈する。底面は平坦で、住居跡床面からの深さは0.14mと浅い。覆土上層から土師器小型甕が出土している。

南東コーナー付近のP6については、用途・性格ともに不明である。

図示した遺物のうち、13は滑石製模造品の有孔円板である。縦3.1cm、横3.15cm、重さ8.85gほどが残存し、厚さ0.55cm、孔径0.28cmを測る。14は土製の紡錘車で、縦5.0cm、横5.1cm、厚さ1.05cm、孔径0.8cm、重さ31.63gを測る。15は砥石で、長さ4.3cm、幅2.8cm、厚さ1.7~1.95cm、重さ23.82gほどが残存する。ほかに、図示得なかった土師器甕・甌・壺片および混入した弥生土器片も出土している。

第3号住居跡（第14図）

C-5・6、D-6グリッドに位置する。重複する第4号住居跡、第7号掘立柱建物跡－第1号柵跡－第2・7号溝跡よりも新しく、東西方位に沿って走る第1号溝跡よりも古い。

平面形態は方形で、主軸長6.94m、東西幅6.84m、

第2表 第2号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
									Na 6	残存壺部90% 脚部5%
1	高壺	15.0	(6.6)		ABHI	B	橙	90	Na 6	残存壺部90% 脚部5%
2	高壺	14.1	10.7	10.0	ABCI	B	橙	50		
3	小型甕	(8.4)	12.7	6.3	ABCI	B	暗赤褐	60	Na 1・2	
4	壺	(6.9)			BCHIL	B	橙	30	Na 6・8	内外面ともに風化が著しく調整不明瞭
5	甕	(15.0)	(28.5)		ABCHIJ	B	にぶい橙	30		
6	甕	(18.2)	(28.2)		ABCHI	B	橙	40	Na 3	
7	甕	(18.0)	(9.0)		ABCHIKL	B	にぶい橙	10		
8	甕	(6.8)	(5.5)		ABCHL	B	明赤褐	20	Na 7	内外面とも風化著しい
9	甕	(13.4)	4.1		ABCL	B	褐	20		カマド
10	甌	(22.8)	33.0	(6.1)	ABCHI	B	橙	40	Na 4	把手付
11	甌	(2.2)	4.0		ABHJL	C	明赤褐	50		
12	小型甕	(13.6)	5.9		ABCHL	B	橙	30	Na 5・カマド	内面ナデ調整単位不明瞭

確認面からの深さ0.19m、長軸方位N-58°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3の3本が検出されている。残る1本は重複する第1号溝跡によって壊されている。

壁溝は南壁中央～西壁中央および北西コーナー～北東コーナーに検出されているが、第1号溝跡との重複を考えると南壁～西壁～北壁に巡っていた模様である。幅0.13~0.22m、床面からの深さ0.04mほどである。

貯蔵穴は2基付設される。

貯蔵穴Aは北西コーナー部に位置し、長径0.91m×短径0.76mの平面楕円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.13mを測る。底面は平坦である。

貯蔵穴Bは長径0.81m×短径0.76mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.27mを測る。底面に平坦面がない断面U字形である。

カマドは検出されていないが、貯蔵穴との位置関係から、西壁中央付近もしくは東壁の南東コーナー付近に設置されていた可能性が高い。

ピットはP4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P13・P14・P15・P16・P17・P18・P19の16本が検出されている。いずれも用途は不明であるが、西壁中央にカマドを想定すると、P9はカマド燃焼部の残欠の可能性がある。

遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・壺・高壺片や、混入した弥生土器片が出土している。

第14図 第3・4号住居跡



第4号住居跡（第14図）

C-5・6グリッドに位置する。重複する第3号住居跡よりも古い。

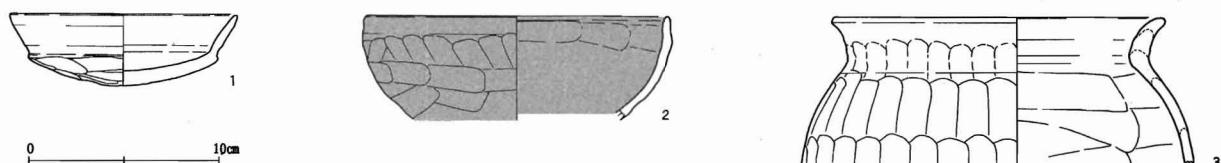
北西コーナー～北東コーナーのみが検出され、東西長5.16m、確認面からの深さ0.15m、北壁の方位N-53°-Eを測る平面方形の住居跡である。埋没状況は自然堆積を示す。

壁溝は検出範囲で全周し、幅0.11～0.18m、床面からの深さ0.06mほどである。

カマド・主柱穴・貯蔵穴は検出されていない。またP1は用途・性格、住居との関連も不明である。

遺物は土師器甕・坏片が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

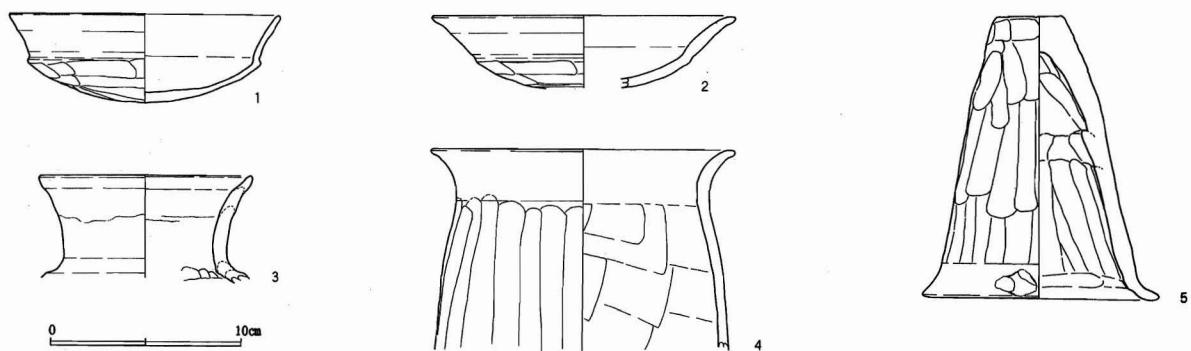
第15図 第3号住居跡出土遺物



第3表 第3号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.8		ABCHIL	B	橙	25	
2	鉢	(15.8)	(5.5)		ABCIL	B	橙	10	
3	甕	(17.0)	(7.9)		ABHIKL	B	橙	5	内外面赤彩 外面風化著しく細かく剥離

第16図 第6号住居跡出土遺物



第4表 第6号住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.2)	4.6		ABCH	B	暗褐	40	
2	坏	(15.8)	(3.8)		ABCIL	B	橙	30	
3	小型壺	(11.0)	(5.3)		ACHIL	A	にぶい赤褐	10	
4	甕	(15.8)	(10.5)		ABCHJK	B	にぶい橙	10	カマドNo 1
5	支脚	3.2	14.8	12.4	ABCHI	B	にぶい橙	100	カマド

第6号住居跡（第17図）

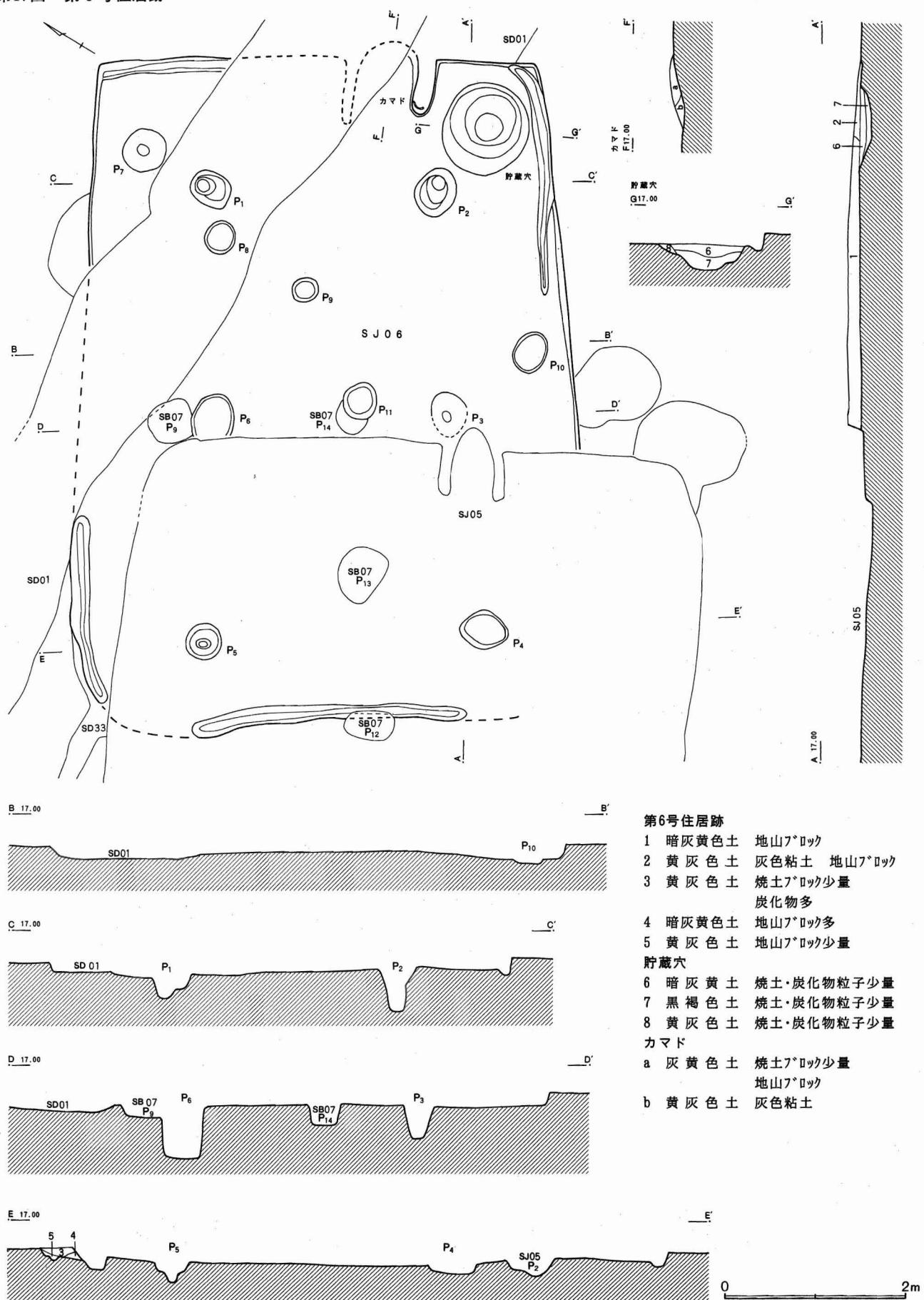
D-6、E-6グリッドに位置する。重複する第5号住居跡、第1号溝跡よりも古く、第7号掘立柱建物跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は長方形で、西半部は重複する第5号住居跡によって掘削され、西壁部は壁溝のみが残存している。主軸長7.53m、南北幅5.14m、確認面からの深さ0.16m、主軸方位N-58°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

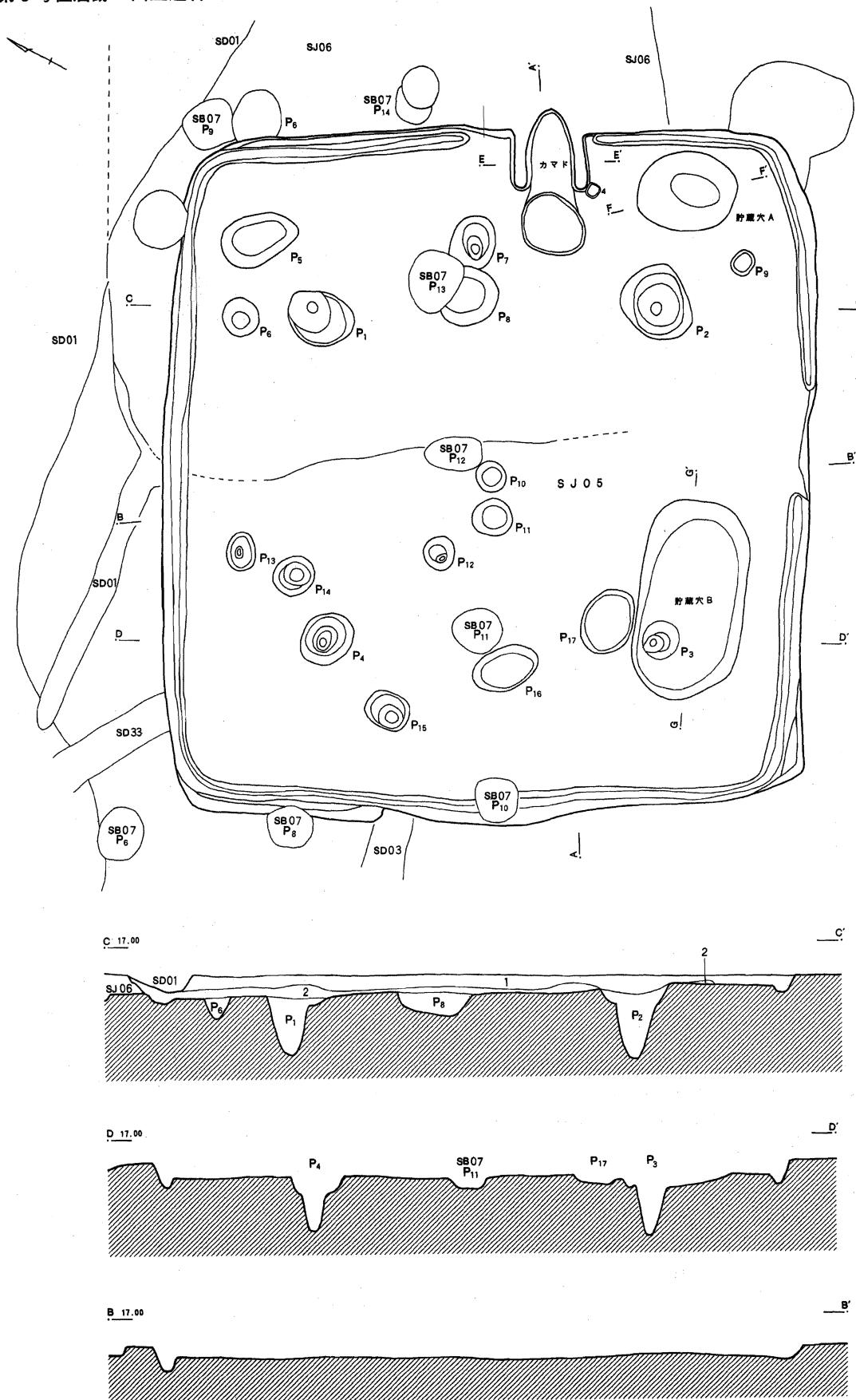
主柱穴はP1・P2・P3・P4・P5・P6の6本である。東半のP1・P2・P3・P6の柱掘形の掘込みは深く、西端のP4・P5は浅い。

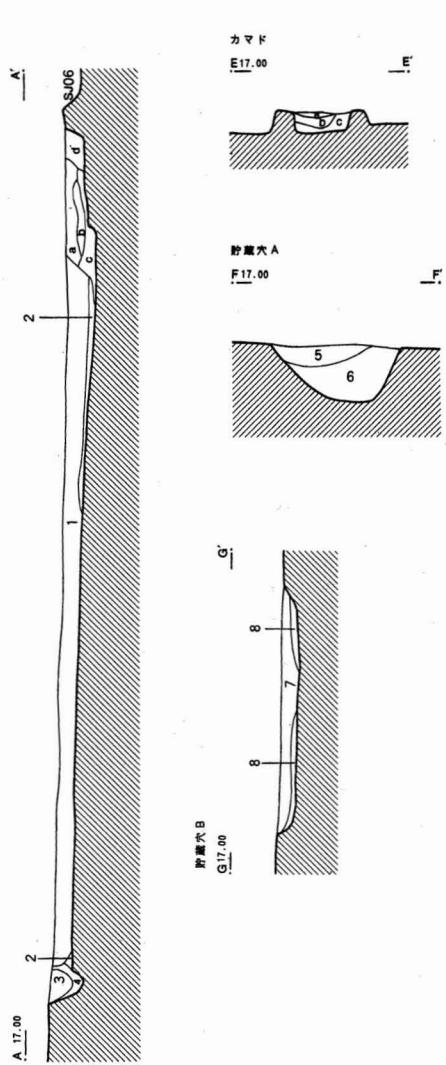
壁溝は東壁北東コーナー付近、南壁南東コーナー

第17図 第6号住居跡



第18図 第5号住居跡・出土遺物

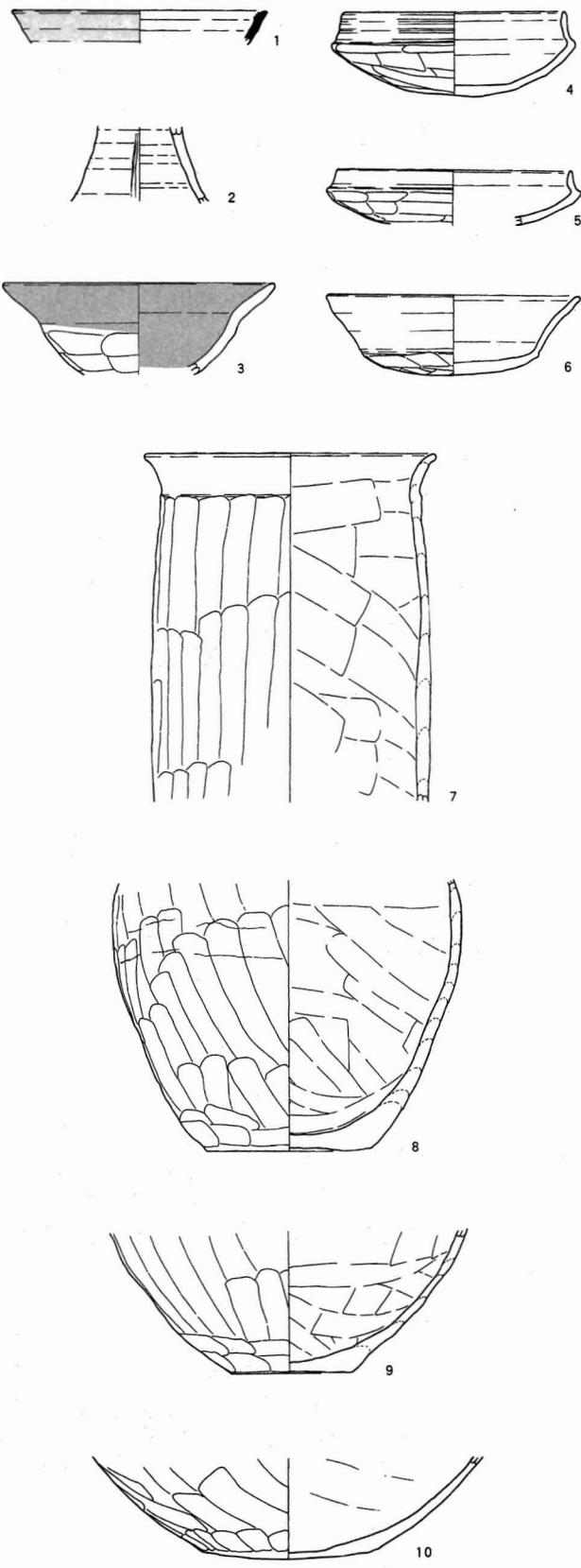




第5号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土粒子少量 砂質
 2 暗灰黄色土 炭化物粒子・地山フロック少量
 マンガン粒子
 3 黒褐色土 粘性強
 4 黄灰色土 砂質地山フロック少量
 貯蔵穴
 5 暗灰黄色土 焼土フロック 炭化物少量 砂質
 6 黄灰色土 砂質 地山フロック少量
 7 黄灰色土 焼土粒子・地山フロック若干 炭化物少量
 8 暗灰黄色土 地山フロック
 カマド
 a 黄灰色土 天井部の崩落
 焼土フロック
 b 黄褐色土 煙道部
 焼土フロック 地山フロック
 底面に炭化物薄層
 c 黑褐色土 炭化物
 d 黄灰色土 烧土フロック

0 2m



付近、西壁中央付近、北壁北西コーナー付近と断続的に巡る。幅0.14~0.20m、床面からの深さ0.07mほどである。

主柱穴の本数・位置・深さと壁溝の設置状況から、第6号住居跡は拡張された可能性がある。本来はP1・P2・P3・P6の柱穴によって構築された平面正方形に近いプランの住居跡が、P4・P5と西壁中央付近、北壁北西コーナー付近の断続的な壁溝が付設された平面長方形プランの住居跡へ拡張されたことも想定される。ただし、重複する第5号住居跡によって想定される拡張前の西壁付近は削平されているため、確証は得られない。

カマドは東壁中央やや南よりに設置される。北半は重複する第1号溝跡によって掘削され、燃焼部の規模は不明である。火床面は煙出部に向かって緩やかに立ち上がる。覆土には、カマド構築材の灰色粘土が堆積する。カマドには支脚（5）が付設される。土器と同様の焼成方法によって製作した円錐形・中空の支脚で、甕等の底部が直接あたる頂部は平坦である。

貯蔵穴は、カマド南側の南東コーナーに付設される。長径1.00m×短径0.95mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.18mを測る。底面の平坦面は狭く、壁の立ち上がりは途中に平坦部をもつ。

ピットはP7・P8・P9・P10・P11の5本が検出されている。南壁中央際のP10は出入り口施設との関連が想起させられる。

遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・高坏・坏

第5表 第5号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏		(1.8)		HJ	A	灰	5	外面自然釉付着
2	高坏		(4.1)		BCHK	A	灰	5	短脚一段三方透し
3	椀	(15.0)	(5.0)		ABCHKL	B	橙	10	内面・口縁部外面赤彩
4	坏	12.4	4.6		ACHK	B	橙	100	カマドNo 1
5	坏	(12.9)	(3.1)		ABCHK	B	にぶい橙	10	
6	坏	13.9	4.4		ABCBI	B	にぶい橙	95	
7	甕	(15.8)	(19.4)		ABCBI	B	褐	20	
8	甕		(15.0)	9.0	ABCBI	B	橙	35	
9	甕		(7.9)	6.6	ABCBIJ	B	橙	15	
10	甕		(5.6)	10.0	ABCBI	B	橙	20	

片および混入した弥生土器片が出土している。

第5号住居跡（第18図）

D-6・7、E-6・7グリッドに位置する。重複する第1号溝跡に先行し、第6号住居跡よりも新しい。第7号掘立柱建物跡、第3・33号溝跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、主軸長6.88m、南北幅6.43m、確認面からの深さ0.17m、主軸方位N-63°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。底面には柱の痕跡が認められる。

壁溝はカマド付近および南壁中央付近で途切れるが、ほかは全周している。幅0.14~0.40m、床面からの深さ0.1mほどである。

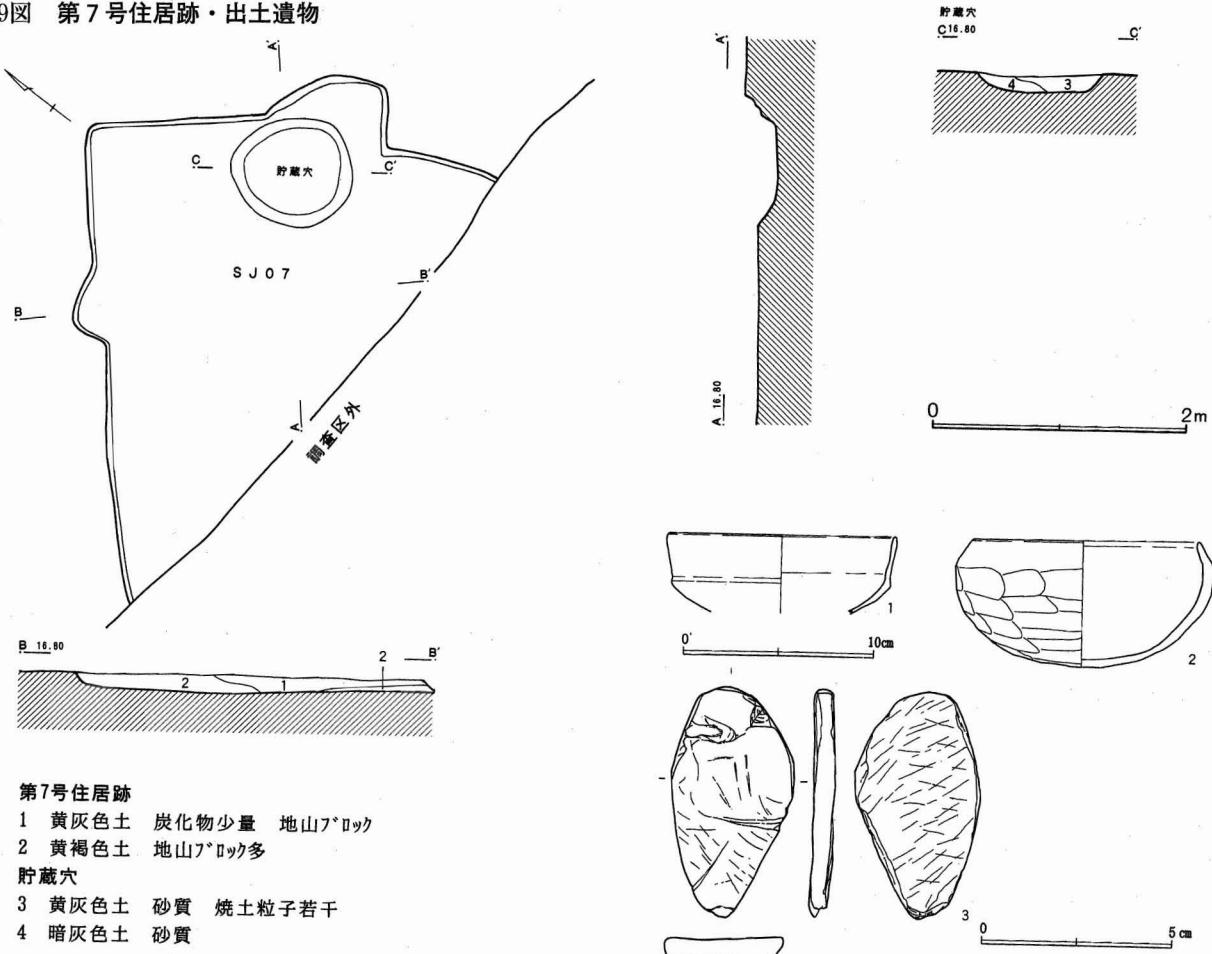
カマドは東壁中央やや南よりに設置され、天井部が崩落した状態で検出されている。燃焼部は1.20m×0.88mの楕円形で、前面には0.63m×0.60mの不整円形の浅い窪みが認められる。最下層には炭化物が堆積していた。

貯蔵穴は2基付設される。

貯蔵穴Aは、カマド南側の南東コーナー部に付設され、長径1.02m×短径0.78mの平面楕円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.44mを測る。底面の平坦面が狭く、壁の立ち上がりは緩やかである。

貯蔵穴Bは、南西コーナー付近に位置し、長軸1.98m×短軸1.04mの平面隅丸長方形を呈し、住居跡床面からの深さは0.13mを測る。底面は平坦である。

第19図 第7号住居跡・出土遺物



第7号住居跡

- 1 黄灰色土 炭化物少量 地山ブロック
- 2 黄褐色土 地山ブロック多
- 貯蔵穴
- 3 黄灰色土 砂質 烧土粒子若干
- 4 暗灰色土 砂質

第6表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.0)	(4.1)		CIJ	C	橙	30	内外面風化著しく調整単位不明瞭
2	椀	(11.8)	6.6		ABCI	B	にぶい橙	70	

ピットはP5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P13・P14・P15・P16・P17の13本が検出されているが、用途・性格等は不明である。

遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・高壺・壺片および弥生土器片が出土し、なかでも赤彩が施された壺片が比較的多くみられる。

第7号住居跡 (第19図)

E-7グリッドに位置し、重複する遺構はない。

平面形態は方形であるが、検出された北側コーナー付近のほかは調査区外にある。平面規模は不明である。確認面からの深さ0.14m、北西壁の方位N-47°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

北東壁には三角形の張出部がみられるが、前面に貯蔵穴が位置するためカマドとは異なり、むしろ第

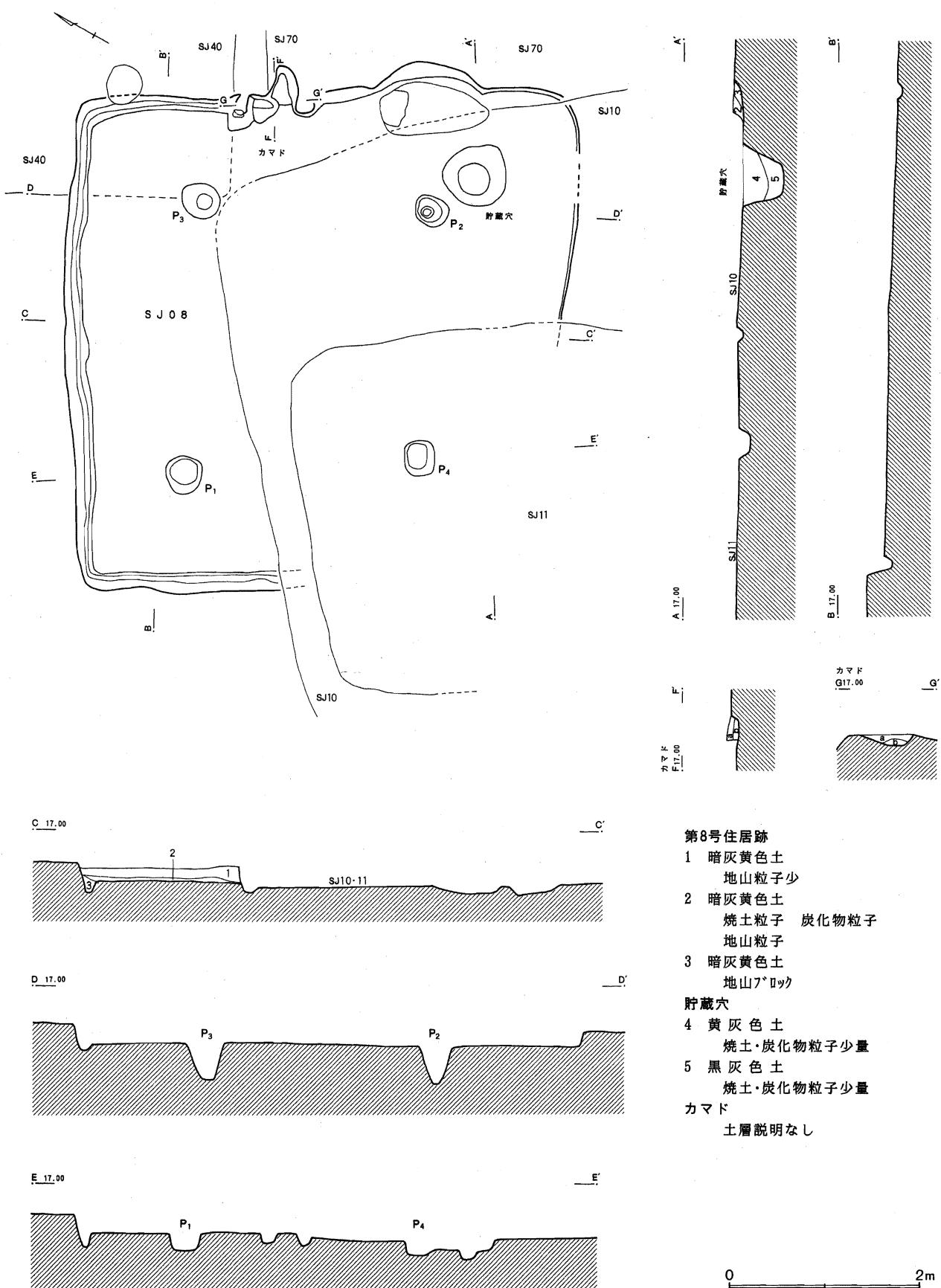
7号住居跡の施設とは思われない。北東壁はこの張出部を境に歪な形状を呈している。北西壁にも張出部がみられるが、貯蔵穴との位置関係からカマド残欠の可能性もあるが、肯定・否定できる根拠はない。

貯蔵穴は北東壁に沿った位置に付設される。長径0.96m×短径0.84mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.12mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

主柱穴・壁溝・ピットは検出されていない。

図示した遺物のうち、3は滑石製模造品の無孔劍形品で、縦6.05cm、横3.22cm、厚さ0.55cm、重さ17.40gを測る。ほかに、土師器甕・壺片が出土している。

第20図 第8号住居跡



第8号住居跡（第20図）

D-4グリッドに位置する。重複する第10・11号住居跡よりも古く、第40・70号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長5.26m、南北幅5.34m、確認面からの深さ0.17m、主軸方位N-60°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示している。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本で、住居跡平面プランに合致した配列が認められる。

壁溝は西壁中央付近～北壁～東壁北東コーナー付近に巡る。幅0.12～0.26m、床面からの深さ0.09mほどである。

カマドは東壁中央北により設置される。第40・70号住居跡と重複するため、燃焼部・袖部の一部が検出されたのみで、遺存状態は良好ではない。規模は明確ではなく、また土層説明が記載もれのため、覆土の堆積状況も不明である。

貯蔵穴はカマド南側の南東コーナー付近に付設される。長径0.66m×短径0.62mの平面不整円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.42mを測る。他の住居跡の貯蔵穴と比較すると、深く掘り込まれている。底面は平坦で、壁の立ち上がりも直線的である。

ピットは検出されていない。

遺物は土師器甕・甌・鉢・高杯・坏片および混入した弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、図示し得ない。

第9号住居跡（第21図）

D-4グリッドに位置する。重複する第10・11号住居跡よりも古い。

平面形態は長方形であるが、重複する第10号住居跡によって削平され、東壁付近が検出されているにすぎない。長軸長は不明で、短軸長2.52m、確認面からの深さ0.18m、長軸方位N-37°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴・壁溝・カマド・貯蔵穴・ピット等の施設は検出されていない。

遺物も出土していない。

第10号住居跡（第21図）

D-4・5、E-4グリッドに位置する。重複する第14号住居跡よりも古く、第8・9・11・13・70号住居跡よりも新しい。

南東辺は壁の立ち上がりと壁溝が二重になっていることから、拡張が行われた住居跡である。

拡張後の平面形態は方形で、長軸長（北西～南東）6.76m、短軸長（北東～南西）6.48m、確認面からの深さ0.16m、長軸方位N-50°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

拡張前の平面形態は長方形で、短軸長（北西～南東）5.42m、長軸長（北東～南西）6.48mの規模である。床面には貼床が施されている。

主柱穴はP1・P9・P3・P4の4本で、方形に配列されている。拡張前と拡張後の主柱穴を共通としていることからも、第10号住居跡が拡張されたことの裏付けとなる。

壁溝は拡張前には、北コーナー付近、北東壁中央付近、東コーナー付近、南東壁中央付近が途切れるほかは、ほぼ全周している。拡張された南東壁には巡っていないが、延長された北東壁・南西壁では壁溝も延長されている。幅0.11～0.30m、床面からの深さ0.12mほどである。

カマド・貯蔵穴は検出されていない。

ピットはP2・P5・P6・P7・P8・P10・P11・P12・P13の9本が検出されている。いずれのピットも、用途・性格は不明である。

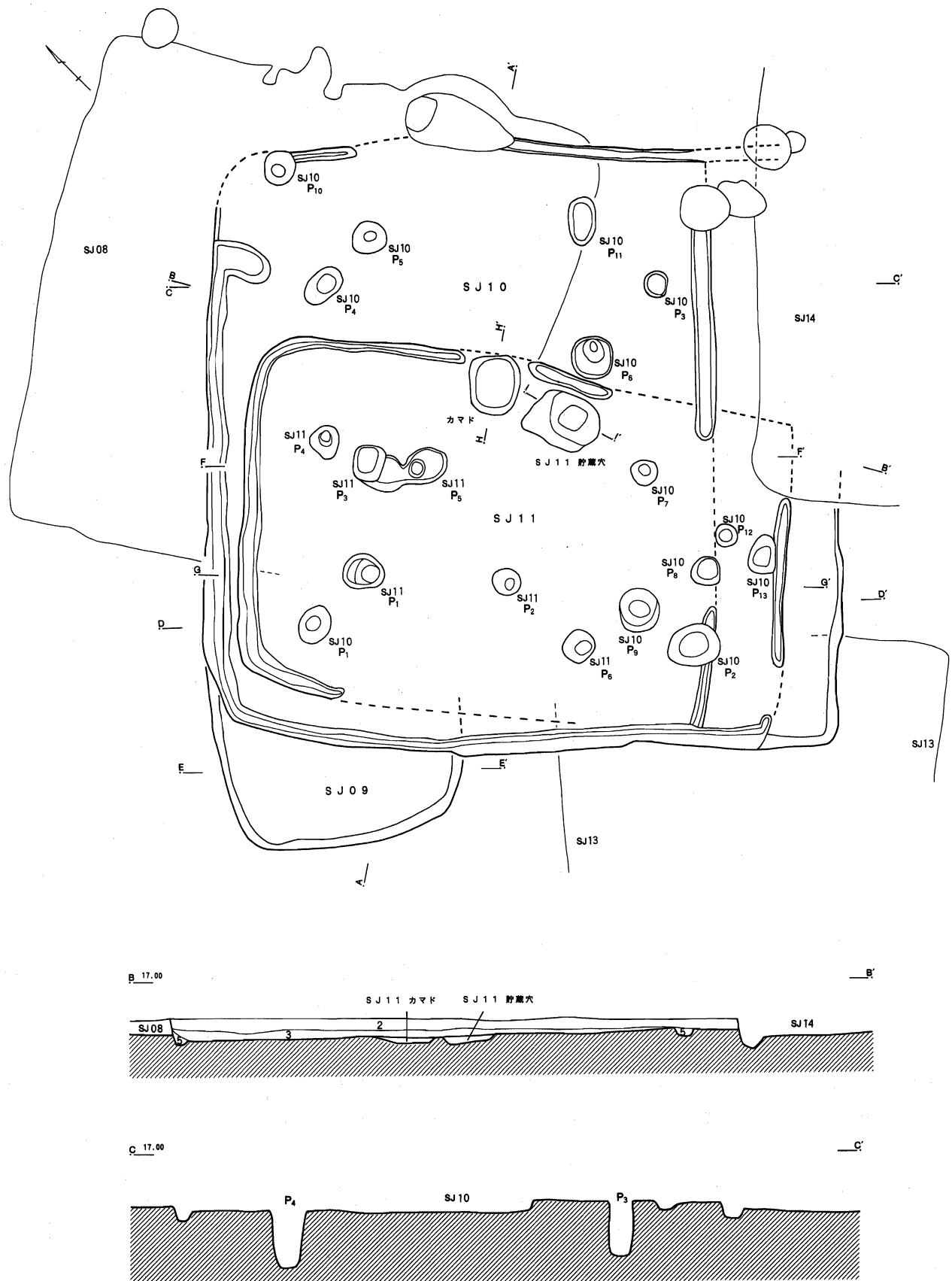
遺物は土師器甕・坏片および混入した弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、図示し得ない。

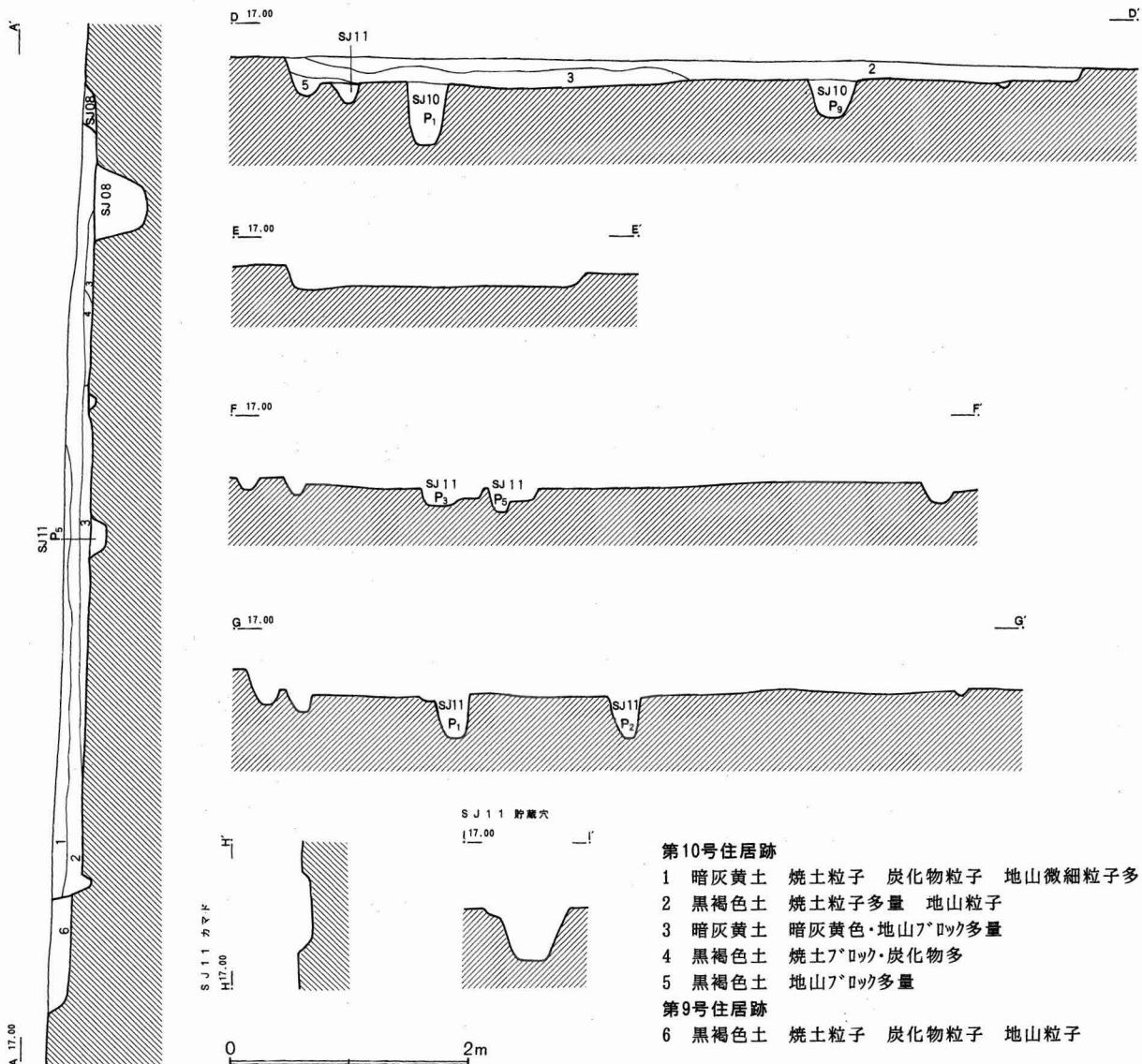
第11号住居跡（第21図）

D-4・5グリッドに位置する。重複する第10・14号住居跡よりも古く、第8・9号住居跡よりも新しい。第13号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は長方形で、主軸長4.23m、南北幅5.74m、確認面からの深さ0.24m、主軸方位N-53°-Eを測る。埋没状況は、第10号住居跡と重複するため、

第21図 第9・10・11号住居跡





不明である。

主柱穴の組み合わせは把握されていない。

壁溝は南東壁中央付近と南西壁西コーナー付近～北西壁～北東壁中央付近に巡る。幅0.09～0.28m、床面からの深さ0.14mほどである。

カマドは北東中央やや北よりに設置される。燃焼部の残のみが検出され、火床面は住居跡床面よりも窪む。

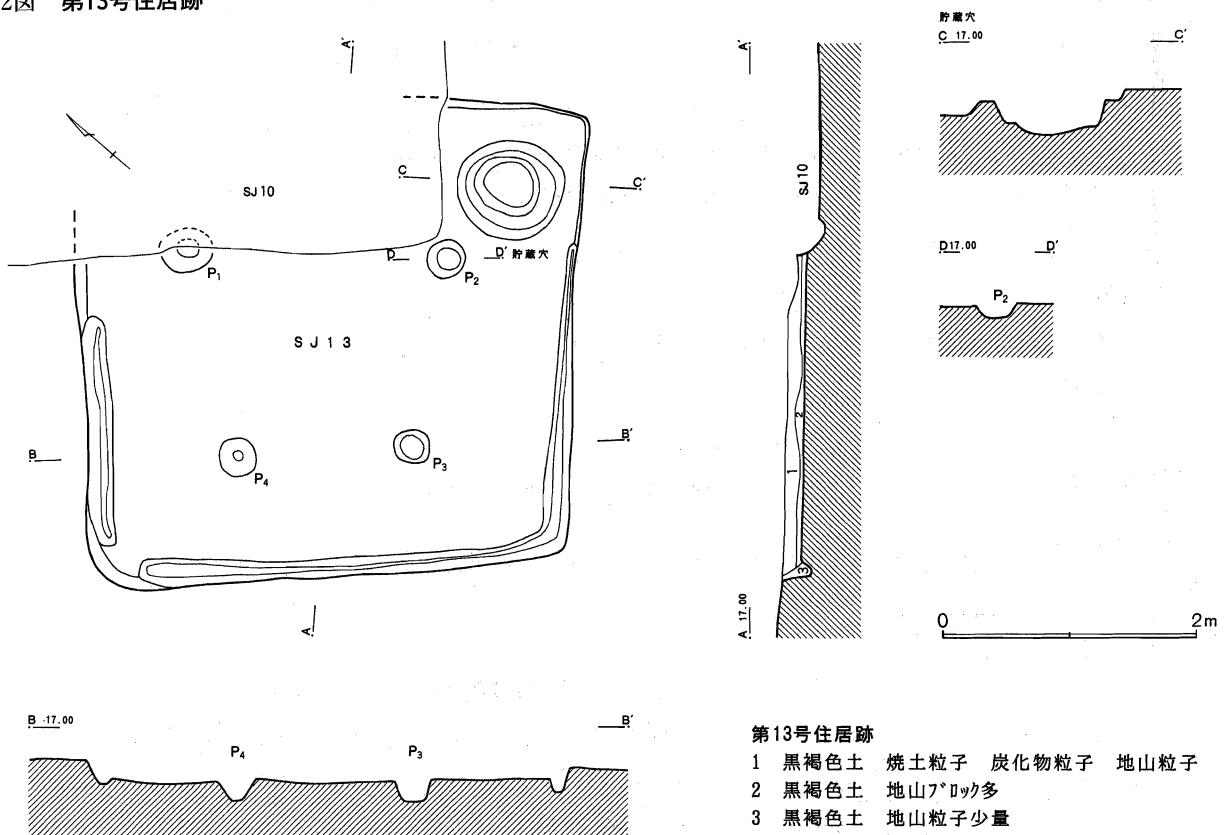
貯蔵穴はカマド南の北東壁中央際に付設される。長軸長0.70m×短軸長0.57mの平面不整長方形を呈

し、住居跡床面からの深さは0.46mを測る。底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。

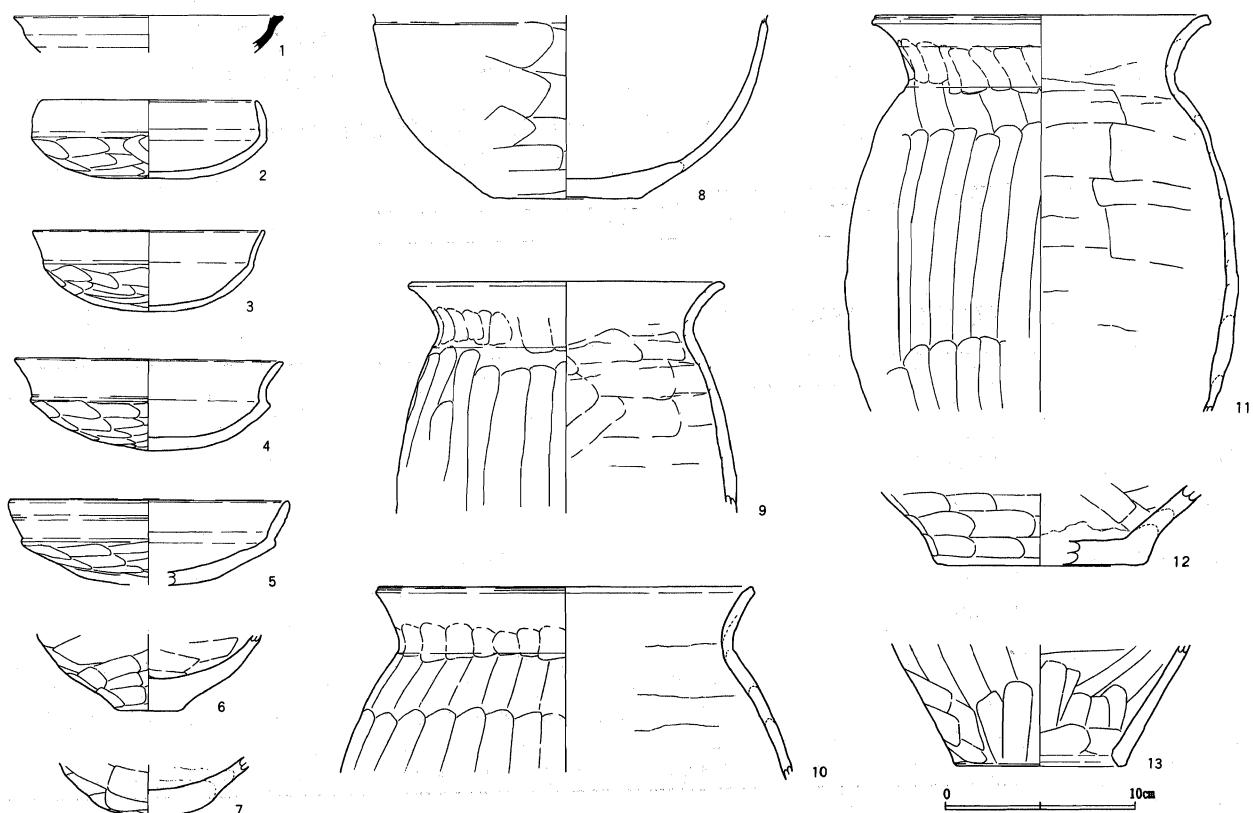
ピットはP1・P2・P3・P4・P5・P6の6本が検出されている。このうちP1は主柱穴となる可能性が高いが、これと組み合うピットは明らかではない。

遺物は土師器甕・甌・壺片および混入した弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、図示得ない。

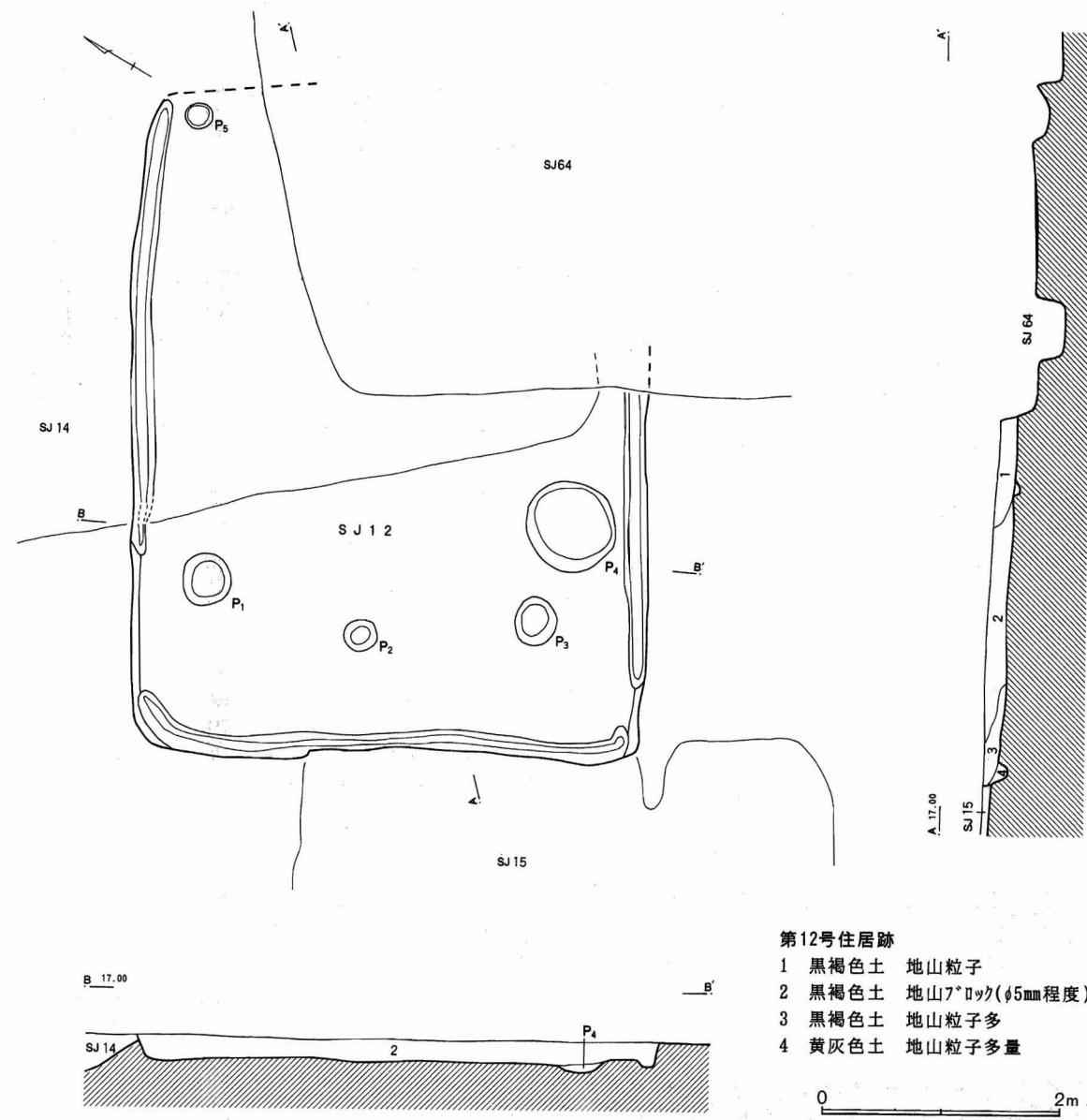
第22図 第13号住居跡



第23図 第8～13号住居跡出土遺物



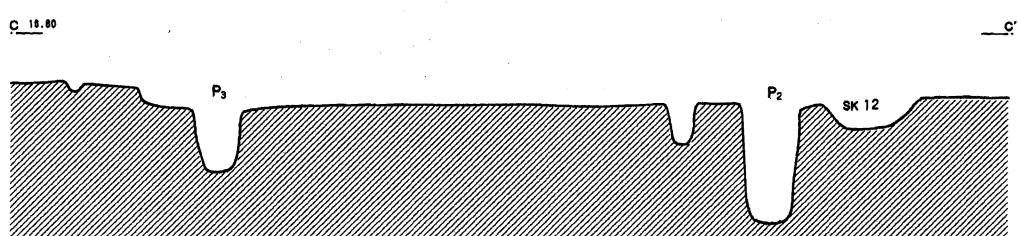
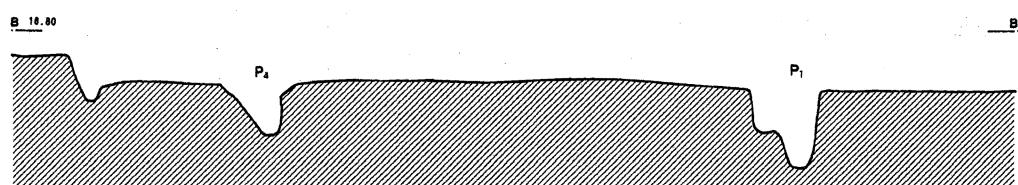
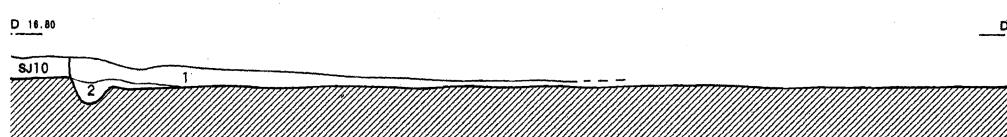
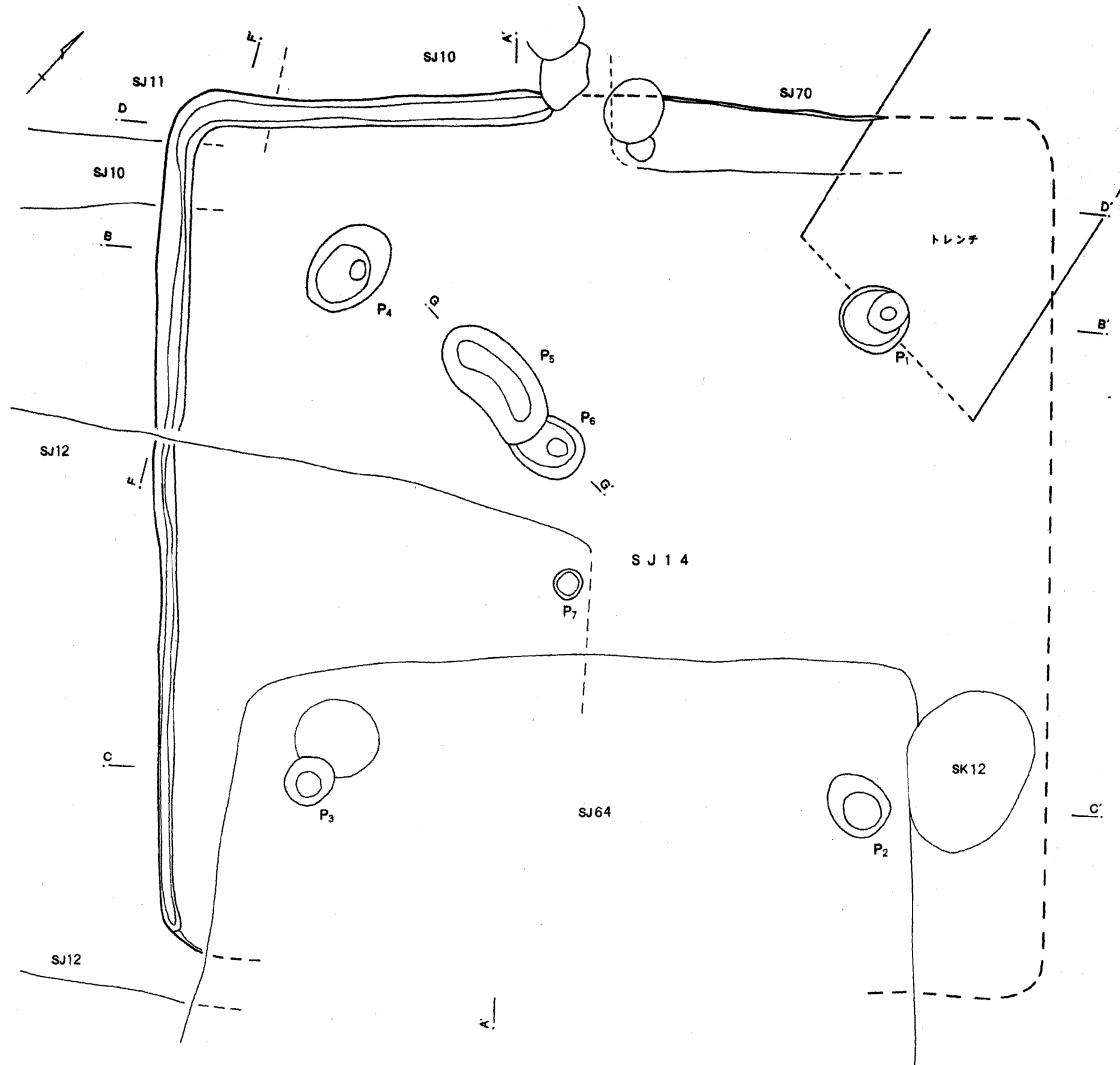
第24図 第12号住居跡



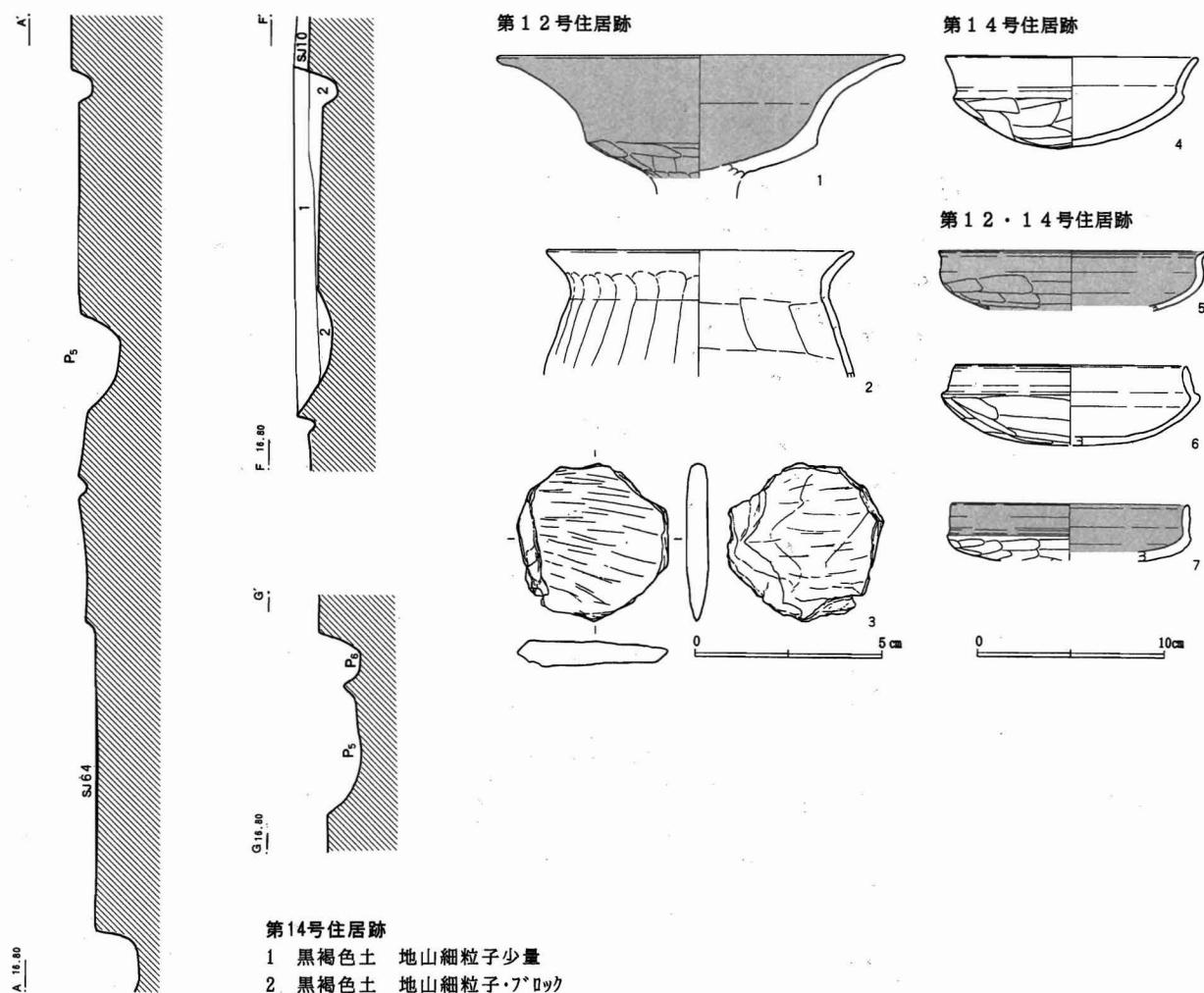
第7表 第8~13号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺		(1.8)		B	A	灰	5	SJ08~13
2	壺	(11.2)	4.1		CGHI	C	橙	25	SJ08~13
3	壺	(12.1)	4.2		ABCI	B	橙	40	SJ08~13
4	壺	(14.1)	4.8		CHI	B	橙	50	SJ08~13
5	壺	(14.5)	(4.6)		ABCII	B	橙	30	SJ08~13
6	小型壺		(4.0)	3.0	ABCGIL	A	にぶい赤褐	5	SJ08~13
7	甕		(2.6)	3.1	ABCHIL	C	橙	5	SJ08~13
8	鉢		(9.6)	7.8	ABCHI	B	橙	20	SJ08~13 内面ナデ単位不明瞭
9	甕	(16.1)	(12.1)		ABCHI	B	にぶい褐	10	SJ08~13
10	甕	(19.6)	(9.7)		ABCEHIL	B	明赤褐	5	SJ08~13
11	甕	(17.4)	(20.7)		ABCHIL	B	にぶい褐	15	SJ08カマド
12	甕		(3.7)	(10.1)	ACKL	B	橙	5	SJ08~13
13	甕		(6.4)	(8.6)	ABCHIL	B	明赤褐	5	SJ08~13

第25図 第14号住居跡



第26図 第12・14号住居跡出土遺物



第14号住居跡

- 1 黒褐色土 地山細粒子少量
- 2 黒褐色土 地山細粒子・フロック

第8表 第12・14号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高壺	(21.4)	(6.5)		ABCHIK	B	にぶい橙	40	SJ12 内外面赤彩
2	甕	(16.2)	(6.7)		ABCHIL	B	にぶい橙	10	SJ12
4	壺	13.4	4.9		ABCGIJ	B	橙	90	SJ14
5	壺	(14.1)	(3.1)		ABCHL	B	橙	10	SJ12・14 内外面赤彩
6	壺	(12.2)	(3.8)		ABCHI	B	橙	35	SJ12・14 内面に油煙状の付着物
7	壺	(12.6)	(3.0)		AEHKL	B	にぶい橙	15	SJ12・14 内面・口縁部外面赤彩

第13号住居跡（第22図）

D-4・5グリッドに位置する。重複する第10号住居跡によって、北壁の東3分の1から東壁の北3分の2が削平されている。第11号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形態は方形である。カマドは検出されていないが、第10号住居跡の重複状況や貯蔵穴との位置関係から東壁中央付近に設置されていたことが推定される。主軸長3.63m、南北幅3.88m、確認面からの

深さ0.15m、主軸方位N-50°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。東壁側の柱間が広い台形気味に配列されている。

壁溝は南壁の西3分の2から西壁および北壁西半に巡る。途中北西コーナー部では途切れる。幅0.06～0.23m、床面からの深さ0.08mほどである。

貯蔵穴は南東コーナーに付設される。長径0.85m×短径0.77mの平面円形を呈し、住居跡床面から

の深さは0.29mを測る。底面は中央部が窪み、壁の立ち上がり半ばに平坦面をもつ。

主柱穴を除くピットは検出されていない。

遺物は図示したほかに、混入したと思われる弥生土器片が出土している。

第12号住居跡（第24図）

D-5、E-5グリッドに位置する。重複する第64号住居跡よりも古く、第14・15号住居跡よりも新しい。

平面形態は長方形であるが、東壁は第64号住居跡によって削平されている。長軸長5.50m以上、短軸長4.50m、確認面からの深さ0.18m、長軸方位N-58°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

壁溝は第64号住居跡と重複する東壁～南壁中央付近と南壁南西コーナー・北壁北西コーナーを除いて全周する。幅0.12～0.22m、床面からの深さ0.09mほどである。

主柱穴・カマド・貯蔵穴は検出されていない。

ピットはP1・P2・P3・P4・P5の5本が検出されている。このうちP1・P3が主柱穴となる可能性が高いものの、相対するピットがない。ほかのいずれのピットも、用途・性格は不明である。

図示した遺物のうち、3は滑石製模造品の無孔円板である。縦4.2cm、横4.05cm、重さ14.58gほど残存し、厚さ0.7cmを測る。ほかに、土師器甕・甌・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第14号住居跡（第25図）

D-4・5、E-4・5グリッドに位置する。重複する第12・64号住居跡よりも古く、第10・11号住居跡よりも新しい。第70号住居跡、第12号土壙との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形であるが、調査区内の傾斜のきつい箇所に位置しているため、東半部の平面プランは確認されていない。また南壁も第64号住居跡との重複のため検出されていない。南北長6.80m、最も標高の高い確認面からの深さ0.23m、南北軸方位N-42°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。比較的深い掘形をもつピットで、傾斜のきつい東半のP1・P2のほうがより深く掘り込まれている。

壁溝は西壁～北壁中央に巡っている。幅0.12～0.27m、床面からの深さ0.14mほどである。

カマド・貯蔵穴は確認されていない。

ピットはP5・P6・P7の3本が検出されている。いずれも住居跡中央付近に位置し、用途・性格は不明である。

遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・椀・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第15号住居跡（第27図）

D-5、E-5グリッドに位置する。重複する第12号住居跡よりも古く、第18号住居跡よりも新しい。第7号溝跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、第12号住居跡と重複する東壁北3分の2、第7号溝跡と重複する北壁のほとんどは検出されていない。主軸長4.56m、南北幅4.52m、確認面からの深さ0.12m、主軸方位N-60°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。南側のP2・P3では柱の痕跡が認められ、北側のP1・P4の柱掘形は深い。

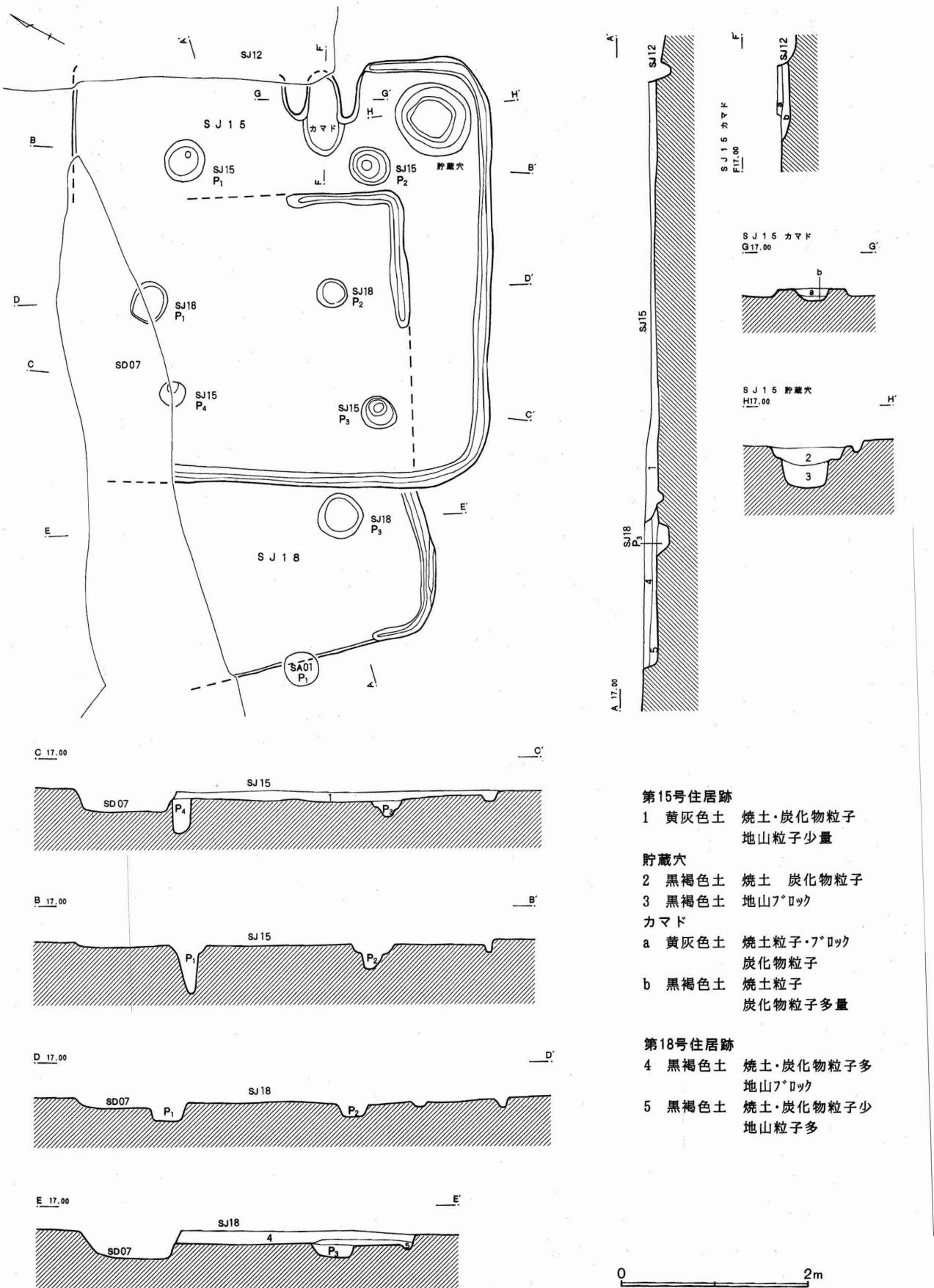
壁溝はカマド南側の東壁南東コーナー～南壁～西壁に巡る。一部検出されている北壁沿いに、壁溝はみられない。幅0.12～0.19m、床面からの深さ0.07mほどである。

カマドは東壁中央南よりに設置され、燃焼部先端が第12号住居跡によって削平されている。燃焼部は推定長径0.92m×短径0.38mの橢円形で、火床面は住居跡床面よりも窪んでいる。多量の焼土粒子・炭化物粒子が堆積していた。

貯蔵穴はカマド南側の南東コーナーに付設される。長径0.81m×短径0.76mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.43mを測る。断面が逆凸字形に掘り込まれ、底面は平坦である。

ピットは検出されていない。

第27図 第15・18号住居跡



第15号住居跡

1 黄灰色土 烧土・炭化物粒子
地山粒子少量

貯蔵穴

2 黒褐色土 烧土・炭化物粒子

3 黒褐色土 地山ブロック

カマド

a 黄灰色土 烧土粒子・ブロック
炭化物粒子

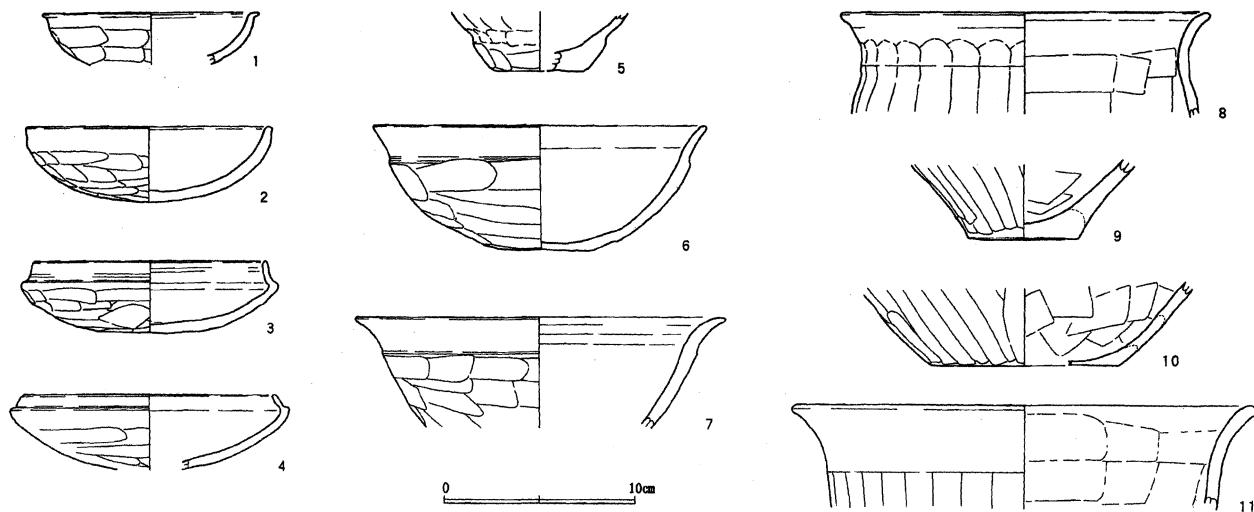
b 黒褐色土 烧土粒子
炭化物粒子多量

第18号住居跡

4 黑褐色土 烧土・炭化物粒子多
地山ブロック

5 黑褐色土 烧土・炭化物粒子少
地山粒子多

第28図 第15・18号住居跡出土遺物



第9表 第15・18号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(11.3)	(2.7)		ACHL	B	橙	5	SJ15・18
2	壺	(12.6)	3.9		ABCHI	B	橙	30	SJ15・18
3	壺	12.1	3.7		ABCHIL	B	明赤褐	40	SJ15
4	壺	(13.0)	(3.8)		ABCHI	B	橙	20	SJ15・18
5	ミニチュア		(3.1)	(4.6)	ABCIJ	B	橙	20	SJ15・18
6	鉢	(17.4)	6.5	(4.9)	ABCBL	B	橙	40	SJ15カマド
7	鉢	(19.0)	(5.8)		ABCH	A	黒褐	10	SJ15・18
8	甕	(18.9)	(5.3)		ABCHIK	B	橙	5	SJ15・18
9	甕		(3.8)	(5.8)	ABCHL	B	にぶい黄橙	5	SJ15・18
10	甕		(4.0)	(9.8)	ACFHJL	A	橙	10	SJ15・18
11	甕	(23.7)	(5.4)		ABHIL	B	橙	5	SJ15・18

図示した遺物は第15・18号住居跡一括遺物で、ほかに、土師器甕・甕・鉢・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第18号住居跡（第27図）

D-5・6グリッドに位置する。重複する第15号住居跡よりも古く、第1号柵跡、第7号溝跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態が方形の住居跡と思われるが、検出されている壁や壁溝を繋ぐと、歪な平面プランが復元されてしまう。2軒の住居跡の重複と判断することも可能ではあるが、主柱穴の配置状況からは1軒の住居跡として把握せざるを得ない。そのため、西壁ラインが東側へ修正される可能性を示唆しておく。東西長4.72m、確認面からの深さ0.17m、南壁の方位N-62°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3の3本で、残る1本は第

7号溝跡と重複する位置にある。

壁溝は南東コーナー部および南西コーナー部に検出されている。幅0.10~0.26m、床面からの深さ0.10mほどである。

カマド・貯蔵穴・ピットは検出されていない。

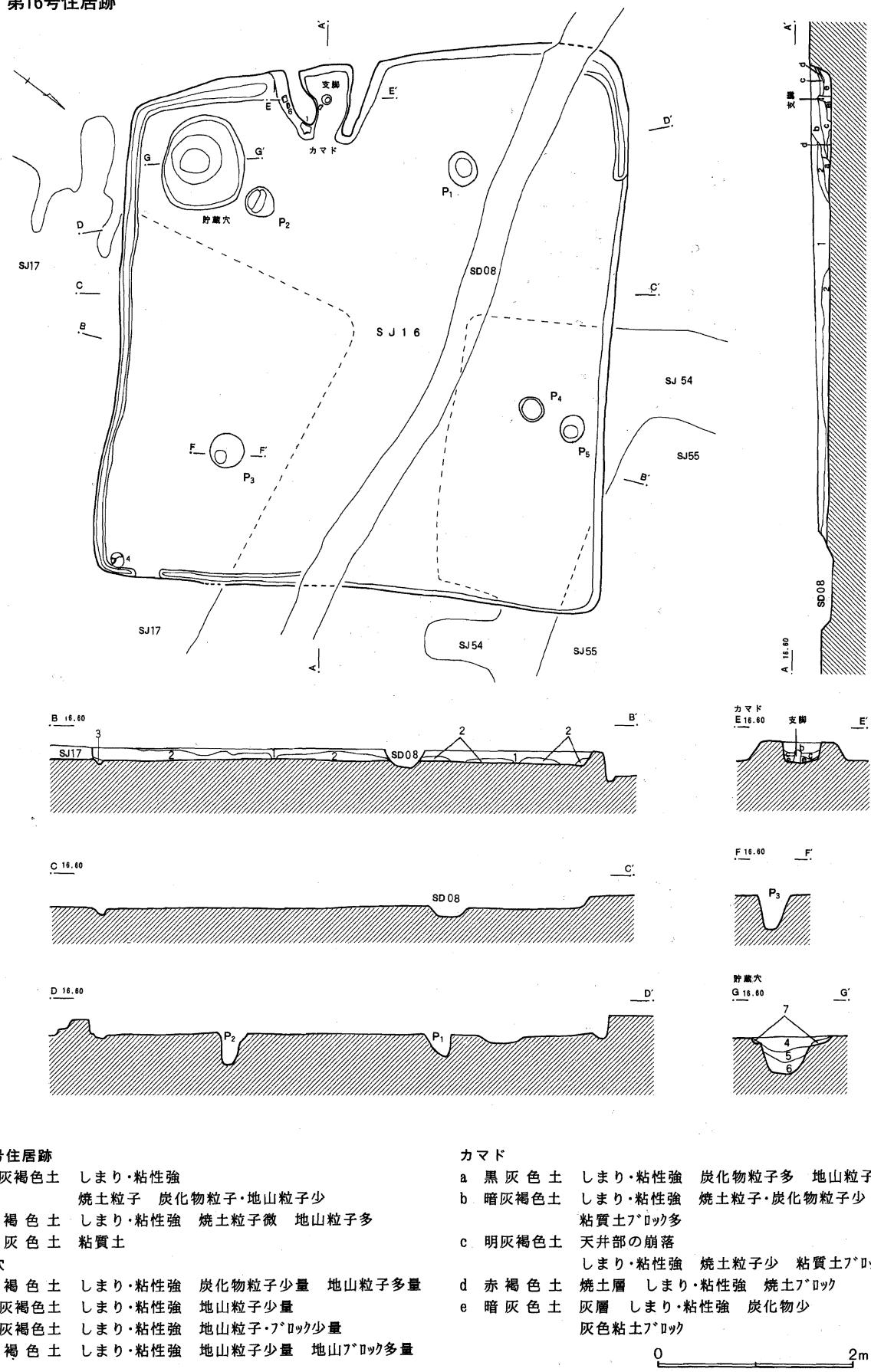
図示した遺物は第15・18号住居跡一括遺物で、ほかに、土師器甕・甕・鉢・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第16号住居跡（第29図）

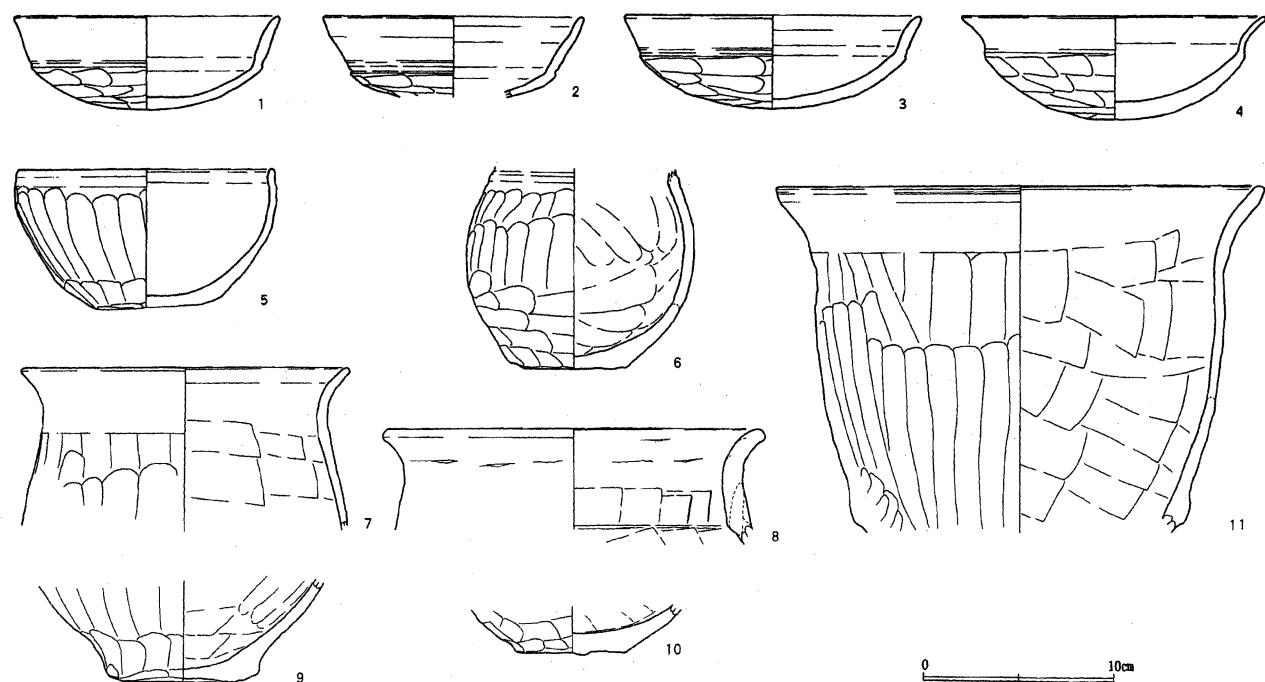
D-2・3、E-2・3グリッドに位置する。重複する第8号溝跡よりも古く、第17・54・55号住居跡よりも新しい。

平面形態は台形である。主軸方向の北壁が5.81m、南壁が4.83m、南北幅5.18m、確認面からの深さ0.16m、主軸方位N-127°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

第29図 第16号住居跡



第30図 第16号住居跡出土遺物



第10表 第16号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(13.9)	4.8		ABCIJ	B	橙	50	No 5・カマド
2	壺	(13.7)	(4.2)		ABCHI	B	橙	20	外面に鉄分付着
3	壺	(15.5)	4.8		ABCIK	B	明赤褐	60	
4	壺	(16.0)	5.4		ABCIK	B	橙	75	No 1
5	椀	13.3	7.4	5.4	ABCI	B	にぶい黄橙	75	
6	小型壺		(10.5)	5.4	ABCJ	B	にぶい橙	30	No 6・カマド
7	甕	(15.0)	(8.2)		ABCJ	B	にぶい褐	5	
8	甕	(19.4)	(5.3)		ABCIL	B	にぶい褐	5	内外面に鉄分付着
9	甕		5.4	6.2	ABCEIJ	B	にぶい赤褐	5	
10	小型甕		(2.4)	5.7	ABCIJ	B	橙	5	
11	甕	(25.8)	(18.1)		ABCI	B	浅黄橙	20	No 2 把手付

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。住居跡平面プランとは異なる台形に配列されている。

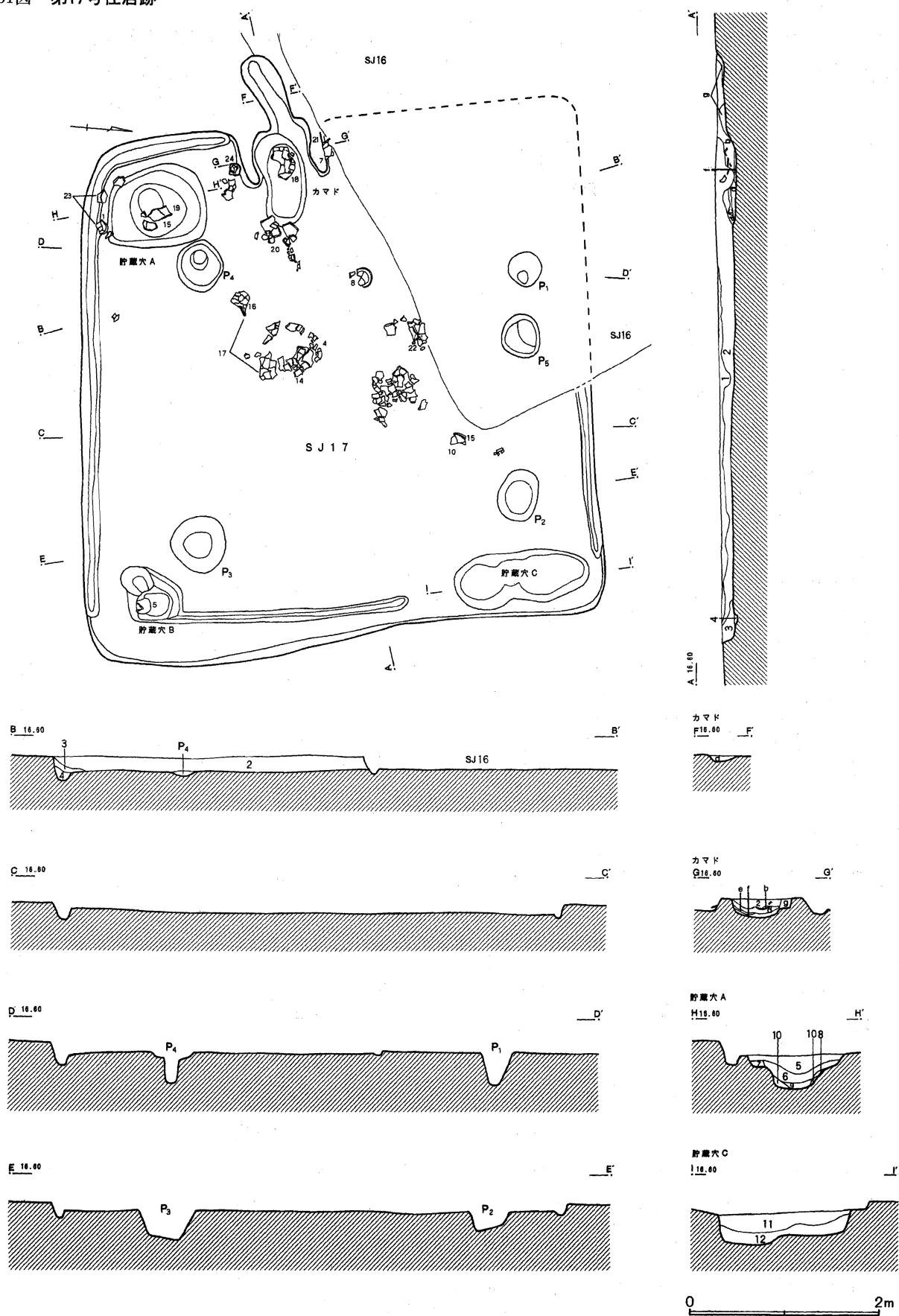
壁溝は北西コーナー部および東壁南半部、南東コーナーで一端途切れ、南壁から西壁カマドまで巡っている。幅0.08~0.27m、床面からの深さ0.05mほどである。

カマドは西壁中央南よりに設置される。燃焼部および袖部が検出されている。天井部が崩落した状態で残存し、灰層・焼土層が堆積していた。燃焼部は長軸長0.78m×短軸長0.33mの歪な長方形を呈する。火床面は住居跡床面よりもごく僅かに窪み、中央に

は黄灰色粘土によって造り付けられた支脚が遺存する。支脚上半部はカマドの被熱によって脆弱ではあるが焼き上がり、下半は粘土状態であった。そのため、遺物として取り上げたが、図化することはできない。

貯蔵穴はカマド南側の南西コーナーに付設される。住居跡床面から深さ0.10m足らずの長軸長0.97m×短軸長0.84mの平面隅丸方形の浅い掘込みの中央に長径0.51m×短径0.49mの平面円形にさらに掘り込んだ二段構造の貯蔵穴である。貯蔵穴底面の深さは、住居跡床面から0.39mを測り、底面は平坦で

第31図 第17号住居跡



ある。中央の平面円形の掘込みが貯蔵機能を持ち、上段の隅丸方形の浅い掘込みには板材等の蓋を架ける機能が推定される。

ピットは北壁際にP5が検出されている。主柱穴

第17号住居跡

1 暗灰褐色土	しまり・粘性強	焼土粒子微	地山粒子少
2 暗灰褐色土	しまり・粘性強	焼土粒子	炭化物粒子 地山粒子多
3 黒灰色土	しまり・粘性強	地山粒子少	
4 灰褐色土	しまり・粘性強	地山粒子多	
貯蔵穴A			
5 暗灰褐色土	しまり・粘性強	焼土粒子・炭化物粒子少量 地山粒子・ ^{アロッカ} 多量	
6 暗灰褐色土	しまり・粘性強	焼土粒子・炭化物粒子微 地山粒子少量	
7 灰褐色土	しまり・粘性強	地山 ^{アロッカ} 多量	
8 暗灰褐色土	しまり・粘性強	焼土粒子少量	炭化物粒子多量
9 暗灰褐色土	しまり・粘性弱	地山粒子少量	
10 暗灰褐色土	しまり・粘性弱	地山 ^{アロッカ} 多量	
貯蔵穴C			
11 黄灰色土	灰色粘土粒子少量		
12 黄灰色土	灰色粘土粒子		
カマド			
a 黑灰色土	しまり・粘性強	炭多量	地山粒子少
b 灰白色土	天井部の崩落	しまり・粘性強	粘質土アロッカ
c 赤灰色土	天井部の崩落		
d 黑灰色土	しまり・粘性強	焼土化	粘質土アロッカ
e 黑色土	灰層	しまり・粘性強	焼土粒子・炭化物粒子多
f 暗灰色土	炭化物層	しまり・粘性強	
g 掘り過ぎ	しまり・粘性強	灰少	地山土多

第11表 第17号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.8)	4.6		ABCI	C	明赤褐	40	No20
2	壺	(13.6)	(2.7)		ABCI	B	橙	5	
3	壺	(13.8)	(3.5)		ABCI	B	灰褐	5	
4	壺	(15.8)	(3.7)		ABCI	B	浅黄橙	10	No 4 内面赤彩
5	壺	(15.0)	4.6		ABC	C	橙	60	No10 二次的な被熱による風化が著しい
6	壺	(15.8)	(4.1)		ABCI	B	橙	25	P 1
7	壺	(17.0)	4.0		ABCI	B	赤褐	45	No24
8	壺	15.6	4.9		ABCI	B	橙	60	No13
9	壺	(16.3)	(3.2)		ABCBI	B	にぶい橙	10	
10	壺	(17.5)	(4.4)		ABCI	C	橙	40	No12
11	高壺		(6.2)		ABCHIJKL	B	橙	20	壺部内外面に鉄分付着
12	小型壺	(10.4)	(4.8)		ABHIL	B	橙	5	
13	小型甕	(12.9)	(4.6)		ABCI	B	明赤褐	5	内面に黒色の付着物
14	小型甕	12.3	17.1	(8.4)	ABCI	B	橙	60	No 5
15	甕	(17.8)	(5.5)		ABCI	A	浅黄橙	5	No12
16	甕	(23.6)	(15.2)		ABCEHIKL	B	橙	15	No15 内面に鉄分付着
17	甕	(23.8)	(22.5)		ABCIL	C	にぶい褐	40	No 6 · 15
18	甕	(16.5)	31.5	6.9	ABCI	B	にぶい橙	50	No23 · カマド
19	甕	16.2	(11.7)		ABCIK	B	橙	40	No18 二次的な被熱による風化が著しい
20	甕	(19.8)	(13.0)		ABCI	B	にぶい赤褐	20	No14
21	甕	(17.0)	(6.2)		ABCI	B	明赤褐	10	No24
22	甕	18.4	(13.9)		ABCIK	B	橙	30	No 1
23	甕		(3.3)	7.0	ABCI	B	明赤褐	5	No20 · 21
24	甕		(4.1)	6.4	ABCI	B	赤褐	5	No16

と推定されるP4と隣接するため疑問が残るが、出入り口施設に関わる機能が想定される。

遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・坏片および混入した弥生土器片が出土している。

第17号住居跡（第31図）

D-2·3、E-2·3グリッドに位置する。重複する第16·67号住居跡よりも古い。

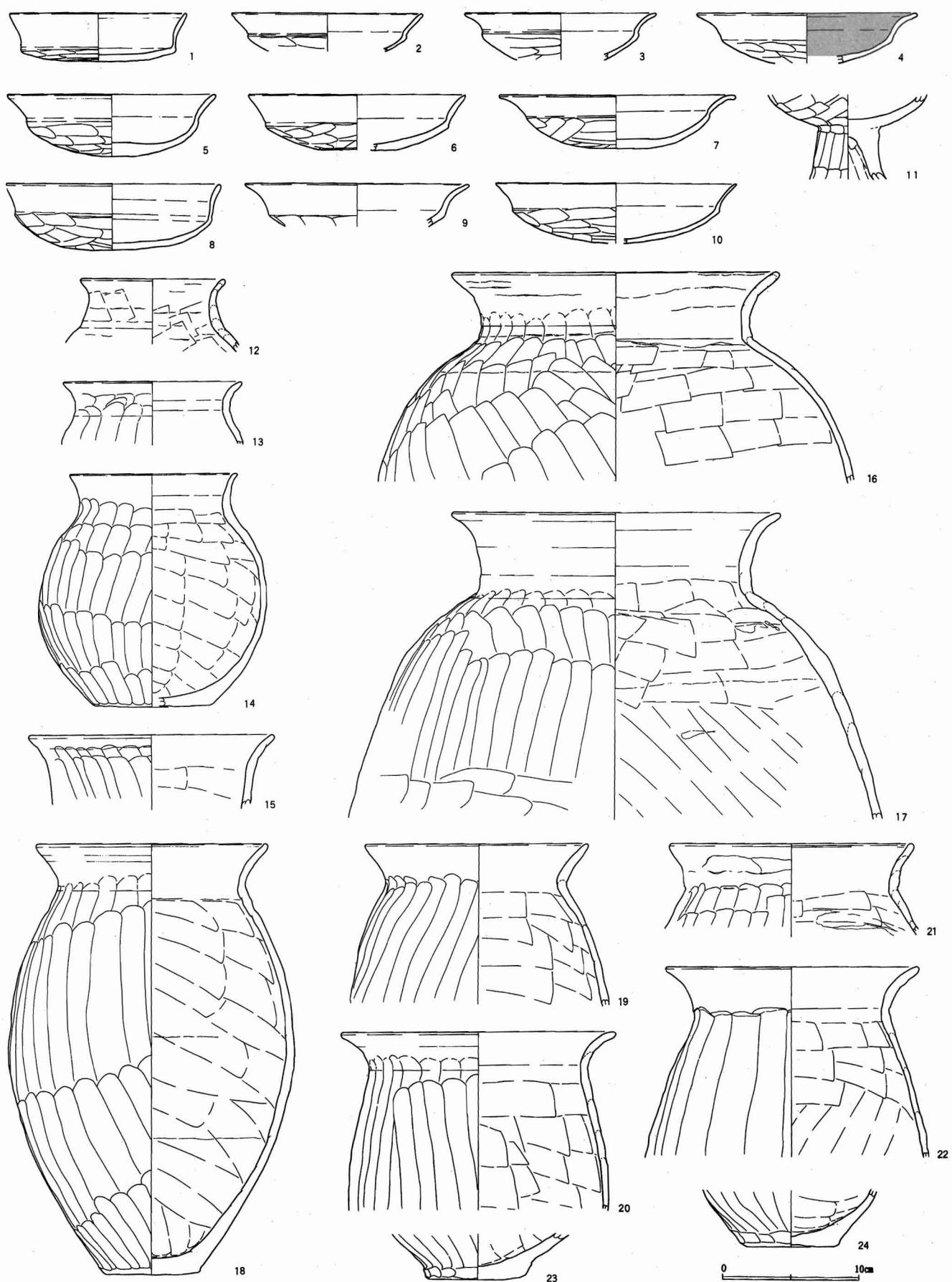
平面形態は方形で、東壁南半は壁溝よりも緩やかに外方へ膨らむ。主軸長5.66m、東西幅5.53m、確認面からの深さ0.18m、主軸方位N-97°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1·P2·P3·P4の4本で、P4には柱の痕跡が認められる。長台形に配置され、南北方向の柱間が広い。

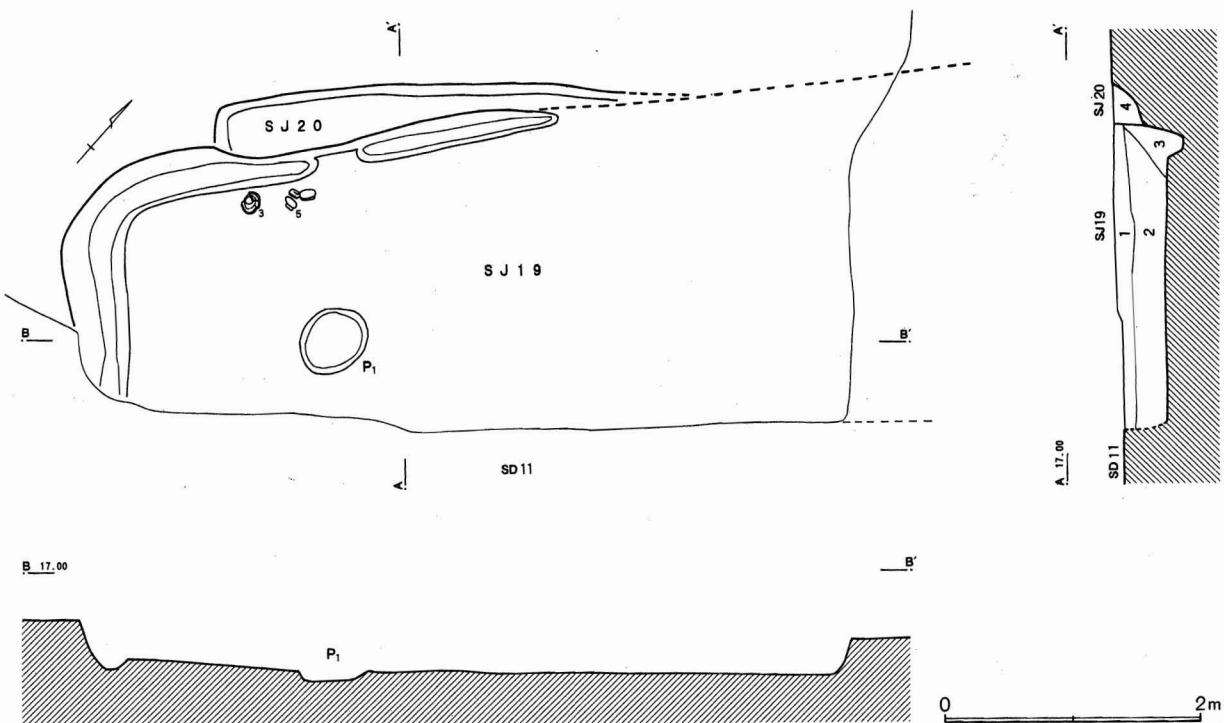
壁溝は第16号住居跡と重複する箇所については不明であるが、途切れながら北壁東半部、東壁南半部、南壁～西壁南西コーナー部にかけて巡る。幅0.10～0.22m、床面からの深さ0.09mほどである。

カマドは西壁中央より南に位置に設置される。天井部が崩落した状態で遺存し、燃焼部・煙道

第32図 第17号住居跡出土遺物



第33図 第19・20号住居跡・出土遺物

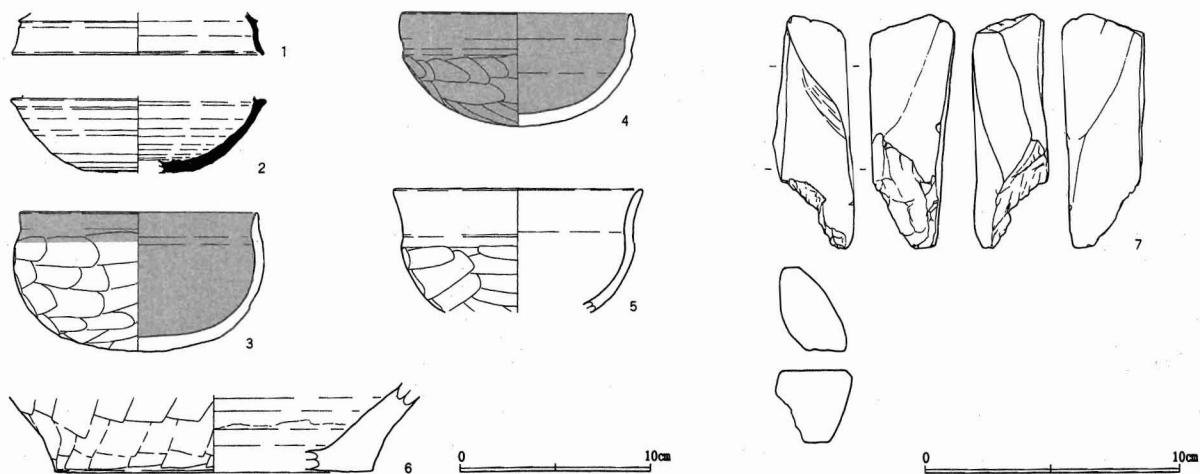


第19号住居跡

- 1 暗灰黄色土 しまり・粘性強 焼土粒子少量 炭化物粒子
地山粒子
2 黒褐色土 しまり・粘性強 焼土粒子 地山ブロック
3 黒褐色土 地山粒子少量

第20号住居跡

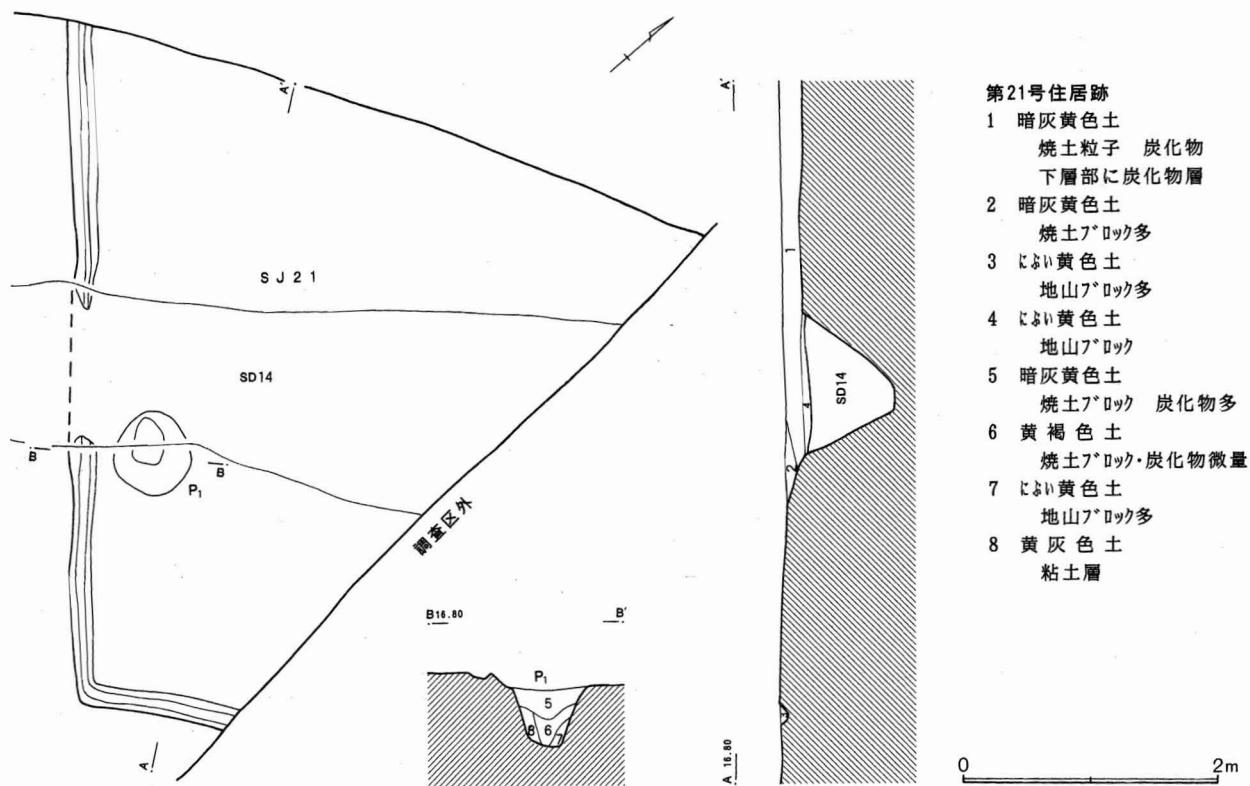
- 4 黒褐色土 しまり強 焼土粒子若干



第12表 第19・20号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	(13.2)	(2.2)		HJ	A	灰	5	
2	壺		(4.0)		ABIL	A	灰	30	
3	椀	12.4	7.3		ABC1	B	にぶい橙	90	SJ19 No 1 内面・口縁部外面赤彩
4	壺	12.0	6.0		ABC1	B	橙	90	SJ19 No 3 内外面赤彩
5	椀	(12.9)	(6.5)		ABCHIKL	B	橙	20	SJ19 No 2
6	常滑甕		(3.9)	(16.6)	ABKL	B	にぶい橙	10	

第34図 第21号住居跡



部・袖部が検出されている。箱形の燃焼部で、上層から甕が横倒しの状態で出土している。燃焼部と煙道部の区別は明瞭で、火床面から高低差約0.1mほどの直線的な立ち上がりをもち、煙道部底面には凹凸がみられる。煙道部の方向は住居跡主軸方向と異なり、大きく南に振られている。燃焼部は長軸長1.11m×短軸長0.63mの平面長方形で、南側袖部に沿った長径0.96m×短径0.42mの平面橢円形の火床面は住居跡床面よりも窪んでいる。火床面には灰・炭化物の層が形成されていた。

貯蔵穴は3基付設される。

貯蔵穴Aはカマド南側の南西コーナーに備えられる。長軸長1.04m×短軸長0.86m、深さ0.12mほどの平面長方形の浅い掘込みの中央に、長径0.61m×短径0.56mの平面円形に掘り込まれる二段構造である。住居跡床面から壙底の深さは0.34mを測り、底面はほぼ平坦である。中央の平面円形の掘込みには貯蔵機能が、上段の浅い隅丸方形の掘込みには板材等の蓋を架ける機能が推定される。貯蔵機能部から甕が、上段から壺が出土している。

貯蔵穴Bは南東コーナーに備えられる。平面不整方形を呈し、南西隅にはピット状の掘込みもみられる。長径0.66m×短径0.60m、住居跡床面からの深さは0.30mを測る。

貯蔵穴Cは北東コーナーに備えられる。長径1.43m×短径0.48mの平面不整橢円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.33mを測る。底面には段差がみられ、南側が深い。

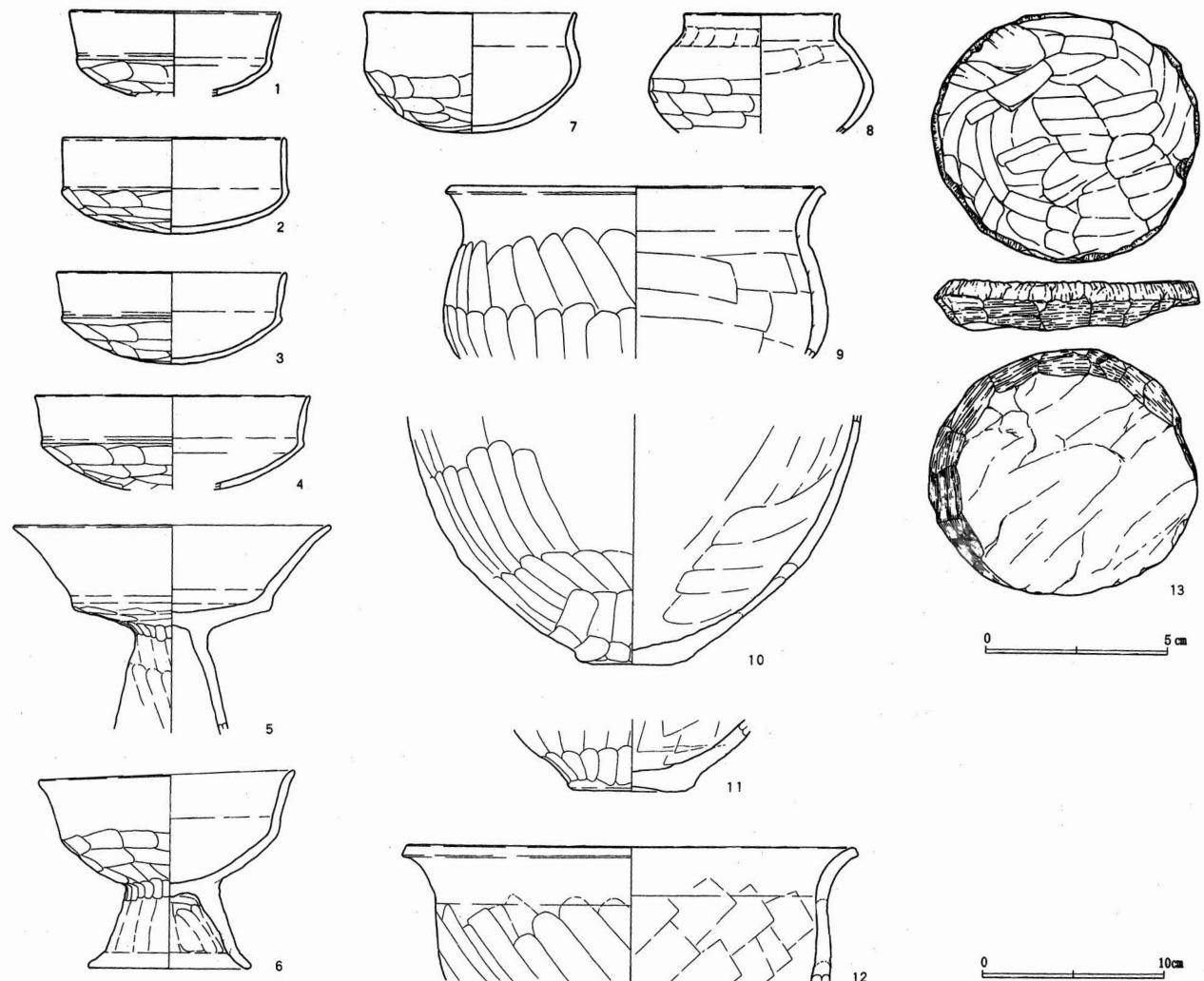
ピットは北壁中央際にP5が検出されている。主柱穴の柱間が最も狭い位置ではあるが、出入り口施設に関わる機能が推定される。

遺物はカマドや貯蔵穴Aおよびその周辺と住居跡中央の床面直上付近からまとまって出土している。図示したほかに、土師器甕・壺片および混入した弥生土器片もみられる。

第19・20号住居跡（第33図）

F-6・7、G-6グリッドに位置する。重複する2軒の住居跡で、第19号住居跡が第20号住居跡よりも新しい。第11号溝跡との新旧関係は明確ではないが、2軒の住居跡よりも第11号溝跡が新しい可能

第35図 第21号住居跡出土遺物



第13表 第21号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(11.7)	(4.6)		AHI	C	橙	20	外面の風化著しい
2	壺	(12.1)	6.2		ABCI	B	橙	45	
3	壺	(12.6)	4.9		ABCI	B	橙	30	
4	壺	(15.1)	(5.2)		ABCHI	B	浅黄橙	20	
5	高壺	(17.5)	(9.5)		CHI	C	橙	30	
6	高壺	14.0	11.1	8.6	ABCE	B	橙	90	風化著しく、内外面とも調整単位不明瞭
7	椀	11.7	6.5		ABCHI	B	明赤褐	90	
8	椀	(8.6)	(6.5)		ACHIJ	B	橙	20	
9	甕	(20.4)	(9.3)		ABCIL	B	橙	10	
10	甕		(13.9)	6.0	ABCEI	B	橙	30	
11	甕		(3.4)	6.2	ACEHL	B	にぶい橙	10	
12	甕	(24.6)	(7.5)		ABCEHIL	B	にぶい橙	10	

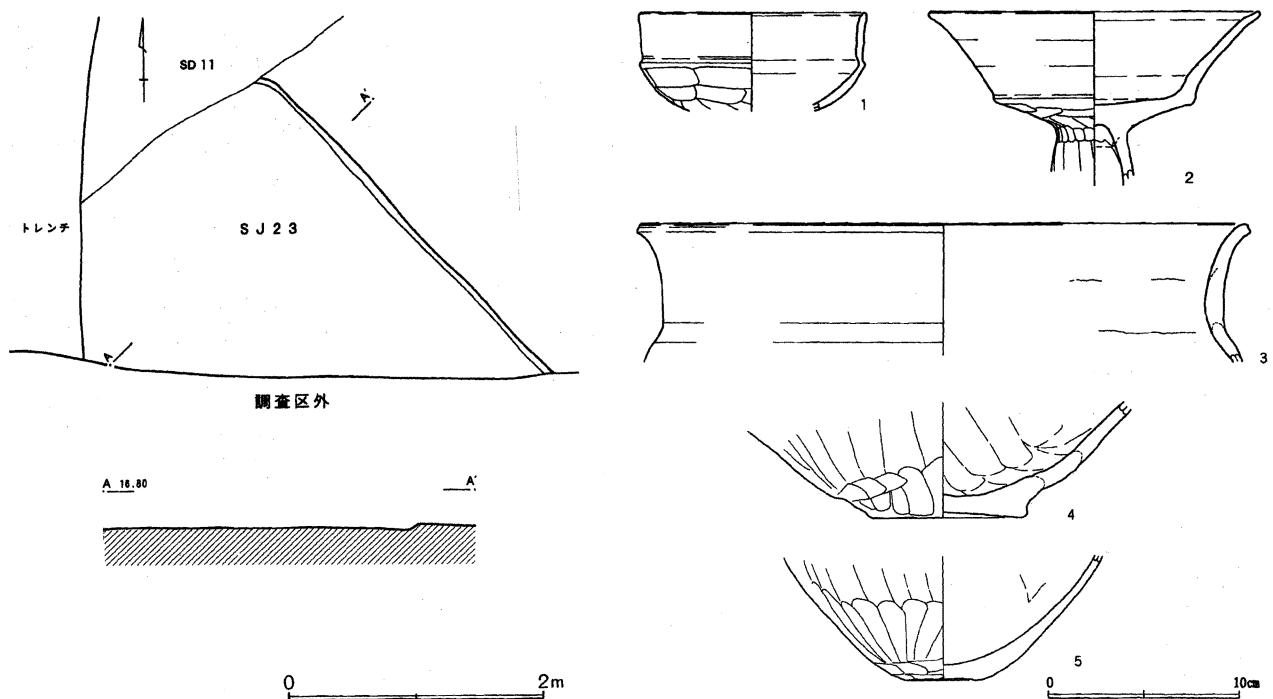
性が高い。

第19号住居跡は南西コーナー付近のみが検出されている。平面形態は方形であるが、規模は不明である。確認面からの深さは0.42mを測り、北西壁の方位はN-40°-Eを指す。埋没状況は自然堆積を

示す。主柱穴はP1のみが検出されている。壁溝は一端途切れる状態で、北西コーナー付近に確認されている。幅0.16~0.50m、床面からの深さ0.12mほどである。カマド・貯蔵穴・ピットはみられない。

第20号住居跡は、南西コーナー～西壁南半部の壁

第36図 第23号住居跡・出土遺物



第14表 第23号住居跡出土遺物観察表（第36図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(11.8)	(5.1)		ACHIJ	B	橙	10	
2	高壺	17.2	(8.5)		CHI	B	橙	50	
3	甕	(31.8)	(7.2)		ACEHIKL	B	橙	5	
4	甕		(6.0)	7.2	ABCI	B	橙	15	
5	甕		(6.5)	(4.0)	ABCI	B	にぶい褐	10	

に沿ったごく一部のみが検出されている。平面形態は方形であるが、規模は不明である。確認面からの深さは0.22mを測り、北西壁の方位はN-45°-Eを指す。埋没状況は自然堆積を示す。主柱穴・壁溝・カマド・貯蔵穴・ピット等の施設は、一切検出されていない。

第19号住居跡からは、須恵器蓋・壺と残存率の高い壺や甕が出土している。7は砥石で、長さ9.1cm、幅2.4~3.2cm、厚さ2.7~3.3cm、重さ97.57gほどが残存する。図示したほかに、土師器甕・鉢・高壺・壺片および混入した弥生土器片が検出されているが、殆どは第19号住居跡から出土している。

第21号住居跡（第34図）

調査区南東隅の、G-6・7、H-6・7グリッドに位置する。北側は第11号溝跡に削平され、東側は調査区外にある。重複する第14号溝跡よりも新し

い。

平面形態は方形であるが、規模は不明である。確認面からの深さは0.16mを測り、南西壁の方位はN-49°-Wを指す。埋没状況は自然堆積を示す。第14号溝跡と重複する部分には、明瞭な貼床が施されている。

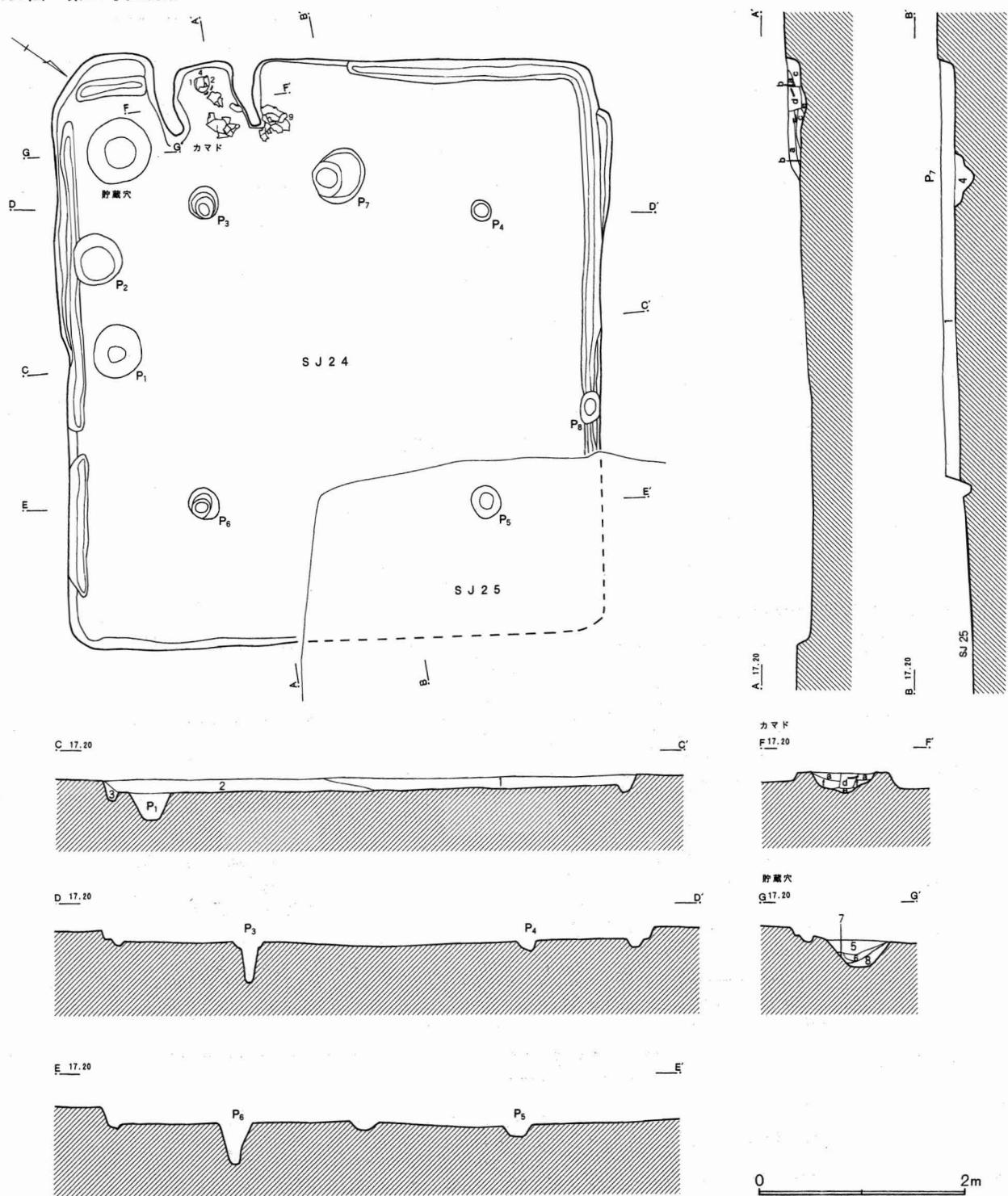
壁溝は第14号溝跡と重複する箇所を除き、検出範囲で全周する。幅0.16~0.23m、床面からの深さ0.06mほどである。

主柱穴・カマド・貯蔵穴は検出されていない。

ピットは、西壁際にP1が確認されている。出入り口施設に関連する機能が想定することも可能である。

遺物は図示したほかに、土師器甕・甕・高壺・壺片が検出され、赤彩が施された高壺・壺片が多くみられる。13は円盤状の滑石製品で、紡錘車もしくは

第37図 第24号住居跡



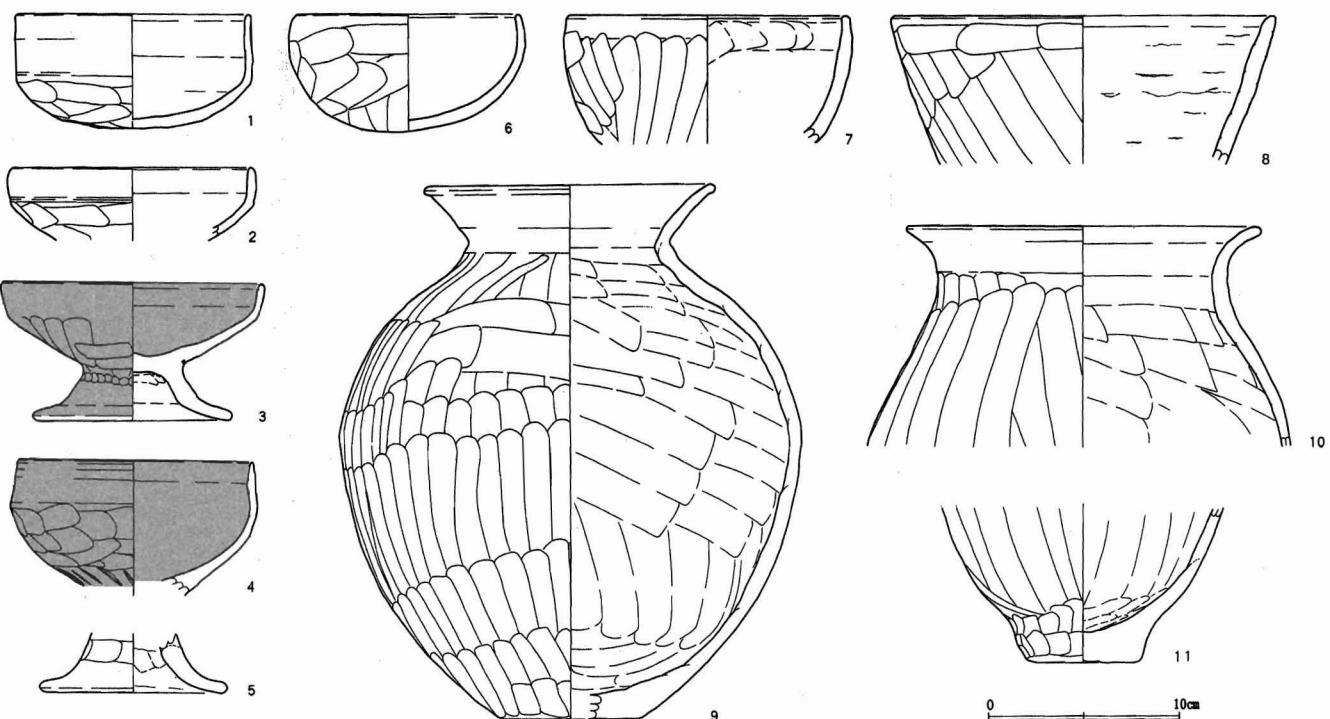
第24号住居跡

- 1 黒褐色土 地山粒子少
- 2 黒褐色土 地山粒子・ γ ロック($\phi 10\text{mm}$ 以下)
- 3 黒褐色土 地山 γ ロック($\phi 30\text{mm}$ 以下)多
- 4 黒褐色土 焼土 γ ロック($\phi 20\text{mm}$ 前後) 炭化物粒子
- 貯蔵穴
- 5 黒褐色土 烧土粒子少量
- 6 黒褐色土 烧土粒子・炭化物粒子多
- 7 暗灰黄土 地山 γ ロック多
- 8 暗灰黄土 炭化物粒子 地山粒子

カマド

- a 暗灰色土 天井部の崩落
烧土粒子 炭化物粒子 地山 γ ロック多
- b 黑色土 灰層 炭化物
- c 浅黄色土 地山 γ ロック
- d 暗灰色土 接け口
炭化物 地山 γ ロック
- e 黑褐色土 炭化物多
- f 黄灰色土 烧土 γ ロック 地山 γ ロック

第38図 第24号住居跡出土遺物



第15表 第24号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	12.0	5.9		AHCIJ	B	橙	70	カマドNo 7・8
2	高壺	(12.5)	(3.8)		ABCI	B	橙	30	カマドNo 6
3	高壺	(13.6)	7.2		ABCIJ	B	橙	60	カマド 内外面赤彩
4	高壺	12.3	(7.2)		ABC	B	にぶい赤褐	60	カマドNo 7・8 内外面赤彩不明瞭
5	高壺	(3.1)		(9.4)	ABCEHL	B	橙	5	カマド
6	椀	(11.5)	5.1		ABCH	B	橙	45	
7	椀	(14.7)	(6.7)		AEHIL	A	にぶい橙	10	カマドNo 6
8	甌	(19.6)	(7.7)		ABCEHIKL	B	にぶい橙	10	
9	甌	(14.8)	(27.9)	(7.2)	ABCI	C	にぶい橙	40	カマドNo 2
10	甌	18.1	(11.4)		ABCHI	B	にぶい橙	30	P1
11	甌		(8.3)	5.3	ABC	B	橙	5	

第16表 第25号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(13.4)	(2.4)		AHIJL	B	淡橙	5	内外面赤彩
2	壺	(13.6)	(3.4)		ABCHI	B	浅黄橙	15	
3	壺	(14.0)	(4.9)		ABCHIK	B	橙	15	内面・口縁部外面赤彩
4	ミニチュア		(2.5)	3.3	ABC	B	橙	60	

鏡形品の未製品と思われる。縦6.8cm、横7.35cm、厚さ1.35cm、重さ101.94gを測る。また、混入した弥生土器片も出土している。

第23号住居跡（第36図）

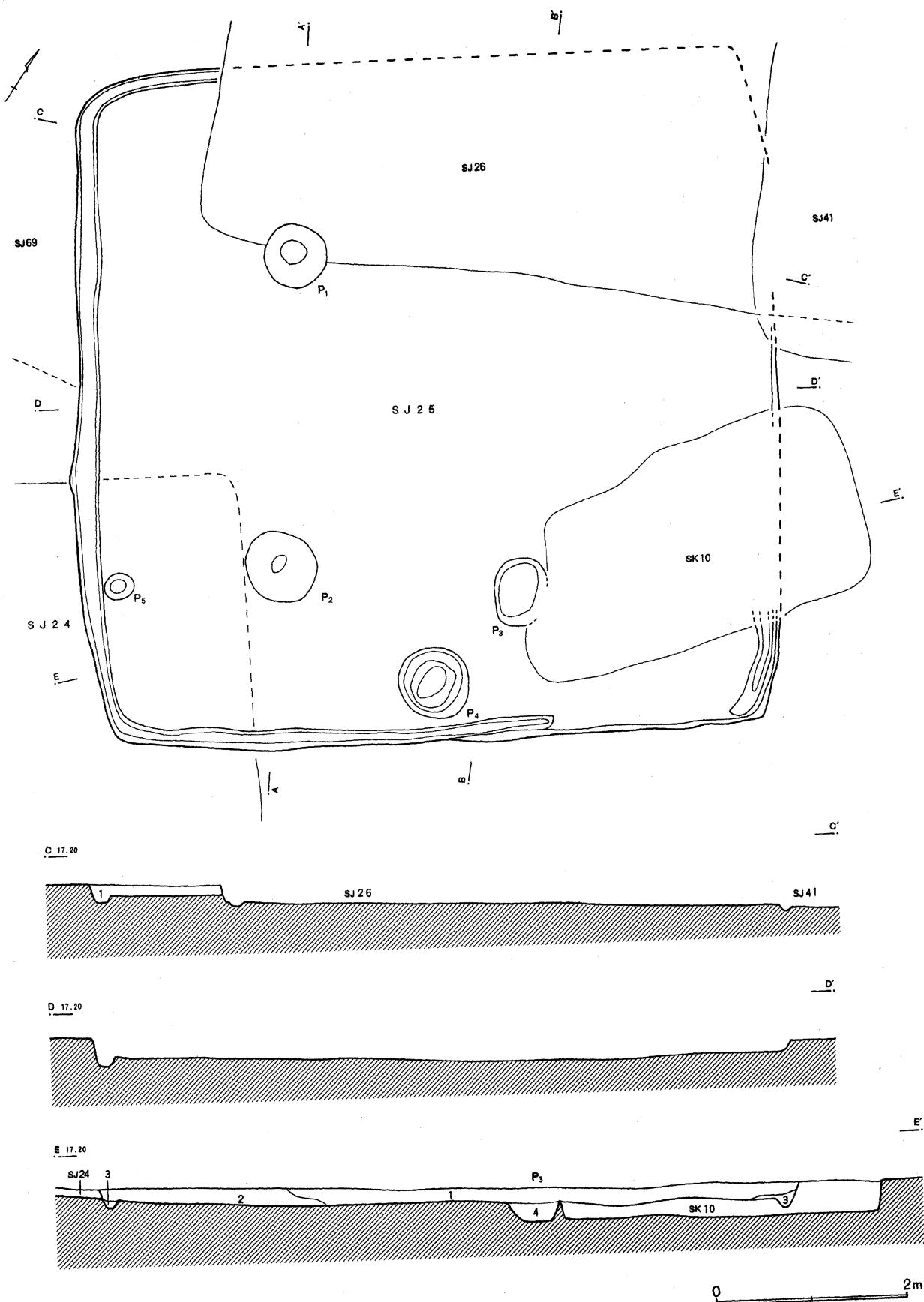
調査区南東隅のF-7、G-7グリッドに位置する。南半は調査区外にあり、また重複する第11号溝跡および試掘調査トレンチによって西半が削平されている。

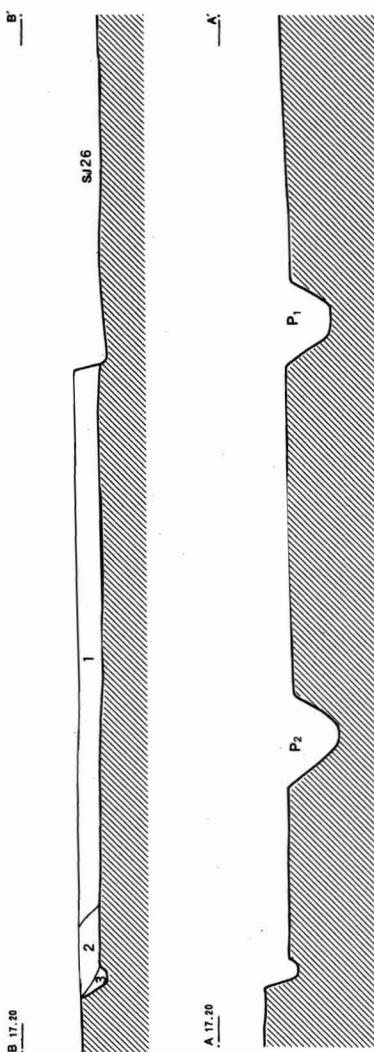
方形の平面形態ではあるが、規模は不明である。確認面からの深さは0.04mを測り、北東壁の方位はN-43°-Wを指す。埋没状況は不明である。

主柱穴・壁溝・カマド・貯蔵穴・ピット等の施設は検出されていない。

遺物は図示したほかに、土師器甌・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

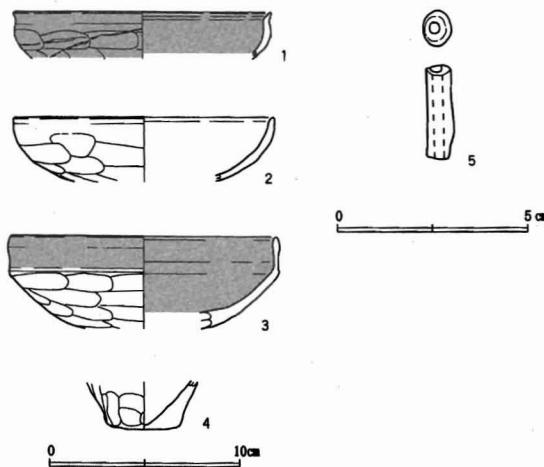
第39図 第25号住居跡・出土遺物





第25号住居跡

- 1 暗灰黄色土 地山アーロック(Φ10mm前後)
- 2 暗灰黄色土 地山細粒子多量
- 3 暗灰黄色土 地山アーロック多量
- 4 暗れアーロック褐色土 地山アーロック(Φ100mm以下)多量



第24号住居跡 (第37図)

C-4・5、D-4グリッドに位置する。重複する第25号住居跡よりも古い。

平面形態は方形で、主軸長5.82m、幅5.34m、確認面からの深さ0.14m、主軸方位N-126°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP3・P4・P5・P6の4本である。方形に配置され、南列のP3・P6は深い。

壁溝は、東壁を除く検出範囲で途切れながらもほぼ全周する。幅0.12~0.24m、床面からの深さ0.08mほどである。

カマドは西壁の南西コーナーへよった位置に設置される。天井部が崩落した状態で遺存し、土層断面には掛け口が確認できる。燃焼部は長軸長0.70m×短軸長0.62mの平面方形を呈し、長軸方向は住居跡主軸よりも南へ振られている。火床面は中央部が僅かに窪み、炭化物層が形成されていた。煙道部へと繋がる壁は直立気味に立ち上がる。燃焼部および北側袖部付近から多量の遺物が出土している。

貯蔵穴はカマド南脇の南西コーナーに付設される。長径0.63m×短径0.62mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.25mを測る。底面は平坦で壁の立ち上がりは直線的である。

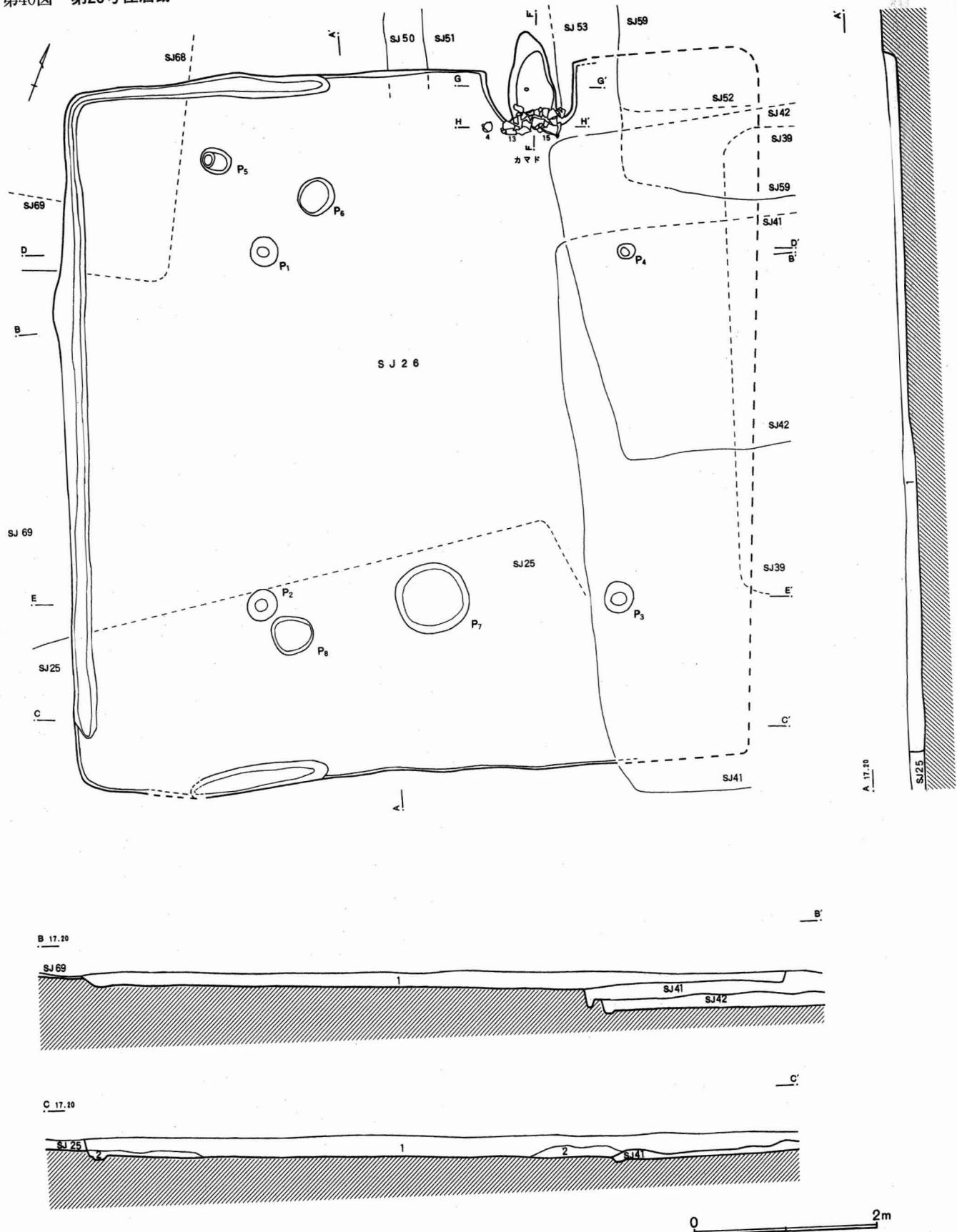
ピットはP1・P2・P7・P8の4本が検出されている。P1・P2は並列し、南壁中央際に位置する。2本のピットが対になって、出入り口施設に関連する機能が予想される。P8はP1・P2に対面する北壁東3分の1の壁溝内に掘り込まれ、壁材の固定などの用途が想像される。P7は主柱穴P3・P4の中間に位置し、補助的な柱の柱穴である可能性も考えられる。

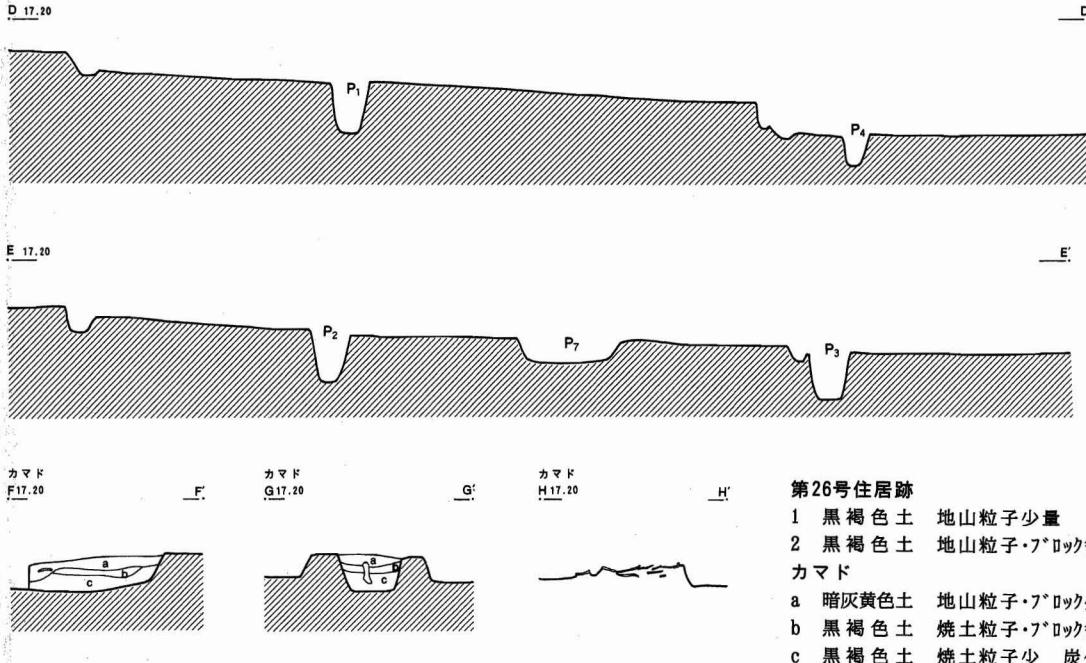
遺物はカマドおよびその周辺から出土し、図示したほかに、土師器甕・甌・壺片および混入した弥生土器片が検出されている。

第25号住居跡 (第39図)

C-3・4、D-3・4グリッドに位置する。重複する第26号住居跡よりも古く、第24号住居跡、第

第40図 第26号住居跡





10号土壤よりも新しい。第41・69号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、南北長7.16m、東西長7.37m、確認面からの深さ0.20m、南北軸方位N-35°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2の2本である。4本柱穴を想定すると、残る2本は第26号住居跡、第10号土壤と重複する箇所にあたる。

壁溝は東壁中央および南壁南東コーナー付近を除き、検出範囲で全周する。幅0.14~0.30m、床面からの深さ0.08mほどである。

カマドは検出されていないが、第26号住居跡に削平される北壁中央に設置されていたものと推定される。

貯蔵穴は検出されていない。

ピットはP3・P4・P5の3本が検出されている。推定されるカマド位置に相対する南壁中央際のP4には出入り口施設の機能が想定される。残るP3・P5の用途・性格は不明である。

図示した遺物のなかで、5は土錘である。長さ2.45cm、径0.7~0.9cm、孔径0.3cm、重さ1.87gを測

る。ほかに、土師器甕・甌・高坏・坏片および混入した弥生土器片が出土している。

第26号住居跡（第40図）

C-3・4、D-3・4グリッドに位置する。重複する第25・39・41・42・68・69号住居跡よりも新しく、第50・51・52・59号住居跡との新旧関係は明確ではない。

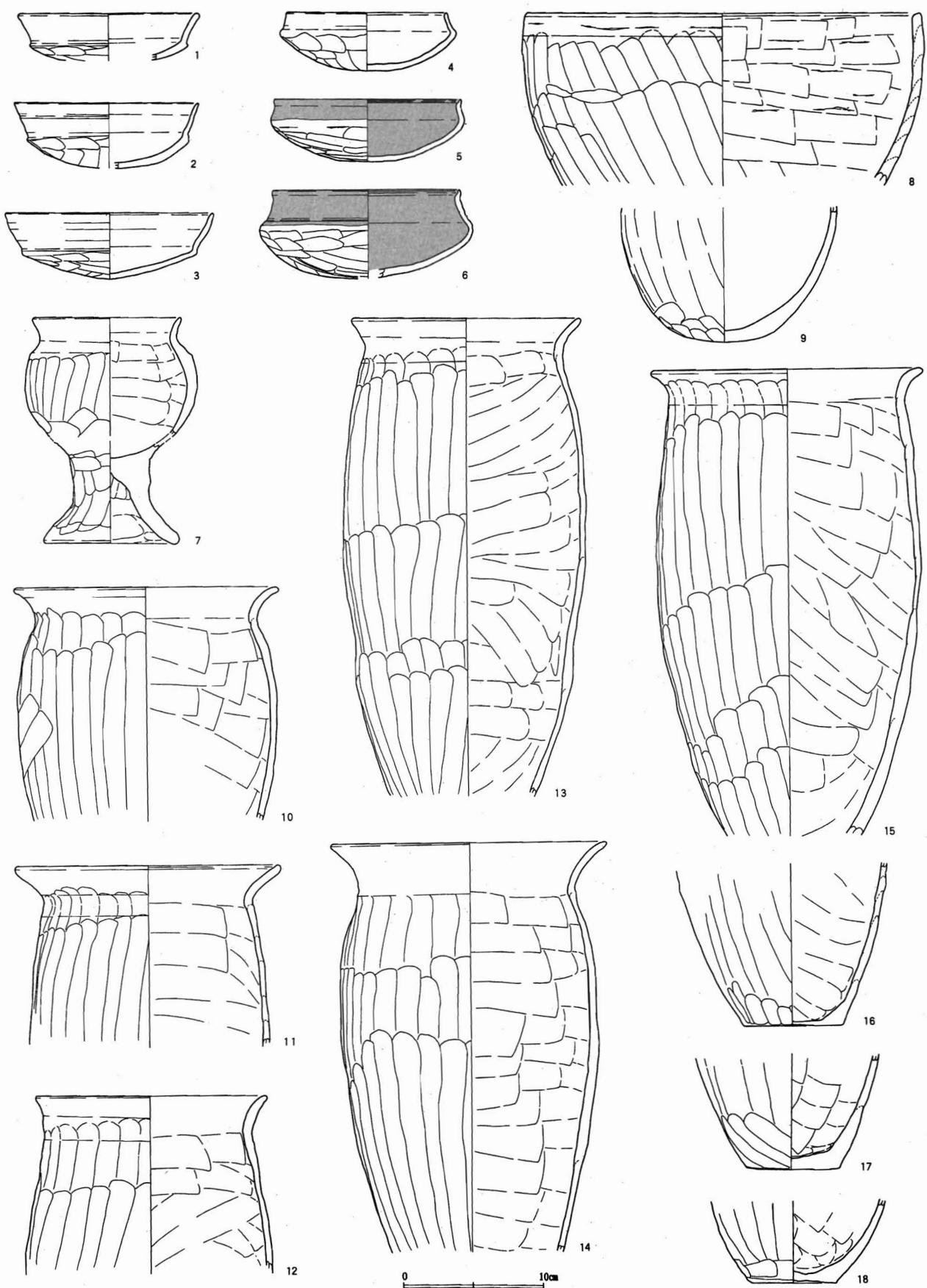
平面形態は方形で、主軸長7.93m、土層断面から推定される東西幅7.76m、確認面からの深さ0.19m、主軸方位N-25°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示し、第41号住居跡と重複する箇所には貼床が施されている。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。平面規模は小さいが、住居跡床面から0.4m前後の深さをもつ。

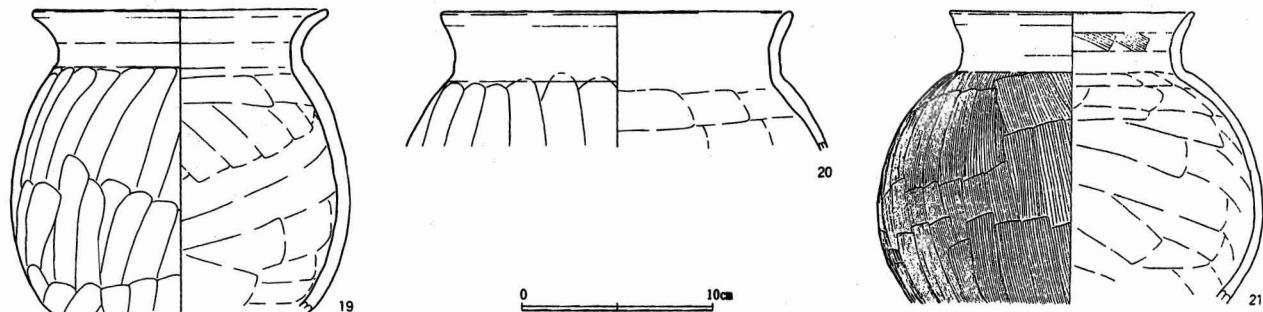
壁溝は南壁の一部と西壁～北壁西半に巡る。幅0.14~0.36m、床面からの深さ0.06mほどである。

カマドは北壁中央東よりに設置される。燃焼部は長径1.04m×短径0.53mの平面不整楕円形で、火床面は住居跡床面よりも僅かに窪む。袖部先端には土師器甕と甌が横倒しの状態で出土している。出土状

第41図 第26号住居跡出土遺物(1)



第42図 第26号住居跡出土遺物(2)



第17表 第26号住居跡出土遺物観察表 (第41・42図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.9)	(3.4)		ACHI	A	にぶい橙	10	
2	壺	(13.2)	(4.7)		ABCIJ	B	橙	60	
3	壺	(14.8)	4.7		ABCBI	B	にぶい赤褐	30	カマド
4	壺	11.4	4.1		CHI	B	にぶい褐	90	カマドNo 1
5	壺	(13.2)	4.4		ABCHIJL	B	橙	30	内面・口縁部外面赤彩
6	椀	13.4	(6.2)		HII	A	にぶい褐	75	内面・口縁部外面赤彩
7	脚付椀	10.4	(16.1)	9.3	ABCBI	B	橙	90	
8	鉢	(28.0)	(12.2)		ACHL	A	にぶい黄橙	10	
9	小型壺		(9.7)		HII	B	橙	20	調整単位不明瞭
10	甕	(18.6)	(16.6)		ABCI	B	橙	20	
11	甕	18.7	(12.9)		ABCBI	B	橙	25	
12	甕	16.3	(12.7)		ABCI	B	橙	30	
13	甕	16.0	(34.3)		ABCI	B	橙	70	カマドNo 2
14	甕	19.6	(29.2)		ABCI	B	にぶい橙	60	
15	甕	19.2	(33.6)		ABCI	B	にぶい橙	80	カマドNo 3
16	甕		(11.6)	7.0	ABCBI	B	にぶい橙	15	
17	甕		(8.2)	6.7	ABCI	C	橙	10	
18	甕	(5.8)	6.2		ABCIL	B	橙	10	
19	小型甕	15.3	(15.7)		ABCIJ	B	橙	50	
20	甕	(18.4)	(7.0)		ABHL	C	橙	5	胎土に小礫多
21	台付甕	12.8	(15.3)		ABCI	B	明赤褐	40	

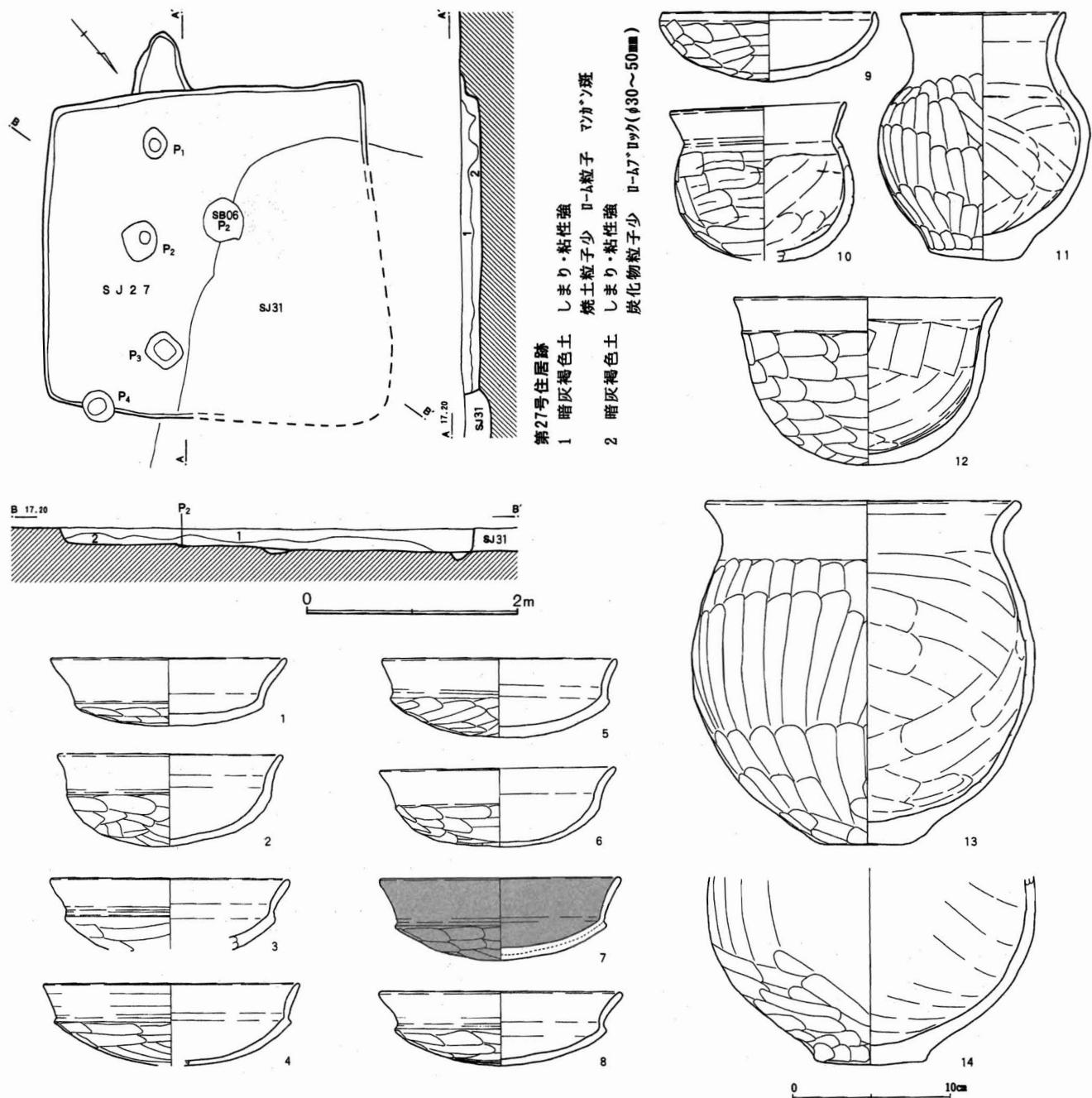
第18表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(14.8)	4.4		ABCI	B	橙	30	
2	壺	(14.1)	5.9		ABCI	A	橙	50	
3	壺	(15.0)	(4.5)		ABCI	A	にぶい赤褐	10	
4	壺	16.1	(5.2)		ABCI	B	橙	60	
5	壺	14.6	5.1		ABCI	B	にぶい赤褐	85	
6	壺	14.8	5.1		CIJ	A	橙	80	
7	壺	(15.2)	5.2		CHI	A	橙	75	内外面赤彩
8	壺	(15.2)	4.7		ABCI	B	橙	35	
9	壺	(13.6)	(4.3)		ABCI	B	橙	45	
10	小型甕	(11.0)	(10.0)		CHIJ	B	橙	80	
11	小型壺	10.2	15.5		CIJ	A	橙	60	
12	鉢	16.9	10.7		CHIJ	B	橙	80	
13	甕	19.6	21.9	5.1	ABCBI	B	明赤褐	40	
14	甕		(12.4)	6.8	CIJ	B	橙	30	

況からカマド掛け口に掛けられた状態で放置された甕・甌が、住居跡埋没段階に転倒した可能性は低く、

カマド a 層とした暗灰黄色土がカマドの構築材であれば、焚口部にアーチ状に架けられたカマドの芯材

第43図 第27号住居跡・出土遺物



として用いられたものといえる。

貯蔵穴は検出されていない。

ピットはP5・P6・P7・P8の4本が検出されているが、いずれも用途・性格は不明である。

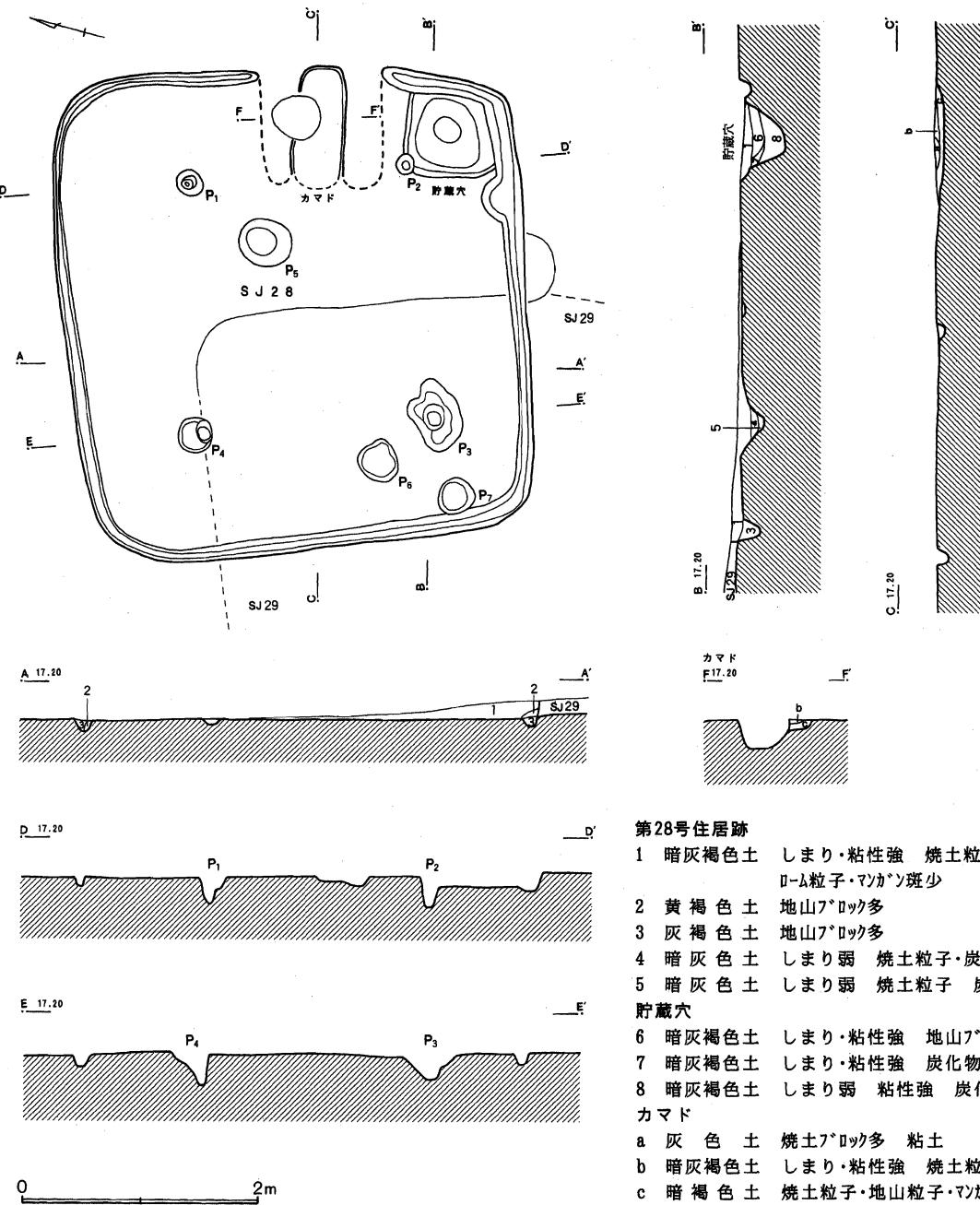
遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・椀・壺片と、混入した弥生土器片および古墳時代前期の土器(21)が出土している。

第27号住居跡 (第43図)

A-3、B-3グリッドに位置する。重複する第31号住居跡よりも新しく、第6号掘立柱建物跡との新旧関係は明らかではない。

平面形態は方形を基本としているが、土層断面から復元されるプランは、やや歪な台形を呈している。土層A-A'方向の長さは3.10m、これに直交する方向の長さは3.06m、確認面からの深さ0.21m、A-A'

第44図 第28号住居跡



軸の方位はN-50°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP₁・P₃の2本が検出されている。

壁溝・カマド・貯蔵穴は確認されていない。西壁にみられるカマド状の張出は、第27号住居跡とは異なる掘込みである。

ピットはP₂・P₄の2本が検出されている。P₂は主柱穴P₁・P₃の中間に、P₄は北東壁際に位置する。いずれも用途・性格は不明である。

第28号住居跡

- | | |
|---------|------------------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | しまり・粘性強 焼土粒子・炭化物粒子多
リム粒子・マンガン斑少 |
| 2 黄褐色土 | 地山ブロック多 |
| 3 灰褐色土 | 地山ブロック多 |
| 4 暗灰色土 | しまり弱 焼土粒子・炭多 |
| 5 暗灰色土 | しまり弱 焼土粒子・炭多 地山粒子
貯蔵穴 |
| 6 暗灰褐色土 | しまり・粘性強 地山ブロック多 |
| 7 暗灰褐色土 | しまり・粘性強 炭化物粒子少 |
| 8 暗灰褐色土 | しまり弱 粘性強 炭化物少
カマド |
| a 灰色土 | 焼土ブロック多 粘土 |
| b 暗灰褐色土 | しまり・粘性強 烧土粒子多 |
| c 暗褐色土 | 焼土粒子・地山粒子・マンガン多 |

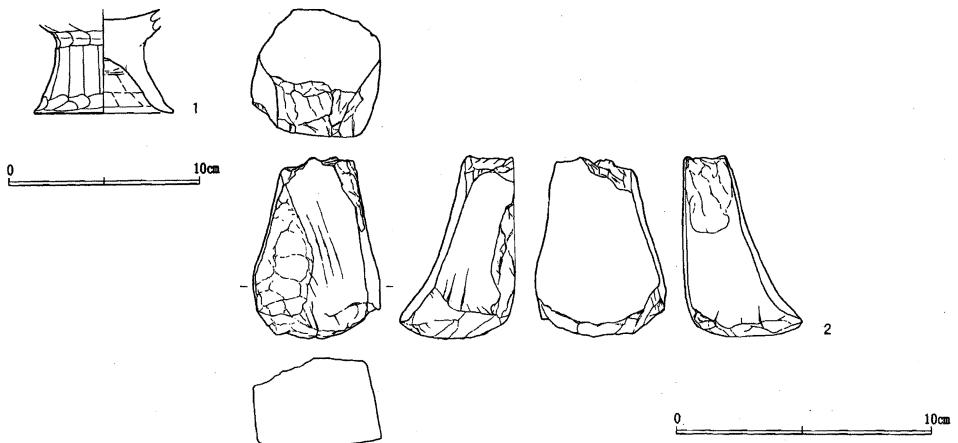
遺物は図示したほかに、土師器甕・鉢・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第28号住居跡（第44図）

A-2、B-2グリッドに位置する。重複する第29号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長4.16m、南北幅3.99m、主軸方位N-67°-Eを測る。確認面からの深さは最深0.14mあるが、北東半は遺構確認面で既に床面が露出していた。埋没状況は自然堆積を示す。

第45図 第28号住居跡出土遺物



第19表 第28号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		(5.3)	(7.3)	ACHIJKL	B	橙	5	

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。P3を除いて平面規模は小さいが、住居跡床面からは0.25~0.30m程度の深さをもち、主柱穴としての機能を充分果たすことができる。

壁溝は全周し、幅0.07~0.20m、床面からの深さ0.09mほどである。

カマドは東壁中央やや南に設置される。住居跡北半部に位置しているため、燃焼部のみが確認され、袖部・煙道部は検出されていない。燃焼部は推定される長軸長1.02m×短軸長0.43mの長方形で、火床面は住居跡床面よりも僅かに窪んでいる。カマド構築材と思われる灰色粘土や多量の焼土が堆積していた。

貯蔵穴はカマド南側の南東コーナーに付設される。東西長0.71m×南北長0.75mの平面方形の浅い掘込みの中央に、東西長0.57m×南北長0.55mの平面隅丸台形に掘り込まれる。住居跡床面からの深さは0.39mを測り、底面はほぼ平坦である。中央の平面隅丸台形の掘込みには貯蔵機能が、浅い方形の掘込みには板材等の蓋を架ける機能が推定される。

ピットはP5・P6・P7の3本が検出されているが、用途・性格は不明である。

図示し得た遺物のなかで、2は砥石である。長さ

7.0cm、幅3.0~4.95cm、厚さ2.0~4.2cm、重さ162.66gほどが残存している。ほかに、土師器甕・高坏・坏片および混入した弥生土器片が出土しているが、量は少ない。

第29号住居跡（第46図）

A-2、B-2グリッドに位置し、北西コーナー付近を試掘調査のためのトレーニによって削平されている。第28号住居跡よりも古く、第31号住居跡よりも新しい。重複する第15号溝跡は土層断面を観察したB-B'まで達しておらず、新旧関係は明確ではない。

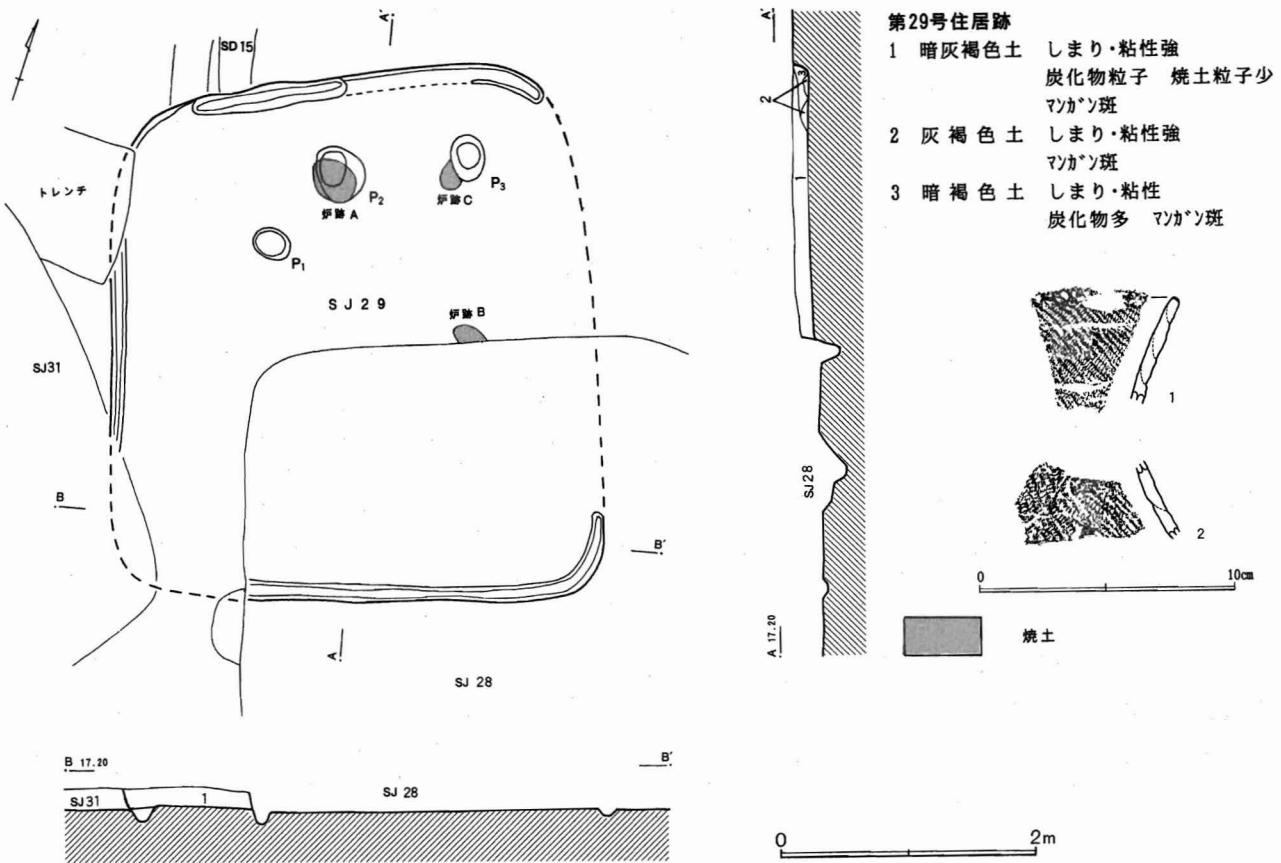
平面形態は歪な方形である。南北長3.76~4.26m、推定される東西長は3.71~3.96m、確認面からの深さ0.16m、南北軸の方位はN-23°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示し、床面直上に炭化物が部分的に堆積する。

壁溝は壁が検出されている範囲ではほぼ確認されることから、本来は住居跡を全周していたことが予想される。幅0.09~0.20m、床面からの深さ0.04mほどである。

厨房施設として3基の地床炉が設置される。

炉跡Aは住居跡中央よりも北壁によって位置する。南北0.29m×東西0.38mの平面隅丸長方形に焼

第46図 第29号住居跡・出土遺物



土化し、P2とした掘込みを備える。

炉跡Bは住居跡中央よりも東壁によって位置する。平面楕円形に焼土化し、第29号住居跡に南半が削平されているため長径は不明で、短径は0.18mを測る。

炉跡Cは北東コーナーによって位置し、P3と重複する。P3は炉跡Cに伴うピット、もしくは主柱穴か判断がつかない。仮に主柱穴とした場合、2つの解釈が可能である。ひとつは、炉跡Cを炉の機能を考えずに、何らかの理由によって床面が焼土化したものとする解釈である。一方は、炉の機能をもたせて、本来の炉が住居跡の拡張に伴う新たな主柱穴によって掘削されたとする解釈であるが、住居跡の検出状況からは拡張を裏付ける要素はない。

貯蔵穴は検出されていない。

ピットはP1のみが検出されている。炉跡Cと重複するP3の解釈によって、主柱穴となる可能性がある。

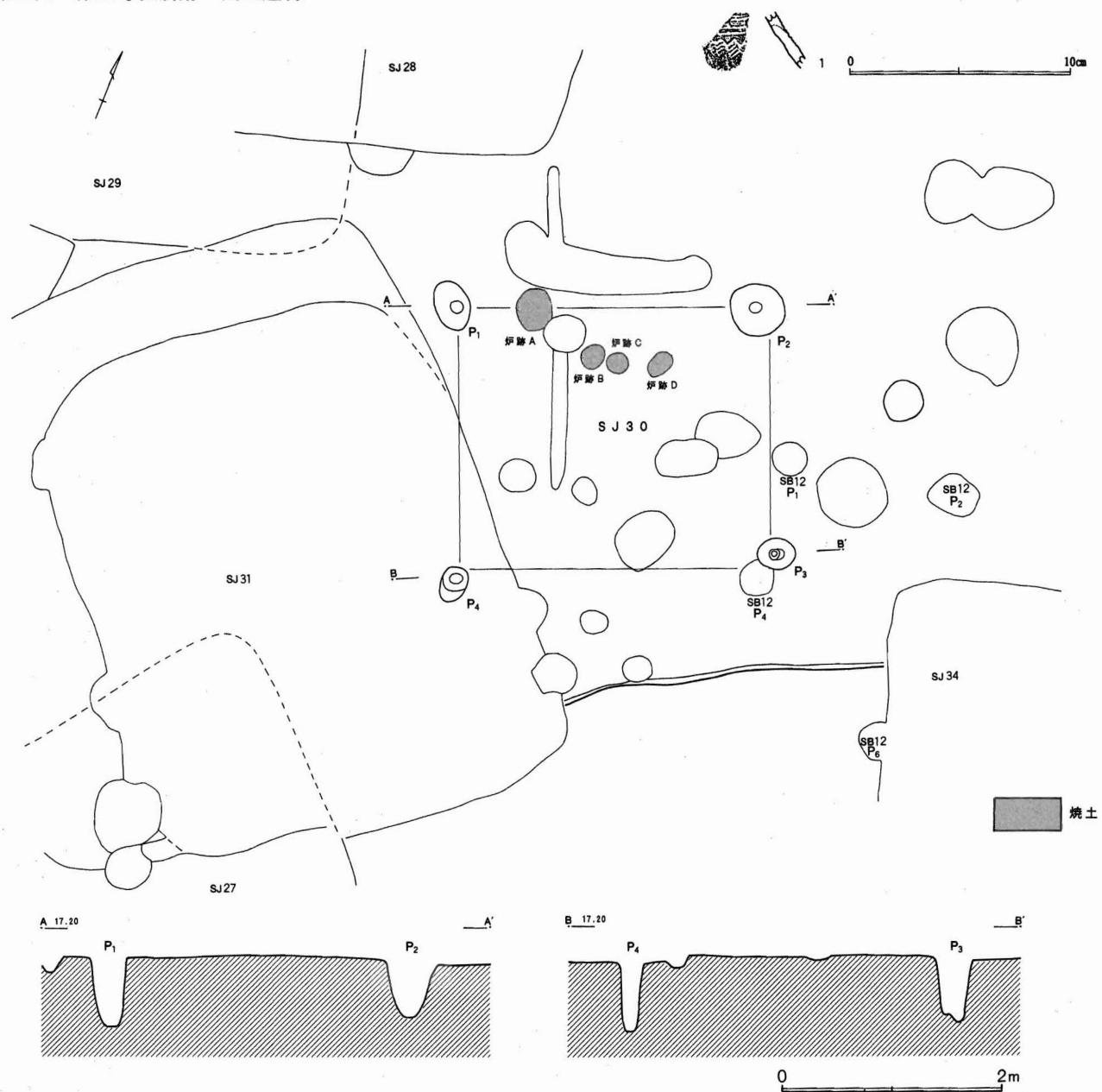
遺物は図示したほかに、細片や風化が著しい弥生土器片が出土し、土師器甕・坏片も混入している。

第30号住居跡（第47図）

B-2グリッドに位置する。第28・29・31・34号住居跡、第12号掘立柱建物跡と著しく重複する。また遺構確認面で既にほとんどの床面が削平されており、南壁のごく一部と主柱穴・炉跡のみが検出されたにすぎない。発掘調査では3軒の住居跡が重複する第30・32・33号住居跡として着手した。しかし1組の主柱穴の組み合わせのみが把握され、これを第30号住居跡とし、第32・33号住居跡は欠番とした。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。柱間は東西2.88m、南北2.38mを測り、主柱穴列南北軸の方針はN-30°-Wを指す。P3-P4列から検出された南壁までの距離は0.82~1.24mである。主柱穴と各壁までの距離を平均1.03mと等しく見積もると、住居跡の平面規模は南北4.44m×東西4.94mと推定される。

第47図 第30号住居跡・出土遺物



床面には焼土化した部分が4ヶ所認められ、地床炉として捉えられる。いずれも住居跡北側へよっている。

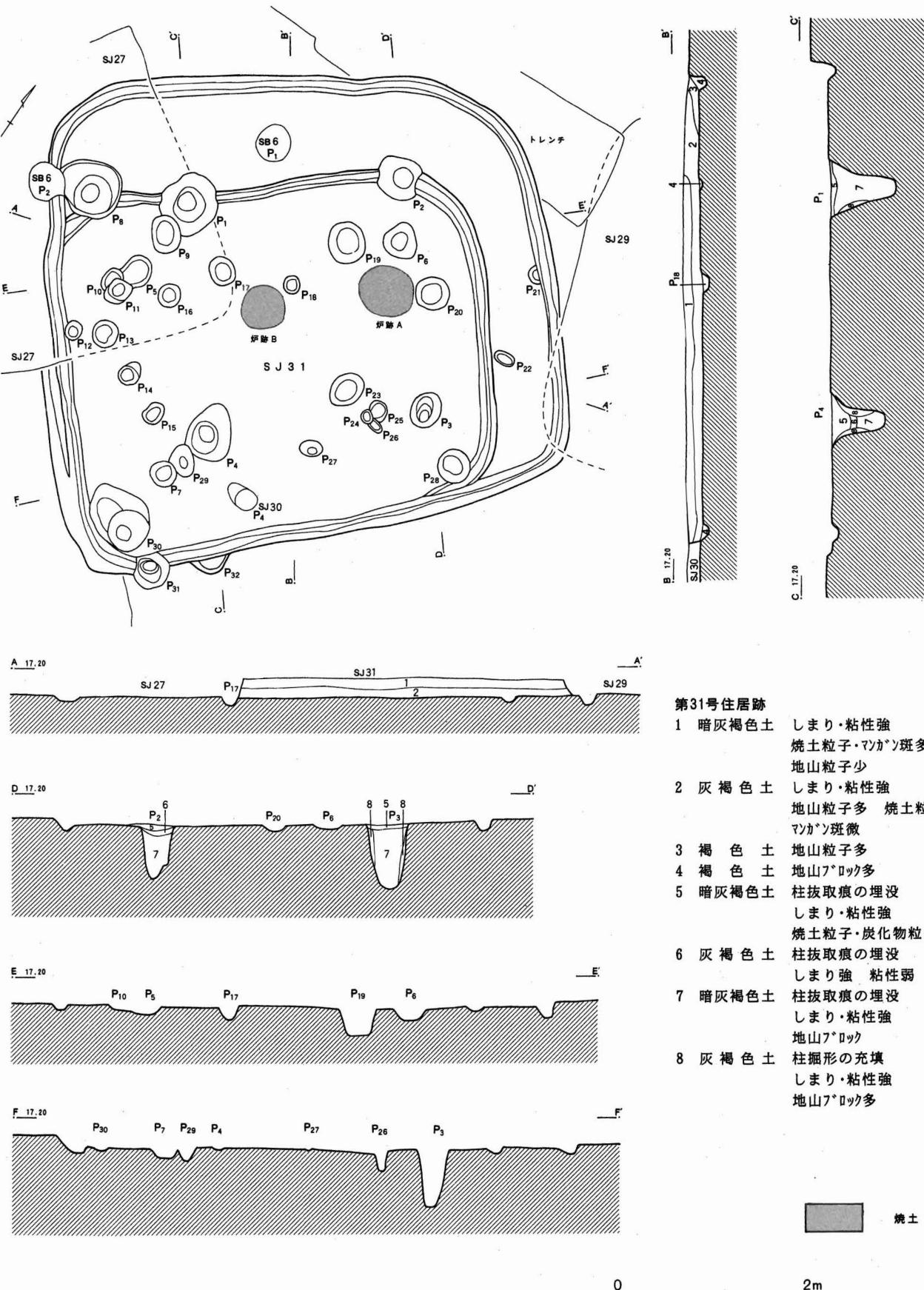
炉跡Aは主柱穴P₁—P₂列の線上にあり、極端に西側によっている。平面円形に焼土化し、南北径0.37m×東西径0.32mを測る。検出された4基の地床炉のなかで、最も平面規模が大きい。確証はないが、4基の地床炉に先後関係が存在すれば、最も新しい炉跡の可能性が高い。

炉跡B・炉跡C・炉跡Dは主柱穴P₁—P₂列よ

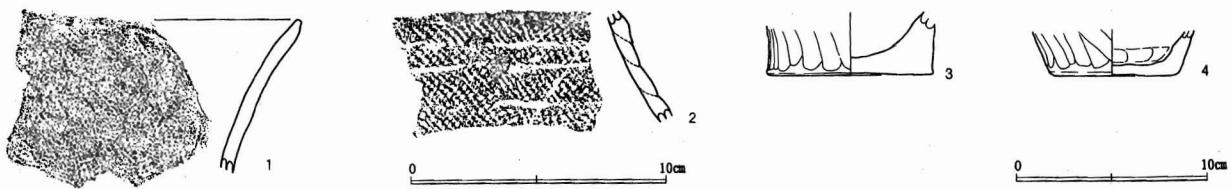
りも住居跡中央へより、またP₁—P₂間の中央付近に集中する。なかでもほぼ中央に位置する炉跡Cか、僅かに西に位置する炉跡Bが本来の炉跡と推測される。炉跡Dは炉跡Aと同様に後出的な位置にある。但し、4基の炉跡の新旧は、主柱穴との位置関係のみから想定されるもので、裏づける根拠は検出されていない。また、そもそも先後関係が成立するか否かすらも確証はない。

炉跡Bは平面不整円形に焼土化し、南北径0.22m×東西径0.22mを測る。

第48図 第31号住居跡



第49図 第31号住居跡出土遺物



第20表 第31号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
3	壺		(3.3)	(8.6)	ABC	B	にぶい橙	5	
4	壺		(2.4)	(6.1)	ABC	B	橙	5	

炉跡 C は平面円形に焼土化し、南北径0.18m×東西径0.21m を測る。

炉跡 D は平面不整隅丸長方形に焼土化し、長軸長0.26m×短軸長0.17m を測る。

図示した遺物は弥生時代後期の櫛描文系の土器片である。ほかに、細片や風化が著しく図示し得ない弥生土器片も出土し、また、土師器甕・坏片も混入している。

第31号住居跡（第48図）

A-2・3、B-2・3グリッドに位置する。重複する第27・29号住居跡、第6号掘立柱建物跡よりも古く、第30号住居跡よりも新しい。

平面形態は長方形で、南東壁・南西壁を基準に拡張が行われている。拡張前の規模は、長軸長4.72m×短軸長3.82m、拡張後の規模は長軸長5.58m×短軸長4.91m、確認面からの深さ0.20m、長軸方位N-49°-E を測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴は、拡張前後のそれぞれに対応する組み合わせが認められる。

P3・P4・P5・P6 は拡張前の主柱穴で、住居跡プランに応じた長方形に配列されている。拡張後の主柱穴に比べ、平面規模は小さく、掘形も浅い。

P1・P2・P3・P4 が拡張後の主柱穴で、P3 は拡張前後とも主柱穴として機能している。拡張後の主柱穴は P3 を基準とし、住居跡拡張方向に反している。また、住居跡プランと異なり、方形に配列されるなど不可思議な主柱穴配列が行われている。ここで注目されるのは壁際に掘り込まれた相対する P

12・P21の存在である。いずれも辺の中央付近に位置し、また P1-P4 と P2-P3 の中点を結ぶ延長線上にある。いわば、主柱穴 P1・P2・P3・P4 に対して棟持柱的な位置にある。拡張後の柱穴は P12・P21を含めた配列と捉えられ、長方形の住居跡プランとも齟齬がない。主柱穴 P1・P2・P3・P4 の土層観察から、柱が抜き取られたことが判明し、一部に柱を立てるために柱掘形に充填した灰褐色土も残存する。

壁溝も拡張前後に対応して二重に巡り、いずれも全周している。拡張後の壁溝は、幅0.14~0.34m、床面からの深さ0.08m ほどである。拡張前の壁溝は、幅0.12~0.17m、住居跡床面からの深さは0.04m を測る。壁溝の深さは拡張前後の差が認められるが、拡張段階に共有する壁溝部分を再度掘り下げられたものと推定される。

厨房施設としての炉跡も拡張前後に対応する2基の地床炉が検出されている。

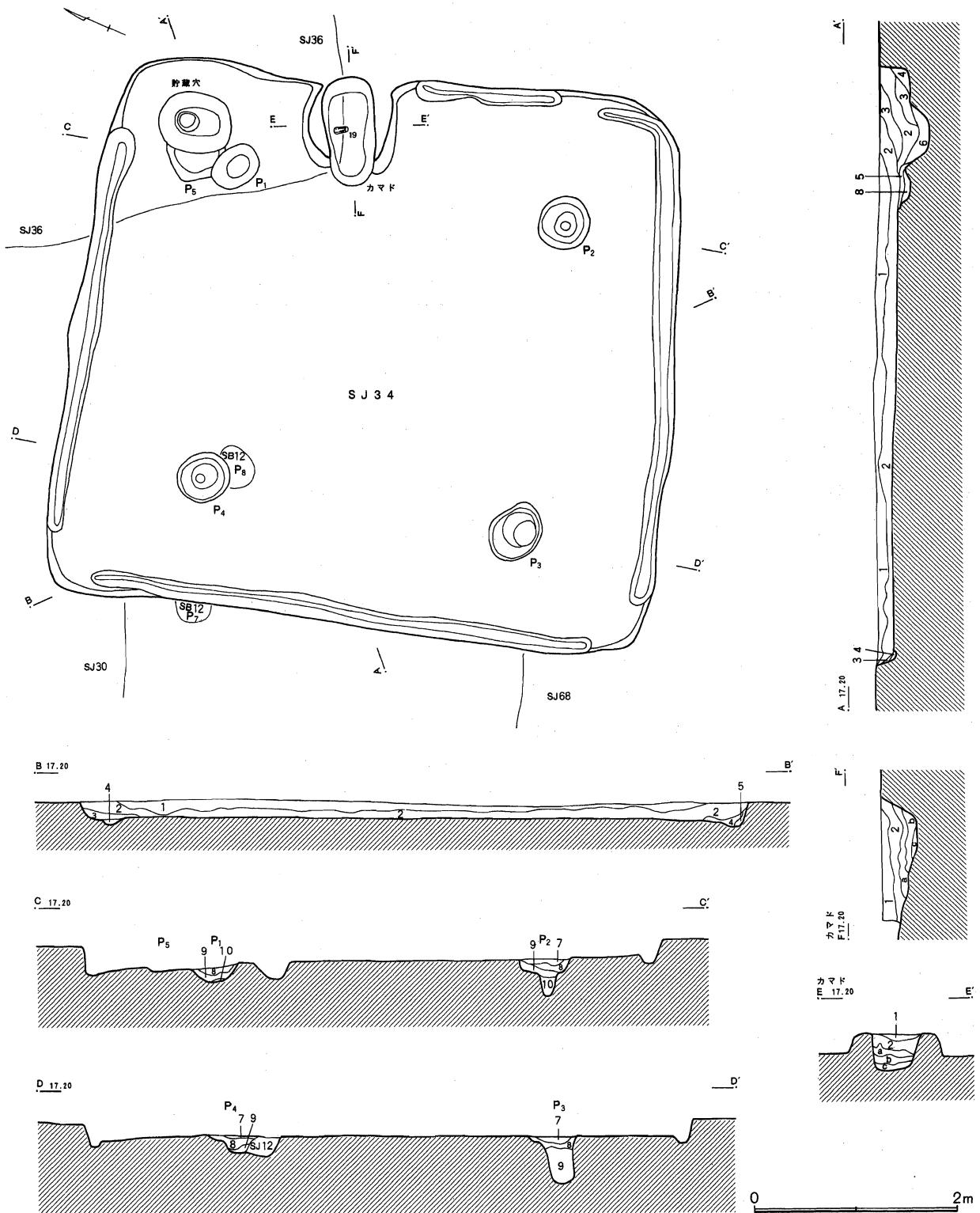
炉跡 A が拡張後の炉跡であり、住居跡短軸の主柱穴 P1 と P3 を結ぶ中央付近の住居跡中央よりに位置している。長径0.59m×短径0.53m の平面円形に焼土化している。

炉跡 B が拡張前に使用されていた炉跡である。住居跡長軸の主柱穴 P5 と P6 を結ぶ中央付近の住居跡中央よりに位置する。0.47m×0.47m の平面隅丸方形に焼土化している。

貯蔵穴は検出されていない。

ピットは P7・P8・P9・P10・P11・P13・P14

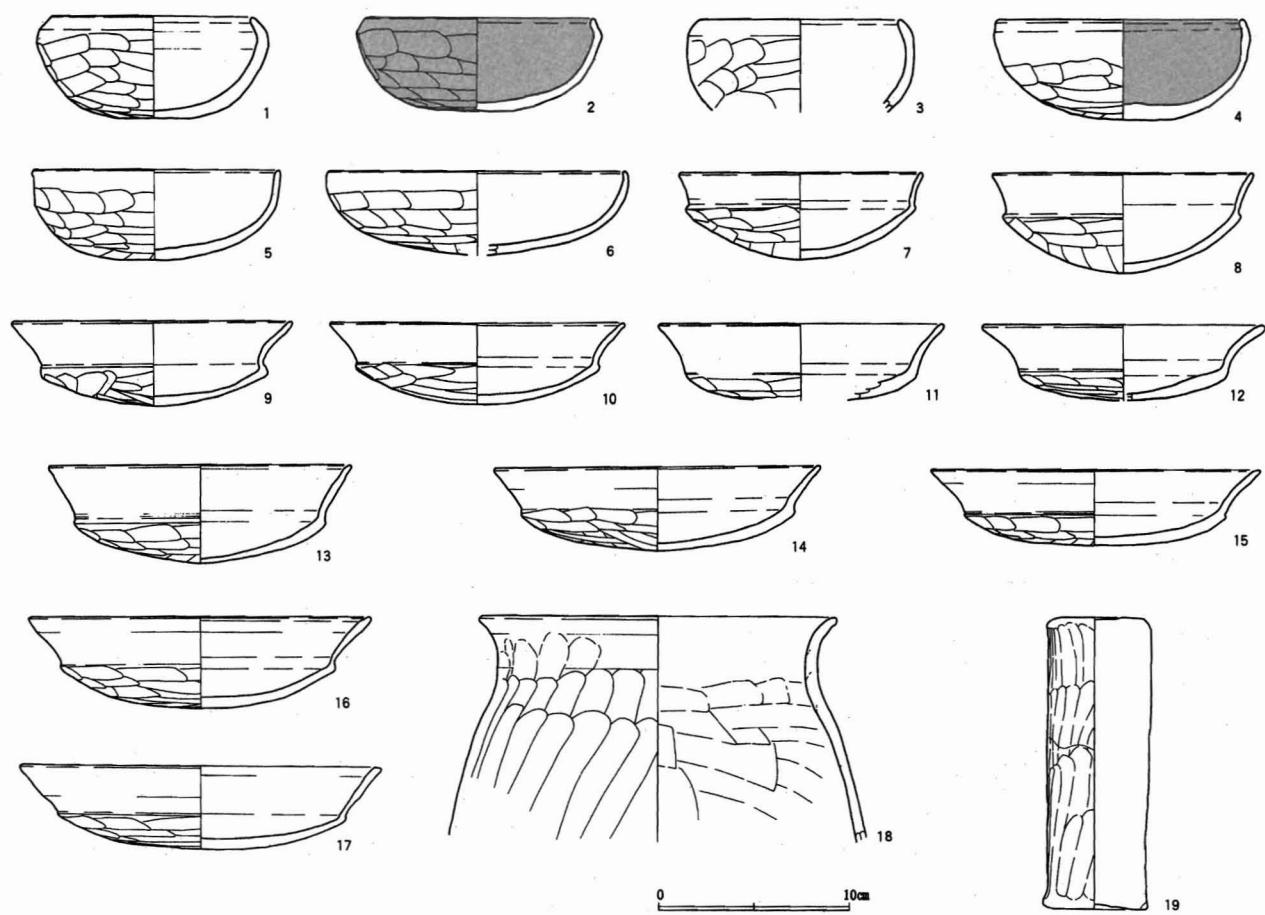
第50図 第34号住居跡



第34号住居跡

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 粘質 灰色粘土少量 地山粒子・フロック多 | 8 黒褐色土 焼土フロック暗灰色粘質土 |
| 2 黒褐色土 焼土 茶褐色土 地山フロック少量 | 9 黒褐色土 地山フロック多 |
| 3 黒褐色土 地山フロック少 | 10 黒褐色土 灰黄色粘質土 |
| 4 黒褐色土 粘性強 灰色粘質土主体 地山粒子微量 | カマド |
| 5 灰黃褐色土 壁・底の溶軟化層 地山主体 | a 黒褐色土 天井部の崩落 焼土粒子・フロック |
| 6 黑褐色土 貯藏穴覆土 黑色土・地山フロック少 | b 黒褐色土 黒色灰層 しまり欠 焼土若干 炭化物 |
| 7 暗褐色土 茶褐色土 烧土 地山フロック少量 | c 暗褐色土 粘質土 |

第51図 第34号住居跡出土遺物



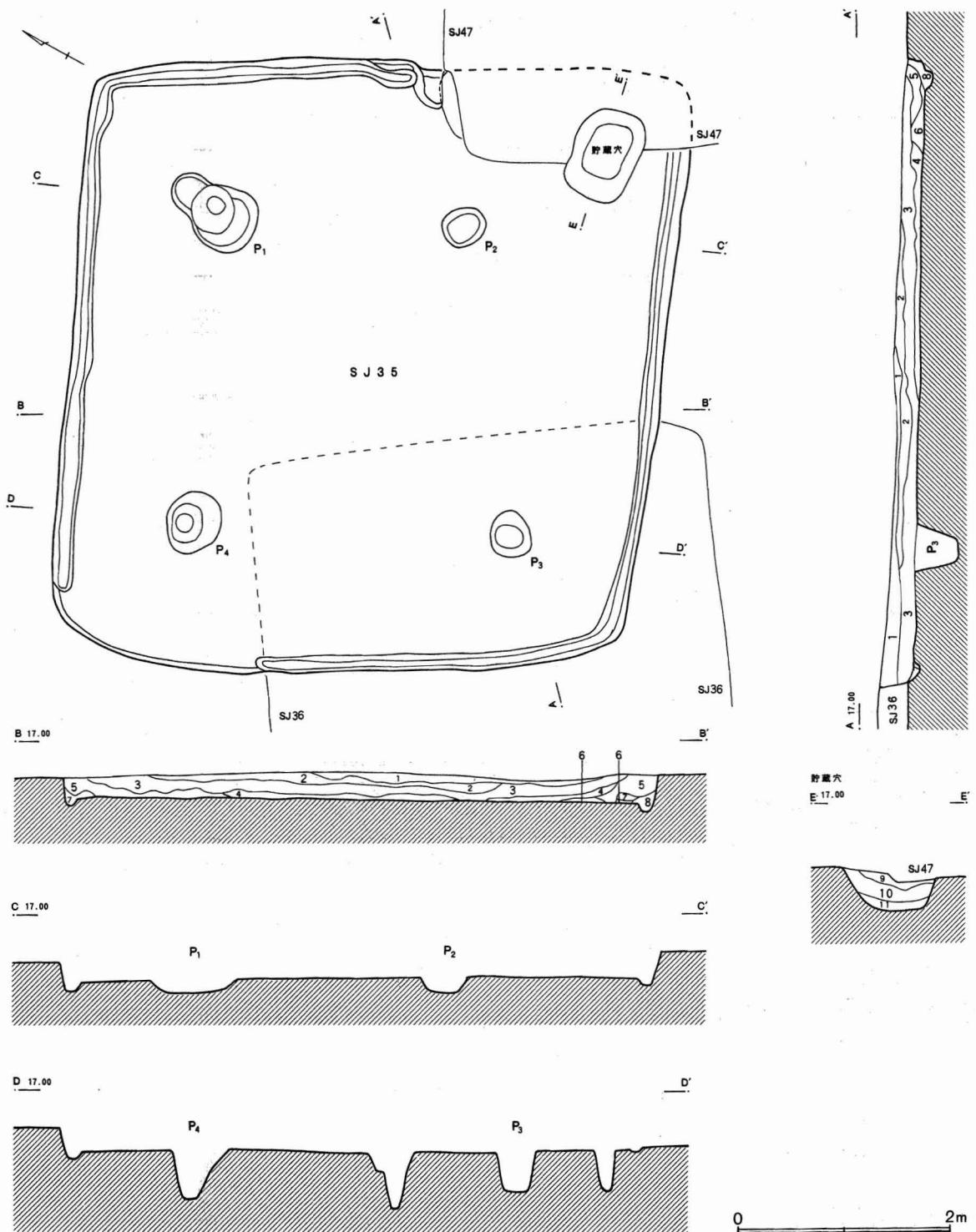
第21表 第34号住居跡出土遺物観察表 (第51図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	(10.6)	5.3		CHI	B	橙	40	
2	椀	11.9	4.9		CI	C	橙	100	内外面赤彩不明瞭
3	椀	(10.6)	(4.8)		CHI	B	橙	10	
4	椀	(12.8)	5.2		ABCBI	B	明赤褐	40	
5	椀	12.9	4.7		CHI	B	橙	90	
6	坏	(15.5)	(4.4)		ABCBI	B	橙	25	
7	坏	12.6	4.6		CHI	C	橙	95	
8	坏	13.6	5.2		BCHI	B	橙	80	
9	坏	(14.6)	4.4		CHI	B	橙	30	
10	坏	(15.4)	4.2		CHIJ	B	橙	40	
11	坏	(14.8)	(4.0)		CHI	A	橙	15	
12	坏	(14.5)	3.9		CHI	B	橙	30	
13	坏	(15.9)	5.1		AHIL	B	浅黄橙	30	
14	坏	17.1	4.5		ABCIJ	B	にぶい赤橙	100	No 2
15	坏	(17.4)	4.0		ABCGHIL	B	橙	20	
16	坏	17.9	4.8		ABCI	B	橙	95	No 2
17	坏	18.9	4.5		ABCHI	B	橙	60	
18	甕	(18.4)	(11.9)		ABCHI	B	にぶい黄橙	10	
19	支脚	4.7	15.4	5.2	CHI	B	明赤褐	100	

・P15・P16・P17・P18・P19・P20・P22・P23・P24
・P25・P26・P27・P28・P29・P30・P31・P32の24
本が検出されている。このなかで、P8・P28・P30

は住居跡コーナー部に位置する。住居跡拡張の基点
となっている南コーナーに位置するP30は二段に掘
り込まれるピットで、P28とP30が拡張前、P8とP

第52図 第35号住居跡



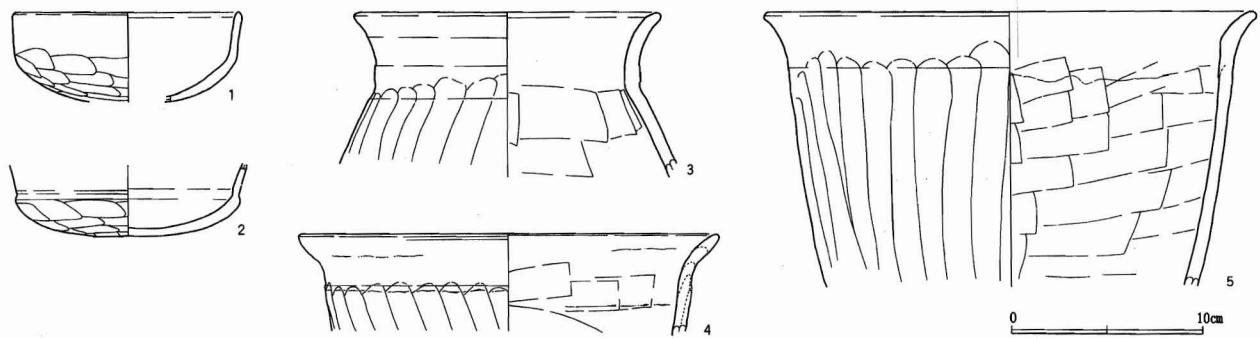
第35号住居跡

- 1 黒褐色土 灰色粘土層 鉄 マンガン
- 2 黒褐色土 しまり強 燃土粒子・炭化物粒子・黄白色地山粒子少
- 3 暗褐色土 地山粒子・フリック多量
- 4 黑褐色土 暗灰色粘質土主体 地山粒子少
- 5 黑褐色土 粘性強 暗色帶 地山粒子・フリック少
- 6 暗褐色土 灰色粘質土
- 7 黄褐色土 黄灰色粘土フリック
- 8 暗褐色土 粘性弱 灰色粘質土少 褐色土主体

貯蔵穴

- 9 黑褐色土 しまり強
燃土粒子・炭化物粒子・黄白色地山粒子少量
- 10 暗褐色土 地山粒子・フリック多量
- 11 黑褐色土 暗灰色粘質土主体 地山少

第53図 第35号住居跡出土遺物



第22表 第35号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(11.7)	(4.6)		CHIJ	B	橙	40	
2	壺		(3.7)		ABHIL	B	浅黄橙	25	風化著しい
3	甕	(15.8)	(8.5)		ABCi	B	橙	15	貯蔵穴
4	甕	(21.7)	(5.1)		ACGHI	B	橙	5	カマド
5	甕	(25.6)	(14.4)		ABCHI	B	橙	20	

30が拡張後のコーナーピットといえる。拡張前後とも炉跡に相対する位置にあり、住居構造上、重要な役割が与えられているものと予想される。P31・P32は住居跡南東壁と重複し、第31号住居跡に付随するピットとして判断できない。ほかの19本のピットの用途・性格は不明である。

遺物は図示したほかに、細片や風化の著しい弥生土器片が出土し、土師器甕・壺片も混入している。

第34号住居跡（第50図）

B-2・3、C-2・3グリッドに位置する。重複する第30・36・68号住居跡よりも新しく、第12号掘立柱建物跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、主軸長5.50m、幅6.05m、確認面からの深さ0.18m、主軸方位N-70°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。いずれの主柱穴も柱は抜き取られているが、P1・P2の底面には柱根を固定したと思われる灰黄色粘質土を混入した黒褐色土が残存している。

壁溝は東壁中央～南壁～西壁～北壁に巡るが、北東・南東・南西・北西の4隅の各コーナー付近で途切れ、またカマドから貯蔵穴にかけても設けられない特徴的な巡り方をしている。幅0.12～0.30m、床

面からの深さ0.8mほどである。

カマドは東壁中央北よりに設置される。燃焼部の天井が崩落した状態で検出され、カマドの中軸は住居跡主軸から北へ振られている。燃焼部は長径1.08m×短径0.49mの平面橢円形で、掘形を暗褐色の粘質土で充填し火床面を形成している。上面には灰層が堆積している。備えられた支脚（19）は土器の焼成方法によって製作した円筒状のもので、上端・下端とも平坦である。カマドによる二次的な被熱を受けているため、表面は脆弱である。

貯蔵穴はカマド北側の北東コーナーに付設される。長径0.74m×短径0.60mの平面橢円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.24mを測る。底面は基本的に平坦であるが、北半部に浅いピット状の掘込みが認められる。底面直上から、完形の壺が伏せた状態で出土している。また西側にP5が接し、貯蔵穴に関連する機能が備わる可能性も考えられる。

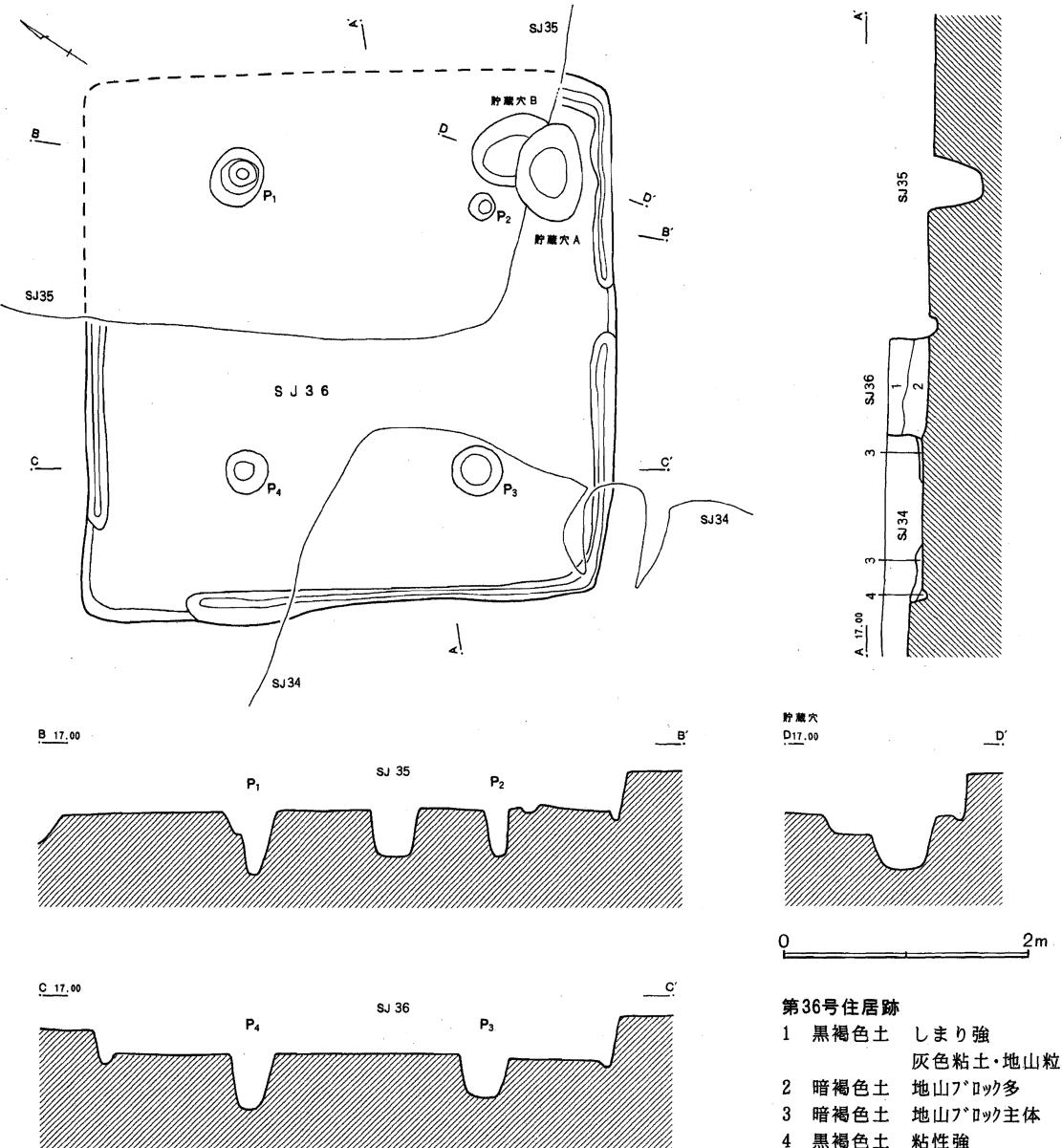
遺物は図示したほかに、土師器甕・甕・高壺・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第35号住居跡（第52図）

C-1・2グリッドに位置する。重複する第47号住居跡よりも古く、第36号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長5.33m、幅5.59m、確

第54図 第36号住居跡



認面からの深さ0.25m、主軸方位N-65°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本である。

壁溝は、西壁北西コーナー付近を除いて、検出範囲では全周する。幅0.12~0.23m、床面からの深さ0.10mほどである。

カマドは東壁中央南よりに設置される。重複する第47号住居跡に掘削され、燃焼部の一部と北側の袖部が検出されているにすぎない。

貯蔵穴はカマド南側の南東コーナーに付設される。長軸長0.89m×短軸長0.62mの平面長方形を呈し、

住居跡床面からの深さは0.36mを測る。底面は平坦で、壁は住居跡壁側（東側）が直立気味に立ち上がり、住居跡内側（西側）は緩やかな立ち上がりとなっている。

ピットは検出されていない。

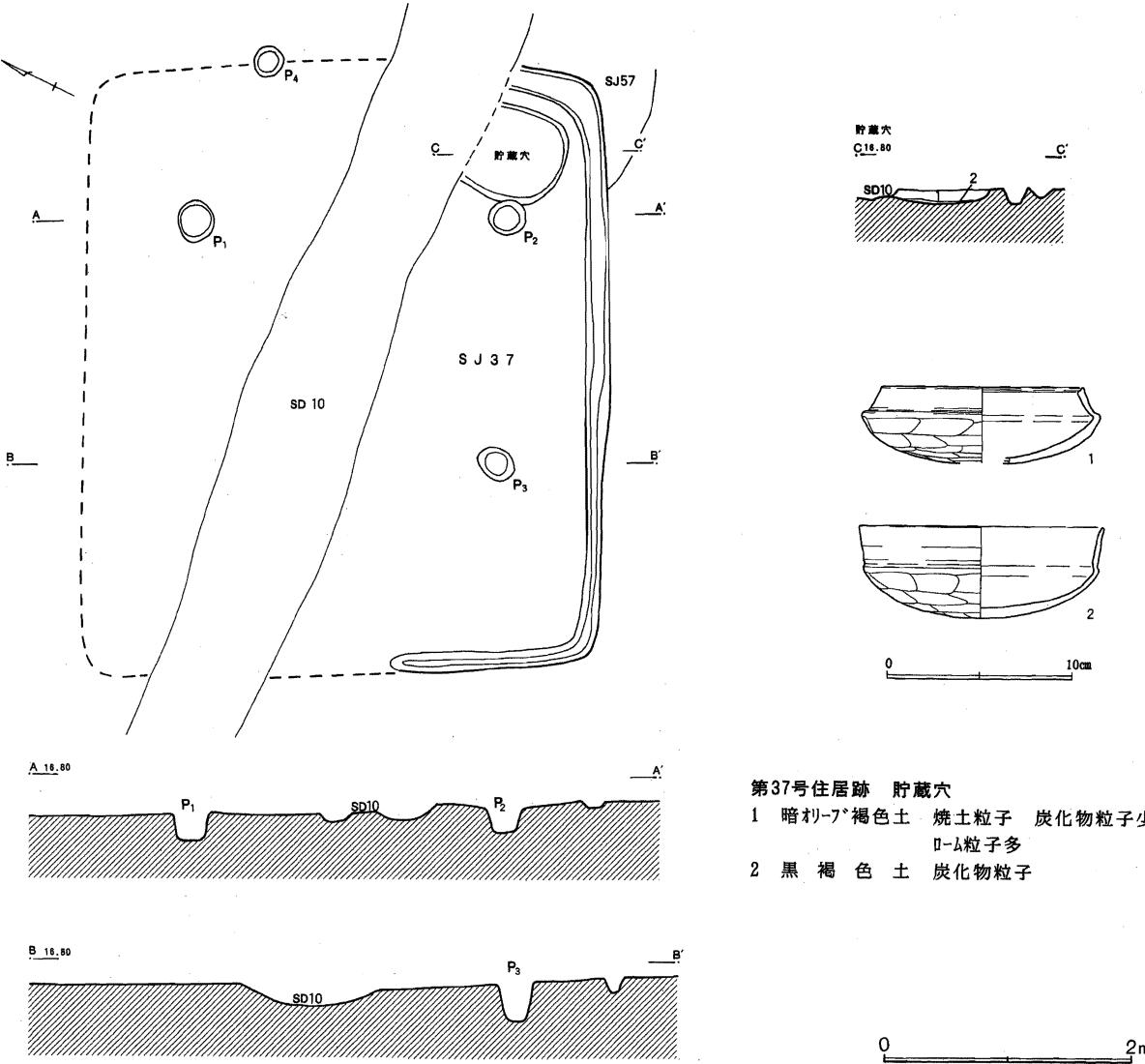
遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・坏片および混入した弥生土器片が出土している。

第36号住居跡（第54図）

B-2、C-2グリッドに位置する。重複する第34・35号住居跡よりも古い。

平面形態は方形であるが、重複する第35号住居跡

第55図 第37号住居跡・出土遺物



第37号住居跡 貯蔵穴

- 1 暗れ-7°褐色土 焼土粒子 炭化物粒子少
口-ム粒子多
2 黒褐色土 炭化物粒子

第23表 第37号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(10.9)	(4.1)		ACHIKL	A	灰褐	30	貯蔵穴 内外面に鉄分付着
2	壺	(13.2)	5.0		ACHIJKL	C	浅黄橙	45	風化著しい

の掘削により、北壁の東半部から東壁は検出されていない。南北長4.45m、東西長4.35m、確認面からの深さ0.34mを測る。南壁の方位はN-58°-Eを指す。埋没状況は人為的に埋め戻された状況を示し、覆土には地山粒子・ブロックが多く含まれている。また3・4層は、第36号住居跡よりも床面標高が高い第34号住居跡の貼床層である。

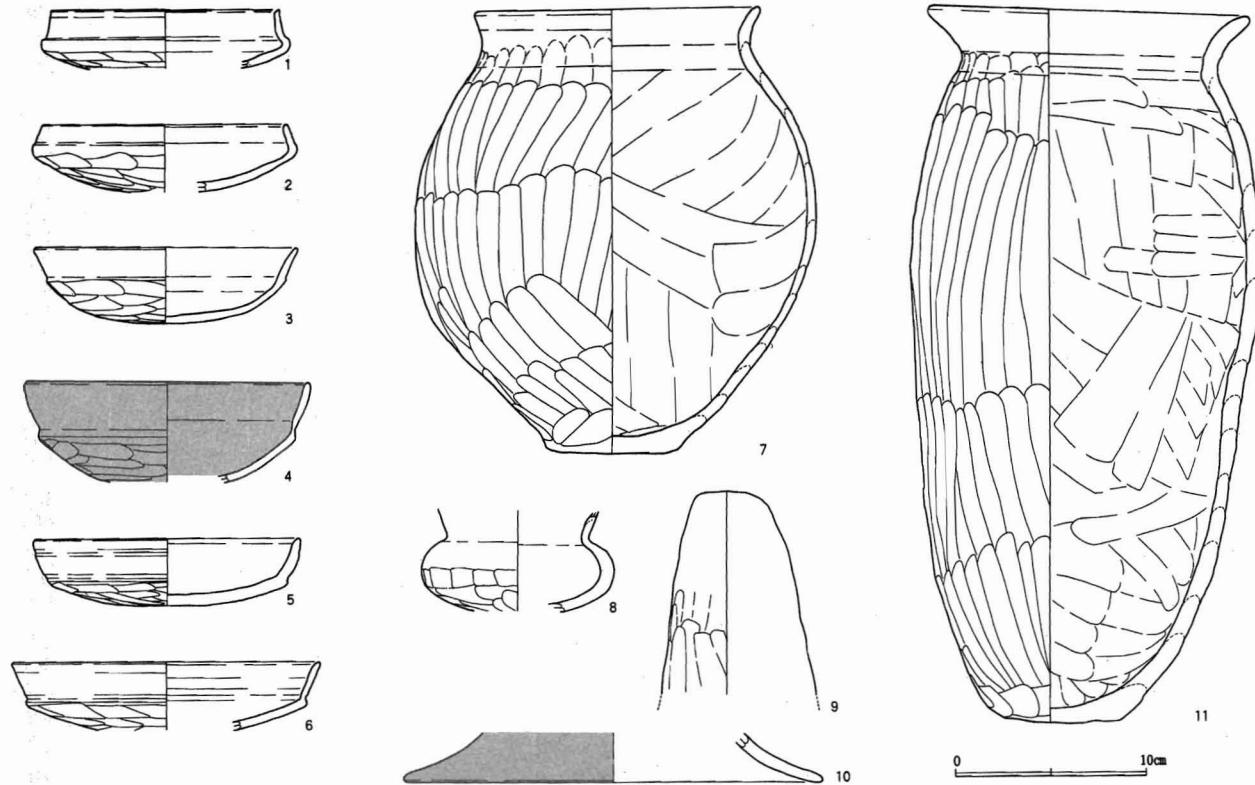
主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。平面規模は小さいが、柱を支え得る充分な深さを有している。

壁溝は、検出範囲では南壁中央部と北西コーナーを除いて全周する。幅0.10~0.28m、床面からの深さ0.09mほどである。

カマドは検出されていない。貯蔵穴との位置関係から、第35号住居跡に掘削された東壁中央付近に設置されていた可能性が高い。

貯蔵穴は重複する2基が南東コーナーに付設される。貯蔵穴Aは長径を東西に向ける平面楕円形で、長径0.82m×短径0.54m、住居跡の床面からの深さ0.44mを測る。貯蔵穴Bは長径を南北に向ける平

第56図 第38号住居跡出土遺物



第24表 第38号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.0)	(3.0)		ACHJK	A	橙	5	カマド
2	壺	(12.8)	(3.5)		ABCH	B	にぶい橙	30	
3	壺	13.8	4.0		ABCBI	B	橙	95	
4	壺	(14.8)	(4.2)		ABCHIL	B	にぶい橙	25	カマド 内外面赤彩
5	壺	(13.8)	3.6		ABCHI	B	橙	35	カマド 内面風化が著しい
6	壺	(16.0)	(3.5)		ABCHK	A	橙	5	
7	甕	14.1	23.3	6.7	ABCHIJL	B	橙	80	
8	ミニチュア		(5.3)		ABCHI	B	橙	20	
9	支脚	2.6	(10.6)		I	B	にぶい黄橙	40	カマド
10	高壺		(2.5)	22.0	ABCHI	B	にぶい黄褐	10	外面赤彩
11	甕	16.3	37.4	6.0	ACHJKL	B	橙	90	カマド

面積円形で、長径0.72m、住居跡の床面からの深さ0.26mを測る。貯蔵穴Aのほうが貯蔵穴Bよりも深いため、図上では全形を表現しているが、両者の新旧関係は不明である。いずれの貯蔵穴も底面は平坦である。

ピットは検出されていない。

遺物は土師器甕・壺片および混入した弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、図示し得ない。

第37号住居跡（第55図）

B-1・2、C-1・2グリッドに位置する。重

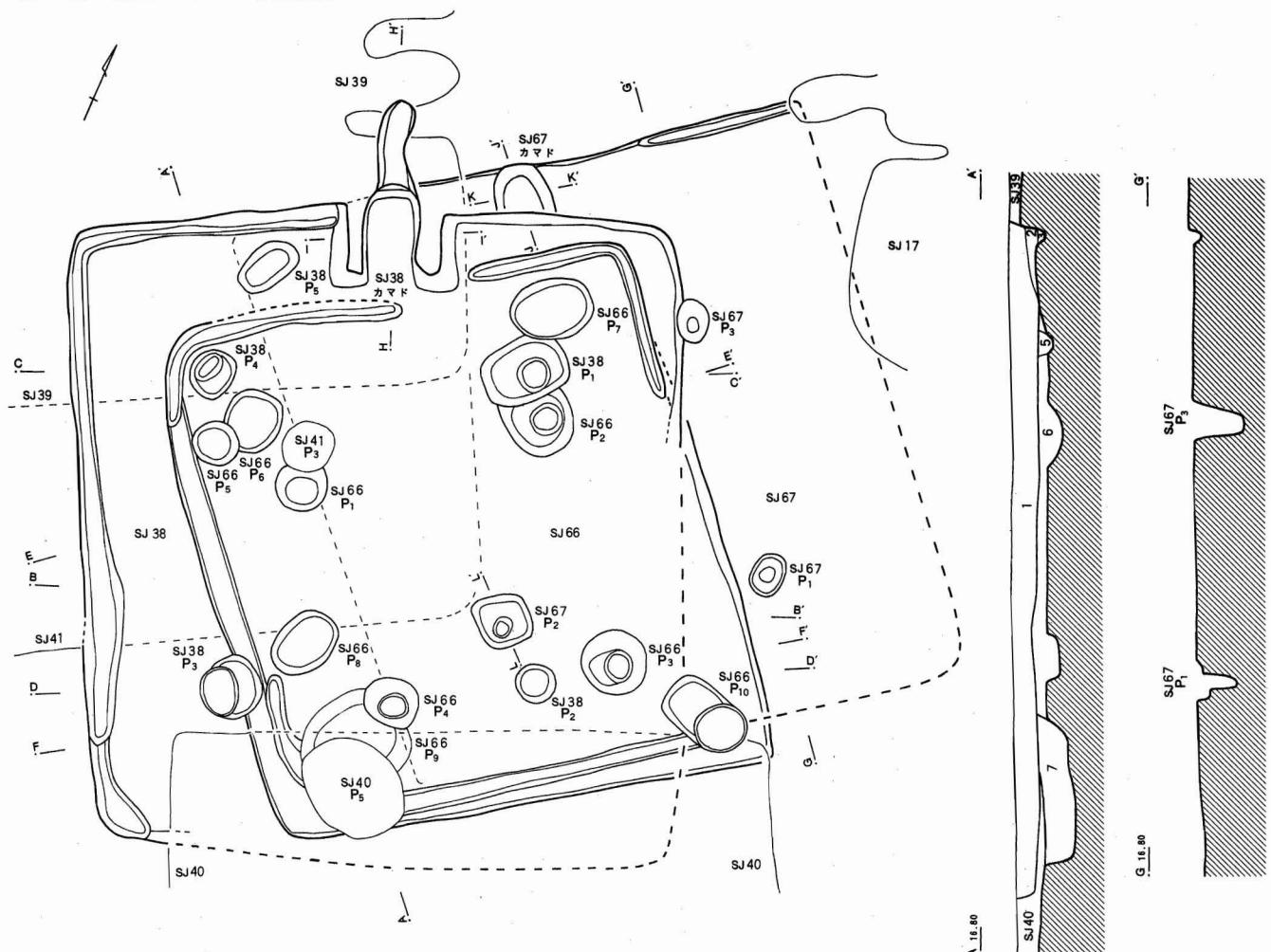
複する第10号溝跡よりも古く、第57号住居跡よりも新しい。

平面形態は長方形で、東西長4.86m、東西軸方位N-63°-Eを測る。遺構確認面で北半部は床面が既に削平され、南半部も床面が露呈していた。

主柱穴はP1・P2・P3の3本である。残る1本は第10号溝跡によって掘削されているものと推定される。

壁溝は住居跡南半部の東壁南東コーナー～南壁～西壁南3分の1付近に検出されている。幅0.12～0.24m、床面からの深さ0.13mほどである。

第57図 第38・66・67号住居跡



第38号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土・地山粒子多量
- 2 黒褐色土 焼土粒子・地山粒子多
- 3 黒褐色土 地山フロック多
- 4 黄灰色土 地山フロック多

カマド

- a 黒褐色土 焼土粒子・地山粒子少量
- b 黒褐色土 焼土フロック
地山フロック(Φ50mm以下)
- c 黑褐色土 烧土粒子・地山粒子少量
- d 黑褐色土 烧土粒子・フロック多量

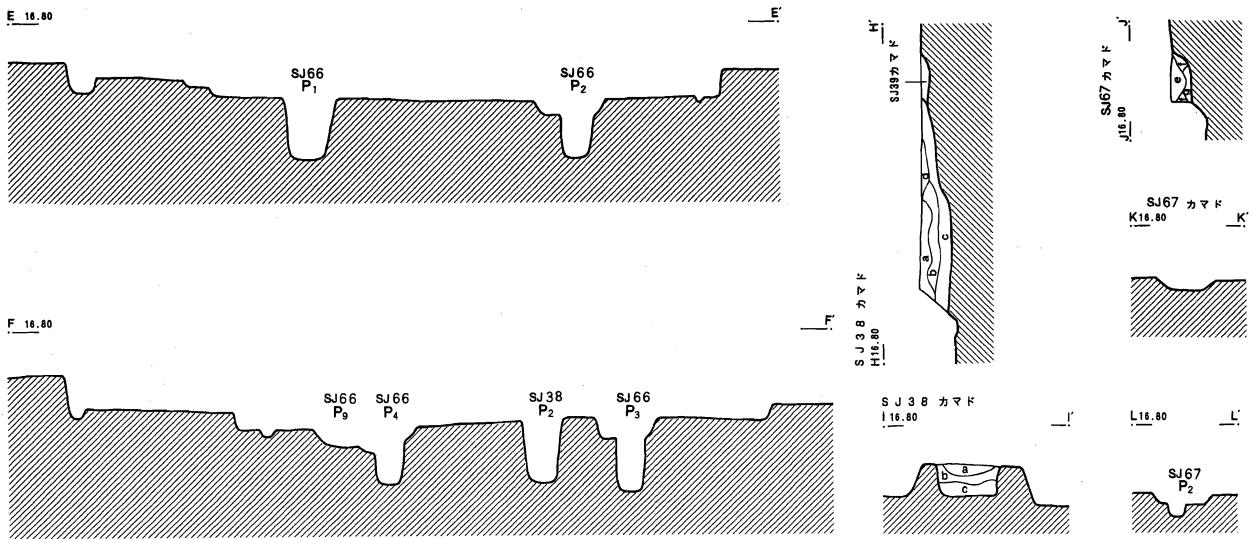
第66号住居跡

- 5 黒褐色土 地山フロック少量
- 6 黑褐色土 地山フロック多
- 7 黄灰色土 地山フロック多
- 8 オリーブ褐色土 地山フロック多量

第67号住居跡

- カマド
- e 黑褐色土 烧土フロック・粒子多
 - f 黄灰色土 地山粒子多
 - g 黑褐色土 烧土粒子少 地山粒子少量

0 2m



カマドは検出されていない。貯蔵穴との位置関係から、東壁中央付近の第10号溝跡重複箇所もしくは北半の削平部分に設置されていた可能性が高い。

貯蔵穴は南東コーナーに付設される。北側を第10号溝跡によって掘削されているため、平面規模は明らかにできない。短径0.78mの平面橢円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.12mを測る。底面は緩やかな窪みをもち、直上には炭化物粒子を含む黒褐色土が薄く堆積している。

ピットはP4が検出されているが、用途・性格および住居との関連については不明である。

遺物は図示したほかに、土師器甕・壺片が出土している。

第38号住居跡（第57図）

D-3グリッドに位置する。重複する第39・40・41・66・67号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長5.26m、幅5.10m、確認面からの深さ0.27m、主軸方位N-26°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。いずれも住居跡床面からの深さ0.45m前後を測る。

壁溝は南西コーナー～西壁～北壁西半部に検出されている。幅0.13～0.33m、床面からの深さ0.10mほどである。

カマドは北壁中央に設置される。煙道部は長さ0.68m、幅0.27mで、緩やかに立ち上がる。燃焼部は長軸長0.85m×短軸長0.46mの平面長方形で、灰層・炭化物はみられない。燃焼部から煙道部へ繋がる箇所の上層に堆積するd層は、カマド天井部の被熱を受けた内壁の一部が残存している。火床面は僅かに窪み、黄灰色粘土によって造り付けられた支脚が備えられている。支脚(9)は上半部がカマドの被熱によって脆弱ではあるが焼き上がり、下半が粘土状態のままで検出されている。

貯蔵穴は検出されていないが、カマド西脇のP5が貯蔵穴と捉えられるかもしれない。長径0.55m×短径0.32mの平面橢円形を呈する。

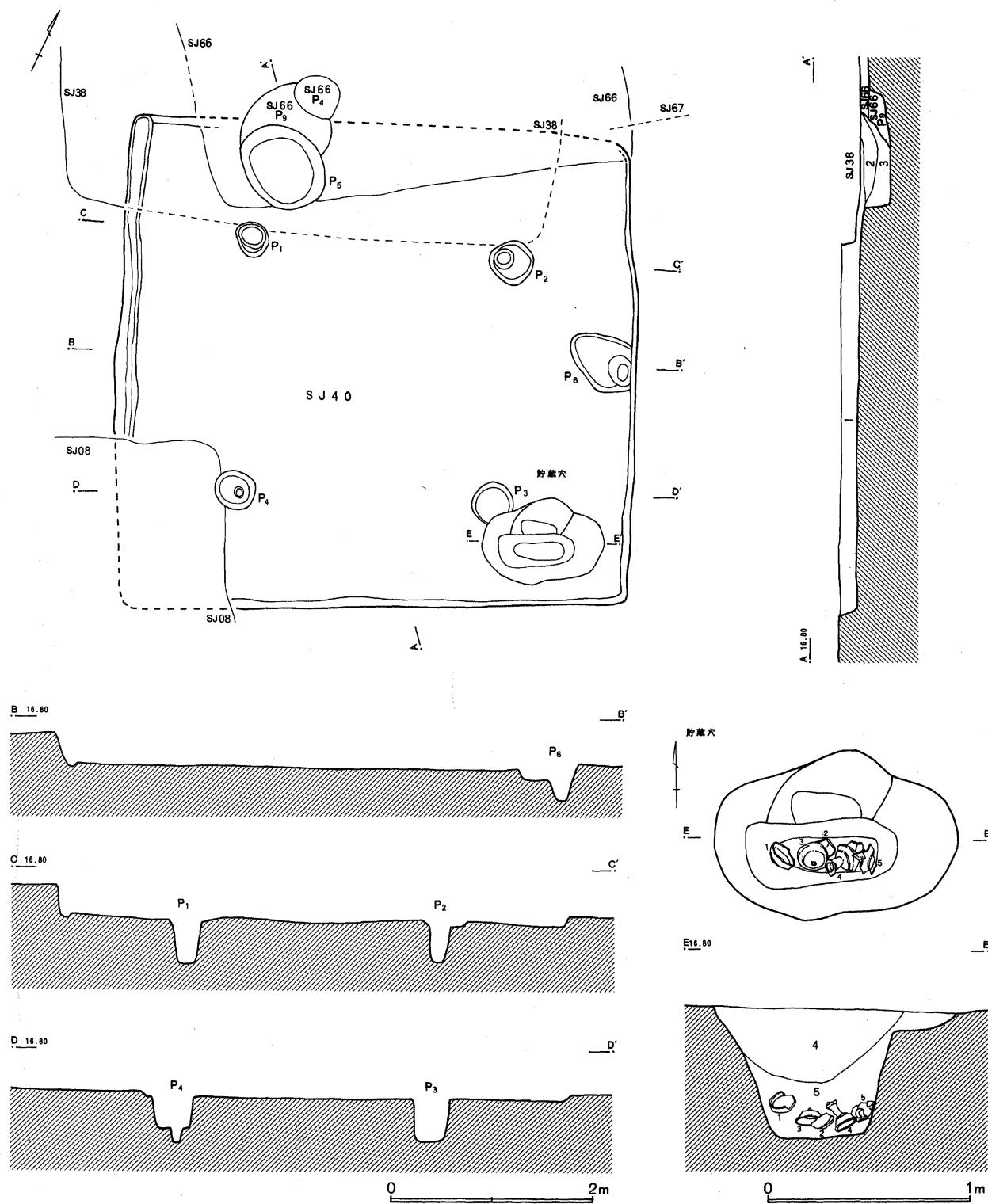
遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・鉢・高壺・椀・壺片、須恵器蓋片、および混入した弥生土器片が出土している。

第66号住居跡（第57図）

D-3グリッドに位置する。重複する第38・40号住居跡よりも古く、第39・41・67号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、南北長4.60m、東西長4.30m、確認面からの深さ0.35m、南北軸方位N-39°-Wを測る。埋没状況は、人為的に埋め戻された可能性が高い。

第58図 第40号住居跡



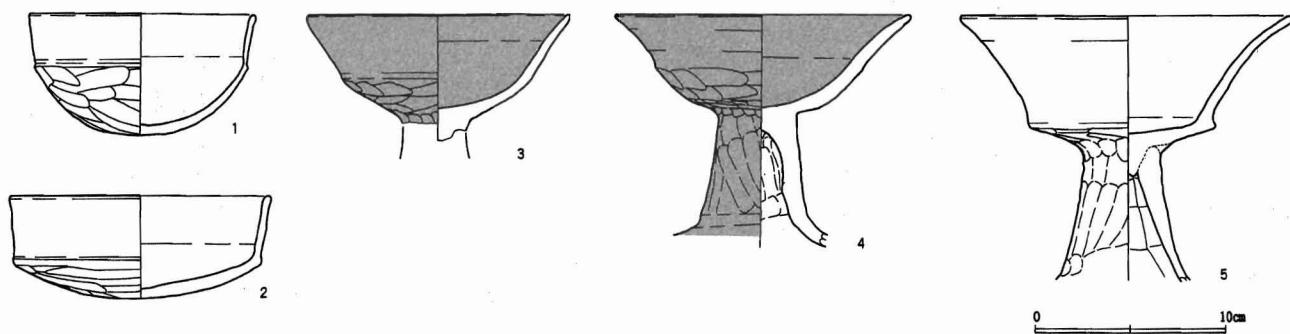
第40号住居跡

- 1 暗灰黄色土 地山ブロック(Φ20mm以下)多
- 2 黄褐色土 烧土ブロック少 声山ブロック(Φ30mm前後)多
- 3 柿-7褐色土 烧土ブロック(Φ20mm前後)多 地山ブロック

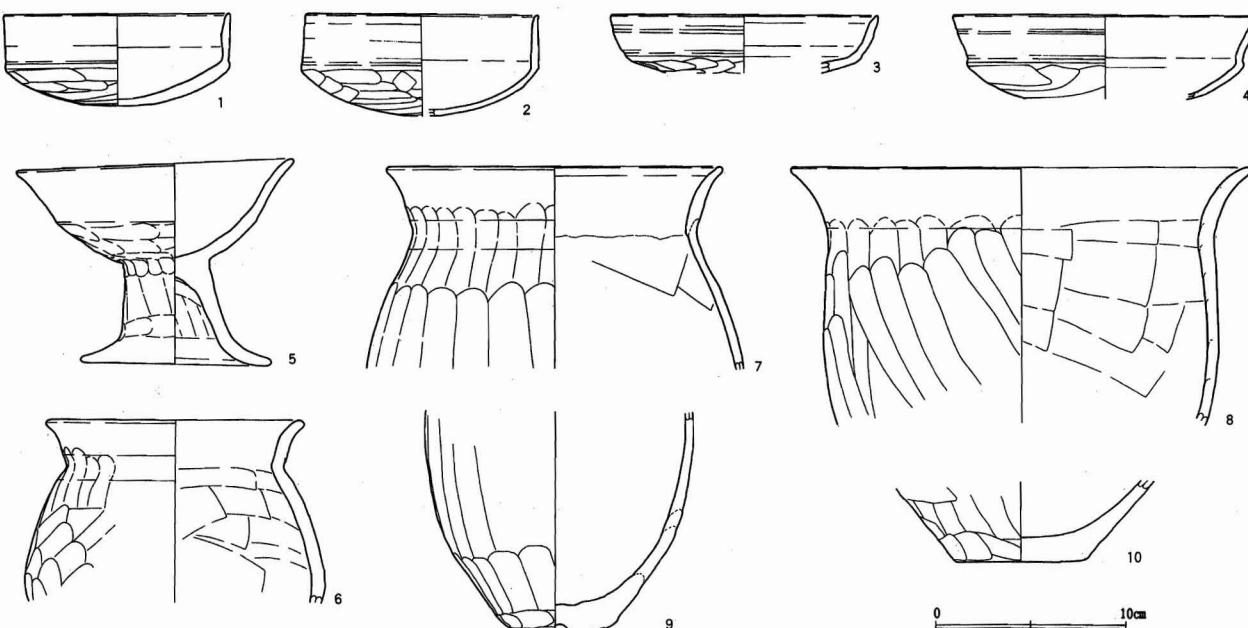
貯蔵穴

- 4 暗灰褐色土 しまり・粘性強 地山ブロック若干 烧土ブロック少
- 5 暗灰褐色土 しまり・粘性強 地山ブロック多

第59図 第40号住居跡出土遺物



第60図 第38・40号住居跡出土遺物



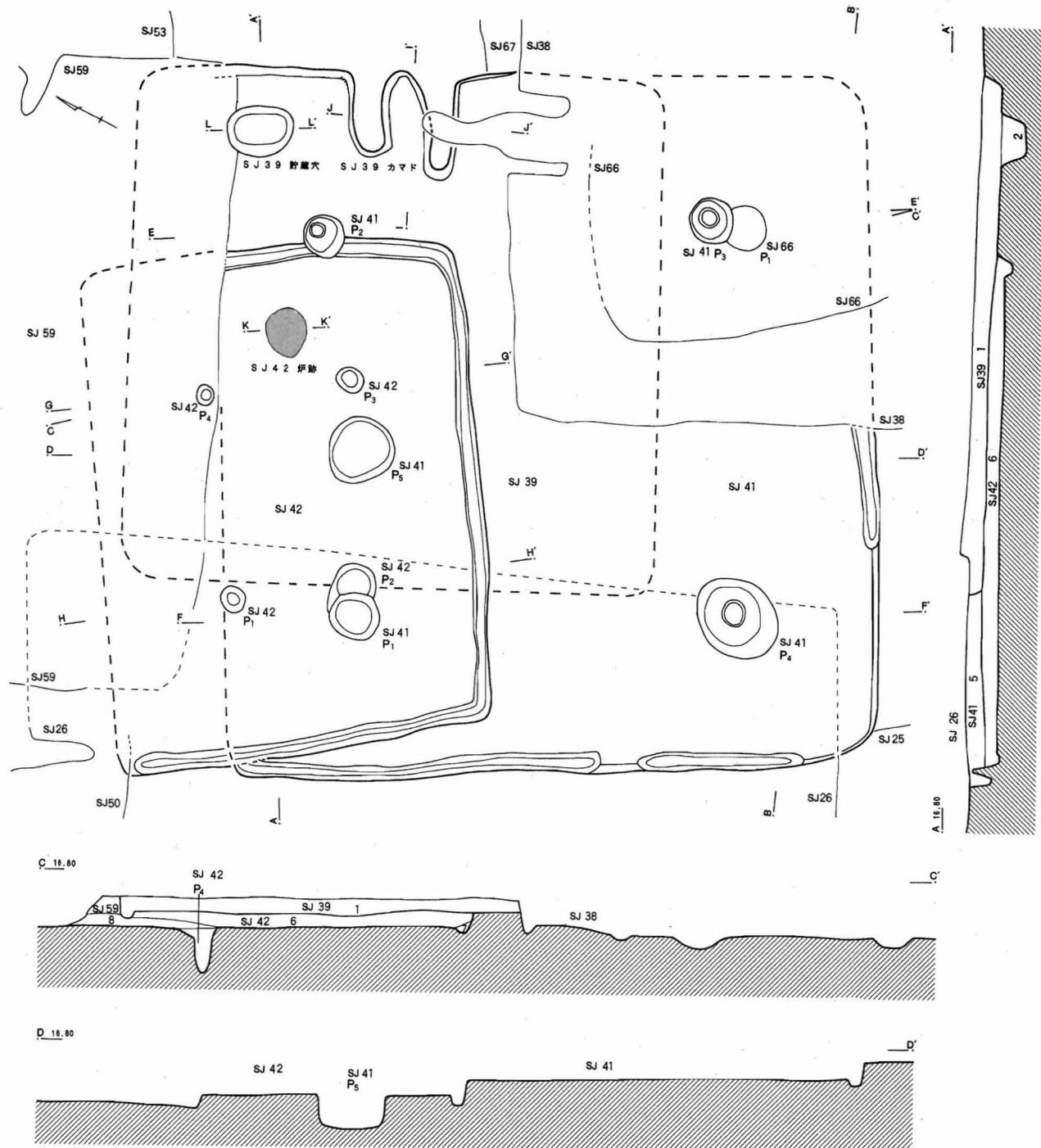
第25表 第40号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	11.7	6.3		ABCHI	B	明赤褐	80	貯藏穴No.1
2	壺	13.5	5.3		ABCHI	B	明褐	90	貯藏穴No.3
3	高壺	13.7	(6.5)		ABCHI	C	にぶい黄橙	60	貯藏穴No.2 内外面赤彩不明瞭
4	高壺	15.3	(12.1)		BCHIJ	B	にぶい橙	80	貯藏穴No.4 内外面赤彩
5	高壺	17.2	(13.2)		ABCHIJL	B	にぶい橙	80	貯藏穴No.6・7

第26表 第38・40号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(11.8)	4.8		ABCHI	B	橙	35	
2	壺	12.3	(5.4)		HI	B	にぶい橙	90	
3	壺	(14.0)	(3.0)		ACHJKL	C	橙	15	
4	壺	(15.8)	(4.4)		ACEHJK	B	橙	10	
5	高壺	14.4	10.9	9.3	ABCHIJL	B	橙	95	
6	小型甕	(13.2)	(9.6)		ABCI	B	赤褐	15	
7	甕	(17.4)	(10.6)		AHKL	B	にぶい黄橙	15	
8	甕	(24.0)	(13.6)		ABCI	B	橙	10	
9	甕		(11.4)	5.1	ABCEHI	B	明褐	10	内面ナデ調整単位不明瞭
10	甕		(4.1)	6.8	ABCHI	A	明褐	10	

第61図 第39・41・42号住居跡・出土遺物



第39号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多 地山ブロック(Φ20mm前後)多
貯蔵穴

2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微 地山ブロック(Φ20mm前後)多
カマド

a 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子(Φ3mm前後)多

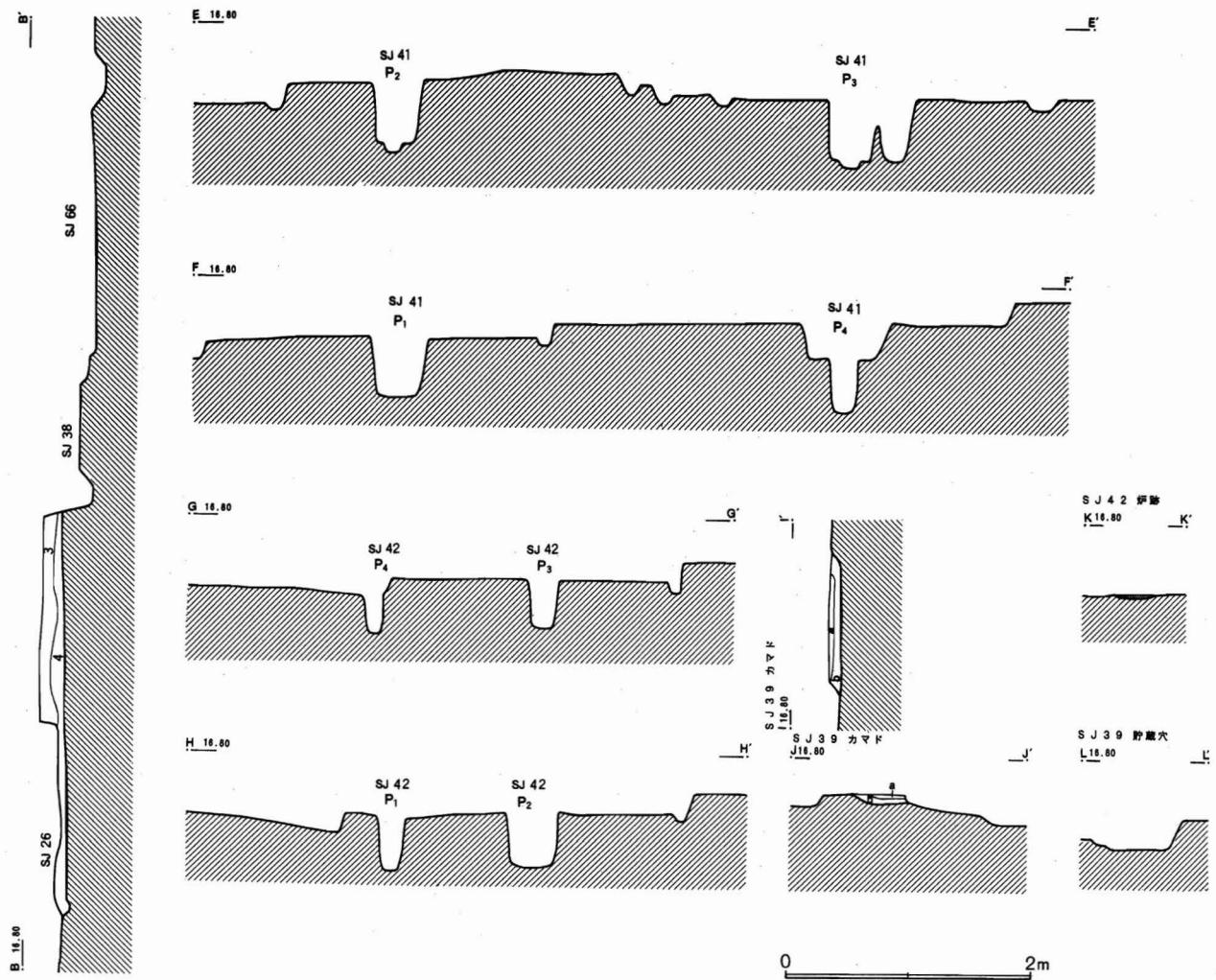
b 黒褐色土 地山粒子多

第41号住民跡

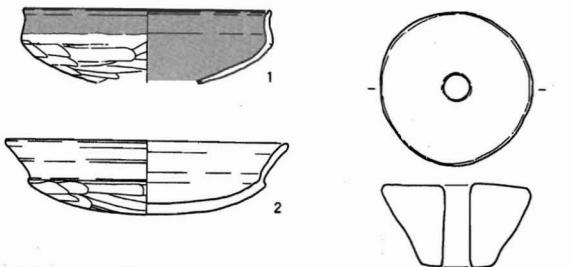
- 第41号 住居跡
 3 黒褐色土 地山粒子多量
 4 黒褐色土 地山⁷ロック
 5 黒褐色土 地山⁷ロック(φ100mm前後)多量

第42号住居跡

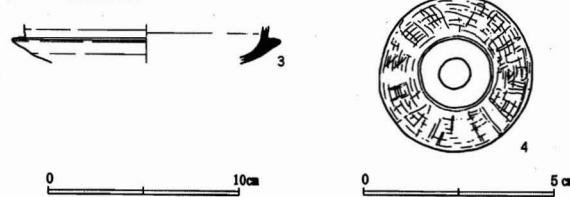
- 6 黄灰色土 烧土粒子・炭化物粒子少量 地山ブロック少量
 7 褐色土 壁溝底 溶軟化層
 8 褐色土 粘質 地山ブロック



第39・42号住居跡



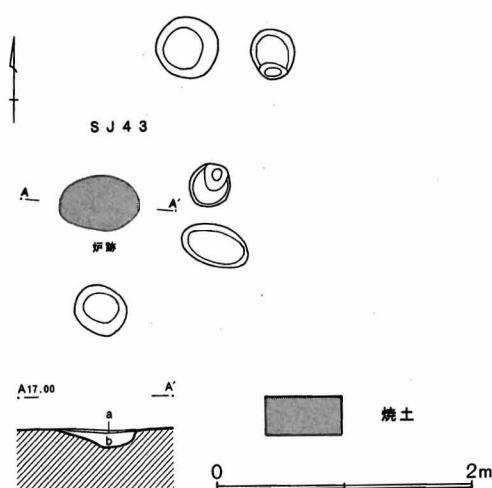
第41号住居跡



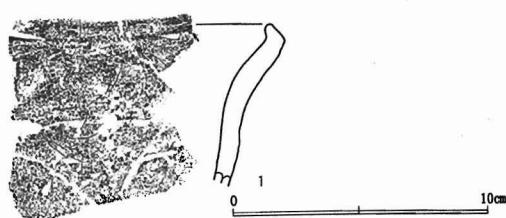
第27表 第39・41・42号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.8)	(3.8)		ABC1	A	にぶい橙	20	SJ39・42 内面・口縁部外面赤彩
2	壺	(14.7)	4.4		ABC1	B	にぶい黄褐	40	SJ39・42
3	壺		(1.9)		ABCH	A	灰	5	SJ41 P3

第62図 第43号住居跡・出土遺物



第43号住居跡 炉跡
a 暗灰黄色土 焼土ブロック 灰層
b 黄灰色土 焼土粒子少 マカラン



主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本で、いずれも深い掘込みを有する。

壁溝は北壁・南壁を中心に巡る。幅0.08~0.24m、床面からの深さ0.03mほどである。

カマドは検出されていない。北壁中央付近の壁溝が途切れる状況や重複する第39・67号住居跡の設置位置と比較すると、北壁中央に設置されていた可能性が高い。

貯蔵穴は検出されていない。カマドの設置位置を北壁中央に仮定すれば、北東コーナーのP7が貯蔵穴と捉えることもできる。長径0.68m×短径0.49mの平面橿円形である。P7のほかに、P7に相対する位置の南西コーナーのP9も貯蔵穴の候補としてあげられる。

ピットはP5・P6・P8・P10の4本が検出されている。P5・P6・P8は西壁際に、P10は南東コーナーに位置している。用途・性格については不明である。

遺物は土師器甕・壺片および混入した弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、図示し得ない。

第67号住居跡（第57図）

D-3グリッドに位置し、他の遺構との重複が著しい。第17・38号住居跡よりも古いため、第39・40・41・66号住居跡との新旧関係は明確ではない。また他の遺構と重複しない住居跡東半部は、既に遺構確認面で床面が削平されている。

平面形態は方形であるが、平面規模は不明である。主軸方位N-41°-Wを測る。

主柱穴はP1・P2・P3の3本である。

壁溝は北壁東半の一部に検出され、幅0.10~0.12m、床面からの深さ0.06mほどである。

カマドは北壁中央付近に設置される。重複する第38号住居跡に掘削されているため、燃焼部の北半部のみが検出されている。

貯蔵穴・ピットは検出されていない。

遺物は土師器甕・壺片および混入した弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、図示し得ない。

第40号住居跡（第58図）

D-3・4、E-3・4グリッドに位置する。重複する第8・38号住居跡よりも古く、第66号住居跡よりも新しい。第67号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、南北長は推定4.87m、東西長5.14m、確認面からの深さ0.17m、南北軸方位N-26°-Wを測る。埋没状況は人為的に埋め戻されたものと思われる。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。

壁溝は西壁に巡り、幅0.16~0.22m、床面からの深さ0.05mほどである。

カマドは検出されていないが、第38号住居跡に掘削された北壁に設置されていたことが予想される。

貯蔵穴は南東コーナーに付設される。長径1.22m×短径0.82mの平面不整橿円形を呈し、住居跡床

面からの深さは0.86mを測る。底面は平坦で、下層部から完形度の高い土師器壺・高壺が出土している。

ピットはP5・P6の2本が検出されている。P5は北壁によった位置にあり、貯蔵穴もしくはカマド燃焼部の掘形である可能性がある。P6は東壁際に位置し、出入り口施設に関連する機能が想定される。

遺物は図示したほかに、土師器甕・甌・椀・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第39号住居跡（第61図）

C-3、D-3グリッドに位置する。重複する第26・38号住居跡よりも古く、第41・42・53・59号住居跡よりも新しい。第66・67号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形であるが、東壁中央付近を除く壁は確認されていない。土層断面から主軸長4.96mと推定され、確認面からの深さ0.18m、主軸方位N-66°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴・壁溝は検出されていない。

カマドは東壁中央付近に設置され、一部を重複する第38号住居跡カマド煙道によって掘削されている。袖部は、北側が0.78m、南側が0.97mの長さを測り異なる。燃焼部は長径0.90m×短径0.46mの平面楕円形で、火床面は住居跡床面と同一高である。

貯蔵穴はカマド北側の北東コーナー付近に付設される。長径0.64m×短径0.50mの平面楕円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.24mを測る。底面は平坦である。

ピットは検出されていない。

図示した遺物は第39・42号住居跡一括遺物で、ほかに土師器甕・壺片が出土している。

第41号住居跡（第61図）

C-3、D-3グリッドに位置する。重複する第26・38・39号住居跡よりも古く、第42号住居跡よりも新しい。第25・59・66・67号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形であるが、南壁西半～西壁が検出

されているにすぎず、平面規模は不明である。南北長は最長6.35mで、確認面からの深さは0.16mを測る。埋没状況から、人為的に埋め戻された状況が窺われる。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。いずれもしっかりととした深さを有し、P2・P3の底面には柱の痕跡がみられる。

壁溝は南壁中央付近と西壁に検出されている。幅0.13～0.18m、床面からの深さ0.08mほどである。

カマド・貯蔵穴は検出されていない。

ピットはP5が検出されているが、主柱穴P1・P2の中間に位置し、補助的な柱穴の機能も想定される。

図示した遺物のなかで、4は滑石製紡錘車である。上径4.0cm、下径2.0cm、厚さ2.2cm、孔径0.7cm、重量43.49gを測る。ほかに、土師器甕・甌・鉢・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第42号住居跡（第61図）

C-3、D-3グリッドに位置する。重複する第26・39・41・59号住居跡よりも古い。

平面形態は主柱穴の配列から長方形と推定されるが、短軸長は不明である。長軸長4.88m、確認面からの深さ0.36m、長軸方位N-58°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本で、長軸のP1-P4・P2-P3の柱間が1.95m、短軸のP1-P2・P4-P3の柱間が1.40mを測る長方形に配列されている。

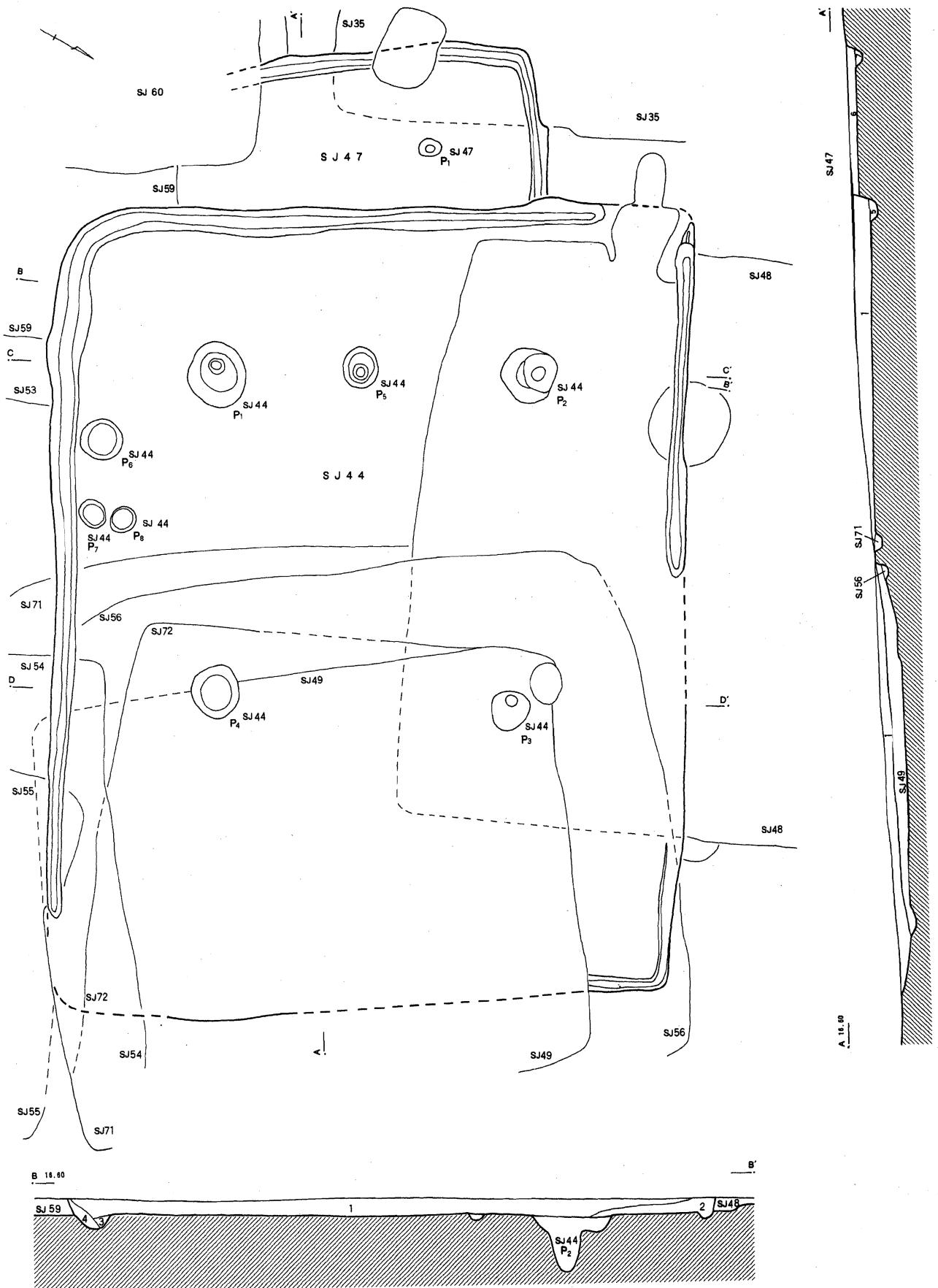
壁溝は検出範囲には全周し、幅0.12～0.18m、住居跡床面からの深さ0.09mほどである。

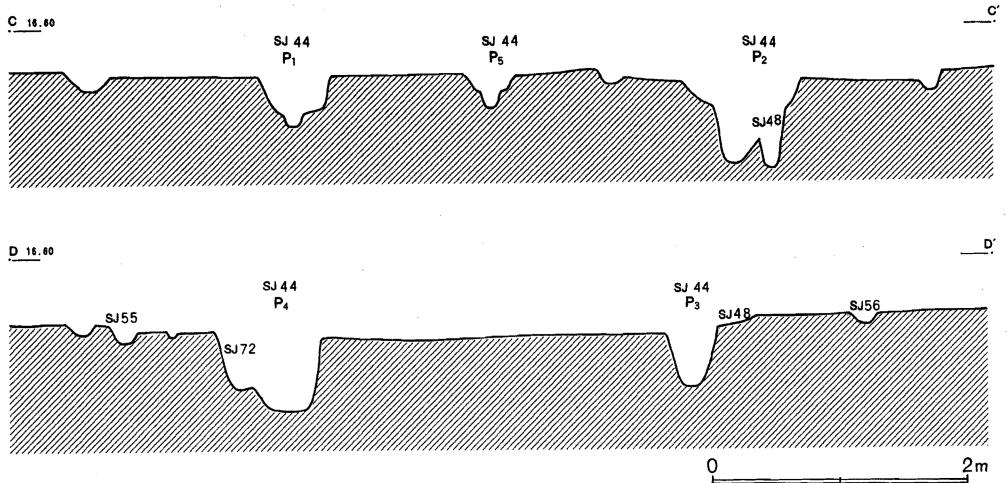
厨房施設には地床炉が設けられ、主柱穴P4-P3列より外側に位置している。東西0.47m×南北0.40mの平面円形に焼土の広がりが認められる。

貯蔵穴・ピットは検出されていない。

遺物は細片や風化が著しい弥生土器片が出土し、土師器甕・壺片も混入しているが、いずれも微細な破片であり、図示し得ない。

第63図 第44・47号住居跡





第44号住居跡

- 1 黒褐色土 しまり・粘性強 焼土・地山粒子少量 炭化物多
- 2 黒褐色土 地山フロック(Φ30mm前後)多
- 3 黒褐色土 地山フロック(Φ30mm前後)
- 4 黒褐色土 地山フロック
- 5 暗灰褐色土 しまり・粘性強 地山フロック多量

第47号住居跡

- 6 暗灰褐色土 しまり・粘性強 烧土粒子少 地山フロック若干
- 7 暗灰褐色土 しまり・粘性強 烧土粒子少 地山フロック多

第43号住居跡（第62図）

B-2グリッドに位置し、遺構確認面で、炉跡のみが検出されている。周囲にはピットが存在するが、第43号住居跡の主柱穴となる組み合わせは把握されていない。そのため、平面形態・規模、壁溝・貯蔵穴・ピットの有無等は不明である。

炉跡は地床炉で、東西0.63m×南北0.43mの平面橢円形に焼土化している。火床面は僅かな窪みをもち、灰層が形成されている。掘形には焼土粒跡を少量含む黄灰色土が充填されている。

遺物は図示したほかに、細片や風化が著しい弥生土器片が出土し、土師器甕・壺片も混入しているが、遺物量はきわめて少ない。

第44号住居跡（第63図）

C-1・2、D-1・2グリッドに位置する。重複する第47・48・49・53・54・55・56・59・71・72号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、長軸長8.52m、短軸長6.86m、確認面からの深さ0.19m、長軸方位N-118°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。西側のP1-P2列と西壁の距離と、東側P4-P3列

と東壁の距離の差が大きい。

壁溝は北壁西半部、北東コーナー付近、南壁～西壁に検出されている。幅0.13～0.42m、床面からの深さ0.16mほどである。

カマド・貯蔵穴は検出されていない。しかし、カマドは壁が検出できなかった北壁中央付近に設置されていた可能性が高い。

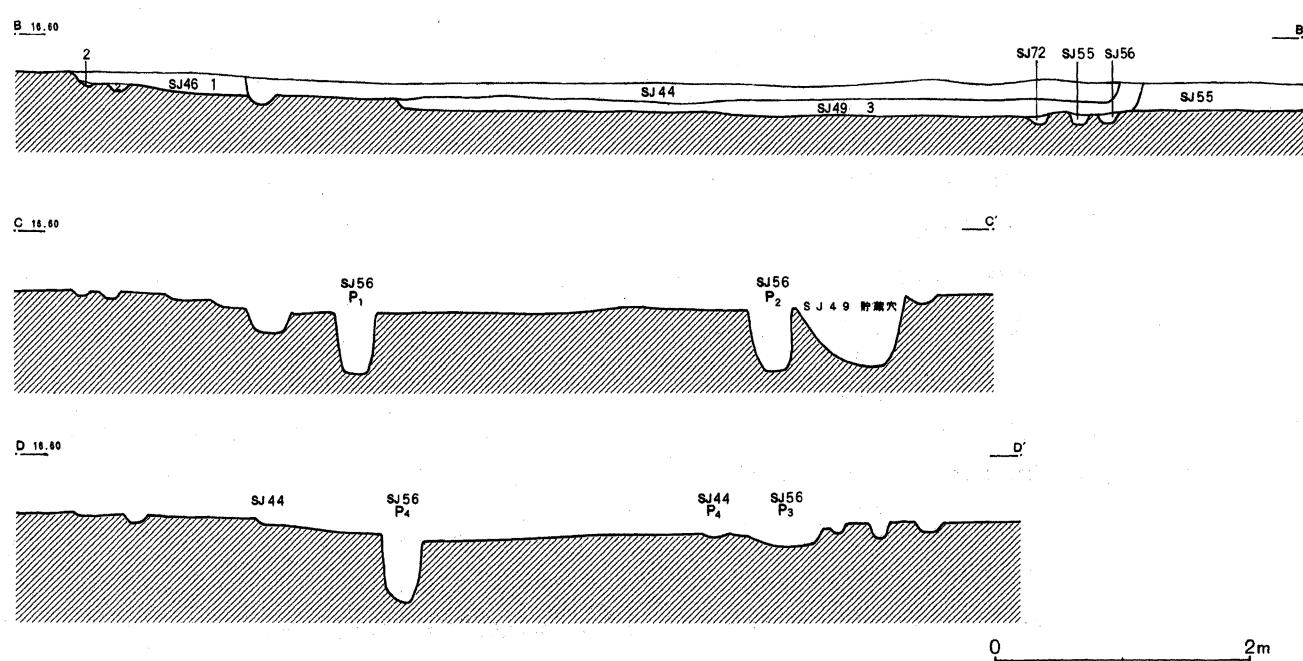
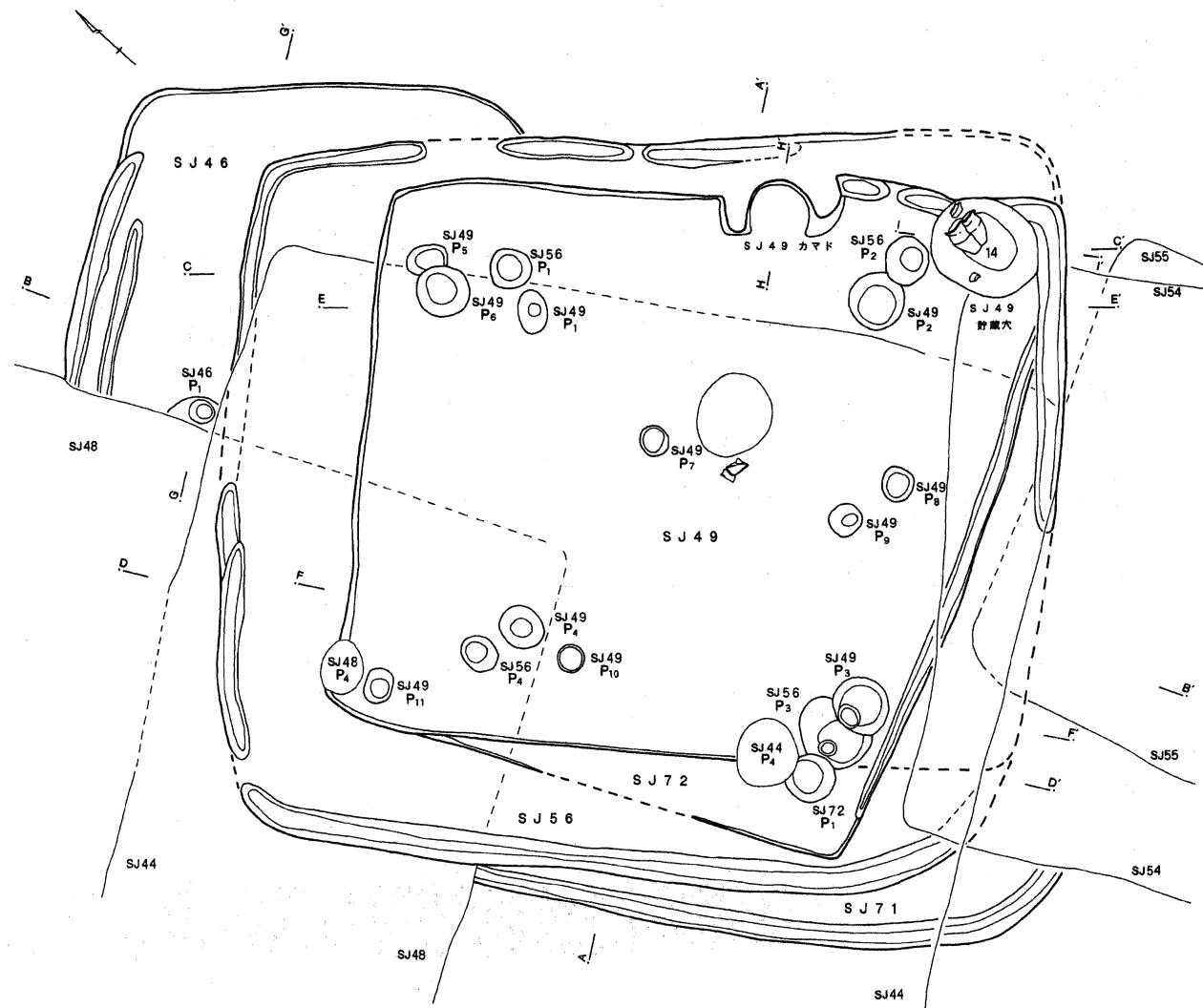
ピットはP5・P6・P7・P8の4本が検出されている。P5は主柱穴P1・P2の中間に位置し、補助的な柱穴機能も想定される。P6・P7・P8は想定されるカマド位置に相対する南壁際にあり、出入り口施設に関連する機能が想起させられる。

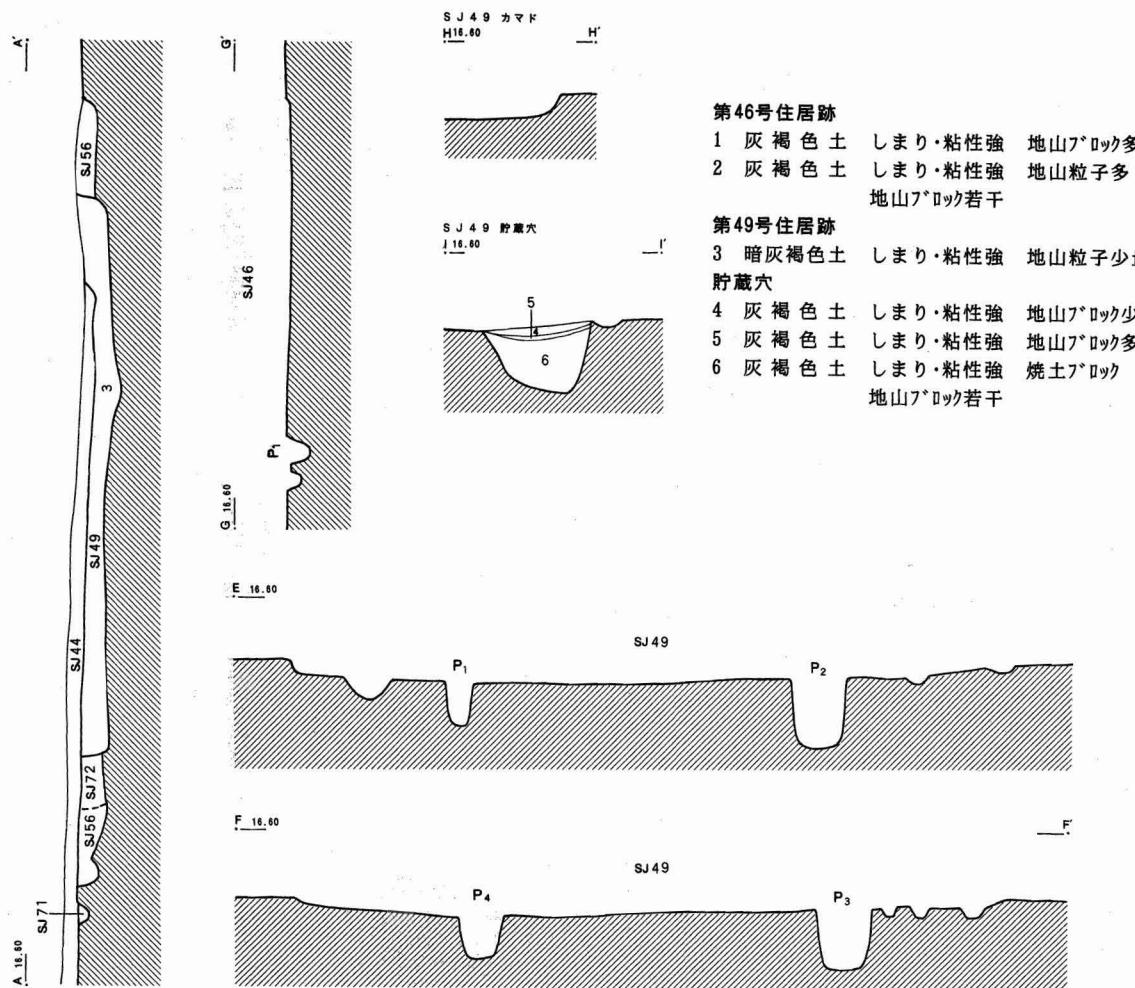
第65図に図示した遺物は1～4が第44号住居跡、15～18が第44・49・56号住居跡一括遺物である。4は滑石製臼玉で、径1.3cm、厚さ0.7cm、孔径0.25cm、重さ1.82gを測る大型品である。ほかに、土師器甕・高壺・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第47号住居跡（第63図）

C-2グリッドに位置する。重複する第44号住居跡よりも古く、第35・60号住居跡よりも新しい。第48・59号住居跡との新旧関係は明確ではない。第44

第64図 第46・49・56・71・72号住居跡





号住居跡に東半部が掘削され、また他の遺構との重複が著しいため、北壁北西コーナー付近～西壁の一部が検出されているにすぎない。

平面形態は方形で、平面規模は不明である。確認面からの深さ0.08m、南北軸方位N-30°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1の1本のみが確認されている。

壁溝は検出範囲で全周し、幅0.13～0.24m、床面からの深さ0.08mほどである。

カマド・貯蔵穴・ピットは検出されていない。

第65図に図示した遺物のほかに、土師器甕・鉢・片壊および混入した弥生土器片が出土している。

第46号住居跡（第64図）

D-1グリッドに位置し、第44・48号住居跡よりも古い。重複する第56号住居跡との新旧関係は土層

第46号住居跡

- | | | |
|---------|---------|-------------------------|
| 1 灰褐色土 | しまり・粘性強 | 地山ブロック多量 |
| 2 灰褐色土 | しまり・粘性強 | 地山粒子多
地山ブロック若干 |
| 貯蔵穴 | | |
| 3 暗灰褐色土 | しまり・粘性強 | 地山粒子少量 |
| 4 灰褐色土 | しまり・粘性強 | 地山ブロック少量 |
| 5 灰褐色土 | しまり・粘性強 | 地山ブロック多量 |
| 6 灰褐色土 | しまり・粘性強 | 焼土ブロック 砂粒少量
地山ブロック若干 |

SJ 49

SJ 49

SJ 49

の堆積状況によって捉えることはできなかったが、出土遺物から第46号住居跡が先行する。

平面形態は方形であるが、平面規模は不明である。南北長3.8m程度の小規模な住居跡で、確認面からの深さ0.22mを測る。埋没状況は人為的に埋め戻された状況を示す。

主柱穴・炉跡・貯蔵穴は検出されていない。壁溝は北壁に沿って二重に検出され、第46号住居跡の拡張を物語る。幅0.10～0.20m、床面からの深さ0.07mほどである。ピットはP1が検出されているが、用途・性格は不明である。

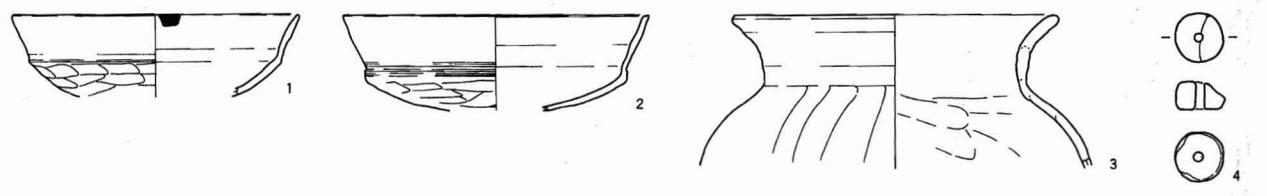
遺物は図示したほかに、土師器甕片が出土している。

第48号住居跡（第64図）

D-1・2グリッドに位置する。重複する第44号

第65図 第44・46・47・49・56号住居跡出土遺物

第44号住居跡

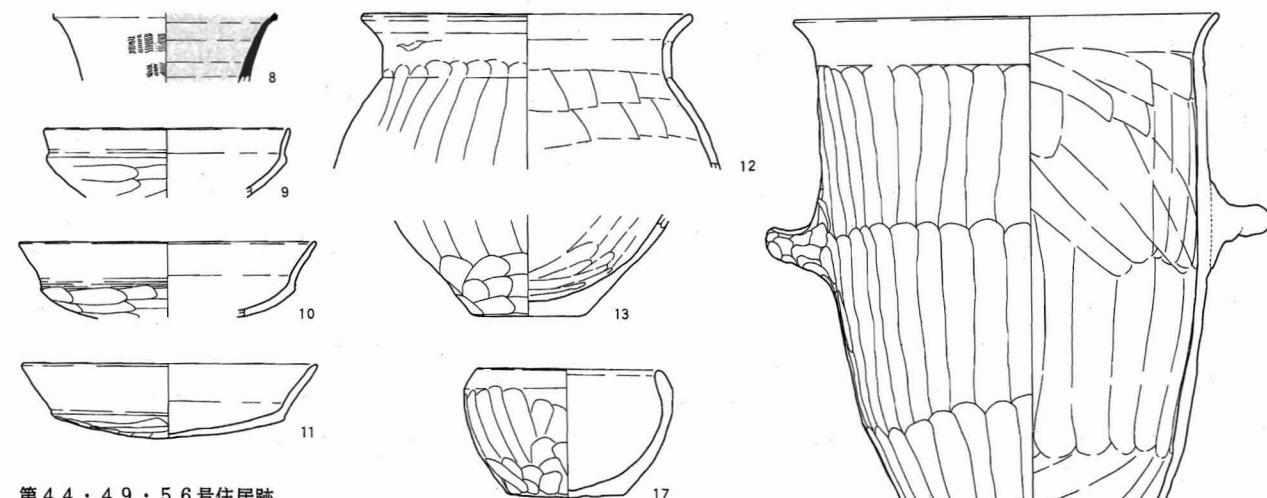


第46号住居跡

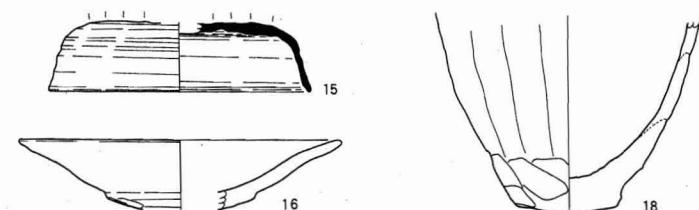


第47号住居跡

第47号住居跡



第44・49・56号住居跡



住居跡よりも古く、第48・54・55・56・71・72号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長4.62m、幅5.74m、確認面からの深さ0.13m、主軸方位N-31°-Eを測る。埋没状況は自然堆積と思われる。

主柱穴はP1・P2・P4の3本が確実である。主柱穴と想定されるP3は他の主柱穴に比べて壁に寄りすぎており、P3を主柱穴と認定すると、住居跡平面プランに対する主柱穴の配列が歪になる。

壁溝は北東壁東半から南東壁東半にのみ検出されている。幅0.18~0.24m、床面からの深さ0.06mほ

どである。

カマドは北東壁中央東よりに設置される。燃焼部と袖部が確認されているが、堆積状況等の詳細は明確ではない。火床面は住居跡床面とほぼ同一高である。

貯蔵穴は東コーナーに付設される。長径0.92m×短径0.75mの平面橢円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.53mを測る。底面は北から南へ下る傾斜をもっている。

ピットはP5・P6・P7・P8・P9・P10・P11の7本が検出されている。P5・P6・P11は住居跡

第28表 第44・46・47・49・56号住居跡出土遺物観察表（第65図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(15.0)	(4.3)		ABCI	B	橙	15	SJ44 口縁部内面に油芯の痕跡
2	壺	(16.0)	(5.0)		ABCI	A	浅黄橙	10	SJ44 P4
3	甕	(16.6)	(8.0)		ABCI	B	橙	5	SJ44 カマド袖
5	壺	(15.6)	(4.6)		ABCHI	B	明褐	40	SJ46
6	壺	(16.0)	(4.7)		ABCI	B	橙	5	SJ47
7	壺	(15.3)	5.1		ABCHI	B	赤褐	60	SJ47
8	はそう		(3.5)		ABH	B	灰	5	SJ49 No 2 内面自然釉付着 外面波状文不明瞭
9	壺	(12.8)	(3.7)		ABCI	B	橙	5	SJ49
10	壺	(15.6)	(3.0)		ABCI	B	橙	10	SJ49 No 1
11	壺	(15.3)	4.0		ABCI	B	橙	80	SJ49 カマド前面
12	甕	(17.0)	(8.2)		ABCII	B	にぶい橙	5	SJ49 No 2
13	甕		(5.3)	6.0	ABCI	B	橙	5	SJ49 No 2
14	甕	22.0	30.0	7.7	ABCEI	B	にぶい橙	95	SJ49 No 2 貯蔵穴
15	蓋		(3.6)	(13.8)	ABH	A	灰	30	SJ44・49・56
16	高壺	(16.8)	(3.7)		ABCI	B	にぶい黄橙	10	SJ44・49・56
17	椀	(9.4)	6.8	6.0	ABCII	B	にぶい黄橙	50	SJ44・49・56
18	甕		(10.3)	5.2	ABC	B	橙	15	SJ44・49・56

コーナー部に、P8・P9は主柱穴P2とP3の中間付近、P10は主柱穴P4に隣接し、P7は住居跡ほぼ中央に位置している。いずれも用途・性格は不明で、重複の激しさから、第49号住居跡に備わるピットという確証もない。

第65図に図示した8~14が第49号住居跡、15~18が第44・49・56号住居跡一括遺物である。ほかに、土師器甕・甕・高壺・椀・壺片および弥生土器片が出土している。

第56号住居跡（第64図）

D-1・2グリッドに位置する。重複する第44・49・54・72号住居跡よりも古い。第48・55・71号住居跡との新旧関係は明確ではない。また、第46号住居跡との新旧関係は土層の堆積状況によって捉えることはできなかったが、出土遺物から第56号住居跡が後出する。

平面形態は方形である。長軸長6.52m、短軸長6.80m、確認面からの深さ0.16m、短軸方位N-40°-Wを測る。埋没状況は、土層の観察状況から把握できない。

主柱穴はP1・P2・P4の3本が確実である。主柱穴と想定されるP3は他の主柱穴に比べて壁に寄り、P3を主柱穴と認定すると、住居跡平面プランに対する主柱穴の配列が歪になる。この部分にあた

る主柱穴はP3もしくは第49号住居跡P3のいずれかと思われる。

壁溝は重複する住居跡によって掘削されている箇所も多く確証はないが、途切れながらもほぼ全周する可能性が高い。検出された壁溝は、幅0.13~0.27m、床面からの深さ0.06mほどである。

カマド・貯蔵穴・ピットは検出されていない。

第65図に図示した15~18は第44・49・56号住居跡一括遺物で、ほかに、土師器甕・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第71号住居跡（第64図）

D-2グリッドに位置し、南西壁の南コーナー部から中央付近にかかる壁溝の一部が検出されている。重複する第44・48・49・54・55号住居跡よりも古く、第56号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形であるが、平面規模は不明である。確認面からの深さ0.10mを測る。

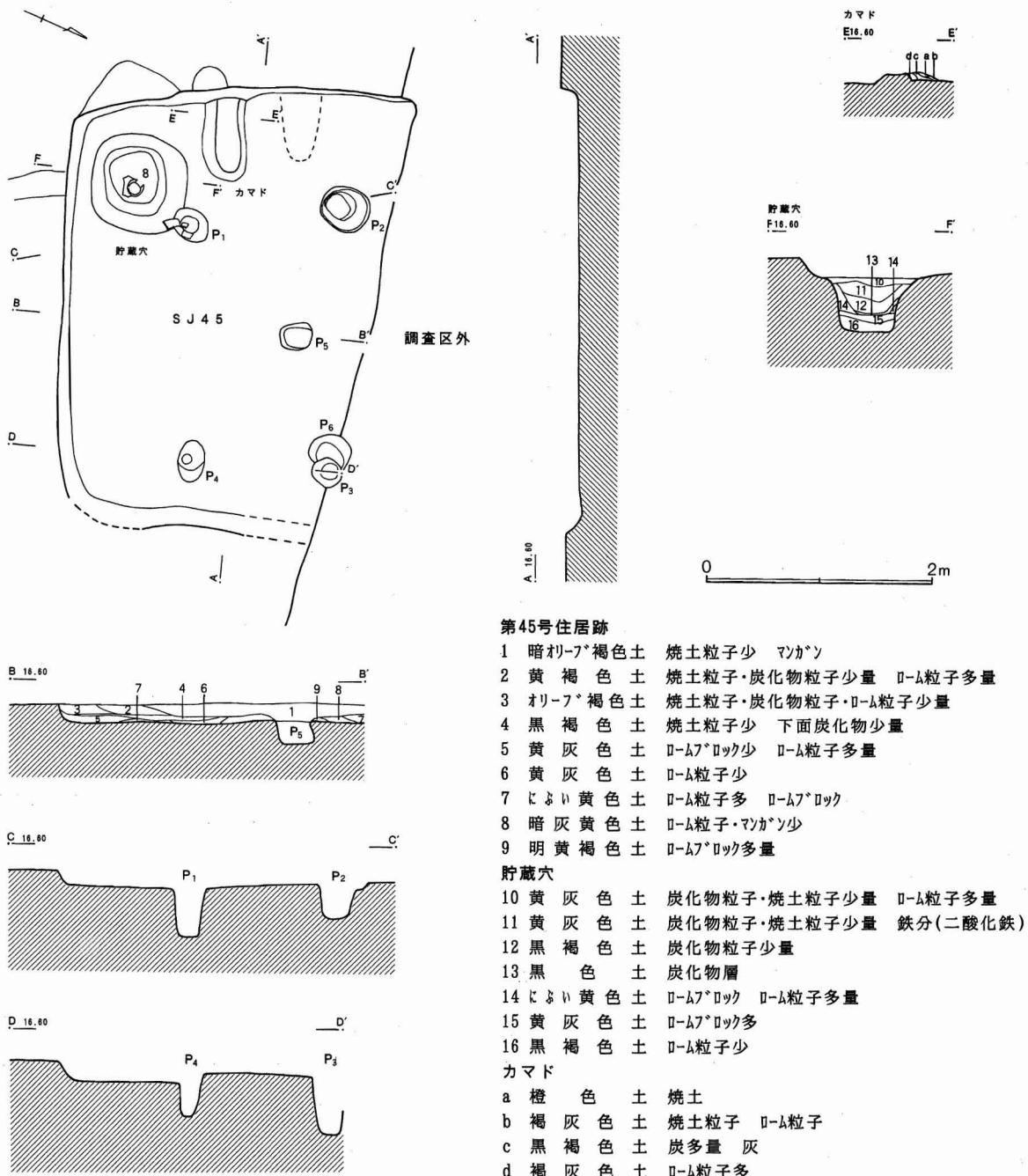
壁溝は幅0.16~0.23m、床面からの深さ0.09mほどである。主柱穴・カマド・貯蔵穴・ピットは検出されていない。

遺物は出土していない。

第72号住居跡（第64図）

D-2グリッドに位置する。第44・49・54号住居跡よりも古く、第56号住居跡よりも新しい。また重

第66図 第45号住居跡



複する第48・55号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形であるが、平面規模は不明である。

確認面からの深さ0.10mを測る。

壁溝は南東壁に沿って巡り、幅0.08~0.14m、床面からの深さ0.06mほどである。カマド・貯蔵穴は検出されていない。ピットはP₁が検出されている。住居跡南コーナーに位置するが、用途・性格は

不明である。

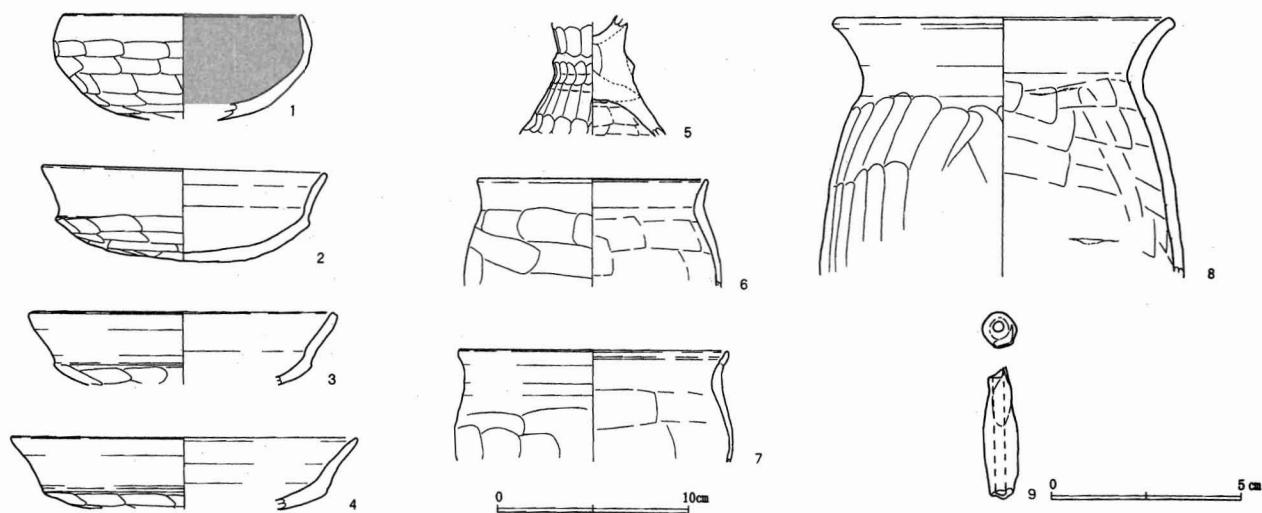
遺物は出土していない。

第45号住居跡（第66図）

C-1、D-1グリッドに位置し、北半は調査区外にある。重複する遺構はない。

平面形態は方形で、主軸長3.86m、確認面からの深さ0.19m、主軸方位N-110°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

第67図 第45号住居跡出土遺物



第29表 第45号住居跡出土遺物観察表（第67図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	(12.6)	(5.4)		ABHI	B	橙	15	内面赤彩
2	壺	14.7	5.0		ABCI	B	にぶい橙	95	
3	壺	(17.8)	(3.8)		ABCI	B	橙	5	
4	壺	(18.1)	(3.7)		AHII	B	橙	5	風化著しい
5	高壺		(5.8)		ACEHKL	B	橙	20	
6	小型甕	(11.8)	(5.7)		ABCI	B	にぶい黄橙	5	胴部外面に煤状の付着物
7	小型甕	(14.0)	(5.8)		ABCI	B	にぶい黄橙	5	外面に煤状の付着物
8	甕	17.3	(13.5)		ABCI	B	にぶい橙	20	貯藏穴

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。柱間が東西（主軸）方向に比べて南北方向が短い配列となっている。

壁溝は巡っていない。

カマドは西壁中央南よりに設置され、燃焼部と南側袖部が検出されている。燃焼部は長軸長0.78mの平面長方形で、火床面と住居跡床面はほぼ同一高である。袖部は、灰黄色土によって造り付けられている。

貯蔵穴はカマド南側の南西コーナーに付設される。長軸長0.88m×短軸長0.84mの平面方形を呈し、住居跡床面からの深さは0.49mを測る。底面は平坦で、直上付近から甕が出土している。壁の立ち上がりは上部に傾斜変換点が認められる。

ピットはP5・P6の2本が検出されている。P5は住居跡のほぼ中央に、P6は主柱穴P3の西側に接して位置する。いずれも用途・性格は不明である。

図示した遺物のなかで、9は土錘である。長さ3.40cm、径0.60~0.90cm、孔径0.25cm、重さ2.92gを測る。ほかに、土師器甕・瓶・壺片および弥生土器片が出土している。

第48号住居跡（第68図）

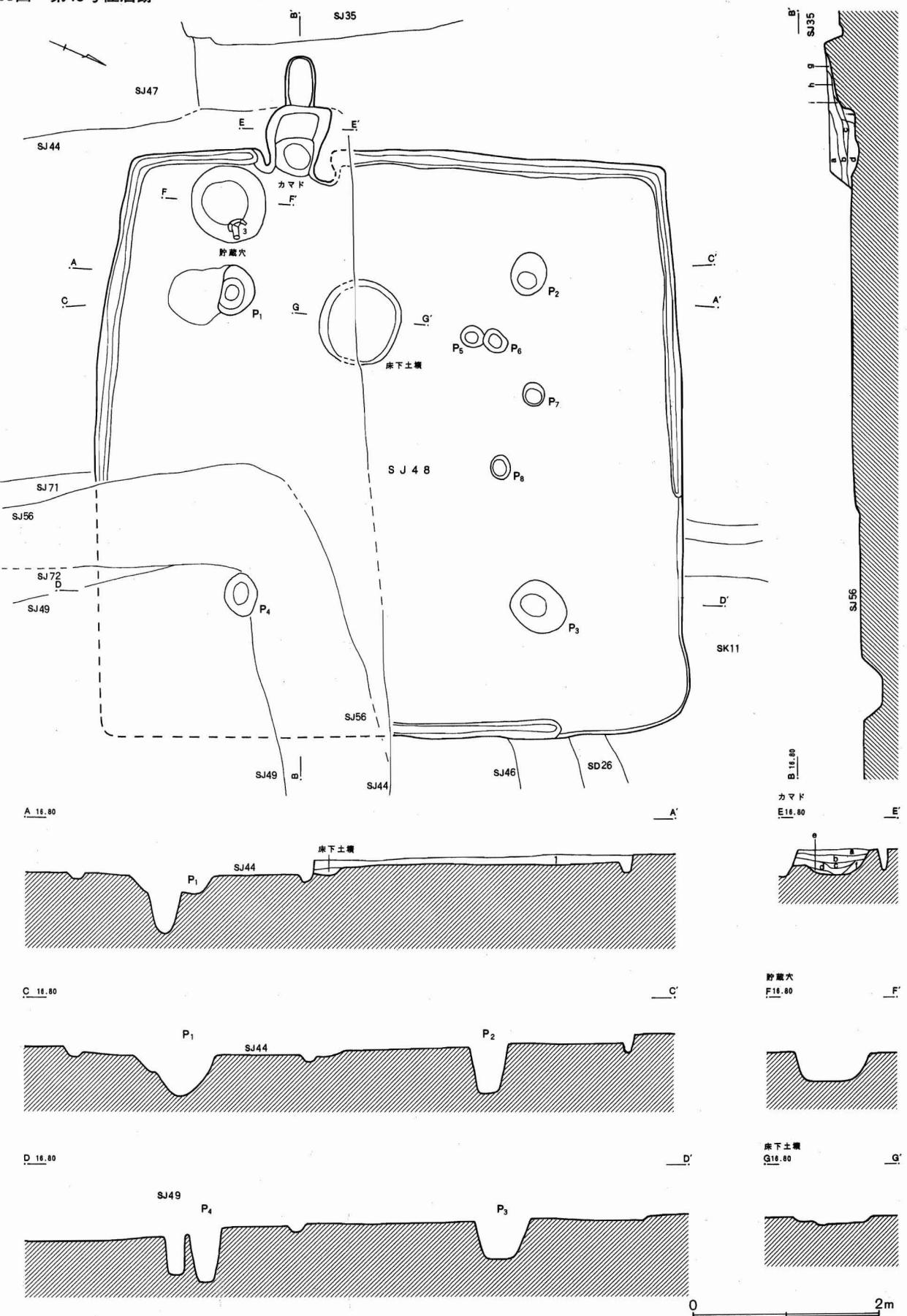
C-1・2、D-1・2グリッドに位置する。重複する第44・49号住居跡よりも古く、第46・71号住居跡よりも新しい。第56・72号住居跡、第11号土壙、第26号溝跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、主軸長6.29m、幅6.28m、確認面からの深さ0.10m、主軸方位N-116°-Wを測る。埋没状況は、人為的に埋め戻された状況を示す。

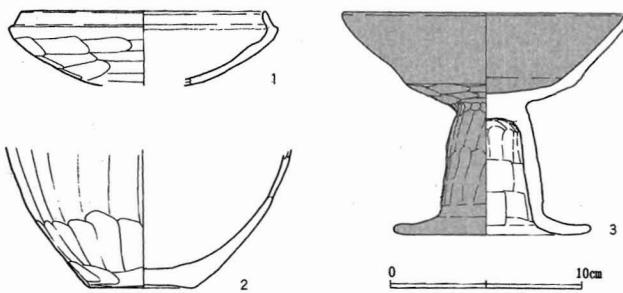
主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。方形に配列され、柱掘形の平面規模や深さは住居跡に比して充分である。

壁溝は北東コーナー部および第49・56号住居跡と重複する南東コーナー付近を除いて全周する。幅0.

第68図 第48号住居跡



第69図 第48号住居跡出土遺物



第30表 第48号住居跡出土遺物観察表（第69図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.7)	3.8	BCHI	C	にぶい橙	20		
2	甕	(7.2)	5.5	ABCHI	C	橙	5	内面ナデ調整単位不明瞭	
3	高壺	14.8	9.5	ABC1	B	橙	90	貯蔵穴No1 内外面赤彩	

11~0.22m、床面からの深さ0.11mほどである。

カマドは西壁の南によって設置される。燃焼部は長軸長0.75m×短軸長0.48mの箱形で、大半が住居跡壁外に掘り込まれている。火床面は先端部が住居跡床面よりも掘り窪められ、煙道部へ続く立ち上がり部に多量の焼土が堆積している。煙道部は、緩やかな傾斜をもつ。袖部は、燃焼部が壁外にあるためにきわめて短い。

貯蔵穴はカマド南側の壁際に付設される。燃焼部が壁外にあるカマド形態を反映して、コーナー部までよっていない。長径0.82m×短径0.81mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.22mを測る。底面は平坦である。

ピットはP5・P6・P7・P8の4本が検出されている。いずれも主柱穴P2の東側に位置するが、それぞれのピットとの関連や用途・性格は不明である。

主柱穴P1とP2の中間付近に床下土壤が検出されている。長径0.90m×短径0.87mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.90mを測る。

遺物は図示したほかに、土師器甕・高壺・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第50・51・52・53・59・60号住居跡（第70図）

C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。遺構埋没後の大震に伴う影響が最も明瞭に残されて

第48号住居跡

- | | | |
|------------|-----------|---------|
| 1 暗灰黄色土 | 焼土粒子 | 炭化物粒子少量 |
| 灰色地山ブロック多量 | | |
| カマド | | |
| a にじみ黄色土 | シルトブロック少量 | |
| b にじみ黄色土 | シルトブロック少量 | |
| c 暗灰黄色土 | | |
| d 地山色土 | | |
| e 黄灰色土 | 粘性強 | |
| f 暗灰黄色土 | 粘性強 | |
| g にじみ黄色土 | シルト多量 | |
| h にじみ黄色土 | 焼土 | シルト少量 |
| i 暗灰黄色土 | シルト多量 | |
| j 暗灰黄色土 | 焼土多量 | |

いる住居跡群である。平面図には図化されていないが、土層断面図に地割れの状況を示している。なかには住居跡床面の沈降が認められる箇所もある。ただし、他の遺跡で確認されている液状化現象に伴う噴砂の通り道である砂脈や地滑り等の傷跡はみられない。

第50号住居跡（第70図）

C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。重複する第39・42・51・52・53・59・60号住居跡よりも新しい。

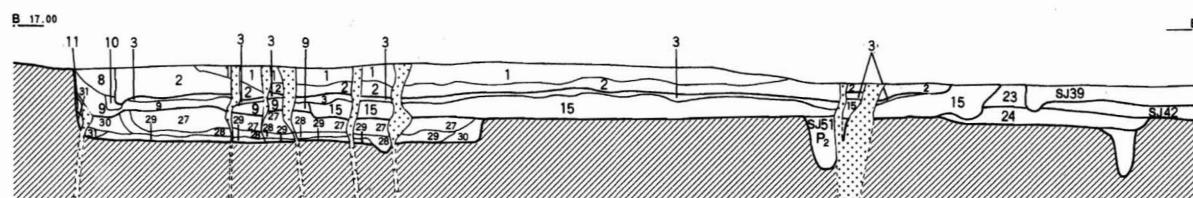
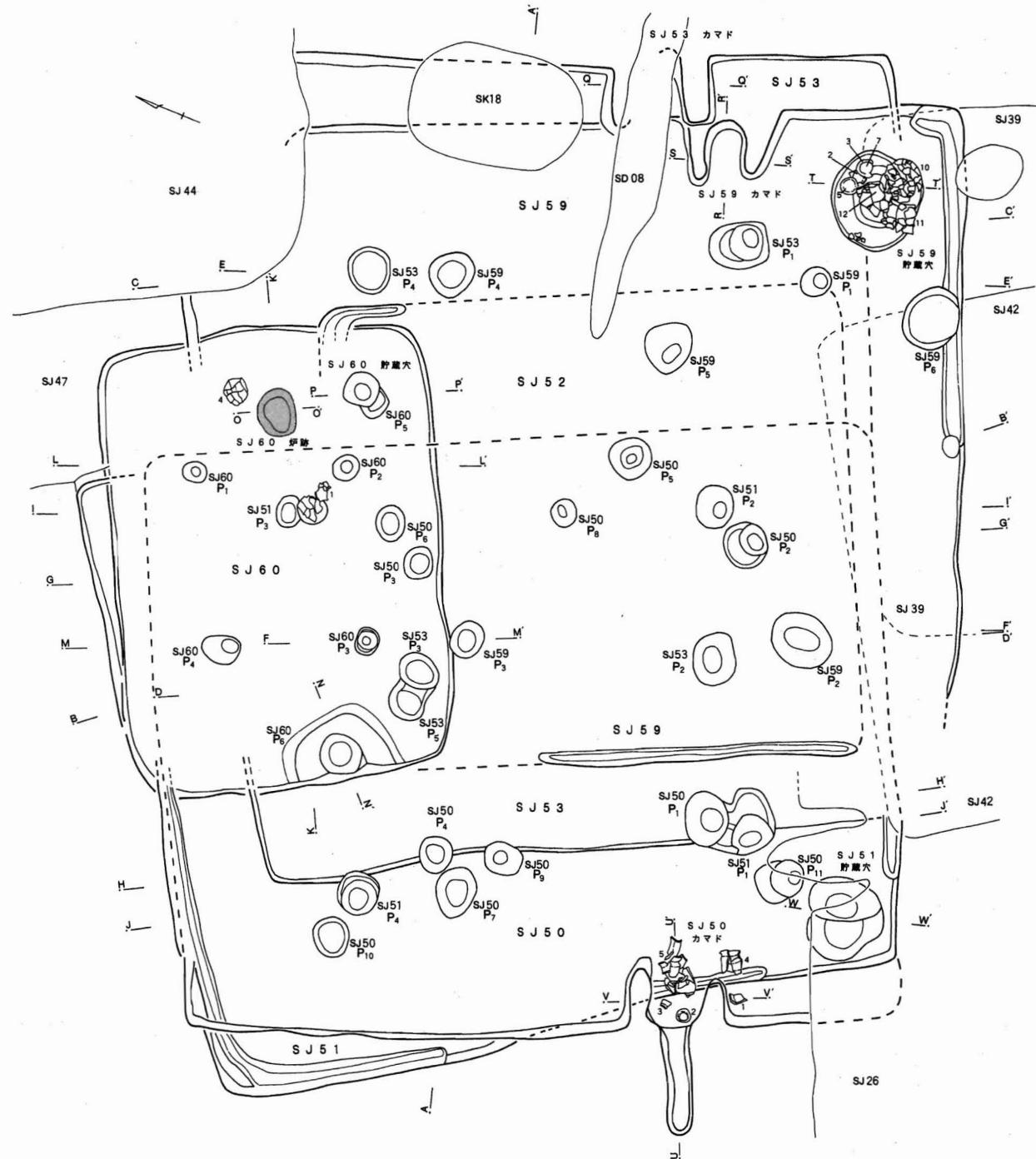
平面形態は長方形で、土層断面図から復元される規模は主軸長5.71m、南北幅7.06m、確認面からの深さ0.31m、主軸方位N-112°-Wを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。カマド側のP1-P4間の狭い台形に配列され、住居跡南側によっている。

壁溝は巡っていない。

カマドは西壁中央よりも南によって設置される。燃焼部は主軸長0.61m×幅0.53mの平面方形を呈する。火床面は住居跡床面より掘り窪められることなく、煙道へ向かってごく緩やかに立ち上がる。煙道部は長さ1.02m、幅0.24mの規模で伸びている。燃焼部からは掛け口に掛けられていた甕が横倒しになった状態で出土している。

第70図 第50・51・52・53・59・60号住居跡(1)





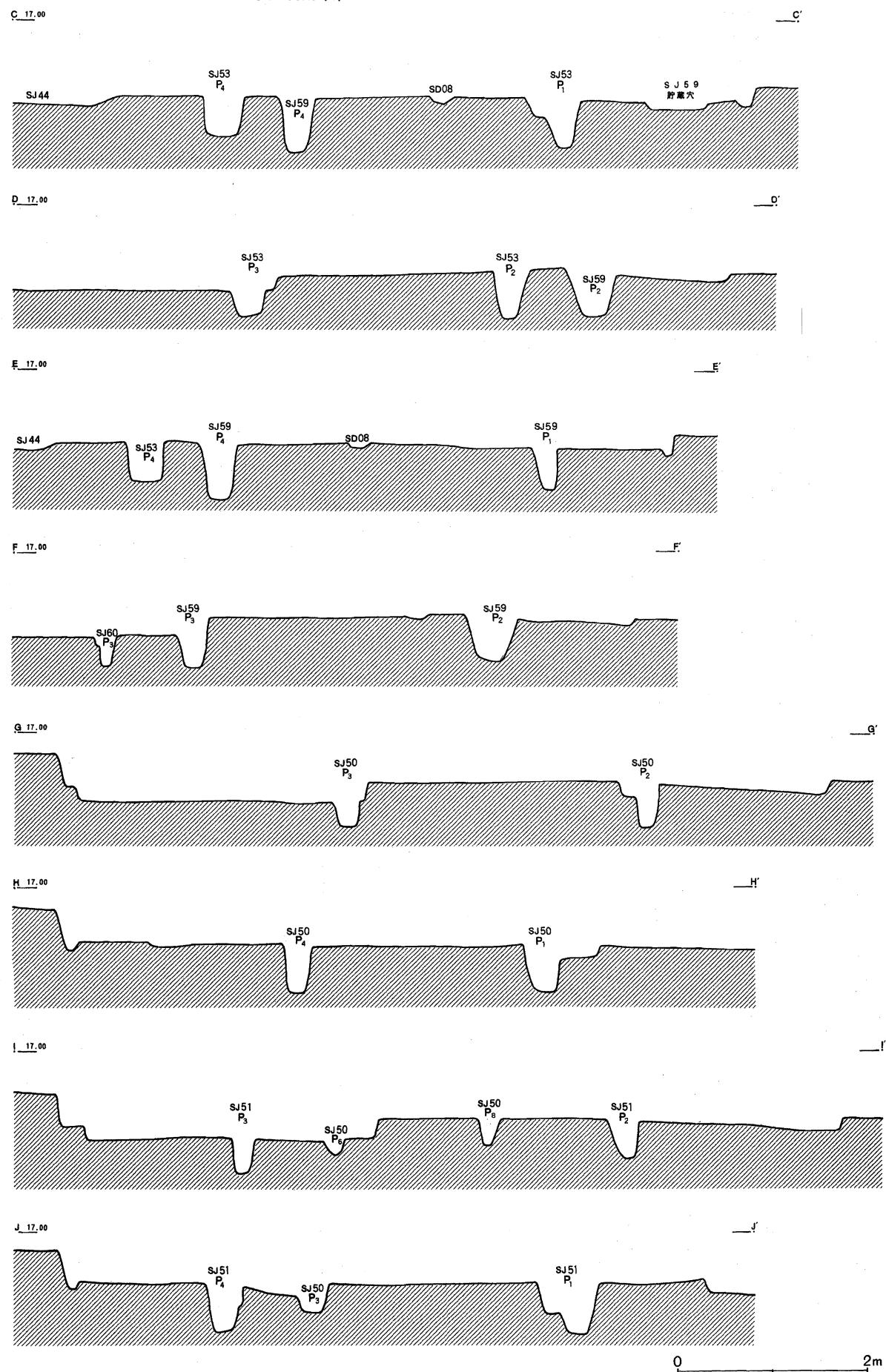
貯蔵穴は付設されていない。

ピットはP5・P6・P7・P8・P9・P10・P11の7本が検出されている。P11は主柱穴P1に、P6は主柱穴P3に、P7・P9は主柱穴P4にそれぞれ隣接し、P8は主柱穴P2・P3とほぼ等間隔に位置する。いずれも主柱穴との関連が想起させられる。P5は東壁際のカマドに相対する位置にあり、出入

り口施設に関わる機能が想定される。P10は用途・性格が不明である。

遺物は第72図および第75図1～9の第50・51・52号住居跡一括遺物、12～20の第50・51・52・53号住居跡一括遺物、21・22の第50～58号住居跡一括遺物を図示した。ほかに、土師器甕・甌・鉢・椀・坏片および混入した弥生土器片が出土している。

第71図 第50・51・52・53・59・60号住居跡(2)



第50号住居跡			
1 黒褐色土	焼土・炭化物粒子多	暗灰色粘質土・地山粒子少	
2 黒褐色土	暗灰色粘質土多	地山粒子少	
3 にい黄褐色土	地山ブロック		
4 黒褐色土	しまり弱 焼土・炭化物多量		
5 暗褐色土	灰色粘土多	地山ブロック少量	
6 黒褐色土	焼土粒子・地山ブロック少量	灰色粘土化進行	
7 にい黄褐色土	壁の溶軟化層		
カマド			
a 黒褐色土	焼土粒子少量	地山ブロック多	
b 黒褐色土	焼土粒子多量	地山ブロック	
c 黒褐色土	焼土粒子	炭化物粒子	
第51号住居跡			
8 暗褐色土	しまり 烧土微量	炭化物強 地山粒子多	
9 暗褐色土	暗灰色粘質土少量	地山粒子多量	
10 にい黄褐色土	地山ブロック		
11 暗褐色土	地山ブロック		
12 にい黄褐色土	掘形充填土	地山ブロック	
貯蔵穴			
13 黒褐色土	地山細粒子少量		
14 黒褐色土	地山細粒子		
第52号住居跡			
15 黒褐色土	硬質 粘質地山ブロック多		
16 にい黄褐色土	粘質地山ブロック		
17 黒褐色土	暗灰色粘土 地山ブロック		
18 暗褐色土	焼土 大型の炭化物少量	地山粒子	
19 黒褐色土	焼土粒子 炭化物多	地山粒子・ブロック	
20 にい赤褐色土	焼土粒子・ブロック	灰色粘土少量	
21 黒褐色土	しまり弱		
22 黒褐色土	焼土粒子	炭化物多量 地山粒子	
第53号住居跡			
23 黒褐色土	しまり強 烧土・炭化物少	地山ブロック多量	
第59号住居跡			
24 黒褐色土	地山粒子・ブロック多量		
貯蔵穴			
25 黒褐色土	地山ブロック(Φ20mm前後)		
26 黒褐色土			
カマド			
d 黒褐色土	地山細粒子・ブロック		
e 黒褐色土	焼土ブロック(Φ10mm以下)多		
第60号住居跡			
27 褐色土	地山ブロック(Φ100mm以上)多		
28 灰黄褐色土	暗灰色粘質土 鉄分多	褐色粒子多量	
	地山ブロック少量		
29 黒色土	灰状の炭化物細粒子の人为的堆積		
30 灰黄褐色土	しまり強 茶褐色土主体	地山粒子多	
31 にい黄褐色土	壁の溶流入土		
32 灰黄褐色土	暗灰色粘質土 鉄分多	褐色粒子多量	
	地山ブロック少量		
33 黄褐色土	ほとんど地山 充填土 固くしまる		
34 灰黄褐色土	暗灰色粘質土はほぼ单一	柱痕	
35 にい黄褐色土	溶化進行した地山ブロック多含	充填	
貯蔵穴			
36 にい黄褐色土	人为的埋戻	地山ブロック(未溶化)多含	
37 灰黄褐色土	人为的埋戻	地山ブロック(未溶化)少	
	粘性強		
P6			
38 にい黄褐色土	人为的埋戻		
	大型地山ブロック(未溶化)多含		
39 灰黄褐色土	人为的埋戻		
	大型地山ブロック(未溶化)少	粘性強	
40 褐灰色土	暗灰色粘質土	地山粒少量含	

第51号住居跡（第70図）

C-2・3グリッドに位置する。重複する第50・52号住居跡よりも古く、第53・59・60号住居跡よりも新しい。第26号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、東西長6.03m、南北長6.61m、確認面からの深さ0.34mを測る。床面には貼床が施されている。埋没状況は自然堆積と思われる。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本と思われる。歪な台形配列であり、配列の点を重視すれば、第51号住居跡P3・P4と第50号住居跡P5・P1がほぼ正方形に並び、第2の候補としてあげられる。

壁溝は北西コーナー部で確認されている。幅0.14～0.28m、床面からの深さ0.14mほどである。

カマド・ピットは検出されていない。

貯蔵穴は南西コーナーに付設される。長径0.80m×短径0.68mの平面橢円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.28mを測る。底面は狭く、平坦である。

遺物は第73図および第75図1～9の第50・51・52号住居跡一括遺物、12～20の第50・51・52・53号住居跡一括遺物、21・22の第50～58号住居跡一括遺物を図示した。ほかに、土師器甕・甌・鉢・椀・坏片および混入した弥生土器片が出土している。

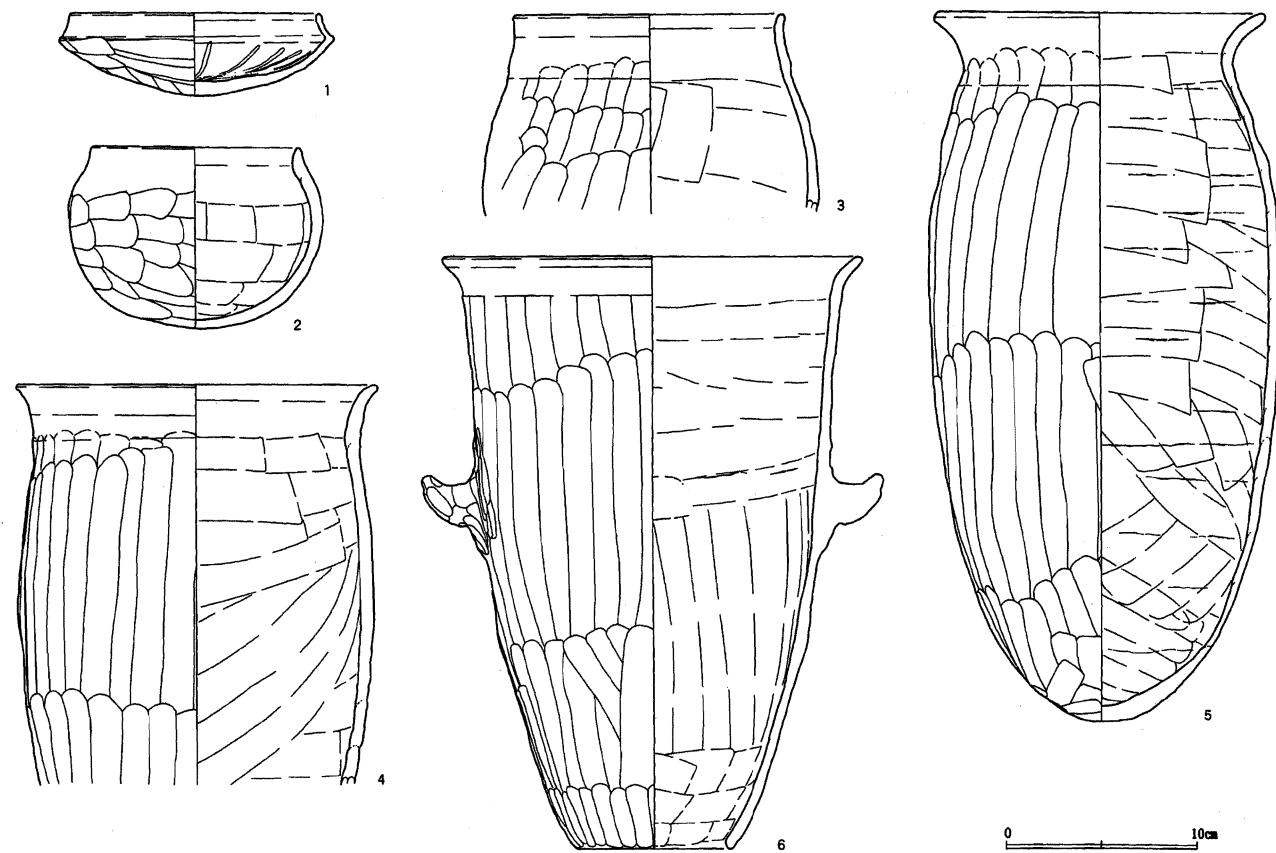
第52号住居跡（第70図）

C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。重複する第50号住居跡、第8号溝跡よりも古く、第51・53・59・60号住居跡よりも新しい。第26号住居跡との新旧関係は明確ではない。

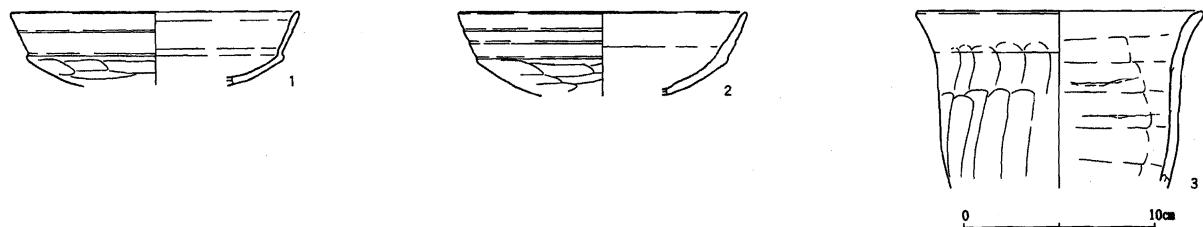
平面形態は方形であるが、平面的に検出されたのは北東コーナー部と西壁南半の壁溝のみである。壁溝は幅0.10～0.16m、床面からの深さ0.11mほどである。土層断面図から、南北長5.00m、東西長4.45mと推定され、確認面からの深さ0.43mを測る。床面には大地震の影響によって、地割れや段差が生じている。

主柱穴・カマド・貯蔵穴・ピットは検出されてい

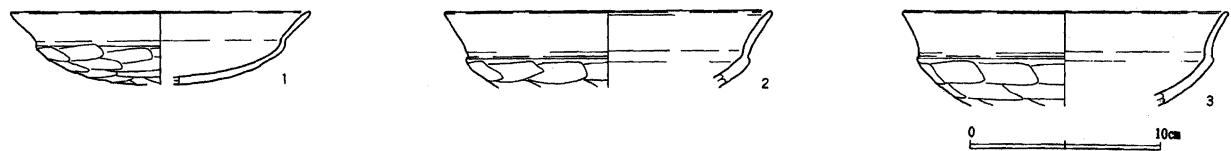
第72図 第50号住居跡出土遺物



第73図 第51号住居跡出土遺物



第74図 第53号住居跡出土遺物



ない。

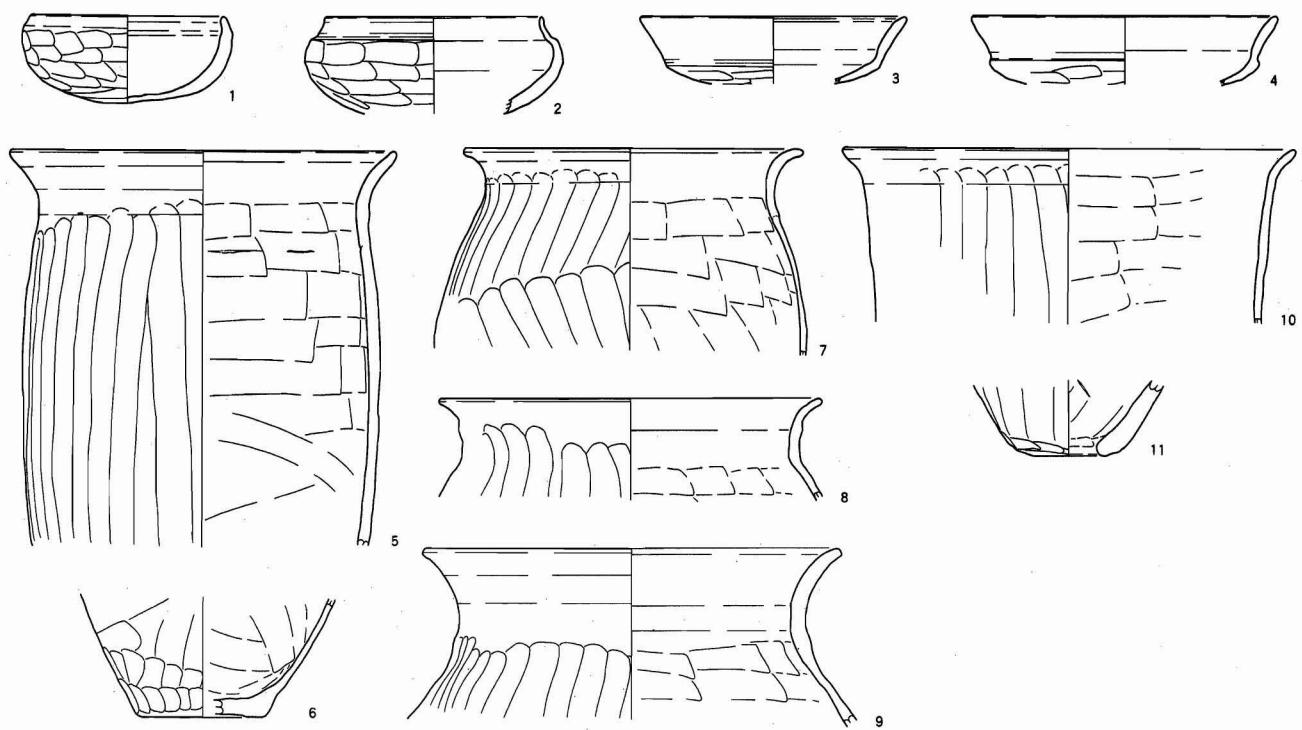
遺物は第75図 1～9 の第50・51・52号住居跡一括遺物、12～20の第50・51・52・53号住居跡一括遺物、21・22の第50～58号住居跡一括遺物を図示した。ほかに、土師器甕・甌・鉢・椀・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第53号住居跡（第70図）

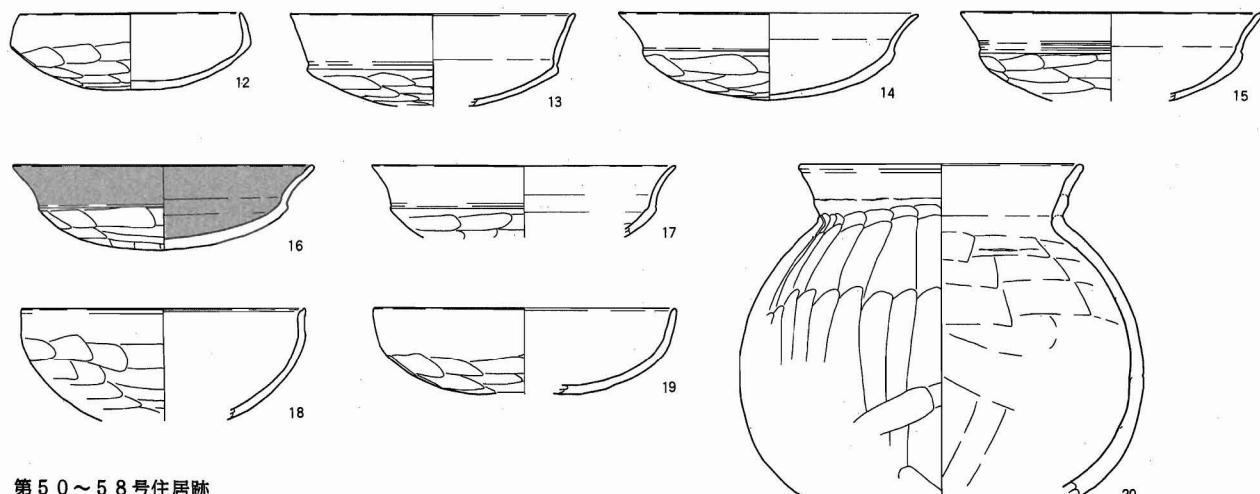
C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。重複する第39・50・51・52号住居跡、第18号土壙よりも古く、第59・60号住居跡よりも新しい。第8号溝跡との新旧関係は明確ではないが、第8号溝跡の走向方位やカマドの確認された状況から、第53号住居

第75図 第50～58号住居跡出土遺物

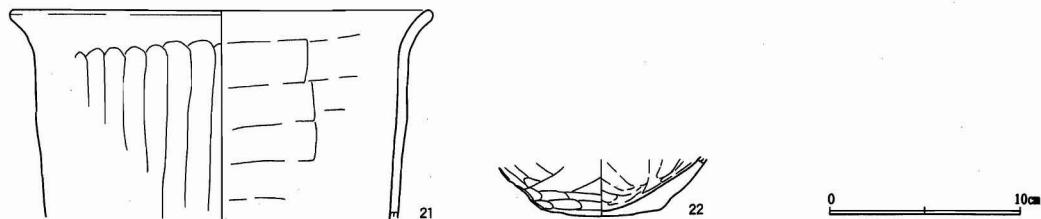
第50・51・52号住居跡



第50・51・52・53号住居跡



第50～58号住居跡



跡が先行するものと思われる。

平面形態は方形で、主軸長7.66m、南北幅6.98m、確認面からの深さ0.18m、主軸方位N-69°-Eを

測る。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本で、カマド側が広い台形に配列されている。住居跡北壁と東壁

第31表 第50号住居跡出土遺物観察表（第72図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(12.8)	4.2		ABCHI	A	にぶい赤褐	10	カマドNo1 内面に放射状の暗文
2	椀	(10.6)	9.5		ABC	B	赤褐	95	カマドNo2 二次的な被熱の度合いが著しい
3	小型甕	(13.8)	(10.3)		ABCI	B	明赤褐	10	カマドNo3
4	甕	18.6	(21.0)		ABCHIL	B	にぶい橙	50	カマドNo4・5
5	甕	16.8	37.3	(2.7)	ABCHI	B	にぶい橙	60	カマドNo4
6	甕	(21.4)	31.3	(8.0)	ABCI	B	橙	40	カマド

第32表 第51号住居跡出土遺物観察表（第73図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(15.0)	(3.9)		ABCJ	B	明褐	10	貯藏穴
2	壺	(15.0)	(4.3)		ABCH	B	にぶい赤褐	10	貯藏穴
3	小型甕	(14.8)	(9.3)		ABCJL	B	橙	5	貯藏穴

第33表 第53号住居跡出土遺物観察表（第74図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(15.7)	(3.8)		ABCI	B	橙	20	
2	壺	(17.1)	(4.0)		ABCHIJ	B	橙	10	
3	壺	(17.0)	(4.9)		ABCHIJK	B	橙	10	P1

第34表 第50～58号住居跡出土遺物観察表（第75図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	(10.0)	4.6		ABCI	B	橙	60	SJ50・51・52
2	椀	(11.4)	(5.1)		ABCH	B	橙	15	SJ50・51・52
3	壺	(13.8)	(3.6)		ABCI	A	橙	5	SJ50・51・52
4	壺	(15.8)	(3.7)		ABCI	A	橙	5	SJ50・51・52
5	甕	20.0	(20.8)		ABCI	B	橙	30	SJ50・51・52
6	甕	(6.4)		6.4	ABC	B	明赤褐	5	SJ50・51・52
7	甕	17.6	(10.7)		ABCEL	B	橙	20	SJ50・51・52
8	甕	(19.8)	(5.4)		ABCE	B	橙	5	SJ50・51・52
9	甕	(21.7)	(9.0)		ABCI	B	にぶい黄橙	5	SJ50・51・52
10	甕	(23.8)	(9.1)		ABCJ	B	橙	5	SJ50・51・52
11	甕	(3.9)		(3.8)	ABCI	B	橙	5	SJ50・51・52
12	壺	(11.5)	4.0		ABCJ	B	にぶい橙	30	SJ50・51・52・53
13	壺	(14.8)	(4.9)		ABCI	B	橙	25	SJ50・51・52・53
14	壺	(15.7)	4.6		ABCI	B	橙	30	SJ50・51・52・53
15	壺	(15.8)	(4.7)		ABCI	B	橙	15	SJ50・51・52・53
16	壺	(15.6)	4.5		ABCHI	B	橙	50	SJ50・51・52・53 内面・口縁部外面赤彩
17	壺	(17.8)	(3.8)		ABCI	B	浅黄橙	5	SJ50・51・52・53
18	椀	(14.8)	(4.9)		ABCJ	B	橙	20	SJ50・51・52・53
19	椀	17.8	(4.5)		ABCI	B	明赤褐	40	SJ50・51・52・53
20	小型甕	(14.6)	(17.7)		ABCHI	B	橙	20	SJ50・51・52・53
21	甕	(21.8)	(11.0)		ABCI	B	橙	5	SJ50～58
22	甕	(3.0)		6.4	ABCI	B	明赤褐	5	SJ50～58

の状況を勘案すると、第53号住居跡は平面台形を呈している可能性も高く、それを反映した柱並びと捉えることができる。

壁溝は確認されていない。

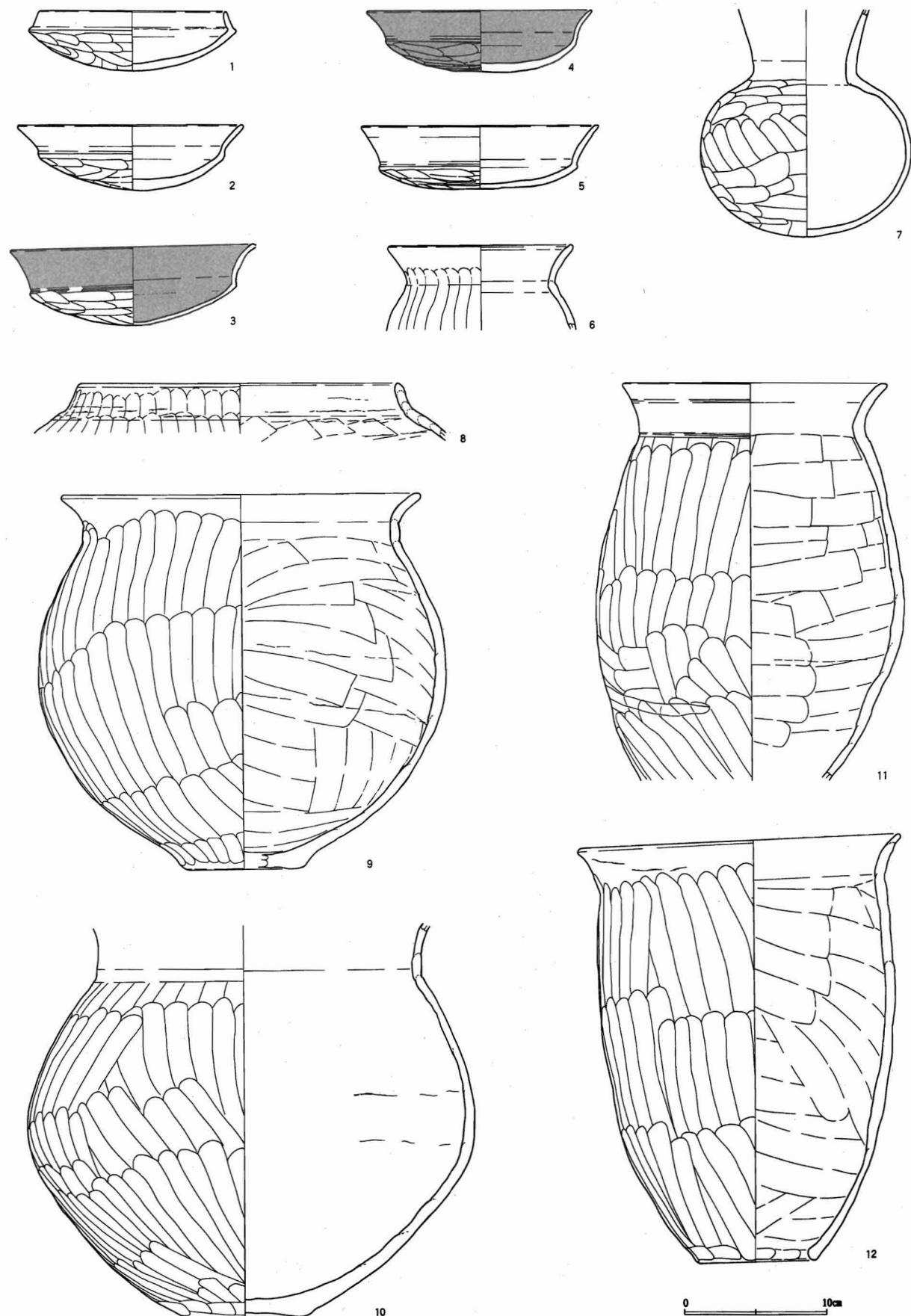
カマドは東壁中央南よりに設置される。中央付近を第8号溝跡に掘削され、燃焼部の一部と袖部が検出されているにすぎない。

貯藏穴は付設されていない。

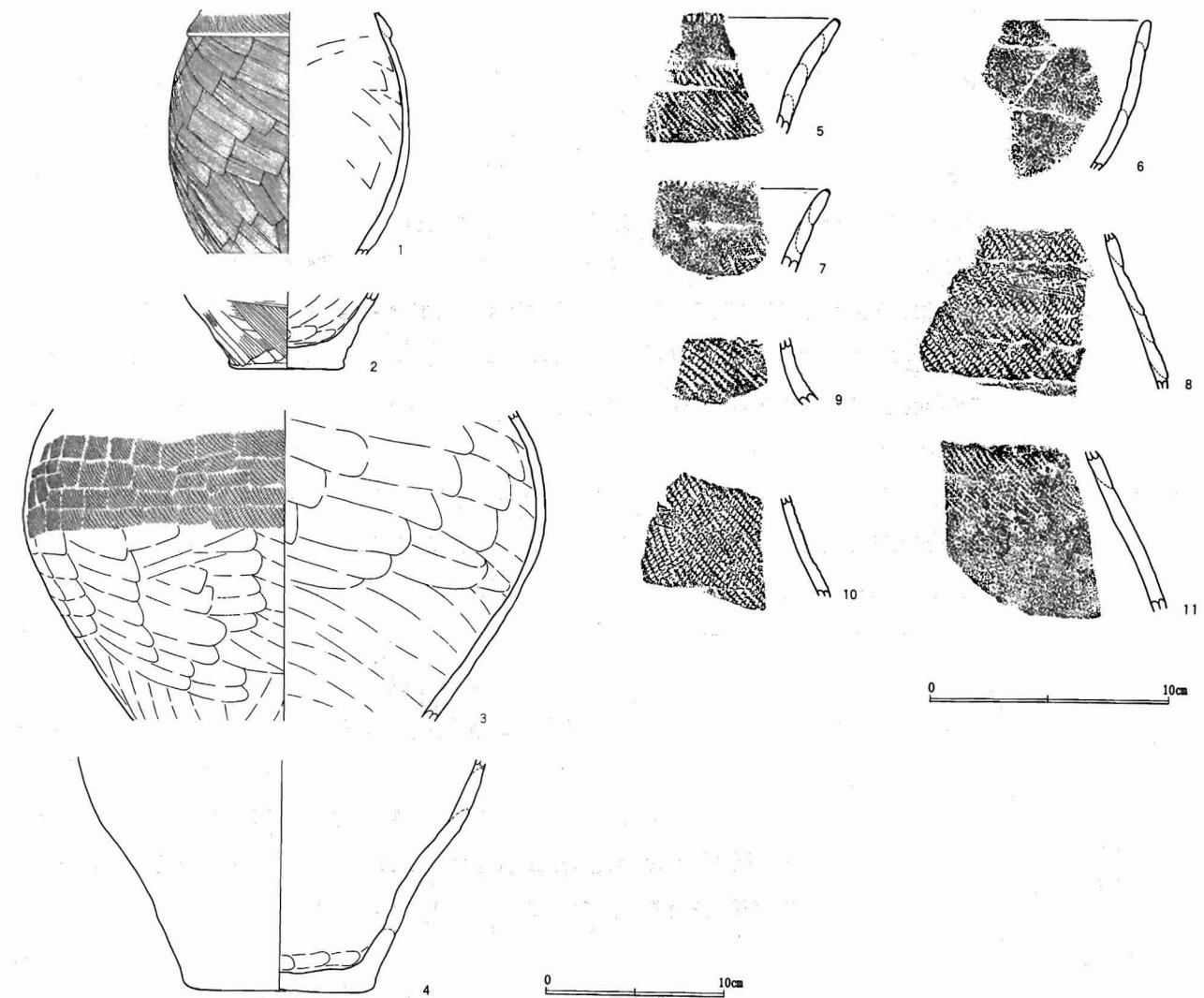
ピットはP5・P6の2本が検出されている。P5は南壁際に位置し、第59号住居跡に伴うピットの可能性もある。P6は主柱穴P3と接し、主柱の補助的な機能も想定できる。

遺物は第74図および第75図12～20の第50・51・52・53号住居跡一括遺物、21・22の第50～58号住居跡

第76図 第59号住居跡出土遺物



第77図 第60号住居跡出土遺物



第35表 第59号住居跡出土遺物観察表（第76図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(13.0)	4.1		ABCHI	A	黒褐	40	
2	壺	(15.6)	4.6		ABCHI	B	橙	70	No 3
3	壺	17.0	5.7		ABC I	B	橙	100	No 2 内面・口縁部外面赤彩
4	壺	(15.6)	4.3		ABC I	B	橙	70	内外面赤彩
5	壺	16.6	4.3		ABC I	A	橙	95	No 4
6	小型甕	(12.8)	(5.4)		ABC J	B	橙	5	カマド
7	埴		(15.8)		ABCHI	B	橙	90	No 1
8	短頸壺	(22.4)	(3.5)		ADHKL	B	明赤褐	5	P 1
9	甕	(25.0)	26.3	7.3	ABC I	B	橙	40	P 1
10	甕		(27.5)	8.1	ABC I	B	にぶい橙	60	No 5 底部木葉痕 内面ナデ調整単位不明瞭
11	甕	18.0	(28.1)		ABC I	B	明赤褐	70	No 6
12	甕	22.2	30.0	8.0	ABC I	B	橙	90	No 7

第36表 第60号住居跡出土遺物観察表（第77図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺		(13.6)		ABC I	B	にぶい橙	30	No 2 RL 単節
2	壺		(4.3)	5.8	ABC I	B	にぶい橙	5	
3	壺		(17.5)		ABC I	B	橙	20	RL 単節
4	壺		(12.0)	(9.6)	ABC I	C	にぶい橙	20	No 1

一括遺物を図示した。ほかに、土師器甕・瓶・鉢・壺片が出土している。

第59号住居跡（第70図）

C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。重複する第39・50・51・52・53号住居跡、第18号土壙よりも古く、第42・60号住居跡よりも新しい。第26・41・47号住居跡との新旧関係は明確ではない。また第8号溝跡との新旧関係も明確ではないが、第59号住居跡よりも後出する第53号住居跡と第8号溝跡の関係から、第59号住居跡の方が第8号溝跡よりも先行するものと捉えられる。

平面形態は方形で、主軸長6.10m、確認面からの深さ0.31m、主軸方位N-68°-Eを測る。埋没状況は、人為的に埋め戻された可能性が高い。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。

壁溝は南東コーナー～南壁中央および西壁中央付近に検出されている。幅0.16～0.22m、床面からの深さ0.06mほどである。

カマドは東壁中央より南側に設置される。燃焼部と住居跡床面の明瞭な区別はなく、火床面も住居跡床面とほぼ同一高である。直上には多量の焦土ブロックを含む土層が堆積している。

貯蔵穴はカマド南側の南東コーナーに付設される。長径0.96m×短径0.82mの平面円形の浅い掘込みの中央付近に長径0.58m×短径0.55mの平面円形に深く掘り込まれる。住居跡床面からの深さは0.36mを測る。上層からは土師器壺・甕・壺等が完存度の高い状態で出土している。

ピットはP5が検出されているが、用途・性格は不明である。

遺物は図示したほかに、土師器甕・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第60号住居跡（第70図）

C-2、D-2グリッドに位置する。重複する第47・50・51・52・53・59号住居跡よりも古い。

平面形態は長方形で、長軸長4.38m、短軸長3.12m、確認面からの深さ0.60m、長軸方位N-61°-E

を測る。床面には貼床が施され、堅緻に踏み固められている。直上には薄い炭化物層が全体を覆っていた。この層には焼土が全く含まれていないため焼失住居とは異なり、意図をもって故意に散布したものと捉えられる。住居跡覆土の埋没状況には、人為的に埋め戻された状況が窺われる。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。P4は他の主柱穴よりも極端に浅く、異質である。土層断面では、南側に並ぶP2・P4に柱痕が認められ、柱掘形の充填状況も窺うことができる。

壁溝は巡っていない。

厨房施設は地床炉で、主柱穴P1と主柱穴P2を結ぶラインより西側の長軸方向中心線上に設置される。火床面は長径0.46m×短径0.36mの平面楕円形に住居跡床面よりも僅かに窪められ、焼土化が著しい。炉跡の覆土には焼土・炭化物はみられない。

貯蔵穴は炉跡南側の南東コーナー部に付設される。長径0.46m×短径0.28mの平面円形を呈し、住居跡床面からの深さは0.33mを測る。底面は中央に向けて緩やかに窪み、覆土は人為的に埋め戻されている。

ピットはP5・P6の2本が検出されている。P5は貯蔵穴に接し、ピットとするよりも貯蔵穴の一部分と捉えた方が妥当といえるかもしれない。P6は炉跡と相対する西壁中央際に位置する。覆土は人為的に埋め戻されている。P6の周囲は、南北1.08m・東西0.43～0.71mの方形範囲に僅かな高まりが認められる。P6の覆土の状況や周囲の高まりから、出入り口の機能が想定される。

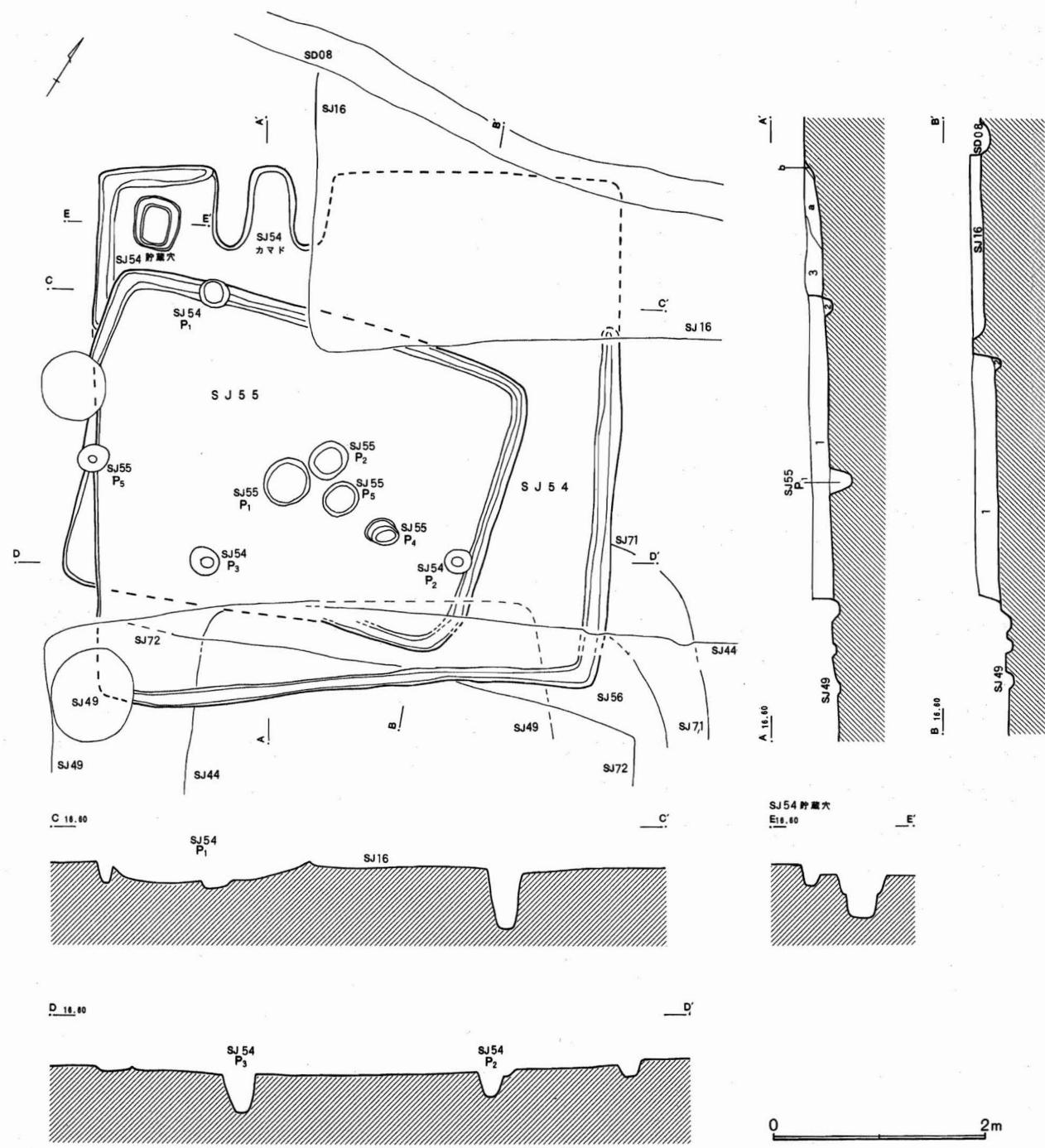
遺物は図示したほかに、細片や風化の著しい弥生土器片が出土し、土師器甕・瓶・壺片も混入している。

第54号住居跡（第78図）

D-2、E-2グリッドに位置する。重複する第16・44・49・55号住居跡よりも古く、第56・71・72号住居跡よりも新しい。

平面形態は方形で、主軸長5.14m、幅5.02m、主

第78図 第54・55号住居跡



第55号住居跡

- | | | | | |
|---|-------|---------|---------|--------|
| 1 | 暗灰褐色土 | しまり・粘性強 | 炭化物少 | 地山粒子若干 |
| 2 | 灰褐色土 | しまり・粘性強 | 地山フロック多 | |

軸方位 N-32°-W を測る。確認面からの深さは最深で0.17m であるが、南東半部においては、遺構確認面で既に床面が露呈している。

第54号住居跡

- 3 灰褐色土 しまり・粘性強 地山粒子少量
カマド
a 暗灰褐色土 しまり・粘性強 焼土ブロック多 炭化物少量
b 暗灰褐色土 しまり・粘性強 地山ブロック多

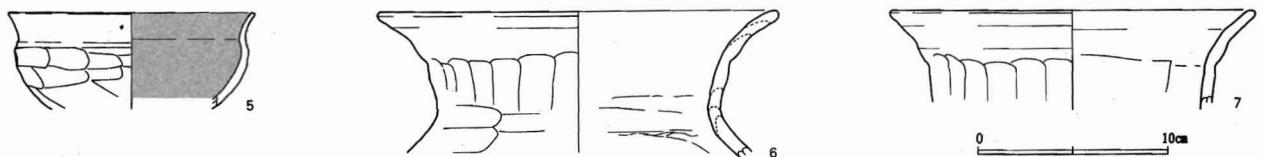
主柱穴はP1・P2・P3の3本が検出されている。残る1本は、重複する第16号住居跡によって掘削されている。

第79図 第54・55号住居跡出土遺物

第54号住居跡



第54・55号住居跡



第37表 第54・55号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	10.8	4.4		ABCIJ	B	にぶい褐	100	SJ54
2	壺	(11.7)	(4.4)		ABCIJ	B	橙	10	SJ54 カマド
3	壺	(13.0)	(4.4)		ABCIJ	B	橙	15	SJ54
4	壺	(13.8)	(4.4)		ABCIJ	B	橙	30	SJ54 貯蔵穴
5	椀	(12.6)	(5.1)		ABCI	B	にぶい黄橙	15	SJ54・55 内面赤彩
6	甕	(20.8)	(7.4)		ABCI	B	橙	5	SJ54・55
7	甕	(19.0)	(5.3)		ABCIJ	B	にぶい橙	5	SJ54・55

壁溝は北西コーナー部および東壁～南壁に確認されている。幅0.12～0.24m、床面からの深さ0.10mほどである。

カマドは北壁西よりに設置される。東側袖部の東半は、重複する第16号住居跡によって掘削されている。燃焼部は住居跡床面との区切りがなく、火床面の比高差もない。緩やかな登り傾斜を保ちながら壁立ち上がりへ至る。直上には焼土ブロック・炭化物が堆積する。

貯蔵穴はカマド西側の北西コーナーに付設される。長軸長0.48m×短軸長0.42mの平面方形の掘込みの中央に、さらに長軸長0.37m×短軸長0.28mの方形に掘り込まれる二段構造である。壙底の深さは住居跡床面から0.42mを測り、底面は平坦である。

ピットは検出されていない。

図示した遺物は、1～4が第54号住居跡、5～7が第54・55号住居跡一括遺物で、ほかに土師器甕・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第55号住居跡（第78図）

D-2、E-2グリッドに位置する。重複する第16・44・49号住居跡よりも古く、第54・71号住居跡

よりも新しい。第56・72号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は長方形で、南北長2.84m、東西長4.18m、確認面からの深さ0.18m、長軸方位N-83°-Eを測る。埋没状況は自然堆積と思われる。

壁溝は西壁北半～北壁～東壁～南壁東半に巡る。幅0.13～0.18m、床面からの深さは0.08mほどである。

主柱穴・カマド・貯蔵穴は検出されていない。

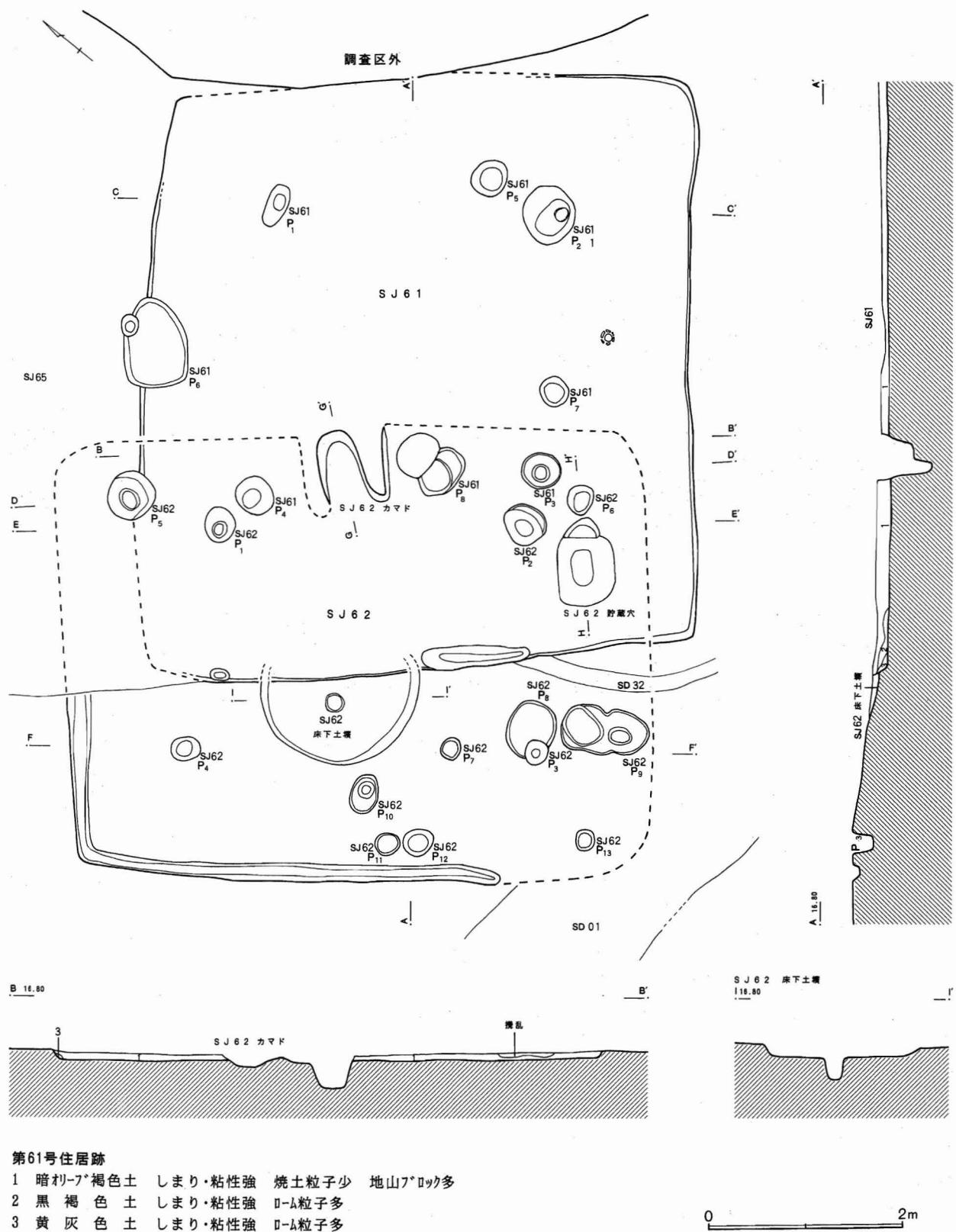
ピットはP1・P2・P3・P4・P5の5本が検出されている。西壁中央際のP5を除き、住居跡中央付近によっている。いずれも用途・性格は不明である。

遺物は5～7の第54・55号住居跡一括遺物を図示したが、ほかに土師器甕・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第61号住居跡（第80図）

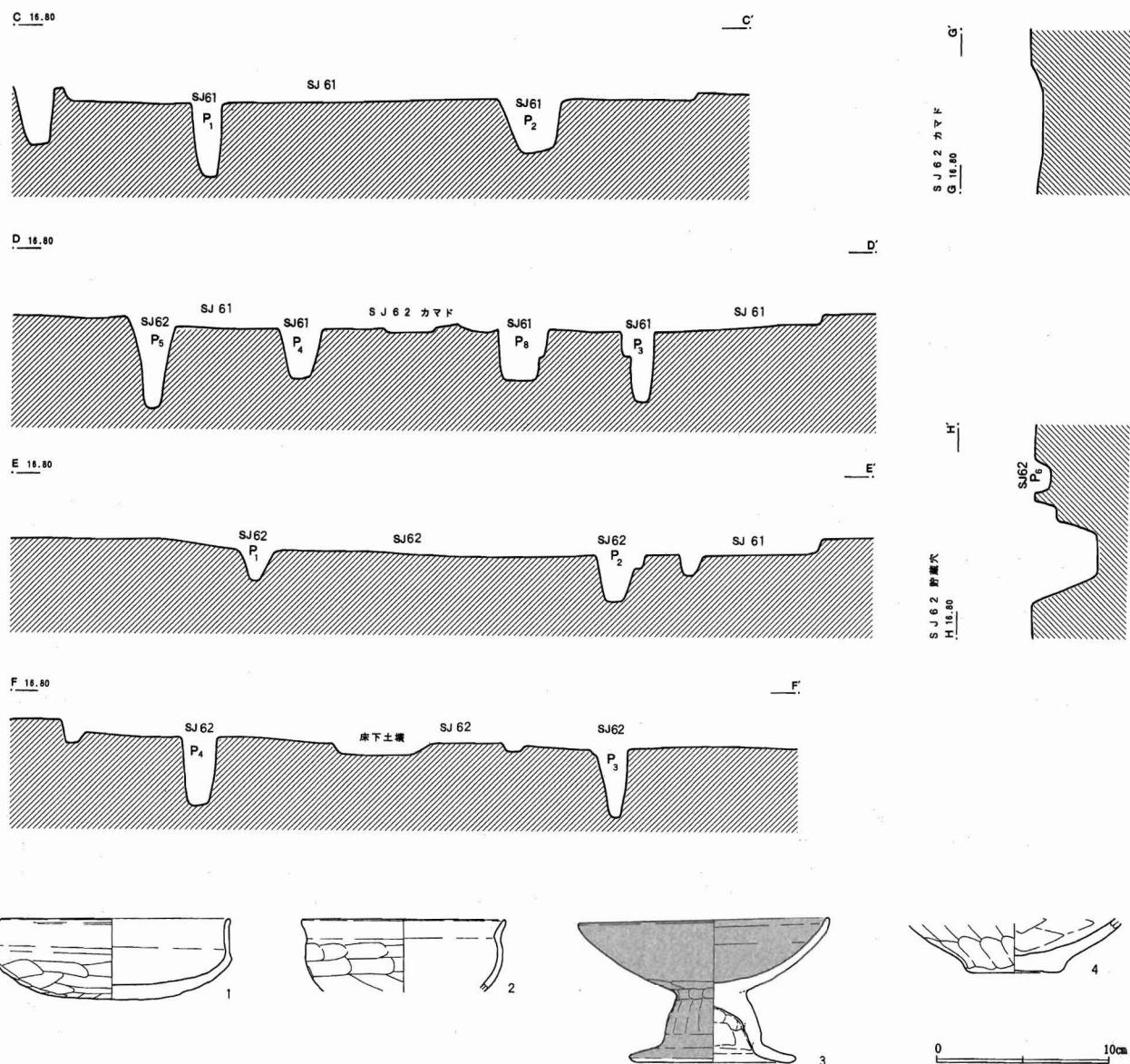
E-5・6、F-5・6グリッドに位置し、北東壁が調査区外にかかっている。重複する第62・65号住居跡よりも新しく、第32号溝跡との新旧関係は明確ではない。

第80図 第61・62号住居跡・出土遺物



第61号住居跡

- 1 暗れ-7⁸褐色土 しまり・粘性強 焼土粒子少 地山⁷ロック多
- 2 黒褐色土 しまり・粘性強 D-L粒子多
- 3 黄灰色土 しまり・粘性強 D-L粒子多



第38表 第61号住居跡出土遺物観察表（第80図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(13.0)	4.7		ABCIL	B	明赤褐	70	No 1
2	壺	(11.7)	(4.2)		ABCI	B	浅黄橙	20	
3	高壺	14.3	8.4	8.9	ABCIIJ	B	橙	95	No 2 内外面赤彩
4	甕		(2.8)	5.0	ACEHIKL	B	明赤褐	5	

平面形態は方形で、長軸長5.97m、短軸長5.22m、確認面からの深さ0.07m、長軸方位N-52°-Eを測る。

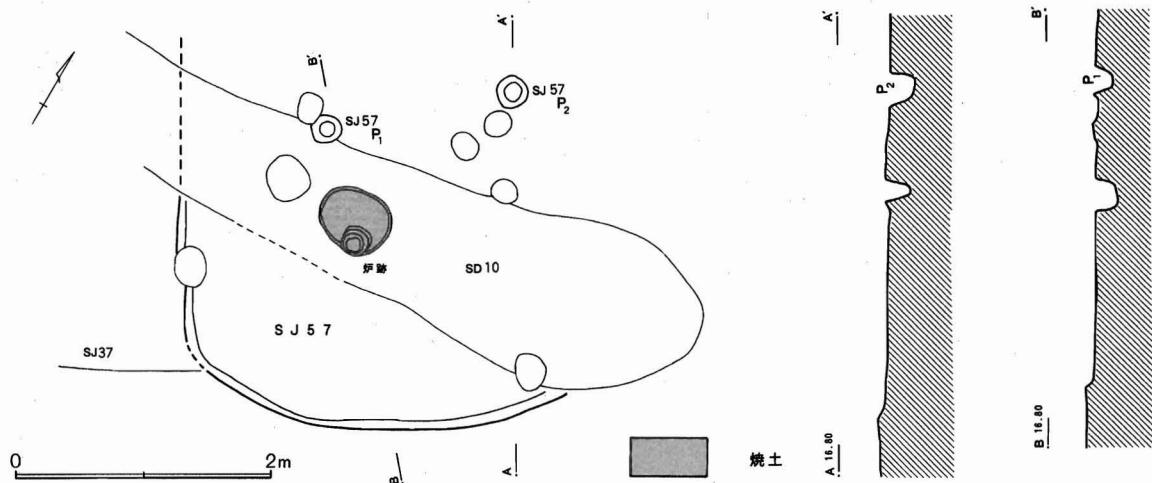
主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。いずれも、しっかりとした掘形を有している。

壁溝は南西壁中央付近にのみ検出され、幅0.14~0.23m、床面からの深さ0.08mほどである。

カマド・貯蔵穴は確認されていない。

ピットはP5・P6・P7・P8の4本が検出されている。P5は主柱穴P2に隣接し、P7は主柱穴P2-P3を結ぶ線上のP3より、P8は主柱穴P3-P4を結ぶ線上のP3よりにあり、主柱穴との関連が想起させられる位置関係にある。P6は北西壁中央に重複する形に掘り込まれ、用途・性格や住居

第81図 第57号住居跡



跡との関連についても不明である。

遺物は第61・62号住居跡一括遺物を図示したが、ほかに土師器甕・椀・壺片が出土し、赤彩が施されたものが多くみられる。また弥生土器片も混入している。

第62号住居跡（第80図）

E-5・6グリッドに位置する。重複する第61号住居跡よりも古く、第65号住居跡よりも新しい。第1・32号溝跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は長方形と推定されるが、壁溝の一部とカマドのみの検出のため、規模は不明である。主軸方位はN-50°-Eを測る。遺構確認段階において床面がすでに露呈していたため、埋没状況は不明である。

主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本である。住居平面プランを想定させるように、長方形に配列されている。

壁溝は西コーナー部付近を中心とする北西壁・南西壁に巡っている。幅0.13~0.22m、床面からの深さ0.08mほどである。

カマドは北東壁中央付近に設置される。後出する第61号住居跡床面下から検出され、燃焼部・袖部が僅かに残存していた。

貯蔵穴はカマド南東側の住居跡東コーナー付近に付設される。長軸長0.92m×短軸長0.60mの平面

長方形を呈し、住居跡床面からの深さは0.56mを測る。底面は平坦である。

ピットはP5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P13の9本が検出されている。カマドに相対する南西壁際のP11・P12およびP10は出入り口施設に関わる機能が想定される。ほかは用途・性格ともに不明である。

住居跡中央付近には、径1.20m前後の円形の土壙が確認されている。住居跡床面との関係を確実に把握されていないが、床下土壙と捉えられる。

遺物は第61・62号住居跡一括遺物を図示したが、ほかに土師器甕・高壺・壺片および混入した弥生土器片が出土している。

第57号住居跡（第81図）

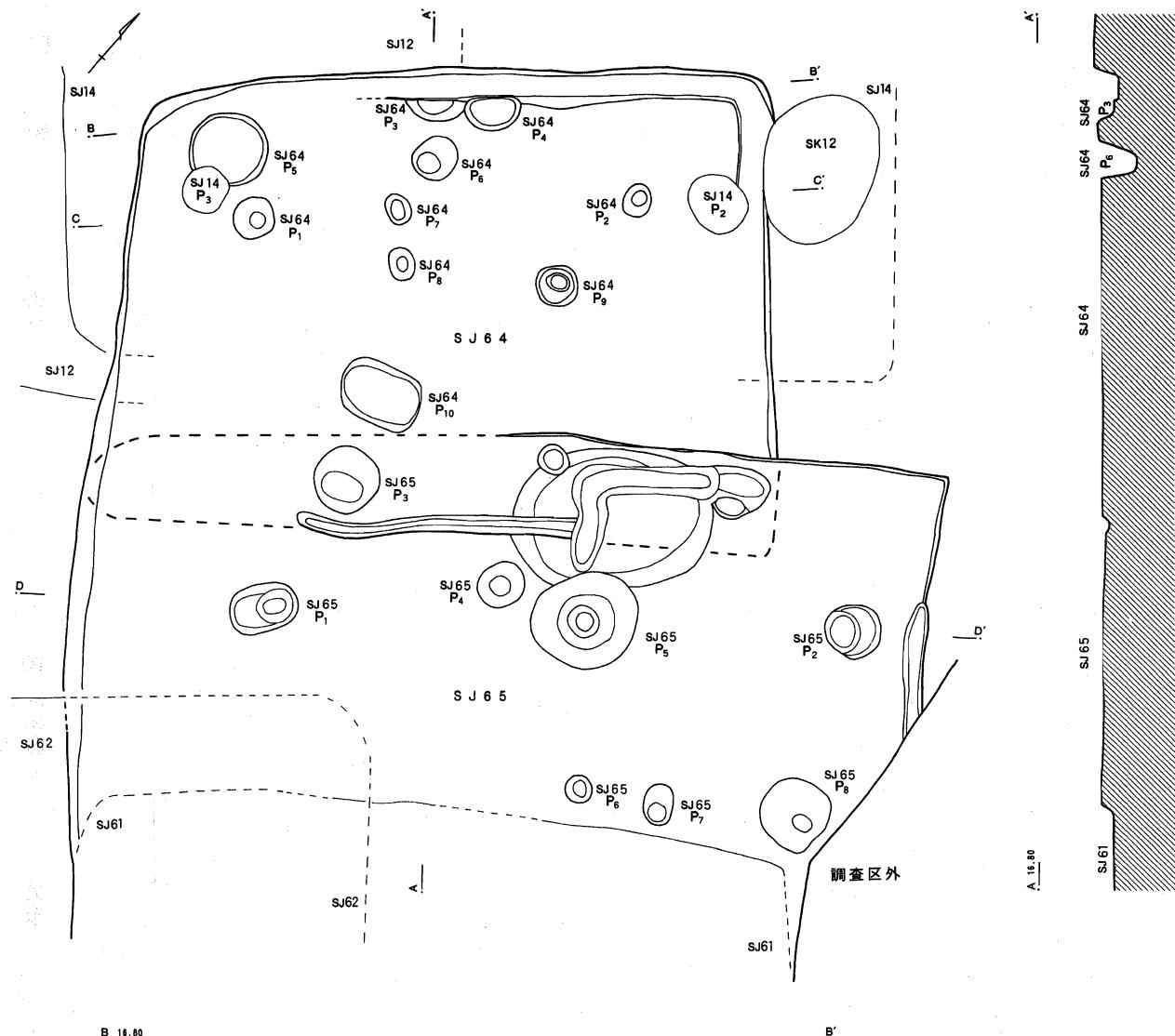
C-1グリッドに位置する。重複する第37号住居跡、第10号溝跡よりも古い。

平面形態は隅丸方形と推定される。南西コーナー付近が検出されているのみで、規模は不明である。確認面からの深さ0.08m、南北軸方位N-31°-Wを測る。

検出されたP1・P2の2本のピットが主柱穴と仮定すると、住居跡の平面プランは隅丸長方形となる。

厨房施設として炉が設置され、住居跡南西によっている。長径0.58m×短径0.48mの平面橢円形に焼

第82図 第64・65号住居跡

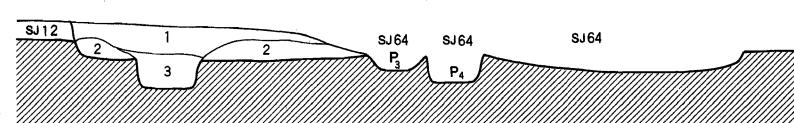


第64号住居跡

1 黒褐色土
燒土粒子 炭化物粒子
地山フ'ロック(Φ20mm以下)

2 黒褐色土
地山フ'ロック(Φ100mm以下)多

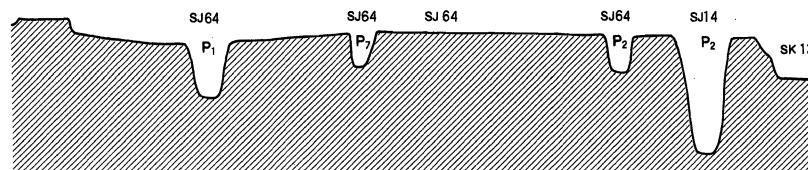
3 黒褐色土
地山フ'ロック少量



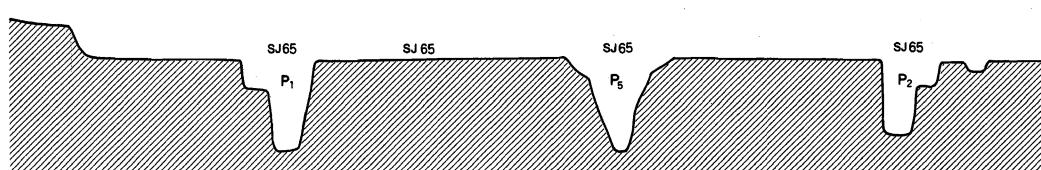
B 18.80

0 2m

C 18.80

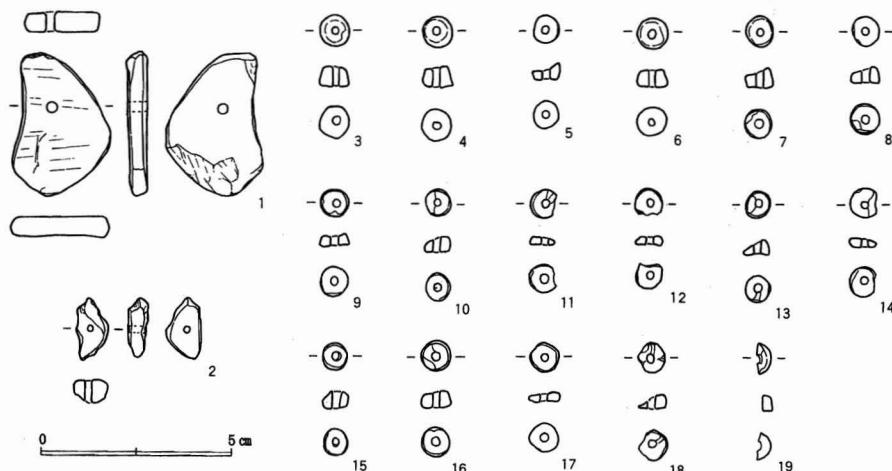


D 18.80

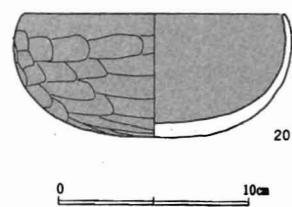


第83図 第64・65号住居跡出土遺物

第64号住居跡



第65号住居跡



第39表 第64号住居跡出土臼玉計測表（第83図）

番号	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	番号	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
3	0.80	0.55	0.20	0.53	12	0.75	0.25	0.20	(0.14)
4	0.80	0.50	0.20	0.51	13	0.75	0.40	0.20	(0.24)
5	0.70	0.40	0.20	(0.26)	14	0.80	0.25	0.20	(0.22)
6	0.80	0.40	0.20	0.44	15	0.65	0.45	0.20	(0.29)
7	0.75	0.55	0.20	(0.31)	16	0.80	0.45	0.20	0.44
8	0.75	0.40	0.20	(0.25)	17	0.75	0.25	0.20	0.19
9	0.75	0.30	0.20	0.25	18	0.75	(0.40)	0.20	(0.21)
10	0.65	0.40	0.20	(0.26)	19	(0.80)	0.40	(0.20)	(0.15)
11	0.70	0.20	0.20	(0.16)					

第40表 第65号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
20	椀	13.6	6.4		ABCH	B	明赤褐	80	No 1 内外面赤彩

土化した地床炉で、住居跡床面よりも僅かに窪む程度である。

壁溝・貯蔵穴は確認されていない。

遺物は弥生土器片が出土しているが、細片や風化が著しく図示し得ない。ほかに土師器甕・壺片が混入している。

第64号住居跡（第82図）

E-4・5グリッドに位置する。重複する第12・14号住居跡よりも新しく、第14・65号住居跡、第12号土壙との新旧関係は明確ではない。

平面形態は長方形で、長軸長5.56m、短軸長3.90m、確認面からの深さ0.28m、長軸方位N-48°-Eを測る。埋没状況は自然堆積を示す。

主柱穴はP1・P2の2本で、ほかは不明である。

壁溝は北壁および南壁に確認されている。幅0.12

~0.16m、床面からの深さ0.04mほどである。

カマド・貯蔵穴は検出されていない。ただし、北西コーナーにあるP5が、平面規模の広さから貯蔵穴であった可能性がある。

ピットはP3・P4・P6・P7・P8・P9・P10の7本が検出されている。北壁中央際に位置するP3・P4は出入り口施設に関連する機能が想起させられる。ほかは用途・性格ともに不明である。

遺物は南壁中央際付近から石製模造品および臼玉17点がまとまって検出されている。3~19の臼玉はいずれも滑石製で、径・厚さ・孔径が均一的な円筒状のものである。1の滑石製模造品勾玉形は歪な形状から、破損した有孔円板を再加工したものと思われる。縦3.7cm、横2.4cm、厚さ0.5cm、孔径0.3cm、重さ9.33gを測る。2は歪な勾玉様の滑石模造品で、

縦1.6cm、横0.85cm、厚さ0.55cm、孔径0.15cm、重さ1.02gを測る。ほかに土師器甕・坏片が出土しているが、微細な破片であり、図示し得ない。

第65号住居跡（第82図）

E-5グリッドに位置し、南東部が調査区外にある。重複する第61・62号住居跡よりも古く、第64号住居跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は方形で、東西長7.30m、確認面からの深さ0.27m、北壁方位N-49°-Eを測る。

主柱穴はP1・P2の2本のみが検出されている。

壁溝は東壁の一部に確認され、幅0.14~0.18m、床面からの深さ0.08mほどである。

カマド・貯蔵穴は検出されていない。

ピットはP3・P4・P5・P6・P7・P8の6本が検出されている。P5は主柱穴P1-P2の中間に位置し、類似する位置関係にあるP8とともに8本柱の住居跡の場合、主柱穴の候補となるものである。ほかは用途・性格ともに不明である。

遺物は図示したほかに、土師器坏片が出土している。

第69号住居跡（第84図）

C-3・4グリッドに位置する。重複する第26号住居跡よりも古く、第68号住居跡よりも新しい。第25号住居跡との新旧関係は明確ではない。

西壁部付近の掘形が検出されているのみで、平面形態は方形と思われる。平面規模は不明であるが、一辺8m前後の大型の住居跡と推定される。西壁方位N-11°-Wを測る。

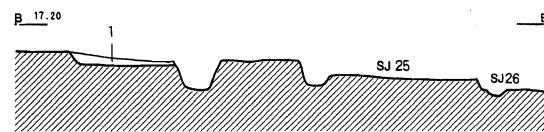
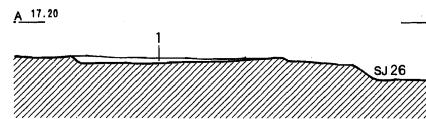
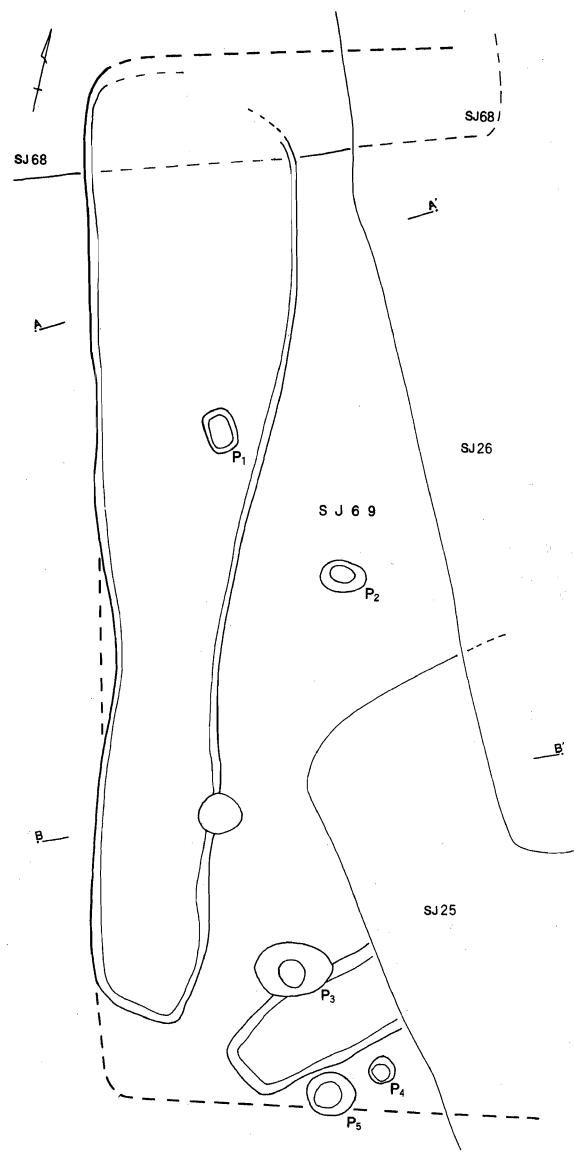
主柱穴・壁溝・カマド・貯蔵穴は検出されていない。ピットはP1・P2・P3・P4・P5の5本が確認されているが、用途・性格は不明である。

遺物は土師器甕・坏片および混入した弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、図示し得ない。

第68号住居跡（第85図）

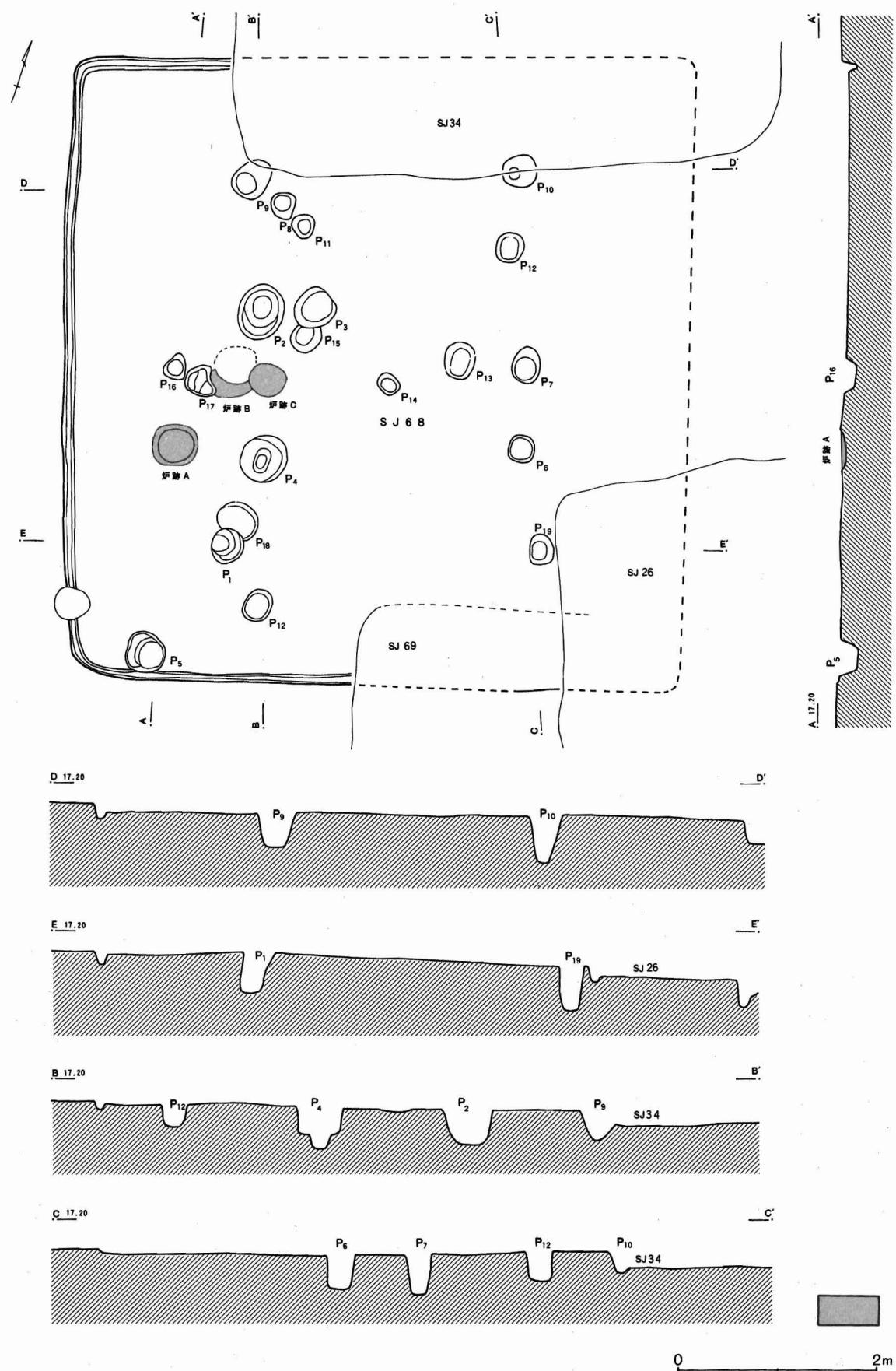
B-3、C-3グリッドに位置する。重複する第26・34・69号住居跡よりも古い。

第84図 第69号住居跡

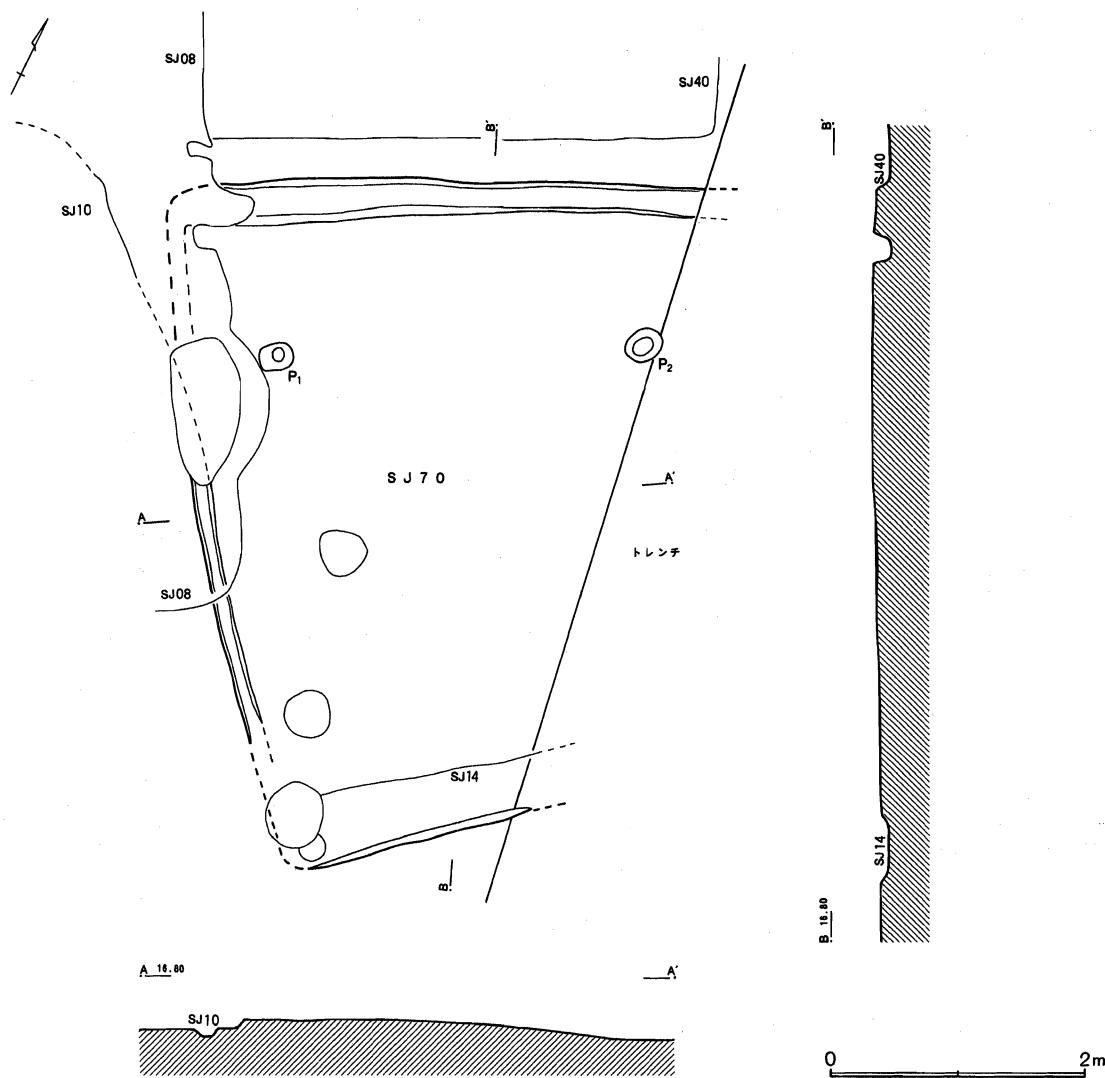


第69号住居跡
1 黒褐色土 地山フロック多量

第85図 第68号住居跡



第86図 第70号住居跡



平面形態は方形で、南北長6.30m、確認面からの深さ0.10m、西壁方位N-18°-Wを測る。

主柱穴はP1・P9・P10・P19の4本で、長方形に配列されている。

壁溝は、壁が検出されている部分では全周する。幅0.08~0.12m、床面からの深さ0.07mほどである。

厨房施設には炉が設置されている。炉跡は3カ所認められ、いずれも住居跡西側によって位置する。炉跡B・炉跡Cは主柱穴P1-P9のほぼ線上に、炉跡Aは主柱穴線よりも南西によっている。

炉跡Aは南北長0.41m×東西長0.46mの平面方形に焼土化した地床炉である。火床面は住居跡床面よりも僅かに窪んでいる。

炉跡Bも地床炉である。西側をP17、東側を炉跡Cと重複しているため、平面規模は明確ではないが、平面橢円形に焼土化している。

炉跡Cは長径0.38m×短径0.33mの東西に長い平面橢円形に焼土化した地床炉である。

貯蔵穴は付設されていない。

ピットはP2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P11・P12・P13・P14・P15・P16・P17・P18の15本が検出されている。P2・P4は主柱穴P1-P9のほぼ線上にあり、炉跡B・炉跡Cを挟み込んで位置する。P7は主柱穴P10-P19のほぼ中間に位置する。P2・P4は主柱穴もしくは炉との関連が、P7には主柱穴との関連が想起させられる。ほかは用

途・性格は不明である。

遺物は混入した土師器甕・坏片が出土している。

第70号住居跡（第86図）

D-4・E-4グリッドに位置する。重複する第8・10号住居跡よりも古いと思われ、第14号住居跡との新旧関係は明確ではない。東半は試掘調査のためのトレンチによって掘削されている。

平面形態は方形で、南北長5.46m、確認面からの深さ0.03m、西壁方位 N-36°-Wを測る。

主柱穴はP1・P2の2本が検出されている。壁溝は北壁・西壁に確認され、幅0.13~0.32m、床面からの深さ0.14mほどである。

カマド・貯蔵穴・ピットはみられない。

遺物は出土していない。